

『最低』な彼は何でもお
見通し

輝く羊モドキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

求めたモノを『視る』事の出来る魔眼の個性を持った『最低』な男の子が、比較的エロい事に寛容な世界線でエロい事をしまくる話。

目次

- 入学・からの・切奈ちゃんえっち
1
- 初訓練・からの・葉隠ちゃんちゅっちゅつ
21
- 体育祭・まえに・百ちゃんもみもみ
46
- 体育祭・おわって・希乃子ちゃんえっち
77
- 期末テスト・まえに・お茶子ちゃんえっち
112
- 期末テスト・直前に・ミッドナイト先生
えっち
154
- 期末テスト・終わって・おうどん食べる
194
- 林間合宿・初日に・A組女子達とえっち
216
- 林間合宿・二日目で・B組女子達とえっち
253
- 林間合宿・三日目で・大事件
310
- 中学三年・初めての・トガちゃんエツチ
340
- IF話・露天風呂で・にやんにやんえっち
368

入学・からの・切奈ちやんえつち

俺は幼い時から、他人には見えないモノを視る事が出来た。

それは言うなれば『生命力』とも言える気、オーラのようなもの。

それは言うなれば『割合』を測る値。

それは言うなれば『数』を数えた自然数。

それを見ようと意識すれば、他人には見えない色や数字が俺の視る世界に浮かび上がる。

病人には、弱弱しく放たれるオーラと、病に打ち勝とうと体内で燃えるオーラの二種類が見える。

朝一で堤防の道をジョギングしている女性の疲労度が見える。

犬を連れて散歩している男性と、その犬の年齢が見える。

俺は、他人には見えないモノを視る事が出来る『眼』を持っていた。

俺は、このチカラを、『個性』を使って――

80 / 900。

姉が牛乳パックをそのまま冷蔵庫に戻す。

「微妙に残すんなら飲みきれよ姉ちゃん」

「げっ、バレた」

「『飲み切った人がパックを洗って干す』ってルール、家じゃあんまり通用しなさそうだ。セコイ奴が一人居るんだから」

「アンタ姉に向かって『セコイ』とは何よ」

「自分が今した行動を省みて、どうぞ」

朝食を食べきって、そのまま隣の椅子にのせていたカバンを持ち上げながら玄関へ向かう。

「何アンタ、もう学校に向かうの？早過ぎじゃない？」

「『どんな学校にも一人は居る、始業1時間前から学校に居て自主勉強をしているクソ真面目』が集うような場所に通うんだ。せめて初日くらい俺も真面目ぶっておこうかな」

まあ一応しつかりとした目的はあるんだがな。

「はあー。アンタが『雄英』目指すって言った時はマジで頭の心配したし、それで『合格通知』見せてきた時はアタシの眼を疑ったし、更に今日のこの発言。そんな『彼女』が出来ただけで人って変わるモンなのかしら？」

「ほお。そういうなら姉ちゃんも彼氏の一人や二人作ればいいだろ？高校三年生。就職するにも進学するにも、遊びの関係は早い内にすませておけばいいだろうに」

「は、はあ〜!?居るんですけど!?アンタが『彼女』作る前からお付き合いしてる男ぐらい居るんですけど!?とつかえひつかえなんですけど!?」

口から唾液を撒き散らしながら怒鳴る我が愚姉。確かに見た目は良い。母親の血を濃く受け継いでいるのか、鴉の濡羽色の艶やかな長い髪。顔も整っていれば身体も出るところ出てるのに引つ込む所は引つ込んでいるナイスボディ。家の中ならともかくとして外面も良いので、学校内では間違いない大人気であろう。風の噂だがファンクラブみたいな物もあるらしい。

だが、俺の『眼』は誤魔化せない。男性経験と念じながら姉の頭上を見れば、そこには無情に輝く円形の数字が見えた。

一息ついて、自慰回数と念じる。すると姉の頭上にあつた数字は三桁程に切り替わった。

「……姉ちゃん。この際だから言うけど、いい加減真面目に良い男見つけろよ……昨日の夜もオナツてたろ。寝てる所にうるさいんだよ」

「ツツツ!!? なつ……はあ!!?」

「じゃーいつてきまーす」

「待つ……ちよ!!? 待ちなさい!!!」

姉を置いて家を飛び出す。

さあ、今日から始まるんだ。俺の素晴らしくも『最低な』学校生活が!!!



国立雄英高等学校。本気でヒーローを目指すなら此処と言われる程に超有名な高校。俺はその学校に居たはずだ。

朝早くから登校して、自身の席に座りながら同じクラスの女の子を観察……おおお、姉ちゃん並のオナニー数をカウントしてる子が居る……流石雄英(?)。

又っ!?! あの女の子、乳でつかっ! お、おお……俺の前の席に座った……だど? 会釈した際に、僅かに揺れたモンを見逃す俺ではないぜ。

ほう……透明の個性、か。だが残念だったな。俺の眼にはその姿、余す事無く全て見

え——は？顔可愛いかよ。可愛いというか、美人系。美人でおっぱい大きいとか好き

♥
 そうして眼福を味わっていると……

「個性把握……テストお!?!」

なんで入学式放り出していきなりテストとか始まるんですかね。

いや、理由は聞いた。不審者にしか見えないが、『オーラ』は今まで見た誰よりも濃い人間……相澤先生が言っていた。ヒーローになるならそんな事に費やす時間は無い的な事を言っていた。

だがそれよりも俺を戦慄させる事実が俺の眼に映し出されていた。

0

0なのだ。

相澤先生は0だったのだ。コイツマジで男かよ？え？ヒーローってそこまで禁欲的ストイックじゃないとダメなの？早くも心折れそう……。女である、うちの姉でさえ三桁行ってるんだよ？少なくとも姉の二倍近い年齢であるにも関わらず、2回とか1回とかでもなく、0。怖あ……。

と、ちよつと気が何処かに吹っ飛んでいる間にも話は続いている。

「トータル成績が最下位だった者は、見込みなしと判断して除籍処分しよう。生徒

の如何は、俺たちの自由だ」

自由が過ぎる。え？マジで？この21人居るクラスメイトの内一人が除籍になる？つまり場合によってはただでさえ少ない6/21の女子生徒一人が居なくなる？許されざる……許されざるアレよ？ソレが教師のやる事か！

と義憤に駆られている間にもテストは始まってしまった。ああ、マズい……何とかして『本気オーラ』を出して相澤先生を止めるか、もしくは如何に女子を引き上げて俺以外の男子を蹴落とすか……流星に大っぴらにやるのはマズい。良い作戦は無いものか……。

「次、八雲」

良い作戦が思いつかないまま俺の番になってしまった。ま、まあまだ一種目だ。一種目で誰が最下位とかまだ決まらんし、大丈夫やろ！

とか考えながらスタート位置につくと、相澤先生から忠言を受けた。

「八雲、お前の全力を見せろ。じゃなけりや即座に除籍処分だ」

「ええ……？」

そして言うだけ言ってスタート合図の準備をする相澤先生。何よいきなり……まあ、出せと言われて出さない訳にもいかないわなあ。

そうして、息一つ。俺の全身から溢れ出るオーラが、脚に集まっていく。

『START!!』

合図と共に、翔ける。

『GOAL!!』

俺が通った痕が地面に刻まれた。

「記録、4. 12秒」

「は、速エエエ!!?」

「お、おい八雲!!?お前の個性って『眼』に関するモンじゃなかったのかよ!」

「増強型の個性……?」

確かに俺の個性は『眼』に関する個性だ。だが俺の眼で見える、『他人には見えないオーラ』。これが俺をここまで強化したタネだ。

このオーラ、とりあえず『生命力』だろうとは思うモノではあるが、なんと言うか……違うのだ。それこそドラゴンボールで言う『気』、ワンピースで言う『覇気』、ハンターハンターで言う『念』、ブラツククローバーで言う『魔力』とか……とにかく『フィクシオン作品』におけるそれらしいモノだ。

ソレを感知出来ない者は、長い修業の果てにソレを感知して操る事が出来るという、まさに達人か仙人の技術と言えよう。だが、俺だけはソレを見る事が出来た。知覚できるといふ事は、操れるという事。勿論長い時間が掛かった……が、それこそ何十年も武

術に身を捧げた達人、程までには時間は掛からなかったのは言うまでも無いが。

コレは『個性』ではなく『技術』だ。だが、現状コレを十全に扱えるのは恐らく俺だけなので『個性』と言っても差し支えは……まあ、あつたりなかつたりするんですけども。

「どうどう？ 皆ちよつとは見直しちやつたかなあ俺の事。つかー、強い男はモテちゃうからなー！ つかー！」

「うん。そういう所だと思うよ」

「ホレ、さっさと次の種目の準備しろお前ら」

はい。

■
そうしてそれなりに問題は発生したものの、最終的に相澤先生が『ちなみに除籍はウソな』発言によって絶叫の嵐に巻き込まれはしたが、恙なく個性把握テストは終了した。

「よっ」

「おお、切奈」

雄英の各ガイドランスが書かれた内容の濃いプリントを見ながら歩いていると、校門に背中を預けて立っている取蔭切奈が手をあげて声を掛けた。

「なんかソツチのクラスは初っ端から大変だったらしーじゃん」

「まあな。入学式どうだった？」

「ん、まあ普通……かな？ 校長先生の挨拶でネズミが喋り出すのはシユールの一言だったけど」

「テレビで見た時は何の冗談かと思ったのも懐かしいな……」

そうして一緒に歩きながら帰路につく。

俺と切奈は中学三年生の頃から『付き合っている』。受験で忙しい時期に何を……と思うかもしれないが、まあ割とキチンとした理由がある。

「……ね、ねえ、今日さ……寄ってかない？」

切奈が気恥ずかし気に俺を誘う。もーほんとえっちなんだからー。

「違うし！ 入学初日から『除籍』とか聞かされて、アタシもちよつと焦ってるだけだし！」
「どーんと構えてなよ推薦入学者。まあどーピング疑惑があるけども」

「どーピングじゃないし！ ちゃんと成長して自分の糧にしてる……ってか、自分で言う？ 普通」

「そりゃ自分の事だからね」

「つたく……………アンタとは違うクラスになっちゃったねえ」

「授業中に悪い事されなくて一安心だよ俺は」

「……………エツチな事が好きな女の子は嫌い？」

「大好き」

「即答……………」

オーラを操れるのは俺の専売特許的なモンだ。だが、なんとも不思議な事に、一時的に他人にもこのオーラを操る事が出来るようにする方法があった。

「それで？さっきの質問の返事は？」

「例え親の死に目だろうが、俺が切奈の誘いを断る訳が無いな」

「いや、そこは親に会いに行きな」

「えっ、ご両親にご挨拶を？」

「……………バカ」

『好感度』と念じる。俺の眼には、切奈の頭上に100%と書かれた数字が見えていた。

「デキちゃったらどうするつもりだよ。流石にお互い高校生なのに産むのは早過ぎると

思うぞっ…」

「……………そこは、アンタが上手い事調節してよ」

「中々ご無理を仰る。例え10%でも当たる時は当たるんだぞ？」
「知ってるよ。……ちゃんと、ピル飲んでるし……」

『妊娠率』と念じれば、0%と数字が切り替わった。

「……今日は朝までコースかな？」

「つつつ」

耳まで真っ赤に染める切奈可愛いだよ。

そうして切奈の手を握りながら、切奈が雄英に合格してから借りたというマンションの一部屋に向かって移動する。



「ふーっ♥ふーっ♥」

「ほらほら、先に制服を脱がなきゃ」

二人で切奈の部屋に入り、玄関の鍵を閉めた直後に切奈が俺に抱き付いてくる。

今すぐ切奈に挿れたい衝動を理性で抑えながら、切奈の唇にキスを落として制服を脱

がしていく。フワフワ広がるフェロモンが凄いエロくて暴走しそう。

「はあっ♥すうう……んっ♥汗クツサ♥」

「っ！発情しきった表情浮かべやがって……そんな顔他の男子に見せてないだろうなっ」

「見せる訳っ♥ないでしょっ♥」

制服を脱がしきって洗濯機の中に投げ入れる。紫のアダルティな下着姿となった切奈のパンツからは既に愛液が垂れ始めていた。

「切奈がA組だったら、間違いなく女子達はビツクリするだろうな」

「えー？なんで？」

「そりゃこんなドスケベな下着着けた同級生が同じ更衣室で着替えてたらギョツとするだろー！」

「あー………それで『彼氏のシユミ♥』って笑いながら皆に見せつけるのも良いかも……♥」

「お付き合い経験の無い子も居るんですよ！そんな子が切奈の所為で悪い性癖身につけちゃったら責任取れるんです!？」

「んー………まあ、もしそうなたら……『一緒』にやろっか♥」

「はあーエロに寛容な彼女を持って俺は幸せだよ本当に!」

「んむっ!」

切奈の口の中に舌を捻じ込み、蹂躪する。切奈はコレが好きなのか、ディープキスを受ける。と全身の力が抜けてオネダリモードとなる。

「んっ♥んふっ♥んひゅう♥ぢゆるっ♥」

オネダリモードの切奈をベッドまで運ぶ。狭い部屋にしては大きなベッドで、かつ頑丈。明らかにセックスする。事前提に組み上がってるピンク色なベッドだ。

「へへ……♥今日は激しい気分かもしれない……♥」

「可愛い彼女のご要望にお応えしましょう」

服を脱ぎ捨て、大きく張り詰めたイチモツをそのまま切奈のぷっくり開いた割れ目に宛がう。まだ入れてもないのに、入口がちゅっ♥ちゅっ♥と乞うように吸い付いてくる。

切奈の脚を大きく開くように抱え、まるでレイプするかのよう激しく突き入れた。

「ああああっっっ♥♥♥」

「くううッ……!相変わらずめっちゃ締まるっ……!」

前戯もせずに入れたというのに、切奈の膣内は準備万端とばかりに広がって俺の形にフィットした。んもーホントドスケベ!ドスケベ悪い子!

そのまま勢いよく腰を叩き付け、膣肉をドチュドチュ突きまくる。その度に切奈は涙

を流しながら可愛い声をあげる。

「ああつ♥あああつ♥まつ、待ってっ♥ちんぽっ♥ちんぽ激しっ♥♥♥」

「ヒーロー志望の女の子が『チンポ』なんてはしたない言葉を使って！悪い子だなっ！好きっ！」

「反則っ♥ちんぽ突きながらっ♥ソレ言うの反則っ♥♥♥」

「なら反則にならないように口塞ぐねっ！」

「んふうううツツツ♥♥♥」

切奈の舌をネチヨネチヨに絡ませるように舌を入れ、熱い口内に唾液を送り込んだ。

切奈はまるで悦ぶ様にちゅーっ、ちゅううっとならと唾液を吸い出してはコクコクと飲んでいく。あーホントにエロっ！

熱く絡みつく膣肉によって射精秒読み段階……となった瞬間に切奈の手足がポンと飛び、俺の背中と尻を後ろから押さえ付ける。拘束してのに抜け出すなんて卑怯だぞ！

「ナカっ♥絶対ナカだからねっ♥」

「当たり前だろうがっ！出すッ！出すぞっ！！」

「ちようだいっ♥濃いザーメンっ子宮にいつぱいだしてえっ♥」

ぶびゆるるるるっ！！ビュルルルッ！！

滅茶苦茶大量の精液が切奈のエロまんこの中に出される。オーラによって精巢の機能が強化された事で、特濃&大量のぷりぷりザーメンが切奈の子宮にたっぷり注がれた。

「おっ♥おおおっっっ♥」

切奈のアへ顔だけでエロすぎて射精しそう。したわ。

「んぐうううっっ♥♥♥お、追い打ちとか卑怯っっっ♥♥♥」

滅茶苦茶気持ち良い射精をドスケベ可愛い女の子の膈内で行えるとか、俺は前世でもでもない徳を積み過ぎたに違いない（賢者モード）。

可愛い顔しながら、涙や鼻水で酷い事になつてる切奈に何度も啄むようなキスを落とす。

さて、ここで改めて俺のオーラ操作技術についての捕捉だ。オーラを操る事は、基本的には俺にしか出来ない。だが何故か不思議な事にこうして俺の精液を体内に送り込まれると、その間オーラを知覚して操る事が出来るようになる。

つまり今、切奈は自身の全身から溢れ出るオーラを見る事が出来、更にそれを思うように操る事が出来るようになったのだ。精液が身体の中にある限り。

「はあくっ♥はあくっ♥好き放題してくれてえ……覚悟しろよおっ♥」

「なっ、ちよっ!?!」

急に切奈の全身がバラバラになって、のしかかる様に押さえ込んだ俺の身体が布団に沈む。

そしてそのまま、仰向けに縛られるように切奈の太腿とふくらはぎで両手を押さえ付けられ、両足は切奈の手で押さえ付けられ、ギンギンに反り立つてるイチモツに切奈の腰だけが叩き付けられる。

「おりやつ♥アンタ専用♥アタシのおまんこオナホで空っぽになるまで搾ってあげるっ♥」

「う、おお!?!」

そのままパンパンバチバチと、肉オナホと化した切奈の腰が踊る様にチンポを貪る。しかもその上、膣肉にオーラを集めて搾精能力を高めているのか、脳が痺れるような気持ち良さが叩き付けられ続ける。気がおかしくなりそうだ。

「はっ♥あっ♥すごっ♥これヤバイっ♥今までのセックスよりヤバイっ♥」

切奈も俺の眼前で白目を向きながら、快楽を楽しんでいる。そのまま舌を伸ばし、舌だけを絡ませるようなキスをした。

「はあっ♥んああっ♥きもちっ♥きもちいつ♥やばいつ♥とまんないっ♥イクの止まんないっ♥」

ぎゅーっ♥ぎゅうううっ♥とイキながら締め付ける肉オナホが、上下の腰振りだけ

じゃなく左右や回転などを加えてきて様々な方向から快樂をぶつけてくる。もはやヒーローというよりサキュバスじゃないか！

「だせっ♥ザーメンだせっ♥妊娠させろっ♥アタシを高校生ママにしろっ♥」
いくら妊娠確率が0%だったとはいえ、それは先程見た時の話。此処まで孕みたがりマンコと化した切奈の妊娠確率は、10%程に上昇していた。

「びゅーっ♥びゅーっ♥ぎーめんびゅーっ♥中出しっ♥せいえきびゆるるるーっ♥」
耳元で淫語を囁かれ続け、我慢の限界を迎えてしまう。

びゅぶぶるるるっ!!!どびゆるるるっ!!!

一回目よりも更に強い射精が切奈の肉オナホに叩き付けられる。

気持ち良かった…と僅かに油断した次の瞬間、精液がまだ迸っているにも関わらず切奈の肉オナホが前後に激しくグラインドし、射精中の亀頭が子宮口に激しく擦り付けられる。

「ああああツツツ♥♥♥あああああツツツ♥♥♥」
「う、あああツツ?!」

射精しながらだというのに、更に次の射精タイミングが来てしまった。切奈と一緒に、快樂の限界を超えた絶頂を味わう。

切奈の肉オナホに入りきれなかった精液が結合部から漏れ出し、ベッドの上に零れ出

た。

「お〃っ♥ん〃お〃お〃っ♥♥許してえ♥♥ごめんなさいっ♥♥♥」
 「おしおきっ！悪いマンコにはオシオキっ!!」

既に日は暮れ、夜もいい時間。そもそも日が沈む前だというのに、大きい声で喘ぎ続ける切奈の頭には近所迷惑という言葉が抜け落ちていたのだろう。まあ俺もそんな言葉は抜け落ちていたのだが。

切奈のマンコにチンポをブチ込みながらケツ穴に指を突っ込んで強引に押し広げ、アナルファックの準備を無理矢理に整える。オシオキだからね、仕方ないね。

ケツ穴を犯すのは初めてだが、そんな時でもオーラで解決。切奈のオーラをケツ穴の神経に集中させ、痛みを鈍らせ快感を強化する。そんな事も出来るんですねえ。

そうして宣言通り、切奈を『朝までコース』で可愛がり続けた。

ちなみにオーラを使えば、ほんの1時間程度の睡眠でもバツチリ8時間睡眠をとったように休息する事も可能。万能過ぎワロタ。

*

「い〃ぐつ♥♥♥い〃ぐの止まんないよ〃お〃ツ♥♥♥」

「…………お隣さんお盛んすぎひん？」

麗日お茶子は、隣から漏れ出る嬌声によつて眠れなかった。身体が疼いて仕方なかった。

「…………少しだけ、少しだけやから…………んっ…………ふっ♥」

「や〃だよ〃だっ♥♥♥おしりでい〃くのや〃だあ〃ツツツ♥♥♥」

「おっ、お尻でっ…………!?!ツツツ♥くっ…………ふいいッ♥」

隣に住むのはどなたか知らないが、自分なんかよりも遥かに『大人』であろうことは予想がつく。そんな人物を自身に当てはめ、誰とも知れぬ大人の男性に抱かれる自身を想像した。

「ツ♥くっ…………ふっ♥んんっ♥♥♥くツツツ♥♥♥んんんんんくくくツツツ♥♥♥」

自身の指では絶対届かない所をゴリゴリ突かれる想像をしながら絶頂したお茶子は、届かない場所を突かれるのってどんな気持ち良さなんだろうと思いつつ手を洗って布団に潜った。

「…………手え、臭っ…………」

「あ〃あ〃あ〃ツ♥♥♥魔眼ツ♥♥♥まなこおツツツ♥♥♥」

そのまま、隣から聞こえてくる嬌声を子守歌として深い眠りについた。
その日見た夢は、とてもいやらしい夢だったような気がした。

初訓練・からの・葉隠ちゃんちゅつちゅつ

宣言通り切奈と朝までぶっ通しセックスをして、繋がったまま一時間程度眠る。それだけで体力は全回復。セーブポイントか何かか？

「んっ……ぢゆるるるっ♥んふ♥」

「っく……！切奈……出すぞっ！」

「んっ♥良いよ……ザーメン、飲ませてっ♥」

「くっ……！」

あれだけやったにも関わらず朝立ちする節操のないムスコにしゃぶりついて朝食のオネダリをする切奈。たっぷり仕込んだフェラチオレベルが上昇しているのを『視』ながら体感し、口内に射精した。

「んっ……ちゆう……っ……♥んあく……ゴクッ♥ぶはあ……ほんと、濃すぎでしょ♥」

大量に射精されたザーメンを口内に溜め、見せつけるように飲み込む切奈。お前はほんとにエロいな！

「魔眼が仕込んだんでしょ♥あー……またスイッチはいつちやつたかも……♥」

「だーめ」

精液を飲み込んで発情スイツチの入った切奈の、フリフリ揺れる尻を軽く叩いて嗜める。流石にそろそろ一旦家に帰らないと遅刻してしまう。

「良いじゃん♥二日目から朝帰りかますド変態ヒーローの卵♥」

「切奈もザーメン臭い身体と口を洗わないと、二日目でチンポ啜えこんだ女って思われるぞ」

「事実だし」

「事実でも」

「むう……じゃあ今日の夜もヤろうね♥」

「二日連続朝帰りは流石に怒られる」

切奈にキスをしてからシャワーと一緒に浴びに行く。切奈の手がずっと俺のイチモツに伸びてきたが、おっぱいをグニグニ揉んで怯ませた。

「ほんと……なんでこんなド変態好きになっちゃったかなあ……♥」

「俺もド変態な切奈が好きだからおあいこだな」

「つ……バカ♥そういつて他の女の子にも手を出すんでしょ？」

「否定はしない。でも——」

「『一番は私』でしょ？知ってる♥だから……ちよつとくらいなら、許す」

「切奈も気に入った男が居れば手を出しても良いんだぞ？」

「えー? ♥ アタシのエロさに釣り合うスケベなんてアンタくらいだよ ♥ ほら、さっさと行った行った」

「おう、また学校で」

「うん、また学校で」

そうして切奈の部屋から出て帰路につく……直前、マンシヨンのエントランスでクラスメイトに出会った。

「えっ!? 八雲くん!?!」

「おっ、麗日さん。此処に住んでるの?」

「そうなんや。八雲くんも?」

「いや、俺は朝帰りの最中」

「朝帰っ……!?!」

「それより麗日さんは……私服、だらしないね」

「えっ、あつ、違っ!?! こ、これはちよつとゴミ出しするだけだから気い抜いてただけというか!?!」

胸元ゆるゆるのシャツ姿と言うか……たぶんパジャマ代わりに使ってるおふるの洋服なんだろうな。下が若干透けてるし。見たわー、似たような格好の団地妻をエロ本で百万回は見たわー。だからといってエロくないとは言ってないんですけどね? むしろ

高校生にしてその色香はヤバくない？

「あー……まあ、なんだ？麗日さんも一人暮らしなんだろ？ちよつと無用心が過ぎると襲われるぞ？俺みたいなヤツに」

「つつつ！み、見んといてえ！」

「がおー、と狼の真似をしながらも、うつすら見える胸のぽつちを脳内HDDに永久保存。大きさもバランスもとてもエロイな！」

「じゃ、じゃあそう言うことで！」

「あつ、逃げた」

そのまま胸を隠しながらマンション内に駆けていく麗日さん。ふむ……ケツもエロいな！

つと、いい加減帰らねば本当に遅刻してしまう。駆け足で家に向かうのであった。

??

「ただいまー姉ちゃん。俺が居ない間に存分にオナれたかー？」

「するわけないでしょーが!!!」

しつかり数字は増えていた……えつ、増えすぎじゃない？10回ってお前……。

??

「戦闘訓練！ヒーローを指すなら避けては通れない、戦いの道！己の基礎を知る為に、クジで選ばれた相手と共に勝利を目指せ！」

「ざっくりと纏めてくれてありがとう八雲少年！急にどうした!?」

いや、なんか言わなければならぬ気がして。

そんなこんなで最初の組の戦闘が終わった。えっ、ヒーロー科ってこんな、コンクリ建物ぶっ壊すのがスタンダードなん？怖あ……。

そうして次の試合。一組だけ三人組なヴィランチーム……まあ俺達の事なんですけど。がビルの中に入る。作戦会議〜！

まず俺。『眼』の意匠が光る和装にゆったり袴。額には紺の地に金の『目』を入れた鉢巻きを着けて、腰には木刀を下げています。

別に剣道を齧っている訳ではないのだが、『オーラ』を通すのは『生きています』物が適している。故に比較的取り回しのしやすい『木』刀を装備している……いや、野郎の説明なんざどうでもいいんじゃない！

一人目の相手、蛙吹梅雨。

「梅雨ちゃんと呼んで」

「よろしくな梅雨ちゃん！」

「けろっ」

笑顔が可愛いナイスガール！やや猫背気味だが、それでも隠しきれないおつきいおっばい！更にはち切れんばかりにムチムチな太ももっ！あゝ挟みてえ。勃起が誤魔化しやうすい袴で良かったよほんと。

次、二人目の相方、葉隠透。

「……ねえ、八雲」

「ん？」

透明人間故にノーガード！ばるんばるんしよるおっばいが下着すらないノーガードですよ！あゝ鼻血でるんじやあゝ。

「私の事見えてるでしょ」

「見えてる？なんの事？」

これはお互いが傷つかない為の合理的虚偽！！全裸が野郎に見られてるとか女の子にとつて憤死モンですからねシカタナイネ！

「おもいつきり私と目が合ってるよね」

「……oh」

でちやったかー！育ちの良さがでちやったかー！目と目を合わせて話しましようの弊害〜！

そうだよ。透明人間と目を合わせて会話出来る訳無いじゃんアゼルバイジャン。梅雨ちやんの絶対零度の視線が突き刺さる！

「……やつぱり、全部、見えてるの……？」

「いやー全部とはそんなそんな。ちよつとソコに居るなあーつてのが見えるだけで」

「じゃあ此処、どうなってるか見える？」

そう言つて手袋を脱いだ葉隠は自身の股を指差した。しっかりと目で追いましたマル。

「……やつぱり、ハッキリ見えてるんだ……」

「それは卑怯つ！！いくらなんでもそれは卑怯ですことよ葉隠さん!!」

「ける……何処を見たのかしら八雲ちゃん？」

「黙秘権を行使させていただきますつ！！」

ハート形にカットされた陰毛とか知らなーい!!!

「……放課後、話があるから」

「ひいん……そ、それよりほら！作戦会議しようね！」

「誤魔化したわね……」

変態の烙印をおされるのは、例え同じ日だろうが後であるほど良いのだあ!!!
こっそり隠し見した葉隠の好感度は、割りと高かった。あるえく？

??

戦闘訓練が始まった。それと同時にビル全体が氷に覆われる。

「う、うわわっ!?! 本当に八雲の言う通りになった!?!」

「やっぱり見えたオーラの出来たか……梅雨ちゃん?」

「け、ける……ご、ごめんなさい八雲ちゃん……私は寒さに弱い……」

「……カエルだしなあ」

梅雨ちゃんが俺の背中に抱き付いてくる。もっちりおっぱいとムチムチ太ももが当たってオホッッ!

全身から垂れ流れるオーラを熱に変換……とカツコ良く書いたが『シバリング』をオーラで強化しただけだ。しかし効果は靦面。一気に部屋中が暖かくなり、身体に着いていた霜が溶けきった。

「……八雲ちゃんは暖かいわね」

「もつとくつついて良いのよ!」

むしろもつとくっ付けえ!!

「……じゃあ、お言葉に甘えるとするわ」

マジかよ、言ってみるモンだな。

尚、カメラを通してクラスメイト達にもその光景は共有されている。『何イチャついでるんだ』と呆れた者、『八雲の個性便利だな』と能天気な者、『羨ま死ねエ!!』と血涙を流す者と大きく別れた。

閑話休題。

梅雨ちゃんを背負いながら、凍りついた冷凍庫と化したビルを索敵する……と言いながらも、『オーラ』を見れる俺には例え隠れていようがすぐに見つけられる。ましてや、先の一撃で仕留めきったと油断してるヤツが逃げも隠れもしようとしなければなら余裕だ。

最低限の警戒をしていた程度の注視力で、気配を消していた俺達に気付くこと無く後ろから奇襲を受ける轟。

「なっ……!!?」

「生え抜きエリート様こんにちはア!生粋のコンクリ育ちヴィランでえーす!!!」

隙だらけな後頭部に向けて木刀を振り下ろす……のは流石にヤバいので、氷で出来た鎧をぶっ壊すように木刀を振り下ろした。一撃で粉々になる鎧。一瞬で冷静さを取り

戻し、俺に向けて氷を飛ばしてくる。

「ぎゃーっ！動けねえ!？」

「ぐっ……ッチ、さっきの攻撃が避けられてたか……此処に居るのはダメエだけかつ……!？」

俺を拘束して油断した所を、梅雨ちゃんが天井から奇襲する。二度目の奇襲もかろうじて回避し、その氷で梅雨ちゃんを凍らせた。

「チツ……だが流石にこれで——」

「油断大敵!」

一度氷で拘束した奴が再び攻撃してくるとは予想してなかったであろう轟を殴り飛ばし、凍っている壁に叩きつける。

そうして体勢を大きく崩した轟は、氷を溶かしながら歩いてくる俺に注視して……意識から逸れていた『透明人間』が轟に拘束テープを巻き付けた。

『三対二でも余裕だ』とかクールぶってたお方は何方ですかあー!？」

「……クソっ」

まあ俺的にはボンボンおっぱいとムチムチ太ももを堪能出来て轟には感謝感激雨霰なんだが。

そうして、勃起しすぎてジンジンしはじめた股間を抑えたまま、轟の相方である障子

を三人で囲んでボコって倒した。やはり数は力だ。戦いは数だよ姉貴！

MVP貰えました。やったぜピースピース。

??

放課後。俺は誰も来ないであろう雄英高校の屋上に呼び出されていた。うひえ〜景色が高い。

そうして屋上を軽く見回してみると、全裸で立っている透明人間の姿が!!!

……いやまあ、不思議なことを言っている自覚は有るが。透明だと言うのに、その姿が見えるというのだから。

「……あー、葉隠?」

「あつ……えへへ、見つかつちやった♥」

葉隠透、好感度89

葉隠の好感度がバリックソ高い件について。俺と初めてセックスする直前の切奈が78だったことを思えば、その高さの異常性が分かる。あれ?俺って既に葉隠とセックスしてた?

葉隠は全裸のまま、腕で胸と股を隠しながら俺に近寄ってくる。透明人間が身体を隠

す必要があるんですか!?

「……やっぱり私の事ハッキリ見えてるんだ♥」

「何がハッキリ見えてるって証拠だよ」

同様と興奮で口調がおかしくなったがなにも問題はないな。

「だっておっぱいとお股を隠してたら露骨にがっかりしてるんだもん♥」

「ちくしよ俺ってば正直者!」

でもさあ!仕方ないじゃん!見放題だったプルンプルンおっぱいとエロエロに整えられた陰毛が見せられないとなるとそりや露骨にがっかりもするわ!しまくるわ!

でもそれはそれとして恥じらう姿って良いよね。良い……。

「……ねえ、おっぱい見たい?」

「見たい」

「……良いよ」

そう言つて顔を真っ赤に染めながら腕をずらし、大変な恵体をさらし出す。『どうせ誰も見られない』と思いつながら全裸をさらすのと、『誰かに見られている』と思いつながら全裸をさらすのでは趣が違いますね。

じつと舐め回すように葉隠の胸を見続けければ、葉隠の乳首が少しずつ大きく膨らんできた。

「見られて興奮してるの?」

「っ♥」

ははあ……なるほど。なんとなく理解してきたぞ。

葉隠はきつと……全裸で外に出ることに性的興奮を覚える変態なんだな。だけど透明人間という性質上、全裸で外を歩き回ったとしても誰にも気付かれる事はない。仮に視覚以外の感覚が鋭敏な個性の持ち主が居たとして、全裸で歩き回る葉隠の存在に気がつけたとする。だが、それでも誰がこんな恵体をさらすのが美少女と気がつける?

要するに、葉隠は『全裸で性欲の対象として見られる』事に性的興奮を覚えるト変態さんということになる。

うん。そう言うことなら俺も脱ぐか。

「っ?!えっ?!八雲?!」

「この大空の下で全裸になる解放感……ちよつとクセになりそうだ」

葉隠以外誰も居ない屋上で、俺は生まれたままの姿をさらし出す。誰にも恥じることの無い肉体美を此処に誇ろう。

「恥じてよ!せめてそこは隠してよ!」

「葉隠のエロい姿で勃起してんだ。何を恥じらうことがある。むしろ勃起してんのは葉隠のせいなんだからね!」

「う、わ、私の……せい……?」

俺の超弩級砲塔が最大仰角。射撃もやむ無し。

「さあ、俺は一切隠し事はしないぞ。葉隠も隠し事するのはアンフェアではないか?」

「う……うん……♥」

顔だけでなく身体全体を赤く染めながら、葉隠は後ろで手を組んだ。所謂『休め』の姿勢だが俺の超弩級砲塔は休まらないんだが?

「ど……どう、かな……♥」

「隠し事はしないけど今すぐ（マス）掻く仕事したい」

「えっ?」

なんでもなーい!

そう、何か違和感が有ると思っていたが、今気がついた。葉隠は恐らく今まで、『誰にもその姿を見られたことが無い』筈だ。でなければまだ出会ったばかりの俺に対してここまで好感度が高い理由にならない。

だと、言うのに。葉隠は常に見られる事を意識している様に思えた。女の子は不思議な生き物だがファンタジーな生物ではない。手入れしなければ肌は荒れるし、処理をしなければ四肢に毛が生え散らかす。俺の姉ちゃんの話だ。

透明人間が髪形を変えて、誰が気付く? 手足の毛の処理をして、誰が気付く? スキン

ケアをして、誰が気付く？

もし仮に、世界が崩壊したとしよう。自分以外誰も居なくなつた世界で、自分以外誰も自身の容姿を気にしない壊れた世界で、普通の人間なら自身の容姿を整える事に時間を割くだろうか？

葉隠は、きつとそんな世界でも一人で容姿を整える事に時間を割くのだろう。

それが、その精神が何よりも美しいと思つた。

だからつい、恥ずかしげに揺れていた葉隠の手首を掴み、引き寄せ、その唇を奪つてしまつた。

「っ——」

「……」

女の子の甘い香りと、仄かに漂う柑橘系の香水の匂い。

手入れの行き届いた、透き通るような肌に惚れた。

ナチュラルメイクが施された、美しい顔に惚れた。

誰にも見せる事が無くとも、自身の秘部までしっかりと手入れする精神性に惚れた。

「好きだ」

「ひゃうあ」

吸い込まれそうな程に綺麗な眼を見ながら、告白した。

「あ、あう……わ、私って透明人間なんだよ?」

「勿論知ってる。例え葉隠の美しさを誰も理解出来なくても、俺は葉隠の事が好きになつた事には変わりはない」

「ふあ……わ、私は全裸になつてえっちな気分になつちやう変態、なんだよ……っ?」

「今は俺も全裸で、興奮してる。一緒だな」

「き、昨日女の子と一緒に帰つてたでしょ!? その子は彼女さんなんじゃないの?」

「おお、よく見てるな。自慢の彼女だ」

「浮気は良くないよっ!」

「まあ一般的にはそうだな。でも俺も切奈もポリアマリー複数恋愛には理解があるぞ」

「ポリ、アマリー?」

複数恋愛、ポリアマリー。あまり一般的な言葉では無いが、要するに複数人のパートナーとオープンな恋愛をする事を指す。自分は相手を好きだし、相手も自分を好き。ただ、相手には自分以外のパートナーも居る。その事を許容する価値観だ。

浮気や不倫と言えはその通りだし、誰もが好きな人の一番になりたいと願うのも当然のことだ。だからこそ一般的な価値観では無い事を理解している。

「でも、好きになつてしまった事はどうしようもない事だ。俺はその気持ちに蓋をして、心の奥底にしまう事は出来ない。それを相手に強要もしない。葉隠が俺を好きになつ

て欲しいと思うけど、だからと言って俺以外のヤツを好きになっても関係を強要はしない」

「ポリアモリー……か」

「……まあ、その……なんだ？俺は葉隠の事が好きだけど、葉隠以外の女の子も好きなんだ。その事を理解して欲しいけど、無理にとは——」

「……えいつ」

「っ!？」

葉隠から返されるようにキスを受けた。

「……私のファーストキスを奪っておいて、ウジウジすんの禁止!」

「お、おう」

「そ、それと……私の事は、名前で呼んでほしいな」

「……透」

「っ!……えへへ♥好きな人に名前でも呼んでもらえるのって、こんな気分なんだ」

照れながら笑う透の顔は、俺の語彙力では表せない程にとても美しかった。

「……今そーいう雰囲気じゃ無かったと思うんだけどなー？」

「すんません……」

勃起した愚息が透のお腹にツンツンと自己主張を始める。こ、コイツばかりは制御不

能なんです……コイツのアクセルしか制御出来ないんです……。

「いっよ」

「えっ?」

「私のせいでこーなっちゃったんでしょ?……じゃあ、『彼女の私』が責任もってシてあげる♥」

女神……。俺今日から葉隠教の信者になります。御神体に射精するって罰当たりが過ぎる。

「ほら……その、私、こういう事初めてだから……色々教えてくれると嬉しいなあ……なーんて……」

その恥じらい顔は反則で御座います女神イ!!

再び透の唇を奪ってしまった。

「……♥」



「うわ、うわあ……凄いいんだね……ビクビクしてる♥」

「透?マジで?マジで此処でやるの?」

「マジだよ♡えへへ、絶対忘れられない経験になると思うな♡」

「絶対忘れないけど、万が一の事考えるとマズイと思うな俺は！」

俺は今、透を屋上のフェンスに寄りかからせるように立たせている。全裸で。

屋上に居る生徒なんて早々見られる事は無いだろうが、そんな度胸試しする？

「切奈さん……だっけ？その子とはもう色々してるんでしょ？」

「してるけども……」

「じゃあ私だつて負けてらんないもん」

もん。じゃないよ可愛すぎて心不全起こしかけたわ。うう、マジで？マジで屋上セツ

クスすんのの？しかも、俺はともかく透の初体験だぞ？

「初めては、外でシたいって思ってたんだよね……♡」

「んもうホントど変態だな透は！大好き!!」

美しい女の子がド変態とかもう本当にありがとうございます神様。陰毛の隙間から

トロトロと流れ出てくる愛液を勃起チンポで掬う。

「あふあつ♡や、やあ……変な声でちゃうっ……」

「ああもうなるようになれ、だ！厄介な女の子好きになっちゃったなあ！」

快感に顔をしかめる透も可愛い。その顔、涙やヨダレでグチャグチャにしたい。

ゆつくりとイチモツを透の割れ目に挿入していく。

「あうっ♥あっ♥ま、待って八雲っ♥」

「ど、どうした?」

イチモツは、丁度処女膜に触れたか触れないか程度にしか入ってない。膣内は思いのほかすんなり入っていて、痛みを感じる事はまだないと思ったのだが……

「き、気持ち良すぎて、入れただけでイっちゃいそうなの……♥」

口元を押さえながらはにかむ透。あのさあ……そういうの逆効果って習わなかった!?

「んぎツツツ♥♥♥」

此処が外だという事すら忘れ、思いっきり奥までプチ込んでしまった。透の膣内はなんと言うか……貪欲だ。まだ膣肉は広がりきっていないというのに、必死にちゅーちゅー吸い付いてくる上にうねうねと動き回って休ませてくれない。全体的にキツキツな膣内の筈なのだが、チンコが潰される痛みよりも快楽が遥かに上回ってくるのは愛液の多さのせいかな。

あー……透のマンコの形が俺専用になるまでプチ込みてえ。一番奥まで腰を叩き付けたせいで、透の両脚が俺の腰に抱き付く様に締め付ける。おほう……程よい筋肉と脂肪が奏でるムチムチハーモニーがチンコに力を与える。しかも肌は脚先までスベスベ。触り心地最高っ。後で手コキや脚コキたっぷりしてもらおう。

透の処女まんこから血が流れるが、血まで透明なのは流石に驚いた。透が怪我したら誰が気付くん……？

「その時はいち早く私に気付いてよねっ♥」

「それはつまりずっと私の傍に居てよって告白っ！」

「一々茶化すなっ！」

お返しと言わんばかりにキュウキュウイチモツを締め付けてくる。おおお……早くも膣肉の動かし方を覚えたのね……流石ヒーロー科(?)

舌を絡めるようなキスをしながら、透を優しく突き上げるように腰を振る。うおお……突き上げる度におっぱいがゆさゆさ揺れるっ！視界の暴力だねこれは！暴行罪適応っ！

「んんんんっっっ♥♥♥お、おっぱいイジメるのダメっ♥♥♥」

揺れまくるおっぱいにむしゃぶりつく。透のおっぱいはこれだけ大きいにも関わらず感度良好。是非とも赤ちゃんミルクを搾り出したいところですね。

「ああああっ♥♥♥まってっ♥♥♥まってやくもおっ♥♥♥」

さつきから絶頂カウンターが回りまくってる透にラストスパートをかけていく。なるほど、透が絶対忘れられない経験を与えたいって気持ちが良い分かった。頭がおかしくなるようなラブラブセックスを、一生二人だけの記憶の宝物としたいっていう気持ち

ち。

「くっ……透！そろそろ出そうだっ！一旦抜くぞっ！」

「ダメっ ♥♥♥ 初めてはナカっ ♥♥♥ 膣内射精じやないとダメっ ♥♥♥」

「お、おま……ッ！赤ちゃん出来たらどうすんだ!？」

「妊娠してもバレないしっ ♥♥♥」

あー、透明人間だしねー。妊娠しても、着る服に気を付けてればバレないよねー。

「んな訳あるかあっ!!!」

「抜くのダメエっ ♥♥♥♥♥」

「うっぐ……おとおッ!!!」

射精直前になって、イチモツを透の膣内から引き抜こうとした瞬間。透は、その細身の何処から力が出てんの？と言わんばかりに強く抱き付き、子宮口が鈴口にちゅううううつと吸い付いた。全身を使って『絶対逃がさない♥』と言い、行動に移す透の妊娠確率は20%。一生を棒に振るうかもしれないリスクとしてはあまりにも大きすぎる……。

「赤ちゃん出来たら、産まれるまでおっぱい独り占めだよ?」

そう耳元で囁かれて、この美少女を孕ませようと思わない男は人間じゃないと思う。俺は人間だった。

ぶびゆるるるるっ!!!びゅぶぶぶっ!!!

「ツツツ~~~~~♥♥♥♥♥」

脳みそまで射精してしまっただかに思える、気持ちの良い絶頂。まさに視界が真っ白に染まってしまった程。

そしてそのまま屋上の床に倒れ込み、透を胸に抱き寄せた。

「す、凄い……セックスつてももの凄かったあ……♥」

またしよーね♥と淫靡に笑う透を見て、女神は女神でも魔性の女神だったか……と思う俺であった。



「……う、嘘でしょ……っ」

「け、ケロ……」

屋上に出入りする扉に隠れるように身を潜める女の子二人。その二人は、視線の先に居る男女の行為の一部始終をずっと見ていた。

耳から伸びるイヤホンが特徴の女の子、耳郎響香に至っては『視る』だけでなく、行為に移る前の会話から今行われているピロートーク（枕は無いが）もしっかりと『聴い

て』いた。

初めは、ただの興味本位。或いは庇護欲とでも言うべきか。蛙吹梅雨は、『ちよつとだけやらしいが授業は真面目に取り組む、格好良い男の子』が自身の個性によつて葉隠透に酷い誤解を受けているのではないかと少し心配になり、『放課後、話があるから』と怒っているように見えた葉隠透と八雲魔眼をこつそりと追いかけた。もし酷い喧嘩になつてしまうようであれば、自分が仲裁に入るつもりで。

耳郎響香は、そんな蛙吹梅雨が深刻な表情をしていたから少しばかり興味本位でついできた。勿論、事情を聞いた上で万が一の際には蛙吹と共に仲裁に入る心づもりを整えていた。

しかし蓋を開けてみればどうだ。万が一にも無いと思つていた……否、そもそも思いもしなかった『男女交際』のやり取り……と言うにはかなり性欲に振れているが。が始まり、出るタイミングも帰るタイミングも失つた彼女達はそのまま行為の一部始終を見てもしまった。

勿論、傍目には彼一人が腰を振っている仕草しか見えない。だがヒーロー科として優れた決して出歯亀として優れている訳ではない視力が、全裸の葉隠の全身に浮かぶ汗や体液等によつて浮かび上がる輪郭をしっかりと捉えていた。ネットの海で見られるようなポルノ映像なんかよりも遙かに生々しく、屋上に響き渡る嬌声がずっと二人の耳に残

り続けていた。

男女二人が屋上の床に倒れてピロートークを続ける事暫く。呆然としていた女子二人は正気に戻り、如何に音を立てずにこの場を去るか思考を巡らした……瞬間、鼻に入るあまりにも強烈な匂いによって絶頂した。

「ツツツ……!?!?」

幸いなことに、漏れ出た嬌声はピロートークを続ける二人には聞こえなかった。だが、無情な事にすぐ隣に居る『相方』にはお互いのイキ声が聞こえてしまっていた。

「……………」

濃密な栗の花の匂いによって再度絶頂してしまわない内に、二人は目を合わせる事なくそそくさとその場から去っていった。

「……………今日、あつた事は秘密よ」

「うん……………」

女子が『精液の匂いを嗅いだだけでイクむつつりスケベ』の称号で呼ばれるのは余りにも不名誉。少なくともこの場に居る二人は、自爆してまで相手を貶めるような性格の悪さは持ち合わせていなかった。

その日の晩。二人の女子のとあるカウントが増大した。

体育祭・まえに・百ちゃんもみもみ

「いやーマスコミ騒動は大変でしたね」

「あれだけの騒動を一言で!？」

そんな事言われても。むしろ俺的にはマスコミGJとしか言いようがない。

例えばそれが俺の両頬に赤モミジ痕が残る結果となったとしてもだ。

「……ちよつとは反省しなよ八雲」

「こればかりは性分なモンで」

食堂でメシを食べ終わり、さて行こうとした直後の出来事だった。突如鳴り響く警報。一斉に避難を始める周囲。突き飛ばされる俺。飛びこんだ先には芦戸の弾力性抜群おっぱい。これはもう事故だよ事故。良い匂いしゆる、とか口から飛び出た気もするが。

それによつて一ピンタを受けた俺は流れに押される芦戸を守るように立ち回つてる最中、これまた避難民達に押し潰されそうになつてる女子を発見。芦戸と共に助けだそうと手を差し出し、女子は俺の手を掴んだ……直後、女子が後ろから突き飛ばされたであろう動きで俺に飛んでくる。咄嗟に受け止めた……は良いものの足の踏ん張りが効

かずに、その女子と芦戸と共に纏れるように倒れた。

丁度その時に飯田が非常口と化して混乱は収まった為、床に倒れた上から踏まれるような事は無かった……が、前門に助け出した女子おっぱい、後門に芦戸パンツ、左右には健康的な太もも、な最高の四面楚歌状態となつて勃起してしまつたのは事故だよ事故！良い匂いした！

図らずも勃起チンチンを助け出した女子に押し当てる事となつてしまい、一ビンタ。両頬のモミジは勲章さ。

「そ、そりゃああの時に八雲が居たお陰で怪我はしなかつたけど……それとこれとは別！」

「八雲テメエ!!芦戸っぱいの感触を教えやがれ下さいッ!!」

「お前はホント……迷いないな」

芦戸っぱいの感触はなんと言うか……ハリがあつてとても良かったです。

「三度目のビンタ行く?」

「ふふふ……殴りたければ殴るがいいさ!それで芦戸の気が済むのなら!」

「アタシが悪者みたいになるからヤメてよ!」

すまんな。



「いやーほんと……USJは大変でしたね」

「ヴィランの襲撃を一言で!？」

「お前が一番酷い怪我してたんだぞ?!」

「先生よりも早く治ってるからヘーキヘーキ」

初めて知ったが、リカバリーガールの治癒と俺のオーラは相性が良いらしい。無尽蔵のスタミナから与えられる無尽蔵の回復力。俺はゾンビ兵か何か？

……まあ、流石に反省はしている。全身が粉々になつて、治癒を受けながら意識が朦朧としてる最中に切奈と透のぐしゃぐしゃに泣き腫らした顔が見えるのは……こう、堪えるからね。

あとずつと動けなかったせいで溜まつてるつてもある。何が『脳無』だ。脳内メーカー並の単細胞がよ! ペッ! あと体いっぱいに手を着けた男! 性欲ある癖にマスの掻き方も知らないのかよすつごくカワイソ!

……まあ実際に相対した時にはそんな事言える精神状況じゃ無かったわけだが。

「八雲君……僕も、もつと強くなって……いつか君より強くなってみせるから！」

「……はっ、寝言は自分の腕ブツ壊さない力加減覚えてから言えよ緑谷」

「うっ、そ、それは……その……ガンバリマス、ハイ……」

いい加減伝えてやるべきなのだろうか、オールマイトの真似はよせて。……まあ、少しは仲良くなつたとはいえないきなりそんな事言われて腹が立たない奴は居ないか。

しかし緑谷は不可思議な奴だ。個性習熟度と念じながら緑谷の頭上を見ると???と書かれていた。俺の魔眼で数字以外の記号を見たのは初めてだ。仮に無個性だったとしても、表記は???ではなくゼロと表示される。本当に変な奴だな……コイツもコイツで性欲ある癖に女子の平均値以下のオナニー数だし。

……そういう意味でも変な奴はもう一人居たな。爆豪だ。いつもキレ散らかしてる癖に、別に欲求が溜まつてる訳でも無い。かと言って性欲が無い訳でもない。なんと言うか、コイツもストイックというか……。

「ああツ? 何見てんだ八雲オ!!!」

「お前つて何見てシコつてんのかなあつて……」

「あゝあゝツ!!!」

あつ、やつべ、つい口から本気の疑問が。というか爆豪つてセックス下手そうだよな

(笑)

「テメエより上手だわ！舐めんな!!!」

「マジかよお前ヤリチン？見た目はアテにならないんすねえー」

「ブツ殺すぞクソがツツツ!!!」

「八雲……お前って女子の気配が無いとそういうタイプなんだな……」

そりゃ男相手に猫被つてもしやーねーしー？

いや、別に女子相手に猫被つてる訳じゃないんだけど……なんと言うか、使い分け？

「いや知るかよ」

「おいそんな事よりよお……八雲！テメエオレ達を裏切ったなア!？」

「裏切った？そもそも仲間だと思つた事は無いんだけど非モテ童貞諸君」

「おボグつつ……!?!や、八雲……言つて良い冗談と悪い冗談があるんだぞ……」

「悪い悪い。んで、何が裏切つたつてんだよ上鳴」

「知らねえとは言わせねえぞ……テメエ、入院してる時に付きつきりでお前に付き添つ

てた可愛い女の子が居たよなあ!？」

「……？付きつきりで俺に付き添つてた？」

「すつとぼけるんじやねえ!!オレ達にも紹介してください!!」

「まてまて。心当たりが多くて困る」

「ヒュッ」

あ、上鳴が白目を向いて気絶した。

「八雲に付きつきりだったと言えば……腰まで届く黒髪ストレートの?」

「あれ? 黒髪だけどウェーブしてなかったか?」

「……え?」

「冗談……とかじゃないよね? えっ? 本当に心当たりが多いの!」

「そりゃー俺ってばモテるし。爆豪より」

「ンでオレに当てこすりやがる!! テメエよりモテてるわ! モテまくりだわ!」

直近のバレンタインで貰ったブレゼントの個数と念じて……うわあ。

「まあ……その、なんだ。悪かったよ爆豪」

「ンで急に謝るんだクソボケがア!!!」

だってお前……いくらナンバーワンを目指してるって言ってもその数字までナン

バーワンじゃなくてもいいだろうに……きつと優しい母親なんだね。

「ンの優しい目ヤメロや!!!」

そして緑谷の方が多く貰ってるって事はちゃんと墓場まで持つてく秘密にするね。

……マジで秘密にしておかないと、そこがお前の墓場だ状態になりかねんし。

俺? 俺は……桁が違うからさ(ドヤア……) あ、でも尾白お前……意外とモテるんだ

な……

ま！バレンタインのプレゼントなんて数じゃねえし！切奈からたつぷり貰えればそれで良かったし！勿論3倍にして返した。

性交経験と念じる。……ふっ、流石に皆ゼロか。うん……別に不安だったとかじゃねーし。実は皆、裏でやる事やっているとかだったらショックとか思ってたねーし。やる事やってんのは俺だし。何言ってるんだし。

……アホくさ。さつさと更衣室出よ。

そうしてヒーロー基礎学、レスキュー訓練を改めて終えた俺達は放課後に入るのだった。



「あ、あの八雲さん……少しだけ、お時間宜しいですか？」

「ん？おおどうした八百万」

可愛い子の為なら何時間だって良いぞ。……自慰回数少なっ。

「そ、その……ですわね……」

うんうん。

「あ、あのお……そのお……」

どしたどした。

「あ、う……その……い、良いお天気ですわね!!」

「そうだな。今日の夜もきつと綺麗な月を見る事が出来そうだ」

「はうツ……」

えつ、なんで急に好感度が上がってくん? 天気の話が好きなん?

「『綺麗な月が見れる』 Ⅱ 『月が綺麗ですね』 ツツツ!!? い、いやいやおお落ち着きなさい
八百万百! 流石に飛躍し過ぎですわツ!!」

……混乱度、80……か。本当にどうしたんだろうか。何故か極度の混乱状態に陥つて
る八百万に、つい悪戯心が芽生えてしまったのは仕方がないと思う。

「なあ八百万」

「ひやつ、ふあいつ!!」

「(ふあい?) 呼び辛いから、これから『百』って呼んでいい?」

「(な、名前呼び—— ツツツ!!? ま、まさか本当にツツツ!!?) ハイどうぞよろしくお願
いいたしますわツ!!!」

混乱度85。此処まで来ると、ちよつと狂気の類だ。だが押す……! 倍プツシュ……

!

「なあ、百 (イケメンボイス)」

「ひゃいつ!!!」

「俺とお前の仲だろ? お前も俺の事『魔眼』まなこって呼んでも良いんだぜ?」

壁ドンからの顎クイ。わー一度やってみたかったんだよね——

「はふうっ」

「ええええええ!!!?」

まさかのノックアウト! ワン・ツー・スリー・おおつとセコンドがタオルを投げたー

!!!

「混乱って伝染るんだな」

セコンドなんて居ねえよ。タオルなんて投げられてねえよ。

顔を真っ赤に染めてのぼせた百ちやんを抱え、とりあえず保健室に向かう。すれ違う生徒達から、なんだなんだと不躰な視線が飛んでくるが無視だ無視!

「リカバリーガール先生、居る?」

居らんか。あ、そういえば今日は回診とか言ってたわ。

「誰も居ない保健室に男女一組、何も起こらない筈も無く——」

とかナレーションを入れながら百ちやんをベッドに寝かせた瞬間、ぱちつと目が覚めた。

「……あー、おはよう」

今の俺は完全に寝込みを襲う不審者です本当にありがたいがとうございました。

「……八雲さんが、起きた時に居る。うふふ、これは夢ですわね」

混乱度、100。

「えいつ♥」

「つつつ!!」

いきなり百ちゃんに抱き付かれ、ベットに引きずり込まれた。

「うふふ♥八雲さんっ♥八雲さんっ♥」

俺を呼ぶ度に百ちゃんのテンションが上昇していく。なんと言うか……そう、飼い主と遊んでいる犬のようにバイブス上がってる。百ちゃんのポニーテールは犬の尻尾だった……?」

そのまま俺の首元に顔を埋め、スンスンと匂いを嗅ぐ百ちゃん。あの……今日動いて汗が……その……。

「好きです八雲さん♥好きっ♥」

「あの、これ俺聞いてて良いヤツですかね」

「うふふふ♥勿論良いに決まってるじゃないですか♥」

これアレだよ。夢だと思つてハツチャケてるパターンのアレだよ。混乱度100つてもうそういう事だもんね。後で正気に戻つて鬱になるヤツだよコレ。

と、言うかなんでこんな——

「本当に、無事で良かった……」

……ああ、そういえばUSJの時は百ちゃん庇って、身体が弾けかけたんだっけか。必死過ぎてあんまり記憶に残ってなかったわ。

「貴方は……私のヒーローですわ。あの時動けなかった私を庇っていただき、ありがとうございます」

……くつそむず痒い。コレ百ちゃん夢だと思ってるんだろ？助けて。

「……八雲さんが死んでしまうかと、思った時は……胸が張り裂けそうでした……」

あー……切奈と透だけじゃなくて百ちゃんも泣かしたんか俺は。

「これからは……これからは、私が貴方を守りますわ。ですからどうか——」

ん？急に俺を抱きしめる力が抜けてきた。流れ変わったな。

「……あの、つかぬことをお伺いいたしますが」

「何でも言っごらんなされ」

「ワタクシが寝ているこの場所は……何処でしょうか……？」

「雄英の保健室のベッド」

「……その、ワタクシが抱きしめている方はどなたでしょうか……？」

「雄英高校一年A組出席番号21番、八雲魔眼」

「……最後にお聞きいたしますが……これは、夢……で、す……か……？」

「分かつてるくせにい。げ・ん・じ・つ♥」

「オアアアアア!?!」

およそ淑女から発せられたとは思えない程の奇声が保健室に響き渡り、ベッドからビタアアン！と転げ落ちた百ちゃん。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫です！いえ、大丈夫ではありません！致命傷ですわ！」

「そうだな。夢だと思ってゴロゴロ甘えてたら実は現実だったとか、夢より悪夢だもんな」

「あああああああ!!!」

そ、そうか。百ちゃんはそのままで俺の事が好きなのか……。

まあ好感度見て知ってたんですけど（無情）

だが分からないのは、何故そこまで好感度が高いのか、だ。少なくともUSJん時は普通だった筈なんだが。

「わ……笑わないで聞いていただけますか……？」

「そんな今にも死にそうな顔されて、聞かないって選択肢が取れる程俺はチャレンジャーじゃないぞ」

「その……あの日、USJでヴィランに襲われた日の夜の事ですわ——」

要約すると、夢の中で『お姫様』^{百ちゃん}を助ける『白馬の騎士』^俺がとんでもねえラブロマンスを繰り広げた……と。

「あ、あまりに衝撃的過ぎて、起床してすぐに日記に書いてしまいました……」

「夢日記ってヤツか……」

「夢日記……ですか？」

「んああ、ただの迷信だから気にすんな」

そんでそれ以降白馬の騎士を意識してしようがない……と。初心か!!!^{うぶ}ヒーローコスチュームがド痴女の恰好しておいて初心か!!!^{うぶ}

「それで夢よりカッコいい俺を見てつい緊張したって事？」

「あつ……その……はい」

えつ、マジ？俺そう言う言葉本気にしちゃうタイプよ？

「で、ですから……その、今度『雄英体育祭』が控えてますわよねっ！」

「おう、勿論目指すは優勝だ」

優勝する⇨色んなヒーロー事務所から指名が入る⇨エロエロなコスチュームを着た女ヒーロー事務所からの指名を受ける確率が高まる

故に目指すは優勝。Q. E. D.

「そ、それで……その……」

「デジャヴかな？」

「さつきまで俺に抱き付いてクンクンハフハフしてて、まだ恥ずかしいって感情残ってらっしゃるっ？」

「お忘れ願いますわツツツ!!!」

無理だろ（無慈悲）

「んんっ！そ、それで『雄英体育祭』の話ですが!!わ、ワタクシが優勝したら……ワタクシが優勝したら……」

「次のセリフは『私と付き合ってください!』という!」

「私と付き合ってください!……はッ!」

んんん古典的イ!

「『お付き合い!』ってのはやっぱりこういう関係?」

そう言つて右手で輪を作り、左人差し指を出し入れするジェスチャーを見せる。

「ええと?その仕草の意味は分かりませんが……男女の交際と言う意味です!」

お、おう……まあ分からんかとは思つてたけど。

でも、そうか。

「なあ、百ちゃん」

「なんででしょうか？」

「俺が、複数の女の子と交際してるって言ったらどう思う？」

「だ、男性の方はえてしてそういう願望を持っているのは理解してますわ！」

「理解力高すぎない？」

「そ、それに……」

それに？

「魔眼さんが、例え何人とお付き合ひしよう……魔眼さんの一番になって見せます

わ……♥」

頬を染めながら微笑む少女が、俺の中の『特別枠』に入り込んだ。

「あっ……♥」

此処はなんとも、都合良く誰も居ない保健室のベッドの上。

体育祭の結果を待たずして、俺と百は『交際関係』となった。

??

「あっ……やあ……♥ 恥ずかしいですわ……♥」

つい勢いで剥いてしまったけど、後で八百万家の人に殺されたりしないだろうか。

「だ、大丈夫ですわっ♥私も説得致しますし、それに……じ、自由恋愛は我が家の家訓でして……」

「自由恋愛に婚前交渉まで含めるとか自由過ぎない?」

「も、勿論妊娠してしまつたら……責任、取つて貰いますわよ♥」

「につこり微笑むえつち少女、八百万百。自慰回数は少ないが、さては結構なスケベだなおめー。」

百の耳にキスを落とす。

「んっ……♥あ、ああ……本当に、今から性行為をするんですね……♥」

「嫌?」

「嫌ではありませんわ……むしろ……♥」

「中々のエッチ娘だな。好きだぞ」

「ツ♥」

耳元で囁くと、全身がピクツと震えた。ははあ、耳が性感帯なんだな?

「本当に分かりやすいなあ百の身体は」

「あつ♥ふあうつ♥」

まあ例え分かりにくくても、俺の眼は誤魔化せないけども。

感度と意識して百の全身を見る。……ほう。ほうほう。

「本当に全身エッチだなあ百は。それなのにあんなコスチューム着てるのか」

「ああっ♥ふあああっ♥」

時々啄むようにイジメる耳は勿論の事、柔らかさとハリを両立させた大きな胸、身体を支えるムツチリとした脚、成長期らしい大人らしさを秘めた身体は、全身の感度が良好だ。

指先で百のへそをつつくと、良い声で鳴くので本当にもう……チンチンふつくらし続けて痛い。

そうして耳の穴まで開発しながら百を高めていく。じつとりと汗が滲むように燃え上がった百の乳首はピンと自己主張していた。

「自分でする時はどうやってしてるの？」

「はあっ♥あっ♥そ、それは……っ♥」

「ほらほら、早く言わないとつらいぞー」

「あツツツ♥あひいツツツ♥」

オーラで強化した指先で百の乳首を挟む。ビリビリとした快楽が乳首を通じて百の頭を駆け巡っているだろう。早く言わないのならここから更に摘まみあげたり、捻ったり、指で擦りつぶしたりするぞ。

「ああツツツ♥おっ、オモチャをツツツ♥振動するオモチャを使ってますわツツツ♥」

「へえ、どうやってシてるか見せてよ」

「ツツツ♥それはあツツツ♥ああつ♥♥」

「自分で作ってみて、そのまま使ってごらん?」

「ひいいつ♥い、意地悪ツツツ♥魔眼さんはイジワルですつ♥♥」

くねくねと悶える百の快樂度を見ながら、絶頂に至る寸前にパツと手を離す。

「ふーっ♥ふうーっ♥も、もう少しなのにつ……っ♥」

「もう少しだから、自分で弄ってごらん?」

百の手足を優しく擦りながら、ギリギリ絶頂に至らないように寸止めをし続ける。涙目で俺を見ながらも、好感度が上昇していく百ちゃんは軽いマゾヒストなんだな。

「うう〜っ♥どうして……っ♥」

そうして百は手から白い棒状のオモチャを作りだし、自身の股に当てる。

「電動のオモチャまで作れるのか。凄いな百は」

「はっ♥ああつ♥ふああつ♥」

「ほら、俺の名前を言いながらイっていいぞ?」

「あつ♥魔眼さんっ♥魔眼さんっつ♥♥」

百は棒状のオモチャを自身の割れ目に入れ、ちゅこちゅこと抜き差ししながら俺の名を呼ぶ。

「魔眼さんっ♥イキますっ♥魔眼さんっ♥魔眼さんっ♥魔眼さんっ♥イクっ♥イクっ♥」

「ああ、百がイクところしっかり見てるからな」

「魔眼さんっ♥魔眼さんっ♥好きですっ♥魔眼さんっ♥あツツツ♥♥♥んツツツ」

♥♥♥」

そのまま腰が吊り上がるように絶頂した百は、荒い息をしながらベッドの上で放心している。

百が持っている棒状のオモチャを取り、先についたヌメヌメを舐めてみる。しょっぱい。

「はあっ……はあっ……♥……ふえあっ!?な、何をしていらっしやるのですか魔眼さんッ!」

「百の味を確かめてるだけだぞ」

「恥ずかしいのでお止めくださいっ!」

さて、まあこれだけ濡れていたら問題ないだろう。透との一件から、万が一外で抑えが効かなくなってしまう用にと用意していた『ゴム』を装着する。

「あっ……」

「そんな顔してもだーめ」

「……今日は、大丈夫な日ですので……」

妊娠確率、70%。嘘じゃん。バリバリ危険日じゃん。責任とらせる気マンマンのまんまんじゃん。でもそういうズルい所も好き。

「でもそれはそれとして嘘付きにはオシオキしなきやね」

「へっ？あつ……あああああつ♡♡♡」

オーラを込めて、お腹の上から百の子宮を指でつつく。オーラは皮膚や筋肉をすり抜け、直接子宮に作用した。

「ひいッ♡ひいイッ♡♡♡魔眼さんツツツ♡♡♡な、にをほオオツ♡♡♡」

「子宮マツサージ♡」

生理が重いという切奈の為に、何か出来る事は無いかと模索した結果体得したオーラの操作技術。飛ばしたオーラが直接子宮に作用し、その周囲の神経や血液の流れを整えて強化する事で痛みを吹き飛ばす快楽を与える。

まあ、勿論普通に肩叩きや柔軟マツサージレベルの気持ち良さ程度に抑える事は出来るのだが、それはそれとして。

「俺とのセックスに手馴れてきた切奈でさえイキ狂わす快楽に耐えられるかな？」

「ほオオツツツ♡♡♡オオオんツ♡♡♡ううううあああツツツ♡♡♡」

ケモノのような声を上げながらがり狂う百。でもオシオキだからね仕方ないね。

そして全身をくねらせて快楽に耐える百に、容赦なく挿入っ！

「はああああああ♥♥♥♥♥」

目にハートマークを浮かべたような蕩けた表情でただただ快楽を受け止め続ける百に、追い打ちの腰振り！パンパンと肉同士がぶつかり合う音が部屋に響き、百はだらしない表情を浮かべながらぎゅうぎゅうとイキ続ける膾肉を更に締め付けた。

ヒイヒイ鳴く百の、ヨダレまみれの顔を舐める。それだけでも好感度が上がっていく姿を見て、己の中にあつた『支配欲』に気が付いた。

このままゴムを外して中出ししたい。

「貴方の赤ちゃんでしたら、いつでも、何人でも、産み育てますわ♥」

俺の『欲』に気が付いたのかそうじゃないのか。俺の首に腕を回して拘束した百の言葉はそのまま俺の理性を溶かした。

ぶぶびゆるるるる!!!ビュルルルツ!!!

気が付けばそのまま中出し。ある意味で先ほどの言葉に助けられてしまった。もしさつきの言葉が無ければ、ゴムを外してから中出しする余裕が残ってしまっただろう。

ぎゅうう……と強く抱きしめてくるので、俺も抱き返す。

迸る精液を出しきっても、暫くの間はそのまま抱き合っていた。



「ん……ああ……んっ、こくっ……ふ、あ……とても、独特な味ですね……」

「だ、だから精液は飲むモンじゃないって言ったのに」

「うふふ♥好きな方の精液は飲むのが作法なのでしょう？ 中学のクラスメイトの方がそう仰ってましたわ」

「……そいつはただのむつつり人間だと思う」

ゴムの中に吐き出された精液を口に移す百ちゃん。丹念に味わった後、ごくんと飲み込んでしまった。

「……ふふ♥お腹の中からじんわりと暖かくなってきました♥寒い日に丁度良いかもしれませんわね♥」

「お、おう……」

去年の冬に、雪が降る外で切奈が俺のイチモツをしゃぶっていた事を思い出す。アイツ、まさかそれ目当てで……な、訳無いか。

「今他の女性の事を考えてましたよね？」

「ナンノコトカナー」

「……ふふっ。とても分かり易い人……♥」

口に手を当ててクスクスと笑う仕草に、上品を垣間見た。しかしその口はつい先ほど

ザーメンを味わい、飲み込んだ口だ。そのギャップに俺のちんちんが反応してしまうのは仕方ないと思う！

「……次は、直接口で飲んで差し上げますわ♥」

「あつ、ちよ、」

ベッドに腰掛ける俺の横から身体を倒し、ゴムを取って精液に塗れているイチモツに吸い付く百ちゃん。フェラチオレベルは1だったというのに、一秒経つ毎にレベルが上昇していく。下学上達つてそういう……。

「ん……む……♥んああ……とても……ゴムの匂いがしますわ……」

「そりゃゴム着けてたからな……」

「ん……すう……それと、汗の匂いも……うふふ♥とてもクセになってしまっそうですわ♥ん……ちゅっ……♥」

「う、おお……」

あつという間にフェラチオレベルが二桁となり、くぼくぼ口を動かして精液をねだつてくる。エロツ！

つい、思わず、揺れる百ちゃんパイを揉んでしまった。フェラしている百と目が合う。……目元がこう、にやりと歪んだ気がした。

「お、おおお!?!」

ベッドから降り、俺の脚の間に身体をうずめて、その大きなおっぱいで俺の竿を挟みながら先っぽに吸い付くパイズリフェラ！視覚に悪い、悪すぎる！こんなん……速射モーション！！

「ツツツ！♥♥♥」

「あつぐつ……!!」

そのまま搾り取られるように二度目の射精。今度はゴムではなく、百ちゃんの口内が精液を受け止めていく。

精液を気持ち良く出しきれるように、百ちゃんは誰に教わった訳でも無く胸で竿をしごきながら尿道から飛び出る精液を吸い続ける。玉の中まで吸い出されそう……。

「おお……ああ……」

「……んっ……ふぁ……あ……♥す、すみません魔眼さん♥飲み切れませんでしたわ♥」

そういつて精液で汚れた口元と胸元を見せつける百ちゃん。お前ソレでド天然って神の悪戯レベルのドスケベやんけえ!!!

「……服を汚してゴメン」

「ふふ、全然構いませんわ♥汚れたら、また作ればいいですから……それより、まだ出せそう……ですわね♥」

あークソっ……入院してしばらく（二日）又いて無かったからってのもあるけど、このデカチチでパイズリとかそんな男の夢やんけ……。

切奈や透の巨乳も凄かったが、その上を行く百ちゃんパイの威力に俺のイチモツは萎え知らずとなつてしまった。

「……その、こんななつてて説得力無いかもだけど、もうすぐ完全下校時間になるからさ……」

「はいっ♥それではすぐに射精に導いてあげますわ♥」

「違うそうじゃなんほおお♥」

そうしてその後、百ちゃんパイに二度精液をぶちまけ、ザーメン臭を擦り付けたまま百は帰宅したのだった。

俺?・俺は——

「体育祭も近いのに、新しく『彼女』増やしてるんだ。余裕だねえ?」

「……その、切奈?この手錠はいつたい何処で手に入れたん?」

「何処でも良いでしょ?それより……色んな子と付き合っても良いけど、アタシを蔑ろにするのは……やだからね」

「……悪かった。USJん時も、要らん無茶したな。心配かけて、ゴメン」

「ん、許す。……そんなアンタだから好きになつたんだもん」

「切奈……」

「でもソレとコレは別♥」

「切奈ア!!!」

「だいじょーぶだいじょーぶ♥男の乳首って気持ち良くなる為だけに存在してるんだつてさ、知ってた?」

「今そんな知識を知りたくなかったかなあ!!!」

「……今日こそ、魔眼の限界が見たいなあ♥」

「限界ってナニする気!?俺に酷い事する気でしよう!エロ同人みたいに!エロ同人みたいなー!」

「勿論♥」

そうして俺は切奈の家に連れ込まれ、朝までフルコースを味あわされた。



「……ヤオモモと、八雲……付き合ってたんだ」

芦戸三奈は自身のベッドの上で横になりながら、昼間の光景を思い返す。付き合ってた……というより、付き合い始めた……が正確か。

誰よりも恋バナが好きで、『恋』という物に敏感なお年頃。今までのクラスメイトがそういう気配を匂わせたら、いち早く嗅ぎつけ、聞き出し、茶化し、祝福してきた芦戸三奈は、自身の『恋』に鈍感だからこそ他人の『恋』に敏感なのかもしれない。

友達は、好きだ。仲の良い異性も居る。しかしその異性に対して『恋』をしているかというと首を傾げる。一緒に居て楽しいが、『ドキドキする間柄』では無い。そういう意味で言えば、ここ最近で一番『ドキドキ』した相手は——

「……保健室で、あんな事して……不良だな……」

電気を消した部屋の中、天井を見上げる。厚手のカーテンを閉めた先から僅かに入りこむ街灯の光が、目を凝らせば辛うじて天井の染みが見えるだろうかという程度の暗闇を作りだし、その暗闇の先には『真面目な時は割とカッコいい』男の姿が浮かび上がっている気がした。

その男が、保健室で、同じクラスメイトの女の子をめっちゃめっちゃに穢していた。

「……八雲……」

ほんの僅かに開かれた扉の向こうで一部始終を見ていた芦戸は、気が付けば完全下校時刻の鐘が鳴るまでずっとそこで座り込んでいた。幸か不幸か、芦戸三奈のその姿を見

た者は誰も居なく、そして勿論最後まで見てしまった芦戸三奈に途中で声を掛けて帰宅を促す者も居なかった。

避妊用コンドームたっぷり溜まった精液を口に入れ、飲み干す八百万百。それだけでなく、胸や顔に大量の精液を掛けられていた八百万百。まさに男に穢されていたにも関わらず、淫靡な笑顔でそれを受け入れていた。

「やくもお……」

気が付けば芦戸三奈は自身の身体を慰めていた。それは昼間の光景を見ていた時もそう。今このベッドの上で寝そべっている時もそう。大きく発達した胸を弄りながら、うつすらと毛が生え揃ってきた自身の秘部を撫でる。

保健室のベッドの上で愛されている八百万百の姿を、脳内で自身に置き換えながら。もしそんな姿を学校で誰かに見られていたのなら、間違ひなく大騒ぎとなつただろう。学校内で、しかも廊下で自慰行為にふけるヒーロー科生徒などあつてはならない。しかし幸運にも誰にも見られなかった。不幸にも誰にも気づかれなかった。

故に、だからこそ。芦戸三奈はその曲がった愛欲を最後まで受け止めてしまった。

「やくもおつ……やくもおつ……」

『ほら、俺の名前を言いながらイっていいぞ?』

「ツツツ♥魔眼つ……♥まなこツ……♥う……♥あツツツ♥♥♥」

彼の言葉が脳内でリフレインし、彼の名を呼びながら、今までで経験したことの無い程まで高められた性欲が解放された。

彼の顔がニツコリと微笑むのを幻視しながら、芦戸三奈は盛大に潮を噴いた。

「はあッ♥はああッ♥はあ〜……♥……んっ♥くっ♥ううう……♥止められないよお……♥♥♥」

イジワルな彼は、一度絶頂した程度では止めてくれない。『三奈はエロいな。そういう子は大好きだ』と、性欲に耽る自身の頭を撫でる姿を夢想する。その度に……

「イクっ♥イクうっ♥まなこおっ♥またイっちゃうっ♥」

更に自身を慰める手に力が入る。そして絶頂する度に、彼は『乱れた姿も可愛いな』と褒めてくる。もはや永久ループだ。自身の体力が続く限りに続く無限ループ。終わりの無い自慰行為。自身の愛液で布団がぐちよぐちよに濡れても尚止まる事は無い。仰向けだった姿がうつ伏せに変わり、今度は彼に直接攻められる事を妄想した。

「ツツツ〜♥♥♥ンンン〜ツツツ♥♥♥♥♥」

枕に顔を押し付けなければ、その嬌声が別の部屋で眠っている家族の耳にまで届いてしまっていただろう。しかしそれでも芦戸三奈は止まらない、止められない。脳内で、彼に延々と愛され続ける事を止める事が出来ない。

自身の秘部を弄っていた手は、いつの間にか両手に変わっている。自身の姿は傍から

見ればマヌケを通り越した姿だ。脳の片隅で意識したが、そんな事よりも彼に愛される事の方が重要となる。

脳内ではイキ狂っている自身を更に滅茶苦茶に穢しながらも、耳元で愛を囁き続ける彼の幻聴に犯されていた。

『三奈は腰がやらしいなあ。孕ませたいエロさだ』

『ほら、陥没乳首の顔を出してやる』

『もつと俺に三奈の可愛い所を見せて？』

「~~~~ツツツ♥♥♥♥♥」

何度も何度も潮を噴きながら止まることの無い愛撫によって、ついに気を失うように眠りの世界へ落ちていった芦戸三奈。しかし夢の世界でも、彼女は八雲魔眼に犯され続けるのだった。

そして、次の日の早朝。目が覚めた芦戸三奈は、自身の痴態を想起しながら部屋の惨状を見て、深い……ふか……いたため息を吐いた。

「どうやってコレ誤魔化そう……」

実家暮らしである彼女の平穏な性生活の敵は、もっぱら自身の親であった。

誤魔化し方を考えながらも、とりあえずグチヨグチヨからカピカピに乾いたシートと

布団マットを洗濯機に放り込むのだった。

体育祭・おわって・希乃子ちゃんえつち

「体育祭前日の放課後、気が付けば俺は切奈ん家に拉致られ、しかも部屋には透と百の二人までスタンバっていた！コレが意味する事はつまり……どういふ事だつてばよ!!」

「落ち着け魔眼」

切奈の手によつて家まで強引に引つ張られ、着いた先には透と百の二人が椅子に座つて寛いでいた。

俺が複数人と肉體關係に及んでいる事は、この場に居る全員が知つているし、お互いの關係はそれなりに良好らしい。なんなら俺を抜いた三人でグループLINE作つてくるくらいに仲が良い。

ところで二人の好感度が既にカンスト寸前なんですけど。切奈と付き合い始めてから好感度がカンストするまで三カ月は掛かつた事を思えば些か異常に思えるんですけど。俺の知らない間に何があつたんですか？

「ん〜？ちよつと魔眼の昔の話とかしてただけだけど？」

「ええ、それと性行為の際の魔眼さんの癖とかの話も少々」

「ん〴〵ん〴〵俺が一番恥ずかしいヤツう〜!!」

好きな人の事はもつと深く知りたいからね仕方ないねっ!?

「……それと、魔眼の興味深い個性について、かなあ〜?」

「あつ」

切奈のニヤニヤした顔と発言をヒントに、俺のピンクな脳細胞が答えを出した。つまり全員、明日の体育祭の為に――

「そういう訳だからさ」

「魔眼さんにも是非」

「協力して欲しいんだよねえ♥」

透と、百と、切奈が、俺を囲む。そりゃあね? 一度は夢想したよ? ハーレム展開。でもさあ、普通、ハーレムってその……女の子に失礼な感じしない?

「ポリアモリーってのも似たようなモンじゃん♥」

全然違うと思うんですけど。

複数恋愛愛つてのは、そんな……一人に縛られるような価値観じゃなくて。

「うん、でも今は好きな人が魔眼だけだし、良くない?」

「まあ、私は今後魔眼さん並に男性の方を好きになる事はまず無いと思いますが……」

「あつ! モモちゃんだけズルい!」

そうして三人の手によってセックス専用のピンクベッドに押し倒され、衣服を脱がさ

れる。

「ん、まあ確かにいつもこうだと嫌になるかもだけど……まあ、『偶に』なら良いスパイスになるんじゃない?」

「というか、そもそも一対一のエツチな事で魔眼に勝てないんだから、今日は三対一で勝負だ!」

「セックスは勝負じゃねえぞ!」

「ふふ、今日こそ魔眼さんを倒してあげますわ……♥」

瞳にハートマークを浮かべた三人に拘束されながら、俺は為すすべなくしつぽり抜かれたのだった。



なんやかんやあつて体育祭当日。

色々飛ばして飛ばして飛ばしまくって、トーナメント。その、決勝戦。

「やアアアアくウウウもオオオオ!!!」

この組み合わせを、誰よりも望んでいた男。爆豪勝己は歯をむき出しにして嗤い、両手から抑えられきれない程の火花が散っているが、それを止めようともしない。抑えようともしない。

彼が雄英に来てから最もいけない男、八雲魔眼。自身と同じ年齢であるにも拘らず、USJの時にはオールマイトと並び立つその姿に人知れず畏怖を抱いた。

名を呼ぶのは、ソイツを認めている証。彼の幼馴染である緑谷出久はそれを知っている。彼と同じクラスの者は、彼等の強さをよく知っている。

「ま、マジで爆豪のヤツ八雲を殺すんじゃねえだろうな……」

「い、いくら何でもありえねえだろ……」

「でもよお……爆豪の顔見ろよ……！ ぜってえ本気で『ブツ殺す』って顔してるじゃねえか!!」

一部の者は、彼等と同じ感想を抱いていた。この雄英体育祭で、まさかの死者が出る事を危惧していた。爆豪は、それを可能とするだけの力を持った個性の持ち主である。

……しかし、極一部の者達はそれは不可能と断じられる程の力を、相対する八雲魔眼が持っている事を知っている。

凶悪な殺人機械と化した改造人間脳無を……オールマイトがUSJに来るまで抑え続けた力を持っている事を知っている。

彼が持つ技術は、この個性社会において尚異質だった。

「……爆豪」

「アアツ!？」

「切奈は強かったか？」

「……あのトカゲ女か。ハッ！オレの足元にも及びやしねえな！」

「切奈は、強かったか？」

「ッ……!」

同じ言葉を、繰り返して聞く。しかし一度目と二度目には、言葉と共に込められた『意』が明らかに違った。

「……チッ！下らねえ……あんなモブ女なんざどうでもいいだろーが！」

爆豪勝己は、知らぬまに一步引いてしまっていた己を吐き捨てるように言う。しかしその言葉は、彼の逆鱗に触れていた。

「俺の自慢の彼女だ」

「……ああ？」

その言葉の意味は知っている。その存在も知っている。だが自身には一切関係ないモノだ。オールマイトを超えるトップヒーローになる。その為にそんな些事些事に気を配ってなんかいられない。

「可愛いヤツでな、何かにつけてスキンシップしてくる。人前じゃあんまり派手な事しないが、人目に付かない家とかに入ると全身で抱き付いてきて、そりゃーそのギャツプにクラクラしてくる程に可愛い。それにえっちな事に凄く寛容なのが堪らん」

「……」

オレは何を聞かされてるんだ、そんな表情にもなる。

八雲の声は舞台の上には届かず、観客席の最前線に居る者にすら届かない。尚審判のミッドナイトの耳には届いていて、密かに悶えていたのだが誰も気にしない。

「ヒーローに憧れてて、真面目に訓練に取り組むし、勉強もすげー頑張る。俺よりも頭が良くて、時々勉強を教えてもらってるんだ」

「……チツ、自慢か？それが何だっつてんだよ」

「そんな可愛い彼女を、お前はモブ女道端の石ころと馬鹿にしたな？」

「ツツツ!!」

「切奈はなあ……お前みてえな口ばつかのヤンキー野郎なんかよりも遥かに立派なヒーローになるんだよボケがツ!!」

感情と共に、彼の体内に秘められたオーラが爆発を起こした。

フィールドに一切の被害をもたらさなかったが、その威力は暴風となつて爆豪とミッドナイトに叩き付けられる。

彼の眼は、その激情を表すかのように燃えさかる業火の様に紅い色に染まっていた。『な、なんだア!!?八雲を中心としてスゲエ風が巻き起こってやがる!!?お前そんな個性だったっけえ!!?』

彼はUSJの大怪我の後、縹渺とした態度で学校に復帰した。しかし彼はあの時死線を潜り抜け、それでも死の淵ギリギリに立っていたのだ。『死』の恐怖は生物を竦み上がらせ、立ち止まらせる。しかし神様というものは、死線を乗り越えた者に新たな力を授けるのだ。

八雲魔眼が得た新たな力。今までのような『オーラで身体機能を強化する力』とは一線を隔す技術。

物理法則の超越。

このオーラ、とりあえず『生命力』だろうとは思うモノではあるが、なんと言うか……違うのだ。それこそドラゴンボールで言う『気』、ワンピースで言う『覇気』、ハンターで言う『念』、ブラッククローバーで言う『魔力』とか……とにかく『フィクション作品』におけるそれらしいモノだ。

もはや彼にとって『フィクション』は現実になった。

それは、世界が『個性』というものに気が付いた時の再来だった。

それでも、ヤツは嗤う。己の乗り越える壁のデカさに怖気づくことなく、ただただ嗤う。

「面白れえ……!!!」

そのバケモノ染みた技術に、己の力で立ち向かう。凶らずもUSJで彼が脳無に立ち向かった時と同じ。ただ違うのが、彼等の立ち位置だった。

彼は英雄ヒーローから超人ヒーローに、己は観客モブから英雄ヒーローに。

圧倒的な力を前に、ただただ牙をむき出しにして己を高め続けた。



「いやー体育祭は惜しかったですね」

「いや軽う!!」

「爆豪とか本気でお前殺そうとしてた目つきだったぞ!」

体育祭終了後の教室。そこで俺達は駄弁っていた。

体育祭の最終戦。俺はそこでガス欠というあんまりな形で幕を閉じた。

「でもさーでもさー！怒りで秘められし力が解き放たれるって主人公じゃね!?俺ももしかなくても主役じゃね!？」

「それで優勝してたらな」

「試合が始まる前に倒れなければね」

「そのまま担架で運ばれなければなッ!!」

「テキビシューッ!!」

くそう……くそう……開始宣言の前にあんな暴風が巻き起こらなければ俺にもワンチャン……。くやしいのう！くやしいのう！

「ま、まあまあ……なんかよく分からないけど、とにかく八雲君が無事で良かったよ」

「心肺停止……って、ホンマに大丈夫だったん？」

「後遺症は一切残らないって話だからへーき、へーき」

リカバリーガール先生の治療を受ける直前に意識を取り戻した訳だし。俺の予想では、『生命力』であるオーラを暴風のエネルギーに変換し過ぎたせいで生命活動が出来るギリギリまで消費してしまったからだと思う。

ま、オーラは飯食って寝てるだけですぐ回復する。心肺停止が寝る扱いで良いのか疑問だが、実際俺の意識的には寝て起きただけだからな。そりゃ後遺症もねえわ。

「黒歴史は全国放送で残ったけどね」

耳郎の心無い言葉でノックアウト。俺、来世は貝になりたい……。

「おい見てみるよ！ツイッターのトレンド『雄英自爆王子』が一位だぞ！」

「いつそ殺せつ！」

みなさーん此処にネットのオモチャが居まーす！ふ、ふふふはは……はあ。

「おつ！これなんか『読唇術』の個性だつてよ！ええと……『せつなつて彼女の事べた褒めしてて草』……は？」

「えっ？」

男子達が一斉に俺を見る。

女子達は麗日さん以外が各々俺ともう一人を交互に見ている……ん？なんで？

「八雲お前……彼女居たのかよっ!!？」

「そりゃ高校生だぞ、彼女くらい居るわ！」

「ごはあ!!？」

「せ、せつなつてももしかしなくてもB組の切奈ちゃん!?うわあ、うわあ！お隣さんなんよ！えっ！いつ!?いつ出会ったん!？」

「中学の同級生でな。本格的に付き合い始めたのは中三の時だ」

「へえー！へええー！ほんまにお付き合ってるんやね！そっか！切奈ちゃんの恋人なんや……（ん？つてことは、切奈ちゃん家から毎日のように聞こえてくる獣のような喘

ぎ声って切奈ちゃんと八雲くんが……) ヴェアアアアア!!!?

「どうっ?!? どうした麗日さん?!? 急に女子が発する声とは思えない叫び声を上げて?!?」

「なツツツ、なんで↓も←あらへ→んよ↓?!?」

「ぜってえ何かあるイントネーション?!?」

麗日さんの好感度の増減が激しいんだが? えっ、なんで?

というか、女子全体の性欲値スゴいことになってんな!? なんで!?

「うおお八雲お! どうしてお前みたいな変態野郎でもモテるんだよオオオ!!!?」

「お前みたいにド変態晒してねえからだよ!?!? 抱き付いてくんじゃねえ!!!?」

体育祭終わりだというのに元気が有り余ってるバカ達を引き剥がし、なんとか帰路についた。

??

「お疲れ、八雲」

「ん、切奈もお疲れ。体育祭、惜しかったな」

「いやあ……地力の差が出ただけよ。まあ、もーすこしで爆豪を倒せたっとは思うんだけどねえ……。そーいう八雲は決勝戦で不戦敗だったけど」

「やめろ切奈。その言葉は俺に効く」

何なんだよ爆豪あいつ、表彰式の時まで俺に掴みかかってくんじゃねーよ。オールマイイト先生も銀メダル掛ける際に『まあ、その……感情の制御もヒーローの技術だぞ！がんばれ！』じゃねーよもつと気の効いたセリフにしろよ銀メダリストだぞ俺！

そして切奈が俺の事を八雲と呼ぶときは、近くに誰か居るということだ。

「……あー、その、さ。頼みがあるんだけどお……」

「どうした切奈。まるで『友達に彼氏の紹介をねだられた』みたいな煮え切らなさじゃないか」

「……ほんとにアタシの心を読んでたりしないよね？」

色々な数値は見えるが、こればかりは切奈の彼氏としての経験値だな。そして、マジで当たってたのか。

切奈は、二人きりの時はめっちゃめっちゃ可愛くなる。だが、こうして誰かに見られている中では、なんと言うか……『普通』になる。そこが猫みたいで可愛くもあるけども。『俺と付き合っている』事自体が恥ずかしいんじゃないやなくて、『そういう関係』をクラスメイトに見られるのは恥ずかしいらしい。

そんな事を考えてると、物陰からチラリとこちらを伺う女子の姿が。

「あー……希乃子、こっち来て良いよ」

「う、うん……」

そうしてヒョコつと現れた女子は、身長が低いのおっぱいおつきいトランジスタグラマーな目隠れ女子だった。エツツツ！

「とかいっぞやの食堂の子じゃん」

「こ、こんにちはー……小森希乃子……です」

前、雄英にマスコミが侵入してきた騒動の際におっぱいパンツサンドイツチ事故の被害者というかその節は本当にありがとうございます。

「ご存知、雄英体育祭準優勝の八雲魔眼だよよろしくね。……んで？まさか本当に『紹介』して終わりって訳じゃないよね？」

「あー、その……希乃子！アンタが自分で言いなさい！」

「うえっ!?えと、その……や、八雲さん！」

「おう、八雲さんだぞ」

というかこの子も好感度たけーなおい。自慰回数も……姉ちゃんには劣るが中々のエッチ娘だ。というか最近うちのクラス女子ズの自慰回数の伸びが異常。催淫剤でも撒かれてる？

「ワタシを、『大人』にしてほしいノコっ!!!」

「ン
??????」

今なんて? えっ、なんで!!?

「切奈ア!! 説明プリーズ!!!」

「いやあ、ホラ……あれよ。その、ツイッターのアレでアタシ達が付き合ってるのがウチの女子達にバレて……赤裸々な性生活を暴露させられたと言うか……アンタのせいだから責任取りなさいよツツツ!」

「逆ギレ!?!」

ツイッターのせいで付き合っていたのがバレる、分かる。それはむしろ感情的になっ
てしまった俺が悪い。

赤裸々な性生活を暴露させられた、……うん、まあ……女子ってそういうトコあるよ
ね。分かる。

俺のせいだからクラスメイトの女の子を彼氏に抱かせる、コレガワカラナイ!!! ナンデ
!!! Why Japanese People !!!?!

「その……ワタシって『アイドルヒーロー』目指してるんノコ……コスチューム着てる時
は平気なんだけど、その……」

「……それ以外の時は内気な性格が出る、と」

「……うん。だから、普段の性格も変えたいなあ……って」

「……いや、『アイドルヒーロー』目指してるからって素の性格を無理に変える必要は無

いんじゃないか？」

「でも『コスチューム脱いでる時のアイツは陰キャ』ってネットで叩かれたらどうするノコ!？」

「おつ、おう……すまん」

「分かればいいノコ」

えっ……この子実は陰キャじゃ無いんじゃないか……

「とにかく！八雲はワタシとエツチな事をする！今さら三人も四人も変わらないでしょ！返事は!？」

「え、はい……」

つい勢いで頷いてしまった。いや、まあ……可愛い女の子とエツチ出来る事自体は嬉しいけども……。チラリと切奈の顔を見ると、なんとというか……えっ、何その表情!?!う、嬉しいの!?!恍惚の表情が混じってる何とも言えない悦びの顔!?!悦んでるの!?!快感なの!?!彼氏とクラスメイトがセックスする事に快感を覚えてるの!?!

「じゃあ、ハイ!こっち来るノコ!」

「ええー!？」

そのまま小森に引つ張られ、切奈と共に何処かへと向かったのだった。

??

引つ張られた先は、切奈が住むマンションだった。えっ?せ、切奈?

「ワタシも偶々此処に住んでるだけよ」

「そ、そうか」

流石に、彼氏と友達を自室に上げてセックスを見届ける……なーんて事をする程切奈の性癖歪んでないよな……よ、良かった……?」

「……………」

『その手があつたか』見たいな顔止めえ!!!」

不安!至極不安なんですけど!これからの生活に不安を覚えるんですけど!!

そうして切奈の部屋とは違う階に連れ込まれ、小森の部屋に押し込まれる。うわお……キノコ柄だらけで凄くファンシー……。

「……………希乃子、分かっているとと思うけど——」

「大丈夫ノコ。お遊びまで……でしよ?」

「……………じゃ、ごゆっくり」

そう言つて扉を外から閉める切奈。にんまりと笑いながら鍵を掛ける小森……あの、マジでやるんですか?

「……嫌なノコ？ワタシじゃ勃起しない？」

「するする、めっちゃやる。食堂の時とかマジ勃起だったから」

「……♡」

そうして更に笑みを深める小森。あーんもう俺の口は正直が過ぎる！例え嘘だとしても、女の子にあんな顔されて喜ばせようとしぬ奴は男じゃねえ！

「じゃ、どーん！」

「うおっつっ?!」

雄英指定ジャージのまま、突き飛ばされるようにベッドに押し倒された。そしてそのまま、そのおっぱいで顔をプレスされる。ああああ汗の蒸れた匂いがあるあああ!!!

「っつ♡もー……誰にでもおつきしちゃう悪いキノコ♡」

「んんんツツツ!!」

顔におっぱいを押し付けられながら器用にズボンを脱がされる。あつ、あつ、おっぱい柔らかかつ……。♡

その勢いでパンツごと剥ぎ取られ、おつきくなった息子キノコがこんにちは。

「こんにちはタケリタケちゃん♡にひつ……モザイクの無い勃起ノコを見るのは初めて……っ♡」

それってよお！モザイク有りのタケリタケちゃんは良く見てるって意味かよオラア

!

と叫ぼうにも、小森おっぱいによってパフパフされ続けている俺はフガフガ言うしか出来ない。

「んっ……しよっ♥」

「つつ!?!」

小森が着ていたジャージのファスナーを開け、蒸れ蒸れインナーを顔に押し付けながら俺ごとファスナーを閉じる。

『服が伸びますよ』

と言えたらどれほど良かったでしょう。女の子特有の甘い匂いと汗が蒸れた匂い、そして僅かに香る淫臭が俺に更なる勃起ノコを強要させる。

「うわ、うわあっ……♥スゴっ……♥ワタシの脚に当たってるっ♥」

小森と俺の身長差によって、小森の胸に顔を押し付けられている俺のイチモツの位置は小森の膝寄りのスネに当たる位置だ。

「ふっ♥ふっ♥スゴいきノコ臭っ♥蒸れ蒸れキノコに部屋中マーキングされちゃうノコっ♥」

こっちは顔面全体が小森の汗蜜ぬちよぬちよインナーにマーキングされてる訳ですが。

「んふふ……ワタシもズボン脱いじやおつ♥あつ……熱つ♥本物のタケリタケちゃん硬くて、熱いっ♥」

小森がズボンを脱いだ瞬間、部屋に広がる発情した女特有の匂い。もはやセックスする事しか考えてないし、俺もセックスする事しか考えられなくなってきた。

「あ、は……♥これは……うん♥もう、いいよね……♥だって、彼のキノコも良いって言ってるし、いいよね♥いいよねっ♥」

小森は足で挟むように俺のイチモツをしごく。顔面パイズリされながら足コキやばっ……。

「もつと、もつと気持ち良く……しちやいノコっ♥」

「ツツツ!!」

「ビッ!ビリリツ!!」

小森は着ているインナーを破き、着けていた下着を外して改めて俺の顔に生乳を押し付けた。

「ぎゅーっ♥むぎゅーっ♥おっぱいきもちいいノコ♥ぐりぐりっ♥」

「ツ!!ツツツ!!」

物理的に呼吸が防がれ、僅かに吸える空気と共に肺に流れこむ、むせ返るようなメスの匂いと汗の匂い。その上足でバキバキに勃起したイチモツをグニグニ刺激され、あつ

という間に限界が訪れてしまった。

ブビュツツ!!!ビュブルルツツツ!!!

「ツツツあ♥♥ザーメン出たツ♥♥」

コシユコシユと器用に足でシゴキながら、身長に対してデカすぎるケツで放たれる精液を受け止める小森。意図的に部屋の湿度が高めに設定されているのか、じつとりと流れる汗が止まらない。

「はーっ♥♥はあああつ♥♥これが、ホンモノのザーメンっ♥♥熱々のチンポ胞子っ♥♥」

ぎゅうう……と俺の顔を押し付ける事を続けたまま、尻に掛かった精液を手でぬぐい取り、ベロベロと味わう小森。

「んっ♥♥んふむうっ♥♥マズっ♥♥クサっ♥♥最悪ツツツ♥♥こんなばつちい胞子飲むの最悪ノコっ♥♥♥♥」

じゆるっ、じゆるっ、と尻に掛かった精液を何度も手で掬っては口に入れる作業を繰り返す。

「えへえっ♥♥えへへえ♥♥本物チンポ凄いいツ♥♥こんな♥♥こんなものっ♥♥もう抑えられないツ!!!」

顔面パイズリからようやく解放され、窒息しかけてフラフラの俺を後目に小森は俺の上で器用に身体を反転。そのムチムチのケツを俺の顔に押し付け、想像以上に長い舌を

俺のイチモツに這わせた。

「んふう♥んむうう♥キノコつ♥ガチガチタケリタケちゃんおいしっ♥こんなのクセになるに決まってるノコツ♥」

「んぶつつつ!!」

「にげるなっ♥タケリタケ逃げるなっ♥えいつ♥えいえいつ♥ワタシのおまんこしゃぶってろっ♥」

ほっかほかに熱された舌が俺のイチモツに這い回る。グチヨグチヨに湿ったパンツを顔に押し付けられながら、肉の詰まったケツに比例してムチムチな脚に頭を拘束された。

「んぶっ♥んふーっ♥チンポでかすぎっ♥このガチガチタケリタケちゃんっワタシの一生のオカズ決定っ♥永久保存っ♥」

カシヤツ!カシヤツ!と閉じきった部屋の中でシヤツター音が響く。おいお前まさか今——ツ!?

「えへーっ♥えへへえ♥やばいつ♥エツチな自撮りしちやったノコつ♥チンポしゃぶってるフェラ顔自撮りしちやったノコツ♥みんなに見せたいっ♥やばいやばいつ♥デジタルタトウーキめたいノコつ♥♥♥」

「バカお前やめッ——」

「うるさいっ♥♥♥チンポ黙ってろっ♥♥♥ザーメン製造機になってろっ♥♥♥」
 更に強く顔に絡みつく脚と尻肉。熱々の舌によつてグツグツと煮え滾った精液が精
 巢を駆け登つていく。

「おりやつ♥♥♥タケリタケちゃんはおっぱいが大好きでちゅもんねっ♥♥♥ぎゅっ♥
 むぎゅ〜っ♥♥♥ザーメン出せ出せっ♥♥♥ワタシに胞子ぶちまけろっ♥♥♥彼女以外の
 女の子相手に子種撒けっ♥♥♥」

「ツツツ〜〜!!!」

ぶびゅぶぶっ!!!びゅぶるるるっ!!!

「んはああっ♥♥♥射精っ♥♥♥タケリタケちゃんかっこいいっ♥♥♥どびゅどびゅし
 てる姿好き好きっ♥♥♥んふう♥♥♥んむうう♥♥♥」

射精しているイチモツにしやぶりつきながら何度も何度もスマホのシャッターを切
 る小森。

「んふあっ♥♥♥下品っ♥♥♥下品すぎるっ♥♥♥チンポしゃぶる為に産まれたみたい
 な顔してるっ♥♥♥こんなのばら撒かれたらアイドルヒーローなる前にソープ嬢にし
 かなれなくなるっ♥♥♥」

「ゲホッ!ゲホッ!はっ、はあっ、おいっ……小森っ……!」

「うるさいっ♥♥♥うるさいっ♥♥♥こんなデカちゃんぽら下げてっ♥♥♥もつと女の

子幸せにさせろっ♥♥♥」

「ツツツが!?ヒュツツ!!」

突然喉の奥に何かが詰まったかのような息苦しき。先程まで口や鼻を塞がれたみたいな窒息感とはレベルが違う、呼吸困難。

「えへ♥♥♥えへへ♥♥♥必殺っ『肺攻めスエヒロダケちゃん』♥♥♥息できないでしよっ♥♥♥ずっとずっと考えてたのっ♥♥♥『キノコ』の個性で悪いヴィランを倒す方法っ♥♥♥なんでかなっ♥♥♥今日、突然出来るようになっちゃったっ♥♥♥」

俺の精液を口から取り込んだ事で、小森は自身の『オーラ』を無意識に操る事が出来たのだろう。そのオーラによって、自身の『個性』のレベルを、たつた今、この瞬間に、無理矢理上げたのだろう。

「ゴホツ……ガツ……ハ……ツ」

「悪いヴィランっ♥♥♥こんなおちんぼ悪いヴィランに決まってるノコっ♥♥♥退治しなきゃっ♥♥♥女の子ムラムラさせちゃうダメキノコはワタシのおまんこで退治っ♥♥♥」

視界が明滅するような苦しきの中、小森は俺に跨ってその秘部にイチモツを叩き込んだ。

「はギイツツ♥♥♥おっ♥♥♥おおおおおおっ♥♥♥」

プシッ！チヨロロロロ……

一気に奥まで突き入れたせいで、限界まで興奮していた膣が喜びのあまり絶頂と共に嬉ションを漏らす。精液の匂いと、メスの匂い、更に汗の匂いに、小便の匂いまで混ざった部屋内は居るだけで気分が悪くなりそうな程に強い匂いが染みついてしまった。

「おっ ♥♥♥ おおおっ?! ♥♥♥ おお おお おおっ!?! ♥♥♥」

ガチガチに勃起したイチモツが腹を押し上げる快樂によって、脳の言語野が一時的に吹っ飛んだのかおーおー唸るような喘ぎ声を喉からひり出しながら、自身の肉体を省みないような激しいピストンをし続ける。

何とか止めようにも、肺に詰まった異物によって呼吸困難となつている俺は手足が痺れて動けない。ただ一方的に行われる暴力的な性行為を享受する事しか出来なかった。

「おおおっ ♥♥♥ んおおおおっ ♥♥♥ おお おお おおおッッ ♥♥♥」

「カ……あ……ッ……!!」

ブビュブビュルルルッ!! ビュブブブッ!!

生存本能によって刺激された生殖欲求が、俺の意思関係なく大量の精液を生産、そして放出した。

放たれた大量の精液は、ドロドログチョグチョに溶けたように濡れている小森の膣内を通り、子宮口を抉じ開け、子宮内に流入していく。

「ツ~~~~♡♡♡ あ、は……♡♡♡ せ、セックス……ヤバいノコっ♡♡♡ あたま、こわれ
ちやうノコっ♡♡♡ ちんぼの事しか考えられないっ♡♡♡」

カシヤツ！カシヤツ！……PRRRR♪

「えへ♡♡♡ えへへえ♡♡♡ みえてるー？♡♡♡ ごめんねせつなあ♡♡♡ こんな知っ
ちやつたらもうオナニーにもどれなあ♡♡♡ やくもも、うわきせつくすきもちーつ
てえ♡♡♡ いっぱい中出しされちやつたあー♡♡♡」

脳に酸素が回らず、意識が暗転する直前。小森が、スマホ片手に誰かと通話している
のが見え……

そのまま意識を失った……。



『えへ♡♡♡ えへへえ♡♡♡ みえてるー？♡♡♡ ごめんねせつなあ♡♡♡ こんな知っ
ちやつたらもうオナニーにもどれなあ♡♡♡ やくもも、うわきせつくすきもちーつ
てえ♡♡♡ いっぱい中出しされちやつたあー♡♡♡』

無料通話アプリのビデオ通話によって映されている映像を確認し、スマホを放り投げ

る。

「……ああ、アタシって最低だ……」

映像にはグツタリと倒れていた、愛しい彼氏と。

その彼氏に跨って、ぐりぐりと腰を動かして精液を垂らすクラスメイト。

それを思いだし、最悪な気分沈む。

「……」

彼との『付き合い』はそれこそ中学三年生の時からだ。だが初めて出会ったのは、中学一年生の頃。それも入学したての頃だ。今思えば、彼はその時からずっと……否、ずっと前からその『個性』を悪用し続けていたのだろう。どんな秘め事も、どんな想い出も、彼の『眼』に映されれば数字となって現れ、暴かれてしまう。相手の好む事を暴き、嫌う事も暴き。そうして人に好かれ、懐に入り、『好意』を盾にして彼は好き放題やった。……まあ、好き放題と言っても犯罪ではなく、女子のパンツ見たりおっぱい揉んだりしてたくらいだが。……いや、やっぱ今思い返せば腹立って来たな。

「……」

彼と『やる』為だけに拵えたベッドの上に倒れ込む。彼の事を『異性』として意識しだしたのは、いつだったか。自分でも分からない自身の気持ち、彼だけは手に取るように分かっているというのも不思議な話だ。

『異性』として意識し、明確な『好意』を意識し、彼と付き合う……『抱かれる』関係になったのが何時だったかは覚えていない。彼がヴィランに襲われ、その『心』を穢された事が切っ掛けとなって……アタシの身体で忘れさせようとした。

「……男女逆だなあ」

レイプされて傷ついた心を癒す為、嫌な記憶を忘れさせるため、新たな行為で塗り替える。そんな展開は何度も見た。まあ、その展開でレイプされたのは女の方だけ。アタシ女と魔眼男の立ち位置逆だけ。

そうしてアタシの初めてを魔眼に捧げ……そのセックスは色々とスゴかった。

「……」

自分でもどうかと思うけど。それまでヒーローになる事を夢見ていたけど。たった一回の経験で、魔眼のお嫁さんになる未来も悪くないのかなあ……とか思ってみたり。

「……」

それから、アタシ達は正式な『お付き合い』を始めた訳だけ。それから、魔眼の『個性』について詳しく聞いた訳だけ。なんだよゴメンって。ズルして好感度稼いだ、偽りの恋心って。何でも見える癖に、肝心な事が見えてないと魔眼をぶん殴って、そのまま家に連れ込んで……。

「……」

あの時から、ナマでやるのに一切抵抗を覚えなくなっただよなあ……。まあ、二回目なんだけど。

それから魔眼に徹底的に愛されて。髪や耳、顔、首、胸、肩、腕、お腹、腰、お尻、脚、ぜーんぶにマーキングされて、この前はお尻の穴まで愛されて……

「っ……………」

アタシの全身、魔眼を悦ばせるためだけに育ってきてる事に気付いて。…………なーがオーラ操作技術よ。自分の願望、鏡を見る度に見せつけられる身にもなれつての。

「ッ……………くっ……………」

そうだ。もう今更他の誰かを好きになる事なんて無い。複数恋愛？馬鹿々々しい。アタシには、アンタしか居ないんだ。だって……

「ズルいっ……………ズルいズルいずるいっ……………あ、アタシもっ……………生ハメっ……………種付けさせられたいよおっ……………」

魔眼に犯される気持ち良さに比べたら、いろんな事がどうでもよくなっちゃう♥

「魔眼っ♥まなこまなこおっ♥」

魔眼が、友達に犯されてる姿を見ながら自慰にふける。

あんな大きいモノが、アタシの気持ち良いトコロ全部ゴリゴリ抉ってくる気持ち良さに比べればカスみたいな快感だけ。

「ごめんね魔眼っ♥♥♥アタシっ♥♥♥アンタの事が大好きだからっ♥♥♥アンタの事
メチャクチャにしたいしっ♥♥♥アンタにメチャクチャにされたいっ♥♥♥」

だからあの時、魔眼の心を滅茶苦茶にした女ヴィランとやらの憎悪した。だからあの
時、滅茶苦茶になった魔眼に欲情した。慰めるだなんて、ただの言い訳。アンタをブチ
犯したい。アンタにブチ犯されたい。その為には、何だつて利用してやる。

「アンタが悪いんだっ♥♥♥アタシをっ♥♥♥こんなアタシを『大好きだ』つて言っちゃ
うアンタが悪いんだからなっ♥♥♥」

擦り切れるんじゃないかという程、激しくクリオナしながら、切り離した指で膣奥の
ザラザラした所を掻き回す。普通の人じゃ絶対出来ないオナニーだし、普通の人じゃ絶
対に与えられない快樂が脳を駆け抜ける。

でも。でも。

八雲魔眼は、普通の人じゃない。

「魔眼っ♥まなこお♥♥♥オシオキっ♥♥♥オシオキしてっ♥♥♥友達に彼氏売っちゃ
う悪い女にオシオキ生ハメしてえっ♥♥♥」

気が狂いそうな程に火照った身体を慰める為に、更に気が狂いそうな程の快樂を自身
に与える。バラバラになったアタシの手足は、アタシの全身の性感帯を攻め続ける。

右手の指全てをバラバラに飛ばし、アタシの膣肉を蹂躪する。

左手の指全てをバラバラに飛ばし、アタシの口内をイジメぬく。

右足を分割して飛ばし、アタシのおっぱいをグリグリ攻める。

左足を分割して飛ばし、アタシの尻肉をパシパシ叩く。

全身が彼の手によって調教されたアタシは、もはや普通のセックスなんかでは満足できない身体になってしまった。

「魔眼っ♡♡♡まなこっ♡♡♡希乃子のマンコきもちいい？♡♡♡アタシの開発済みマンコよりきもちいいっ?!♡♡♡でもダメだからねっ♡♡♡希乃子孕ませたとしてもっ♡♡♡ぜったいに逃がさないからなっ♡♡♡アタシをこんなにした責任とらせるからなっ♡♡♡」

放り投げたスマホはビデオ通話の画面のままだった。お互いが通話を切ろうともしない為に、ずっと繋がっていたままだった。お互いが通話を切ろうともし

『あ♡あ♡あ♡ツツツ♡♡♡ごめんなさいツツツ♡♡♡こめ♡ん♡な♡さ♡や♡い♡ツツツ♡♡♡ザコまんこでイキってましたツ!!♡♡♡オナニー狂いメスブタでごめんなさいっっ♡♡♡現実見えてませんでしたア♡ツツツ♡♡♡イっ♡♡♡イ♡く♡う♡ツ♡ツ♡♡♡まなこさまの♡オ♡ん♡♡♡最強キノコでエ♡い♡く♡ツ♡ツ♡ツ♡♡♡♡』

「あ♡♡♡バカだなア希乃子はツツツ♡♡♡何したって魔眼に勝てる訳無いだろッ

♥♥♥

通話越しに、しかも画面から離れているにも関わらず、力強い射精音が切奈の耳にも届いた。

「いいなツ♥♥♥ザーマン良いなあツ♥♥♥魔眼ツ♥♥♥まなこおつ♥♥♥此処にアンのザーマン専用ゴミ箱があるよおつ♥♥♥アタシのドロドロまんこでザーマンコキ捨ててえっ♥♥♥」

脳みそがバカになってしまった取蔭切奈の好感度は100。

この好感度の数値は、本来であれば『偏差値』のような数値として算出される。つまり『ほぼ他人・興味なし』である人物の好感度は50だし、『大好き・結婚を考えている』レベルであってもその好感度は70を超えない。『一生尽くす・特に仲の良い家族』となつてようやく75だ。

……取蔭切奈の好感度100という数値は、異常である。狂気の類だ。だが『人から人への好感度』を見たことの無い、興味も持たない八雲魔眼は変だなと思う事はあれど、その異常に気が付かない。異常に気が付かないからこそ、八雲魔眼は育成^本ゲーム^本感覚で他者の好感度を荒稼ぎする。

しかし、愛もまた狂気の類。それに気が付かない事の方が当人たちにとって幸せなの

かもしれない。

『ゴホツ……切奈』

「ツツツ♥♥♥な、なに?♥♥♥まなこお♥♥♥」

突然呼びかけられ、甘イキしながら返事をする。

『来い』

「~~~~ツ♥♥♥わっ……かつたあ……♥♥♥」

ご主人様の命令に、脳を焼かれる快感を覚える。そうしてグチャグチャに乱れまくったジャージのまま、奇跡的に誰にもすれ違わずに小森希乃子の部屋の前に来れた。

コンコン

ノックをして、すぐ。

ガチャリと鍵が開く音がした。

「ふーっ♥ふーっ♥」

荒い息を整えながら待つ。一秒、二秒、扉はまだ、開かない。

「……?」

十秒、二十秒、扉は開かない。

鍵を開けたのなら、そこに居る筈なのに……。

アタシはつい、待ち切れず、扉を開いた。……するとそこには全身をザーメン漬けにされて、それでも喜色満面のイキ顔を晒しながら漏らしている友達の姿と。

小森希乃子

「……わざと仕組んだらしいなあ？切奈」

「はっ……ひい……」

紅く燃え上がるような眼でアタシを睨むご主人様。

あ、ああ……このまま、オシオキと称してそのいきり立ったイチモツに貫き殺されちゃうんだ

扉を支えてる腕を掴まれ、そのまま部屋の中へ引きずり込まれた……。

「今日はペット感覚で犯されたいんだな？」

「あツツツ♥♥♥にやあつ♥♥♥にやああつ♥♥♥」

鍵は開きつばなしだ。間違ひなく嬌声が響き渡るこのフロアの誰かが様子を見にきて、扉を開けたら……全部終わる。

「にやあん♥♥♥にやあああん♥♥♥」

だというのに、ご主人様に甘えるような声を止められない。

「にやあおん♥♥♥なああん♥♥♥」

犯してつ♥♥♥犯してえ♥♥♥友達に彼氏を売っちゃう悪い女にオシオキしてえ♥

彼の手が、アタシの腕を掴みあげる。

「それでもお前の事が好きだよ、切奈」

「——あ♥♥♥」

言葉だけで深くイったのは、初めてだった。

絶頂し、視界が真っ白に染まっていく。

「まあ、それはそれとしてオシオキだな」

「ツツツ♥♥♥にゃあ♥♥♥」

そうして、体育祭の日の夜とその次の休日、ずっとぶっ続けでセックスした。



じゆるるるっ、じゆるっ、ずろろろっ、ぴちやつ、じゆるろろお……

「希乃子もしゃぶるのが上手くなったな」

「はっ♥はっ♥まなこさまのせいっ♥まなこさまにおしえこまれたダケだからっ♥」
「ふーっ♥ふーっ♥」

「こら、勝手にチンポ挿入しようとするな。悪い猫だなお前は」
「にやひいつ♥にやああっ♥」

「……くっ、そろそろ、出すぞ。お前らのザーメン化粧顔スマホに保存してやるからな」

「はいっ♥まなこさまのズリネタになるよう、がんばるノコ♥」

「にやあん♥なあおん♥」

「くっ……イクぞー！」

びゅぶるるるっ!!!ドビュルルツ!!!

「んああっ♥♥♥顔が熱いっ♥♥♥ザーメン重いっ♥♥♥」

「なあうん♥♥♥」

「ふー……ふー……ほら、次はケツにザーメンぶっ掛けてやる。尻を向ける」

「はっ♥はいっ♥」

「なああん♥♥」

そうして丸一日、とつぷりと日が暮れるまでずっとスマホにエロ画像を増やしていく作業を続けたのだった。

期末テスト・まえに・お茶子ちゃんえつつ

「職場体験は……大変でしたね……」

「だ、大丈夫か八雲。なんか萎れてるぞ……？」

「大丈夫じゃあねえわ」

体育祭準優勝の俺にとつて職場体験先は選り取り見取りうひょー！……そう思っていた時期もありました。もうね、終わり良ければすべて良しって言うじゃん？ 終わりが良くなければすべてダメなんだわ。女性ヒーローからの指名が、リカバリーガール並みのお年寄りか既婚者、もしくは聞いたこともない調べても良く分からないみたいな指名しかなかったん。

だからせめて……せめてサイドキックに可愛い女性が居る所を探した。探しまくった。調べても分からなさすぎワロタと知恵熱出すほど調べた。最終的に運否天賦に任せて決めたが……

「そんなにガンヘツドの所は厳しかったのか？」

「厳しかったあ……（むさ苦しい的な意味で）」

ゴツイおっさん、筋肉に囲まれて死ぬかと思つた。お茶子ちゃん居なかつたら死んで

た。

……まあ、オーラに頼りきった近接戦闘技術を磨けたと思えば……いややつぱ挫けそう。

「や、やべえなガンヘッド。あの八雲がこうなって、麗日はああなるんだから……」

「お茶子ちゃんは……なんか、突然覚醒したんだ……」

ある日突然、不安定ながらもオーラ操作技術の一部を体得したお茶子ちゃん。格闘の技術はまだただけど、急に強くなつたお茶子ちゃんにガンヘッドも首をかしげていた。

「ねえ、魔眼くん。私、この感覚を忘れない内にしつかり身に付けておきたいんだ……」

「おう……そう言うと思って、狭いけど訓練室予約してるぞ……」

「ありがとう魔眼くん……」

コオオオと息を吐きながら、目からオーラを出すお茶子ちゃん。有り体に言つて怖い。

「……私、気になつたことは何でも口に出しちゃうんだけど」

「どうしたん梅雨ちゃん……」

目の保養……筋肉で受けたダメージは女体で回復……。梅雨ちゃんの身体はえちえちですなあ。

「お茶子ちゃんと八雲ちゃん、距離近くない？」

「そうかな……そうかも……」

なんというか……最終的にガンヘツドの所でお茶子ちゃんとはかり組み手してたら自然とこの距離感になってたというか……。

「物理的な距離もそうなんだけど、お互いの心の距離も……名前呼び会う仲だったかしら？」

ふむ、言われてみれば……なんというかあまりにも自然過ぎて自分でも気づかなかつた。……そういえばお茶子ちゃんの性欲値が一気に下がった日があったが、あれは何だったのだろうか。オナニーカウントが増えてた訳でもなかったし。

??

放課後、訓練室。

そこで俺とお茶子ちゃんは組み手を行っていた。見学に耳郎、梅雨ちゃん、透、芦戸の四人が座って見ている。女子ばかりなのが気になるが、まあいい匂いが狭い訓練室に充満して頭がハッピーセット。

ジャージ姿の俺と、黒いインナーシャツと短パン姿のお茶子ちゃんが向かい合う。

ガンヘッド・マイシャル・アーツ

G・M・Aの基本は、自身の個性を使いながら相手を拘束する動きだが、場合によつては拘束ではなく気絶を狙うことも視野に入れている。相澤先生が大好きな合理性を突き詰めていく武術だ。

俺は、すこしでも相手の衣服に指が引つ掛かればオーラ操作技術による怪力で相手を地面に投げ飛ばし、寝技に持ち込んで拘束する動きを。

お茶子ちゃんは、相手の素肌に触れられれば発動する無重力を狙いながらも、一撃で相手を昏倒あるいは間接技を狙つて立ち回る動きを。

各々狙っている為にお互いは最小限の防具で最大限相手を防ぐ服を着ている。故に俺は暑い中ジャージフル装備だし、お茶子ちゃんは女子にあるまじきノーガード装備。ものすごい物言いたげな観客席の視線を敢えて無視する。

「行くよ魔眼君!!」

「いつでもどうぞ」

この組み手において、挑戦者はいつだつてお茶子ちゃん側だ。俺の方が強いから……というのもあるが、俺の戦闘スタイルは相手のオーラの流れを視て対応する後の先。お茶子ちゃんはその素早い動きと個性を使つて予想外の動きで相手を倒す先の先を得意としてるからだ。

故にいちいち先攻後攻を決めることなんてしない。

「やあああッ!!!」

気合一閃。俺よりも低い身長を生かし、狼の様に手足で地を蹴りながらの突進。これと、『触れる』という目的に対して、これ以上無い正解であろう低姿勢のタツクル。顔が地面に近付くということは、相手の強力な『足技』を顔に喰らうリスクが高い。だがそのリスク以上のリターンが狙える。人は二本の脚で自身を支えている以上、片足を攻撃に使えばもう片足は地を踏み締めてなければバランスが取れず転んでしまう。必然、支えとなつている脚は動かせない。

だからこそ敢えて俺は、限りなく地面ストレスを駆けるお茶子ちゃんの顔に向けて足を突き出す。

「うひいッ!!?!あ、当たったら麗日の顔が潰れるよ?!」

「でも、お茶子ちゃんはしっかり回避してるわ」

バツ、とジャージが空気を叩く音と共に、お茶子ちゃんの手は俺の軸足に触れようとしていた。

しかしお茶子ちゃんの手が俺の軸足に触れる前に、俺は軸足だけで跳んでいた。「え、ええええ!!?!何であの体勢から跳べるの?!八雲の脚の筋肉どうなってるの!!?!」

普通の間人は蹴り出した脚をそのままに片足で跳ぶなんてことは出来ない。しかし俺は普通の人間ではない。勿論タネとなるのは俺のオーラ操作技術だ。

軸足の裏からオーラを放出する勢いで、全身を支えて尚超過したエネルギーが『跳躍』という結果に結び付いた。

そうしてお茶子ちゃんの『掴み』を避けた俺は、地面に降りる前に『オーラ放出』によつて空気を踏み締め、二度目の蹴りを敢行。空中でグルリと景色が回り、お茶子ちゃんの背中に踵を落とす。

お茶子ちゃんはその両手脚で床を叩き、弾かれるように踵落としを避けた。

勢いそのまま離れ、一度仕切り直しとばかりに狼の様な姿勢から普通に立ち上がった。

「凄……麗日の機動力が格段に上がってるし……」

「つていうか、八雲さつき空中で急に姿勢を変えた気がするんだけど」

「コオオオオ……と排気し、息を整える。ガンヘッドの所で学んだ呼吸法はわりとしっかり身に付いているようだ。火のついたエンジンのように吸った酸素が肺の中でオーラと結び付き、全身の血管を通して身体を巡っている感覚が視ずとも分かる。」

「相変わらず奇怪な動きでらっしやる」

「魔眼君ほどやあらへん」

軽口を叩きながら組み手を再開。拳と腕、脚と足が交差し、ぶつかり合う。僅かな隙を狙つてお茶子ちゃんが触れてこようと手のひらを伸ばすが肘で弾き、その流れで返す

ように伸ばした指がお茶子ちゃんの着ているインナーシャツの裾を掴み、引き倒す。

床に手を突いて倒れたお茶子ちゃんの背後に回り、首に腕を回した『裸締め』を完全にキメる直前で止まる。

「うぐぐ……また負けたあ……」

「早々に負けたら俺のプライドが立たん」

後ろから覗くおっぱい……良き……。

と、勃起しない内にお茶子ちゃんを解放し、立ち上がる。

「……と、こんな感じで相手を締め上げ、意識を落とす。『個性』を使わない決め技は一つでも多い方が良いからな」

「おおお……なんか体育の先生みたい！」

「非力でも使える絞め技みたいなのは無いの？」

「基本的に絞め技が決まれば体格差とかは関係無いけど……そうだなあ。脚の力は腕の三倍以上とかよく言うし、脚を使った絞め技なら隙は大きいけど決まれば大抵抜け出せないと思うぞ。お茶子ちゃん、俺に技掛けてみ」

「ん、ええけど……」

お茶子ちゃんも立ち上がり、互いに向き合う。

「相手がこう……襲いかかってきたら——」

俺はお茶子ちゃんに向けて拳を振り上げ、殴りかかる。

「——こう跳んで」

お茶子ちゃんは拳を受け流しながら腕を極め、跳躍。

「——こう脚を掛けて」

お茶子ちゃんの脚が俺の首に回り、体重を掛けながら床に引き倒す。

「そんでコレでおしまい。簡単やろ?」

俺を下敷きにするように押さえ込みながら脚で首を締め、ついでに腕の関節を極める

お茶子ちゃん。

「どこが簡単なの!?!」

「やってみれば案外簡単やで?」

「けろっ……八雲ちゃん、痛くないの?」

「これね、見た目以上に痛いんだわ」

「痛いのかよ!」

関節技ってそういうモンだし。

ただお茶子ちゃんの汗でじんわり濡れた脚で締められるの、悪くないかも。あと腕がおっぱいに当たってぐへへ。

「魔眼?」

「ツという訳で透に色々教えながらお茶子ちゃんと組み手を続けるつもりだがどうすんだ？梅雨ちゃんはともかくとして、芦戸と耳郎は個人的に近接戦闘鍛えるより他の事鍛えた方が良いんじゃないか？」

透の冷たい視線が俺を射抜くがあえて気が付かないフリをしながら、若干早口で三人に聞く。

そう、そもそも訓練室を借りたのだつてお茶子ちゃんとの組み手を行うこともそうだが、攻撃方法がどうしても素手で殴るオンリーになつてしまう透明人間な透の可能性を広げる為に借りたのだ。

色んな女の子の好感度を荒稼ぎしてるとはいえ、『彼女』とそうでない子のどちらを優先するかと言われたら……ねえ。

「あ、ああその……アレだよ！アタシの個性だと決め手に欠けるっていうか、相手に致命傷与えがちだから加減のしやすい格闘を覚えたい……的な!？」

「う、ウチも中距離はともかく至近距離の手数の少なさがネックだし……横で見てるだけで良いから！」

「けろっ！」

「……？まあ、見てるだけなら別にいいが」

はて、女子三人の興奮度が軒並み高いのはなんで？まるで『顔は可愛いけど性格堅物

な超真面目委員長がドすけベスケスケ黒パンツを履いているのを風のイタズラで目撃してしまつた男子中学生』並みに興奮してゐるんだが。謎だ。お茶子ちゃんの汗まみれ黒インナーに興奮してゐる俺ではあるまいし……。

「(B組の子と付き合つてゐるのにも関わらず葉隠と学校でセツ……セツ……アレする奴が、職場体験先でナニやつたか知らないけど滅茶苦茶仲良くなつてゐる麗日と三人だけにするとかあり得ないから!!)」

「(八雲ちゃんが複数の人と付き合うのは当人達の問題……でも、学校の中でそういう事をするのは間違つてゐるわ。……もし次同じようなこととしてたら……わ、私が止めないと……)」

「(うう……も、もしかして、もう皆八雲に手を出されてゐるの?だから皆八雲と……?なんでえ?なんでアタシだけえ……?)」

更に興奮度が上昇し、性欲値も高まつてく女子三人。ははあんつまり……どういう事だつてばよ!?

いや、流石に俺と会話してゐるだけで性欲値が高まつてくのは切奈だけだと思つたんだが……それにしたつて切奈と交際を始めてからの話だし、付き合つてもない女の子と会話してゐるだけで性欲値が上昇するのは……。なんだお前ら!?!俺の事好きか!?!好きすぎか!?!(好感度を見ながら)

ジャージの上のファスナーを開けて『暑っちいー』とインナーの首もとを使ってパタパタ扇ぐ。女子三人……透とお茶子ちゃんも、その性欲値の上昇を確認。あつ、ふーん（察し）つまりお前ら、俺の事をオカズにしてんのね……なんだお前ら!? 俺の事好きか!? 好きすぎか!?（好感度再確認）

仕方ないにやあ……ちよつとだけサービスしてやるか!

雄英指定ジャージを脱ぎ捨て、無地のシャツ姿に換装。

「見るだけで良いってんなら、じゃあ続きをやるかお茶子ちゃん」

「えっ!? あつ、そ、そうやね!!」

ようやく再開する組み手だが……服の裾がチラチラする度動きに精彩を欠くお茶子ちゃんだが、そんなでもより露出（的）が増えた俺と互角の勝負になっていた。なにせお茶子ちゃんの手に触れられたら終わりだ。肌を触れられ、宙に浮かぶ俺。その際服が大きく捲れ上がり、俺の胸くらいまで晒すのはもうわざとじゃないんで許してくれませんかね。

そうしてお茶子ちゃんと組み手をしながら透に指導していた中……事故は起きた。

「ツ、はっ!」

「つあッ!? しまつ——『ビリリイイッ』——は?」

俺の抜き手を払いきれず、黒いインナーシャツに指が引っかけられて投げられる……その瞬間。お茶子ちゃんのインナーシャツの耐久力が限界を迎えた。結果、インナーシャツはビリビリに裂け、豊満な胸を包むスポーツブラが現れた。

ずっと前から使い続けてたのか、お茶子ちゃんのおっぱいの大きさに対しワンサイズ程小さく思える上に色もかなり落ちていいる。要するに、お茶子ちゃんのおっぱいがボンと強調されている上に、汗によつてその内側が大変なスケスケ。あーいけません！これはいけません！！これはとてもいけません！！きれいなビーチクカラーですね！

「っキヤアアア!!!」

「おゴぶツ?!」

お茶子ちゃんの全力アツパーが大命中。俺の顎を綺麗にかち上げ、足が地面から浮く程度の高威力。お茶子ちゃんの透け透けスケベっばいが脳裏に焼き付きながら、俺は意識を飛ばした。

「……あっ?!?魔眼君?!」

??

「麗日、その……大丈夫?」

「だっ……大丈夫……や。上に魔眼君のジャージ羽織れば端から見ても分からへんし」
「と、いうか……その、麗日……あんまこういうこと言いたくないけど……そのスポブラはどうかと思う」

「これは……その、オハズカシイ話やけど……新しいのを買うお金が無い……から……」
「ふーん……魔眼に買って貰えば良いんじゃない？きつとノリノリで選んでくれるよ？」

「ええええ!!なんで魔眼君が私の下着選ぶん!!?」

「えっ?だってもうヤツた仲なんじゃないの?」

「……へっ?」

「えっ、あつ、あの……な、なんで?」

「なんでってそりや分かるよ。魔眼を見る『目』が私達とおんなじなんだもん♥」

「……えっ?」

「わ、私達?えっ、というか、な、なんのこと?よく分からへんなあ……」

「……ふーん?すつとぼけるんだあ……ツ!」

「ツ!?あつぶなツ!?!ちよ、なんで急に殴り掛かってくるん!?!」

「えっ?う、麗日?葉隠は此処から動いてないよ?」

「……えっ?」

気絶している八雲を介抱している葉隠と、八雲が投げ捨てたジャージを取りに一度その場を動いた麗日。互いの距離は3メートル程離れており、当然腕を伸ばした程度では絶対に届かない距離だ。更に言って、八雲の介抱をするために床に座っている葉隠が、いくら透明人間だからといつても離れている麗日に殴り掛かる事はまず出来ないだろう。

そう、葉隠から放たれた特定の人間以外感知する事が出来ない『オーラ』を見えない者にとっては、それが普通なのだ。

だが気絶している八雲と、オーラを飛ばした張本人である葉隠以外のオーラを感知出来る者が居たのなら……葉隠の挑発を『視て』、『反応出来る』者が居たのなら、普通に当てはまらない『行動』をする事になる。つまり……

「……麗日、貴方が『コレ』を視れるって事はつまり、魔眼とヤツたつて事なの」

「い……いやいやいや、言いがかりやん！『ソレ』が見えただけで魔眼君とシタつてのは無理がある！わ、私は魔眼君と一緒にガンヘッドの所で組み手し続けてたから、たまたま見えるようになったつてだけで……」

「『コレ』はたまたまで見えるようになるものじゃないって魔眼は言ってたよ。……まあ、たまたまで見えるようになるんだけど」

「急にド下ネタかますの止めえ!!?」

「あれー？なんで今ので下ネタって分かったのー？偶然って意味のたまたまにのが着いただけじゃん。『たまたまの』がナニを差すのか理解してないと下ネタって発想に至るのは……ちよつとドスケベ過ぎないかなあ？」

「ツ——!!!」

「……あの、さあ」

「そろそろ私たちにも説明してほしいわ透ちゃん」

「つて言うか、『ヤツた』とか『シた』とか……あ、あはは、まるで八雲と麗日がエッチしたみたいじゃん……じよ、冗談きついなー！」

「そうだよ」

「……えっ」

「『魔眼と麗日がエッチした。でも麗日はその事を隠して、嘘吐いてる』って事。だからこうして追及してるの。魔眼はそういう事に関してには嘘吐かないからね。『麗日とヤツた』ってんなら八雲は自分から私達に伝えるし、何か事情があつて隠してるとしても態度に出ちやうからね……まあ、それが可愛い所なんだけど。だから、魔眼が知らない内に麗日とエッチしたんだろうなって……予測出来るんだな。そう、例えば……眠ってる魔眼を麗日がこっそりレイプした……って、予想してるんだけど。どうか
な？」

「……」

「と、透ちゃん？なんか……怖いわ……」

「ふふ、怖い？怖いかー。なんなんだろうねー……私にもこの感情は分からないかな。切奈や、ヤオモモが魔眼とエツチしたつて聞かされてもこうはならなかったんだけどなー。……麗日だから？いや、多分きつと他の人でもこうなつてる気がするなー。……ああ、そうか。私は魔眼のモノだけど、魔眼は私だけのモノじゃない……だから、横から割り込んで搔つ攫つてくヤツが許せないのかなあ。まあ、極論私の感情なんてどうでもいいんだけど。ねえ麗日。どうやって魔眼をレイプしたの？レイプしてる時どう思った？ねえ、ねえ」

「は、葉隠！落ち着きなつて！」

「落ち着いてるよ。私は至極落ち着いてるよ。ねえ麗日、私……きつと今ならまだ許せると思うんだよね、麗日のこと。正直に、素直に、思った事を、感じた事を、有りのままに、話してくれれば」

「……許せる？許されたら……何なん？許されなかつたら、何だつて言うん？」

「う、麗日！何そんな挑発みたいな事言つてんの!？」

「んー……別に？ただ私が貴方を許さないだけ。勿論、今日の事は私達の中で共有するし、その時どうなるかは知らない。まあ、麗日が魔眼に近づくのを皆で阻害しましよ

う、つて結論になるような気がするけど」

「……なんやん……なんやそれ……ッ！そんなアホな話は無いやろッ！！」

「麗日ッ!？」

「ほぼ毎日ッ!!ほぼ毎日や!!夜遅くまでッ!!次の日の朝までッ!!!酷い時は、一日中やで!!!ずうつつつと横で聞いてて、そんなん頭おかしなるわッ!!!」

「お、落ち着いてお茶子ちゃん!」

「落ち着いてられるかッ!!梅雨ちゃんだつて私と同じ立場なら魔眼くんをレイプするッ!!!絶対にするッ!!!早いか、遅いかだけの違いやねん!!!」

ゼエゼエと息を切らしながら叫ぶ麗日の形相を見て、とんでもない事が今起きている……と思いつつも三人がかりで麗日を抑える蛙吹、芦戸、耳郎。

「……ちゃんと、全部話してくれるよね、麗日」

自身の内面に潜む怪物が表に出ようとしているのを抑えながら、気絶している八雲の頭を撫でる事で気を紛らわせている葉隠。

その様子を、しっかりと『視て』いた麗日は荒ぶる気が少し落ち着いた。

「……」から、順番に話すと長くなるけど……聞いてくれる?」

「勿論」

「……まあ、なるべく掻い摘んで話すけど……分からんところあったら最後に聞いてな

……」

そうして麗日お茶子は語り出す。

今住んでいるマンションに引越し、憧れていたヒーローになる……その第一歩を踏み出した直後。その住む隣の部屋から聞こえてくる、色事の音。壁はしつかりと作られている筈なのに、その行為の激しさを前に壁の防音機能など取るに足らないモノであった。

ほぼ毎日、毎日。激しすぎる喘ぎ声と、肉と肉がぶつかり合う音が漏れ聞こえる。そんな音が夜遅くまで、日によつては朝日が昇り出す時間まで。

最初の内はまだ良かった。漏れ出る音をオカズに、火が付いた性欲を指で鎮めている内に眠りの世界に行くことが出来たのだから。

だが、それが一ヶ月、二ヶ月と続いたある日。いくら指で鎮めても、火が付いた性欲はずうつとくすぶり続けたままだった。日が昇つても、学校に向かつても、それから家に帰つても。ずうつと己の身体でジワジワと燃え続けていた。睡眠欲が無くなつていき、代わりに性欲が増大していった。

深く眠る事より、絶頂する方がスツキリするようになった。

「頭がおかしくなりそうやった……目を閉じて眠るより、布団の中でずつとオナニーしてる方が身体が休まるなんてどっかオカシイに決まつてる」

そんな身体になったのは、お隣さんのせいだと考えるのは当たり前だった。

そして、そんなお隣さんの彼氏が、八雲魔眼だと気が付いた。

「こんな身体になったんは、魔眼君のせいや……でも、魔眼君はエッチやけど真面目やし……本当に好き同士ならそれでええかなって……思ってたのに……ッ！」

そう思った次の日の朝。その想いは裏切られた。

「他のっ……あんな可愛い子が彼女なのにつ、八雲君、他の子ん所で朝帰りするんや、つて……思ったら……じゃあ私もってなるやろッ!!」

ああ、そうだ。八雲魔眼、貴方のせいで私の身体はおかしくなった。なら、その責任は取るべきじゃないか。

「……でも、それを直接言う勇氣は無かった。悶々とした日々を過ごしてたら……職場体験先が一緒になるなんて思いもしなかった……」

そんな偶然があるだろうか。もしかして、八雲君はこうなる事を見越して……?なんて詮無き事まで考えて。

それでウジウジと考えてる間に、あつという間に職場体験期間が始まり、ガンヘッドの所でお世話になっていた。そのまま、真面目に終わるんだらうな……と、思っていた
職場体験四日目の事——

◆
「睡眠薬？」

「まあ、似たようなモノかな。正確には『短時間超効率休眠改善薬』の試供品。お世話になってる医薬品会社があつてね、そこで研究開発してる薬なんだよ」

「はあ……この『二時間眠っただけで八時間睡眠並の超休息率!!』ってなんですか？」

「書いてある通りだよ。二時間眠れば、八時間眠ったのと同じだけ休める。ただ、その二時間は絶対に何があつても起きられない副作用があるんだ。忙しいプロヒーローにとって夢のような薬……なんだけど、その『二時間は起きられない』つてのがネックだね。休日でも緊急で出勤要請なんてプロヒーローにとってはよくある事だし、人間だから仕方ない所もあるけど『寝てたから間に合いませんでした』なんていうのは良くない事だからね」

「成程……」

「……欲しいの？」

「欲しいです!!」

「正直だねー」

「そりゃあいつ何が分かるか分からないプロヒーローにとつては『二時間は起きられない』のは凄いネックなのは分かります。しかし出勤時間がほぼ決まってるサラリーマンや俺達学生は『二時間起きられない』のは大したこと無いですからね。試供品……と言う事は、使用感を纏めてレポート提出すれば俺でも使つて良いですよね!？」

「そうだね。先方も薬のデータが欲しいだろうし、そもそも僕達じゃあその副作用のせいで使えないから……大丈夫だと思うよ」

「やったぜ！」

「……ところで、『睡眠薬を他人に盛った場合の刑法』は勿論知ってるよね？」

「どうしてそんなこときくんですかガンヘッド」

「ははは……君がこの短い期間で築き上げた信頼の証さ」

「しんらいってすげえ」

「……ウラビティちゃん、彼が悪い事しないようにしっかり見張っておくんだよ」

「は、ハイ！」

それから夜になり、本日の職場体験は終了。ヒーロー科の二人は近くに借りてもらったホテルへ戻る。

「……で、真面目な話なんやけど八雲君……ソレ、どうするつもりなん？」

「麗日さんまで俺を疑うのかっ!」

「むしろ疑わん要素があると。ふーん……自己評価ずいぶん高いんやねえ」

「ねえ待って麗日さんご出身京都でしたっけ? 違う、そんな事はどうでも良い。勿論普通に俺が使ってみて、その使用感を確かめてみるのさ」

「その心は?」

「いきなり切奈に使って万が一があつたら大変だろっ!」

「……ホンマに正直やな……」

「じゃあとりあえず使ってみるけど、本当に二時間起きないかどうか色々試しているよ」
「……えっ?」

「あつ、叩いたりするのはいいけど軽くね! 怪我が残るみたいな強さで殴ったりしたら嫌だからね!」

「しないよ!」

「ほんとにく? ……まあ叩かないならそれでいいけど。じゃあ『短時間超効率休眠改善薬』を試してみるとしますか……あつ、錠剤じゃなくてコレ、座薬タイプなんだ……ええ……?」

「……私本当に居なきやダメ?」

「ちよつとだけ待って! トイレでサツと入れてくるから待って!!」

そうして、ちよつとの間。

「お、おまたせ……」

「……ホンマに入れて来たん？」

「ん、おう……粘膜吸収だからか、効くのがクソ早いんだね……え」

「あー……無理せず寝たら？」

「そう、する……うおお……視界が揺れる……なんで座薬タイプなん!？」

「ほら、さつさと寝え」

「ん、い……おやすみ……」

「ん、おやすみ、八雲君……」

そして、八雲はあつという間に眠りの世界へ落ちていき、部屋には一人の男の寝息が静かに響き渡った。

「……八雲君？」

「すう……ぷすう……」

「寝息可愛いっ……八雲君、起きないと……ちゅー……するよ……?」

「ふすう……すう……」

「……ふー……」

その後、麗日は思いつく限りの行動を起こして眠っている八雲を起こそうとするも、

薬の説明通りに全く起きる気配が無かった。

「……これ、ホンマに大丈夫な奴なん？」

「すう……くう……」

八雲が眠りについて、早くも20分近く経過した。色々と弄ってみたが、本当に起きる気配が無さそうだ。

麗日は、そのタイミングで魔が差したのか……八雲が眠る布団を捲り上げた。

「……………」

そこには、思わず無言になってしまう程に大きなテントが張ってあった。

「……そういえばほぼ毎日やってたし、四日もそういう事しなければ溜まるモン……なんやろうな……」

麗日は、女性が自分一人しか居ない事をいい事に風呂場で声を抑えながら鎮めていたが、八雲は同性が非常に多く、『裸の付き合い』とばかりにガンヘッドを始めサイドキック達と風呂に入っていたからそういう事をするタイミングは無かつただろう。そして部屋にはそういう匂いは感じられなかつた。

まあ、八雲からしてみれば『外のそういう場所に彼女と来てるならともかく、普通のホテルでソロプレイを行う』事に忌避感を覚え、更に職場体験期間という事も加味して我慢しているだけなのだ。

「……………」

思わず、喉が鳴る。そう、今まで散々、お隣の切奈ちゃんをヒイヒイ言わせていたモノ。それだけじゃなく、切奈ちゃん以外の女の子も泣かせてきたであろうモノが、今日の前にある。彼女以外の女の子にも手を出してしまうのなら、自分だって手をつけて良い筈だ。

テントを張っている布を、ずり降ろす。そこには、指なんかよりも遥かに大きく、太く、ゴツゴツして硬いモノがあつた。

「ふ、ああ……………」

言葉通り、夢にまで見た大きなイチモツ。指で散々搔き回した膣内を、一撃で抉りぬいていく事間違いなしな生デイルド。

顔を近づけ、しっかりと観察する。硬いのに、骨があるような芯は感じられない。でも硬い。両手で挟むように優しく触る。火傷するんじゃないかと思う程に熱い。そしてその匂いも……………」

「……………あ、好きいい♥」

一瞬で脳汁が溢れてくるような多幸感。アブナイ薬をキめた人はこの楽しさがクセになつてしまうのだろうと思つてしまう程に幸せにされた麗日は、そのイチモツに顔をくつつける程にメロメロになつてしまった。

「あはっ……顔熱うっ♥こんなん反則っ……♥卑怯やん……♥」

眠りについていて八雲の腰に抱き付きながら、文句を言っただけで顔を擦る麗日。深く眠っている八雲でも溜まってからか、それだけの刺激でも我慢汁がとろとろ出てきた。

カウパー液を指先で掬い、にちよにちよと弄くり回す。いやらしい知識は、こつそり拾ったエロ本による偏った知識しか持っていないが、それでも最近では擦りきれる程読み更け、お隣から聞こえてくる声と音を頼りに知識を補充してきた。

ちゅっ……とキスするように鈴口に吸い付く麗日。自らが持つ知識を実践していく度、自身の秘部から熱い粘液が分泌される。

「ん……八雲君……きもちええん？」

ちゅっ♥ちゅっ♥と啄むようなキスを繰り返す、同時にカウパー液を吸い上げていく。だんだん濃い匂いが漂ってきた……ということとは

「出しそうなん？いいよ……私に射精するとこ見せて……♥」

再び顔にイチモツを擦りつけながら、手で竿をしごく。その脈動を顔で感じながら、間近で観察し続けた。

ビュルルツ!!ビュブルルルツ!!

「あっ♥あっ♥射精ツツツ♥射精したあツツツ♥」

四日モノのオナ禁精液が麗日の顔と髪をベトベトに汚す。部屋に広がる特有の生臭い匂いが、麗日の残された理性を完全に溶かしてしまった。

びゆるびゆると震えながら精液を放つチンポにしゃぶりつき、吸いつき、貪り喰らう。

ズボボツ♥ブボツ♥ブブヂュボボツ♥

正気の欠片も感じられないような表情で精液を吸い出す麗日。荒い呼吸と共にイチモツを啜えこみ、頭にベツトリと着いた精液を一切気にせず何度も何度も頭を動かし、更なる射精を強くねだる。

幸か不幸か、八雲魔眼は未だに深い眠りの中。もし八雲が目覚め、寝ぼけ頭のまま自身の股ぐらに顔を埋める麗日の顔を見てしまったら、絶叫しながら発狂し、再び意識を失うだろう。それほどまでに今の麗日の表情は淫欲に満ち溢れたフェラ顔を晒していた。

「(精液っ♥射精っ♥だせっ♥ひりだせっ♥精液漬けにしろっ♥♥♥)」

ブボボツ♥ヂュルブブプっ♥グブブポツ♥

すやすや安らかな表情で眠っている八雲とは対称的に、正気を失った魔物と化した麗日は更なる快楽を望んだ。

その吸引力によって、ただでさえ大きなイチモツが更に真っ赤になるほど腫れ上がる事すら気にしない麗日は、再びびくびくと震え出したイチモツに気が付いて口を離し

た。

「だせつ♥だせつ♥だせつ♥だせつ♥だせつ♥精液っ♥精液っ♥」
ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♥

バキバキのパンパンに勃起したチンポの先っぽに両手のひらを当て、唾液と精液と新たに分泌されたカウパー液を激しく泡立てるように擦り上げる。

ビュブルルルッ!!!ビュブツ!ビュルルルッ!!!

射精して手のひらを押し上げようが、麗日は止めずに更に刺激を続ける。

ビュルルルル!!!ビュクッ!ビュクビュクビュルッ!!!

噴き出す精液のシャワーを浴びながら、麗日は自身で慰めるよりも遥かに『深い快樂』を感じている事に気がついた。

しかしそれでも亀頭を擦り上げる事は止めない。

ブビュビュッ!!!ブシッ!!ブシビュルル!!!

ついにはドロツとした精液でなく、透明なさらさらした体液がイチモツから噴き出すようになり、ようやく麗日は八雲のイチモツを解放し……その口に再び納めた。

ずじゅるるるるるるッ♥

噴き出した精液でベトベトになった竿を綺麗にするように。僅かに萎んだイチモツに活を入れるように。

性豪である八雲以外に行えば、たちまちタマの中にある精液全て吸いとられてしまい
 そうなバキュームフェラ。もちろん、麗日は自身の知っている性知識に則った行動をし
 ているのだが、いかんせん『拾ったエロ本』以外の性知識を教えてくるような悪友を麗
 日は持っていないかった。

内出血で真っ赤に腫れ上がったイチモツが再びその高度を保つ頃になつてようやく
 激しい吸い付きを止めた。

「はあーっ♥はあーっ♥あ、あかん……こんな、こんな永遠にやれてまうやんっ♥本番
 もまだやのにつ♥」

自身の頭のみならず、前面全てが噴き出た精液で汚れている事に頓着せずに、眠つて
 いる八雲に股がり、自身の股間をさらけ出す。

もはや漏らしたと言つても過言ではない程に生暖かい粘液でびちゃびちゃに濡れた
 衣服を脱ぎ捨て、その剛直と擦り合わせる。それだけで腰が砕けそうな程気持ちよいの
 なら、生でセックスをしたのならどれだけ気持ちよいか!!

「はあーっ♥あはあーっつっ♥ゴメンな八雲君っ♥勝手にチンポ借りて処女喪失っ♥♥
 ♥大事にしてた処女を眠つてるクラスメイトチンポに勝手に押し付けっ♥♥♥」

性行為によつて子を孕む、という事は当然知識では知っている麗日。しかしそんな些
 細な事よりも、自分が気持ち良くなる事にしか考えが向かない。

あつという間もなく。一切の躊躇もなく。自分の指なんかよりも遥かに巨大なチンポを膣内へ受け入れた。

「ほオツツツ　♥♥♥♥♥♥♥♥」

ここ最近の激しい自慰行為によつて処女膜なんてすりきれて失くなつてると思つていた麗日は、ブチツと脳内で弾けるような音が聞こえた瞬間に僅かに残つていた理性を手放した。

「おツツツ　♥♥♥んオオオつ　♥♥♥ひいあああつ　♥♥♥」

ここがホテルだという事すら頭になく、ただひたすらに腰を八雲に打ち付ける。自分の指では絶対に届かない所が、ただひたすらに気持ちいい。

あー、こんなことならもつと早くデイルド買えば良かった。

そんな事を本能で考えながら、パンパンごりゅごりゅと激しい自慰行為に浸り続けた。

「あひつ　♥♥♥はヒイあつ　♥♥♥んあああつ　♥♥♥」

一心不乱に腰を打ち付ける。自身の体重によつてイチモツが折れる……なんて一切考慮していかないかのように激しく腰を落とす。荒々しく腰を落とす。ガムシヤラに腰を落とす。その際に勢い余つてイチモツが膣から抜けようが、再度激しく入れ直して腰を振り続けた。

「チンポ♥♥♥チンポ気持ちええつ♥♥♥チンポチンポチンポ♥♥♥ずっとおまんこしてたいっ♥♥♥チンポお♥♥♥チンポハメる為に産まれたんやつ♥♥♥チンポチンポチンポお♥♥♥」

膣内の入口側だろうが奥だろうが容赦なく痛め付けるように勃起チンポを突き刺す麗日だが、実際には痛みなど一切感じておらずただただ気が狂う快樂全てを貪っていた。

もつと。もつとだ。更にもつと。もつと凄く快樂があるはずだ。

お隣さんの喘ぎ声の子守唄に眠っていた麗日は、『気が狂う』程度で済まないPlus Ultraがあることを知っていた。

「あ」

くうくうと可愛い寝息をたてる八雲の顔を見て……悪魔の囁き声そのままに口に出してしまった。

「魔眼君」

その瞬間。脳裏だけでなく全身が雷に撃たれたかのような衝撃と共に絶頂の更に向こうへ突き飛ばされた。

言葉通りに天国が見えた麗日は、Plus Ultraの正体を知った。

「あ……は♥八雲君……や、なくて……魔眼君つ♥♥♥」

八雲魔眼の名を呼んだ。ただそれだけなのに、脳内に幸せ物質が駆け巡り全身から火花が散ったかのような快楽を受ける。

眠っている八雲に覆いかぶさり、僅かに空いている口へ舌を捻じ込む麗日。

「んーっ♥んふーっ♥ごめんなっ♥ごめんなあっ♥口じゃなくてチンポにファーストキスしちやうピッチでごめんなあ魔眼君ツツ♥でも今だけっ♥♥今だけやからッ♥♥今だけ私の彼氏チンポになつてえな♥♥♥」

むにやむにやと寝言を言う八雲の姿に、更に燃え上がる麗日。激しく腰を振りながら、その口を貪り続け、息継ぎついでに名を呼んで愛を囁く。

「魔眼君っ♥♥好きっ♥♥好きッ♥♥だーいすきっ♥♥チンポおつきいところとかっ♥♥しゃせーかっこいいところとかっ♥♥精液びゅうううつてするところとかあつ♥♥♥」

自身のヨダレや髪から垂れてきた精液によって八雲の顔もべちよべちよに変えていく。そんな姿すらも『マーキング』しているように見えて、限界を超え続けている興奮度が更に上昇した。

「あっ♥♥♥」

限界の限界。激しく犯され続けた八雲のイチモツがぶくうーつと膨らんだことで『射精の瞬間』を感じた麗日は、自身の腹ごと両手で強くイチモツを締め付ける。

ブビュルルルツ!! ブビュビュルルルツ!!

限界までイジメられた上に、射精の瞬間出口を絞るかのような締め付けによって鉄砲水のような勢いで精液が子宮へ叩き付けられる。その瞬間、麗日お茶子は今まで感じた絶頂の遥か上を征く快楽の極地へ飛ばされた。

「~~~~~お♡♡♡♡♡」

先程は天国が見えたが、今度は『神』を見たような気分だ。天上の更に向こうへ誘われた麗日お茶子は、そのままぐったりと八雲の身体の上に倒れ込んだ。

「ほ……オ……んひ……♡♡♡♡♡」

たつぷりと極地を堪能した麗日は、自身を優しく抱きしめる腕に気が付いた。

「あ……♡」

深い眠りにつきながらも、『自身と愛し合った女の子』が何処かにトんでいかないうように行う、無意識的行動。とくんとくんと鳴る鼓動のリズムが麗日の耳に届き安らぎを与える。

その瞬間、麗日は自身の狂気すら八雲にオトされた事を自覚した。

「(ああっ……♡こんな……ダメになるっ♡八雲君……いや、魔眼君ナシじゃ生きられなくなるうっ♡)」

無意識の中で激しく犯されていたというのに、行為が終わった直後に見せる優しさが

快樂のひいた脳内に染み込んでいく。

もはやそういうプレイとしてではなく、本気で八雲魔眼の事を好きになってしまった。

「……まだ、まだ起きるまで時間があるし……♡今度はもつとゆっくり、たっぷり、ねえつとり愛し合おうな♡♡♡」

八雲の優しい鼓動を聞いて、再び獣欲が燃え上がり出した麗日は舐るようなキスを交わす。

結合部から漏れ出る精液すら愛しく思える麗日は、腰を前後にグラインドさせながら何度も何度もキスを交わした。

「んっ♡♡♡んふう♡♡♡んふーっ♡♡♡キスキもちええなっ♡♡♡魔眼君ももつともつときもちよくなろっ♡♡♡」

腕を首に回しながら、べろちゅーセックスを続ける麗日は、先ほどのような一気にトぶような快樂ではなく、ジリジリと火に炙られているような快樂を受ける。しかしそれもまた気持ち良い。

「んふーっ♡♡♡射精したい？したいっ？♡♡♡ええよっ♡♡♡魔眼君専用浮気まんこに精液捨てててっ♡♡♡」

ちゅうっ♡♡♡ちゅうううっ♡♡♡と精液をねだるように腰を動かす。

今度はうってかわって、漏れ出るような射精が麗日の腔内で行われた。

「えへっ♡♡♡えへくっ♡♡♡可愛い射精っ♡♡♡おチンポ漏れ出ちやつたなあっ♡♡♡好きっ♡♡♡これも好きっ♡♡♡全部好きになるっ♡♡♡魔眼君の全部大好きになるっ♡♡♡」

漏れ出るような射精もきっちり受け止める麗日は、繋がったまま両脚で強く八雲に抱き付く。

「今度は奥っ♡♡♡一番奥に押し付けるように射精しようなっ♡♡♡私も魔眼君チンポ奥で受け止めるからなっ♡♡♡」

そうして、ずっとくっ付いたまま時間は過ぎて行く……

八雲が眠りについて、1時間55分経過した。

「あかんっ♡♡♡あかんでえっ♡♡♡起きちやうっ♡♡♡魔眼君起きちやうっ♡♡♡てえツツツ♡♡♡」

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

全身に精液を浴びながら、尚眠っている八雲の上で腰を振り続けてしまっている麗日。

「魔眼君……もう少し寝ててなっ♥」

麗日はベッドの横に転がっていた『短時間超効率睡眠改善薬』を手に取り、ソレを八雲の尻穴の中へ挿入した。



結局、麗日は次の日の朝になるまで複数回薬を投与し、八雲は体調不良に陥った。

「えーつと……大丈夫かい？」

「なんでえ……なんでえ……」

「薬の副作用？でも一応薬効試験はしてある筈なんだけど……あー……身体を起こす事は出来そうかな？」

「指一本うごかせましえん……」

「そうかあ……病院、行こうか」

「申し訳ない……申し訳ない……」

病院に行っても原因不明、しかし午後になる頃には完全に復活した八雲であった。

「うーん……何か原因は分かるかいウラビティちゃん？」

「さ、さあ分からんですねー……八雲君が特異体質だったとか？」

「そっかー」



「……なるほどねー」

「その時から、ずっと『魔眼君』って言うようになってしまった……かな」

麗日の話を聞いていた葉隠以外の三人は、あまりの衝撃に腰が抜けてしまっていた。

「……ねえ、麗日。最終確認なんだけど……『魔眼の事が本気で好き』なの?」

「っ……それは……分からへん。好き……と言えば好き、なんやけど……それが性欲か

ら来る『好き』なのか、魔眼君の人柄に惹かれての『好き』なのかは分かんない……」

「……ふうん……うん、よし!私、麗日の事許せそう!」

「……えっ? な、なんで? 自分で言うのもなんやけど、私かなりヤバい事してる自覚ある

で!」

「勘違いしないでね! 『許せる』じゃなくて『許せそう』だから! それに——そもそも

魔眼がエロすぎるのが悪いツ!!」

そんなミもフタも無い!と叫びそうになる麗日だったが、魔眼がエロすぎるといのは全面的に同意だ。

「……うん。だから、麗日は魔眼に正直に言う事。そりゃ、魔眼はエロいけど……それでも私達みんなに『誠実』であろうとしてるんだよ。だから抜け駆けしても、みんなに平等で居ようとする魔眼の意志に反するのはダメだよ」

「……みんなって、やっぱり魔眼君は——」

「うん。切奈ちゃんだけじゃなくて、私と、ヤオモモと、それと最近だとB組の子とも『お付き合い』してる。でもそれは『浮気』とか『不倫』みたいな関係じゃなくて……なんて言うのかなあ。魔眼は『ポリアモリー』って言うけど、まあ実質ハーレムみたいなモノだよ。だって私達、みんな魔眼以外の男子と付き合い合えないから」

「お、思った以上に多かった……」

「……幻滅した?魔眼とそういう事してる女の子の多さに。それを『許容』してる私達に」

「……幻滅……は、しない……かな。ただ、その——……一人くらい『身体目的』でもいいよね?」

「——……うん、やっぱ私、麗日の事許せそう。大丈夫だよ、麗日って可愛いし、魔眼もきつとすぐ許してくれるよ!」

「そ、そう?……良かった」

「——まあオシオキは覚悟してもらいたい所だがなお茶子ちゃん?」

「ほひゆつ!?まつ、魔眼……君……お、起きてたん!」

「『なるべく掻い摘んで話すけど、分からんトコあつたら最後に聞いてな』の所から起きてたぞ」

「ほほ最初からやん」

「……まあ、なんだ?俺も不用心だった所もあるから、強くは言わん。ただこれだけは覚えていてほしい」

「な、ナンデシヨウカ……」

「えつちな事が好きな女の子は、大好きだぞ」

「つ——」

「……とりあえず、今日はもういい時間だ。お茶子ちゃん、服、悪かつたな」

「……えあ!?あ、ええよ別に!?古いモンいつまでも着てた私だって悪いんやから!」

「服なんて使い古してナンボのもんだろ。……まあ、アレだ。今度一緒に買い物行こうぜ。『デート』だ」

「あつ……ひゆう……う、うん……行く」

「えゝズルーい！」

「分かってるよ。透もまた別の日にでも行こうな」

「約束だからねっ！」

「はいはい。……さあ、今日は帰るか。お茶子ちゃん、ジャージは貸すから、今度返してくれ」

「え、あ、うん。分かった」

「おっと、洗う前にスンスン匂いを嗅ぐのは止めろよ？俺だって恥ずかしいと思う心は持ってるんだぜ？」

「せえへんわ!!」

「えっ、しないの麗日？魔眼の私物だよ？」

「だからしなあ………やっぱ、する……かも」

「………ほどほどにな」

「うう………こんな恥ずかしい思いすんの初めてや……」

そうして会話しながら訓練室から出て行く麗日、葉隠、八雲。

残されたのは、腰が抜けてずっと気配が消えていた芦戸、蛙吹、耳郎の三人だった。

「……」

「……」

「……マジ？」

「マジ……なのかしら……ね……ケロっ」

「……う」

「……三奈ちゃん？」

「アタシも……」

「？」

「アタシも……八雲にお願いしたら……抱いて、くれるのかな……？」

「!？」

波乱の時は、わりと近いかもしれない。

期末テスト・直前に・ミッドナイト先生えっち

時は遡って、職場体験期間前日。八雲家。

「あ、姉ちゃん。俺明日から一週間家に帰らないからヨロシク」

「……はっ? えっ? 何、急に? 何でよ?」

「職場体験。ガンヘツドん所に一週間世話になるから」

「職場体……はあ!? なにソレ聞いてないんだけど!!?」

「だから今言ってるんだぞ」

「食事当番と買い物当番は!?!」

「昨日代わったじゃん。アレなんだと思っただん……?」

「あ、昨日のつてそういう事……じゃなくて! そういう事はもつと早く言いなさい!」

「早く言ったところで何が変わるわけでもなし。むしろ嬉々として一週間分の家事当番

押し付けられそうだったし」

「するか!」

「ん、まあそういう事だから明日から一週間居ないし、ヨロシク……。……俺が居ないからって大声でオナったりすんなよ? 近所迷惑になる」

「なっ、なあっ……!!?しないわよッ!!」

さて、どうか。俺が高校生になってからもより一層増える速度が上昇したカウントを見る。……ふっ。

「なあ姉ちゃん、今度俺に新しい彼氏を紹介してくれよ。何て言ったっけ……そう、『みちのく君』だっけ?」

「フアアア!!?何でんな事知ってんのよアンタはああああ!!!?」

奇声を発しながら俺に殴り掛かってくる姉ちゃん。だが雄英で鍛えられた俺の相手じゃな……ちよっ!!?個性使ってくるの反則ウ!!!

そうしてボコボコに殴られまくった。

翌日、姉ちゃんのカウントは10回程増加していた。そういうとこだぞ……。

そして一週間後、家に帰って姉ちゃんの頭上を見る……!???

「姉ちゃんどうした!!?体調悪いのか!!?」

「なっ、何よ急に……帰って早々騒がしいわね……」

「だって姉ちゃん、回数が……!!」

回数が増えてないってどう言うことだよ!あの姉ちゃんだぞ!!?性欲旺盛、一日一逝、自家発電の達人が!!?一週間!一週間だぞ!!?何してたんだよ!!!?

「な、何って別に普通に過ごしてたわよ……何よアンタ、まさか一週間お姉ちゃんに会えなくて寂しかったの？ずいぶん可愛いところある——」

「それは絶対無いから安心しろ姉ちゃん」

「せめて最後まで言わせなさいよッ!!」

そして翌朝、姉ちゃんの頭上を確認したらしつかり10回以上カウントが回ってた。な、なんだってんだ一体……。



時を現在に戻して、期末試験前日。放課後、一年A組教室内。

「あ、明日からついに試験か……勉強頑張ったけど、大丈夫かなあ……」

「皆で林間合宿行くんだ！気合い入れろよ！」

「ねえ魔眼！今日魔眼ん家行っていい？」

「良いぞ？」

「やったあ！」

「おい八雲」

「んあ？なんだよ峰田、んな怖い目つきして」

「な、なんでお前葉隠とめっちゃ仲良さげなんだよお……！試験前日に家デートって何様だテメエ!!おま、お前にはB組のヤツが居るだろ!？」

「B組のヤツて……切奈の事か。勿論切奈は俺の大事な彼女だぞ？」

「じゃあなんで葉隠と付き合ってるみたいなき感じ出してんだよテメエは!!!」

「え？だって私も魔眼の『彼女』だよ？」

「カヒユツ」

「みつ、峰田ア!!!」

急に血反吐を吐いて倒れる峰田。ソレに駆け寄る上鳴。

「か、かみ……なり……」

「峰田しつかりしろっ！傷は……相当深いが、まだ助かる!!」

「オイラ……おいらあ……アイツが憎いつ……!」

「ああ、ああ!その気持ち良く分かるっ!!」

「だから、たのむ……オイラのカタキを……モテない男の恨みを……あのハーレムクソ

野郎に……ガフツ」

「みねたああああああ!!!」

血を吐き出しながら床に崩れる峰田。峰田を抱えながら涙を流し絶叫する上鳴。そして周りのの何とも言えない茶番を見るかのような冷めた目。問おう、コレがカオスか。……で、帰って良い?」

「テメエは人の心を持つてねえのか!」

峰田が口角泡を飛ばす勢いで再び俺に掴み寄り、ガクガクと制服を揺さぶる。

「お前ツ!!おまえなあ!!!オイラがどんな想いで彼女を欲してると思ってたんだ!!!毎日毎日、モテる為にファッション雑誌読んだりデートのイメージトレーニングしたりしてんだぞ!!!だつてのにお前はツ!!あつさりとツ!!二人もツツツ!!!」

「つつーか、マジで八雲と葉隠付き合つてるのか?えっ?ドツキリとかじゃなく?」

「ドツキリで交際関係偽るのは人としてどうかと思う」

「『彼女』二人作つてる奴にどうこう言う筋合いねえよツ!!!」

「別に良いだろ、隠れて付き合つてるとかコツソリ浮気してるとかじゃねえんだ。俺が『彼女』複数作つてる事はお互い承知してる」

「……諦めなよ峰田、少なくとも八雲は『人として』峰田よりもシツカリしてるのは間違いないんだから」

「尾白白おお!!!お前は悔しくねえのかよおお!!!」

……ふむ、数値を見る限り……尾白は性交経験こそ無いものの交際経験自体は有る

な。余裕の差はそこからか。おや？砂藤も交際経験あるんだな。意外……でも無いか。筋肉、やはり筋肉こそ全て……ハッ!?俺は何を考えて……

「あー……まあこの際彼女云々は置いて、八雲も葉隠も試験前だつてのにそんなかがわしい事しないだろ流石に」

「おつ、瀬呂がいい事言つた。進退決める試験の前だからな、最後の追い込みを掛けるんだよ」

「そーそー」

「でしたらワタクシも一緒に向かつて構いませんわね!」

「えっ」

「や、ヤオモモ?おま、さっきまでの話の流れ聞いてた!」

「ええ勿論。私も『魔眼さんを愛する者』として、ご一緒しても問題無いですわね?」

「んー、まあ大丈夫だろ」

「でしたら——」

「待て待て待てッ!!」

「なんだよ峰田さつきから。今日は早めに帰ってシッ——しっかり勉強すんだから」

「テメエ今の台詞オイラの目を見てもう一度言ってみろッ!!今『シッポリ』って言い掛けなかつたか!?葉隠とヤオヨロツパイを侍らせてナニを『シッポリ』する気だテメエ!」

「…………ふっ、男の嫉妬は見苦しいぜ」

「テメエの顔面殴り飛ばすぞッ!!」

さながらマフィアのボスになった気分です。多分もう手遅れかもしれない。……まあ、そもそも大っぴらにするモンじゃない話だし、俺が複数人と付き合っているのは事実だ。あまり吹聴すると、付き合っている女の子達に迷惑が掛かるだけだから黙ってただけだしな。

『付き合っている』のは切奈と透と百の三人。『実質セフレ』なのは希乃子とお茶子ちゃんとの二人。……こうして挙げて見ればただのヤベー奴じゃん俺。高校生なのに5人と肉体関係を結んでるって……。

今日帰って行く事も、勿論セックスだ。オーラ操作の技術は、単に肉体的な運動能力の強化だけではない。脳に集中させれば記憶力や判断力の向上も見込める。試験前にそういう事をするのは、中学の時から切奈と行ってたイベントだ。だから抜き打ちテストとかだと切奈の口だけ飛んできてコッソリフェラされるのも……つと、今は関係ない話だった。

「まあそういう事で俺達は帰ると——」

『一年A組、八雲魔眼。一年A組、八雲魔眼。至急職員室に来なさい』

——「帰れそうにないですわー」

ミッドナイト先生の声がスピーカーを通して教室に響く。俺、何かやつちやいました？ (震え声)

「……何やったんだよお前」

「心当たりがありません」

『彼女』複数作っておいて心当たりがありませんだあ!!？」

「峰田、ステイ。今はお前に構ってる暇は無いんだ。ええ？マジでなんかやった覚えはないんだけど」

まあやった覚えはあるんですけどね!!

……いや、自由が校風の雄英が、『彼女』複数人とエツチしたってだけで呼び出すかなあ……呼び出す、かな……。下手しなくてもスキャンダルだもん。どう考えてもエツチしたってだけで済む話じゃないもん。もんもんもん。

そういう訳で俺は泣く泣く透と百を置いて職員室に向かった。くっ……早く帰りたかったが、要件次第では長引いて姉ちゃんが帰ってきてしまう。流石に姉ちゃんが居る中で、彼女複数人とエツチすんのは気が引ける。……だって姉ちゃん未だに交際経験ゼロなのに弟は多くと付き合ってる事実を突きつけられて正気でいられる程強くないだもん……。

「八雲君、テスト終わるまで帰宅禁止ね」

「……What?」

職員室に来て早々にミッドナイト先生に捕まり、俺に手錠を掛けながら言い放った言葉がコレである。そりやまあ……え?なんで?ねえなんで?なんで手錠なん?

「趣味よ」

「生徒に手錠を掛け、自身の趣味を強要した容疑で現行犯逮捕されたプロヒーローであるミッドナイト、本名香山 睡容疑者は『合意の上だった』と容疑を否認しており」

「ムチでぶつ叩くわよ?」

「バイオレンス」

いくらプラスチック製のオモチャとは言え、可愛い生徒を手錠で拘束するのは間違っていると思います。ええ、可愛い生徒を!

「可愛い生徒ならこんな状況でも頬を赤らめたりするものよ」

「そりや可愛くない女教師に攻めよられてもイデデデッ!!!腕がもげるッ!」

「ごめんなさい手が滑ったわオホホ」

「そういうところ!!」

いくら後ろから突然拘束され当たつてゐるんじゃないかと当てるのよ状態になつてるとはいえ、その程度で赤面するような教育は受けていない。股間はおつきくなるけど。

あとミッドナイト先生は可愛い系ではなく美人系なので先の言葉も嘘じゃないのよ。

「嘘でも『可愛いよミッドナイト先生』くらい言うものよ……まあ、許してあげるけど」
「わちき許された」

「でも手錠は外さないわ」

「許されなかった」

いやホント……何で？なんで俺は職員室に呼び出されていきなり手錠掛けられてるん？ほら、他の先生方も見えますよ？相澤先生もブラドキング先生も見えますよ？助けてくれオールマイイト先生。おうこらどこ見とんじやコッチ向け。

「本題に入るわよ。アナタの個性……個性？に関してなんだけど」

「個性……『魔眼』に関する事ですか？」

「いいえ、そつちじゃないわ。貴方が見えている……オーラ？の事よ」

やつぱ『魔眼』に関する事じゃないかと思つたが、この『オーラ操作技術』と『魔眼』の個性は分けて考えた方が色々都合がいいらしい。でも相澤先生の『抹消』では消えない。そりゃ『個性』じゃないからね……。

「オーラを使って身体の各機能の強化をする事が出来る……間違いないわね？」

「ん、ええ……まあおおむねその認識で間違いないかと」

オーラを使うというよりは集める方がイメージとしては近い。「使う」だと消費する感覚だが、『集める』は消費しないのだ。まあ体力は消耗するし、体力が消耗すれば体外に出るオーラも減少するのだが……その違いを理解するには『俺と同じ視界』を持たない限りは無理だろうなあ。

「そして身体能力だけでなく、脳機能も強化できる……違う？」

「はい……それが如何したんです？」

今更『それは不正です』とか言われたら困るんだが。だって雄英入試試験の時にがつり使ってるんだもん。

「そして『オーラを用いた身体の強化は限定的に他人へ付与できる』……合ってるかしら？」

「チョットナニイッテルカワカリマセンサー」

ワターシムツカシーコトワカラナイ。アーム在日日本人デース。

「……『取蔭切奈』『葉隠透』『八百万百』『小森希乃子』『麗日お茶子』の五人に共通する事って分かるかしら？」

「全員女の子」

「……授業で発揮している能力に大きなムラが確認できる生徒達よ。心当たりあるん

じゃない?」

「はっはっは……そりゃあみんな女の子だからね。そういう日もあるさ!」

「同じ女性である私がそういう日の事に気が付かないと思う?」

「体調不良とかそう言う意味なんですけど? え? なんですそういう日って?」

「締めるわよ」

「ミッドナイトさん、話が進みません」

相澤先生が『関わりたくねえ』オーラを出しながら俺達を睨む。

「八雲、お前なんか隠し事してるだろ。オレ達教師に言ってる『隠し事』を。さっさと
言え」

「……………」

答えは沈黙。……なんてふざけてる場合じゃない。相澤先生の纏うオーラに『本気』
が滲みだしてきた。

「言わないってんならお前を『除籍』する。ハッキリ言おう。お前のその力は危険だ。体
育祭決勝戦の事、忘れたとは言わせない」

あの時は感情が荒ぶって、暴風を生み出した。そしてその代償に心肺停止。危険と思
うのも無理はない。むしろ真つ当だろう。

「そしてその力を、先に述べた五人が限定的だが使ってる。お前が制御しきれてない力

を、だ。怪我を負った訳でも無いお前が心臓停止した理由も、そこから蘇生出来た理由もオレ達には分からなかった……婆さんでも、校長でもだ。そんないつ爆発するか分からない爆弾を育ててるお前を、オレ達がどれだけ危険視してるか分からないか？」

「……」

危険、か……なるほど。このオーラ……『生命力』を使えば、当然自身の命を削る事に繋がる。多くの人が『MP』を消費して個性を使ってるのに対し、この力は『HP』を消費している。そして『感情の爆発と共に自爆した俺』という前例があり、五人にも同じような危険性が隠れている。生徒の安全を守る為に、『元凶』である俺を危険視している訳だ。

現実で俺を含め五人の『HP』の数値が教師たちに確認できるのならともかく、俺にしか確認出来ないとなると……『ソレ』を使った教育をする訳にもいかない、そもそも出来ない……と。

「これが最後通告だぞ、八雲。その力に関する、お前の知る限りの情報。それを話せ。でなければ……」

「……」

俺の知る限りの情報、か。

「……先生達を知っている以上の情報なんて無いですよ。強いて言えば——」

俺は相澤先生に向けて、拳大のオーラをノーモーションで放つ。オーラはそのまま相澤先生の腹を突き抜けて行き、相澤先生にゾワゾワした不快感を残していった。

「……こんな風に目の前にいる相手の気を一瞬そらす事も出来るくらいですかね」

「……他人がその力を使えるようになる『条件』を言え」

「言えません」

「何故言えない？」

「『彼女達』の為です」

俺がクソヤロウと誹謗を受けるのは良い。無責任ヤリチン野郎と言われても良い。だが、『彼女達』が俺のせいで謗りを受けるのはダメだ。

女子高校生が『セックス』をしてる、という事はどんな理由があっても大つぴらにするべきではない。例え俺が除籍されようとも。

「つまりお前は『除籍』を受け入れるつもりか？」

「雄英でなくても、士傑でもどこでも、プロヒーローに本気で成ろうと思えば一緒です。少し、回り道をするだけですから」

「……なるほどな。そういう事なら……期末テストで結果を見せろ」

「……えっ？」

「お前は今、自身含めた『六人』の命と未来を握っている。その力を『制御出来ない』と

言うのなら、死ぬ前にとつとヒーローを諦めた方が良い。……だが、期末テストまでに制御してみせたのなら……その力の有用性を認め、お前の『除籍』は取り消そう」

「……相澤先生」

『良い受難を』つてか？ちくしよーめ、燃えるじゃあねえか。雄英を除籍され、『みんな』と別れを告げるか……このまま学校生活を続けられるか、二つに一つ。やるしかないんだろ、じゃあやるしかないんだよ。何より、一度出来たことがもう一度出来ない訳がない。

勝ち取ってみせるさ、必ずな。

「……オレからは以上だ。足掻けよ、八雲」

「もちろん、期待以上な八雲君を見せてあげましょう」

期末テストは明日から。相澤先生が言ってるのは実技試験の事で間違いない。なら、僅かだが時間がある。僅かな時間、存分に使つてやろうじゃないか。

……つて思ってるんですけどねえ。

「なあんでまだ手錠つけられたままなんですかねえ」

「相澤君も言つてたでしょ？『期末テストまでに制御してみせたらその力を認める』つて。つまりそれまでその個性は認めてないつて事よ。脳機能の強化が出来るんですよ？他の子達とも公平を期す為に、どうやって力を分けてるのか理解らないけど貴方を監

視したままにするのはおかしいことかしら?」

「おかしくはナイです……」

でも、だからと言ってセックスしてるなんて話す事は出来ないし、仮に話したとしてもこの拘束・監視が外れることはないだろうなあ。

「……それで俺はテスト終わるまで、このまま学校暮らしですか」

「学校は寝泊まりする場所じゃないわよ」

「ええ?でも『テスト終わるまで帰宅禁止』って言ったじゃないですかミッドナイト先生」

「ええ。だから……ウチに来なさい♪」

「……What?」

??

「……what?」

「生徒を家に入れるのはいつ以来かしらね」

なんか、いつの間にかミッドナイト先生ん家に連れてこられた。催眠術だとか超スピードだとかそんなちやちなもんじゃねえ……衝撃のあまり放心していた俺を普通に

車に乗せて連れてきたミッドナイト先生の恐ろしさの片鱗を味わったぜ……。

ミッドナイト先生は普通の一軒家……というには少し豪華過ぎる家に住んでいた。ガレージ付きで車に乗ったまま家の中で降りる。

……あつ、先生ん家いい匂いしゆる……。

「さあ、テスト勉強なら私が見てあげるわよ?」

「……あの、その前に一度家族に連絡して良いですか?」

「もちろん良いわよ。その間に着替えてくるわね」

手錠を外され、スマホをスワスワ。クラスのグループラインには職員室に呼び出された俺が何をしたか(かなりテキトーな)憶測が飛び交っていた。

えーつと……『ミッドナイト先生ん家に拉致されたナウ』……と。

送信した直後、峰田から電話が掛かってきた。

「もしも——」

『ンデメエエエエ!!!女子にとどまらずエロ教師まで籠絡してんじゃねエエエエ!!!』

すぐに切った。

「連絡は済んだかしら?」

「えっ、ああはい今おわっスゲエ私服着とる!!!」

ミッドナイト先生は自身のコスチュームみたいなドエロピッチリ白シャツとデニム

パンツを着て現れた。歩くスケベやん……。

「ふふ、どうかしら?」

「スゴく似合ってます!」

いやーミッドナイト先生ボンキュッボンのナイススタイルだからこそ似合う服だが、これがもし腹回りが弛んだ人だと途端に『見苦しい』という感想を抱くだろう美人つてホント得だよな。

白いシャツはよく見たら透け……透けつ……あ、いやコレ中に柄物インナー着てるな!?!クソツツ!

「ふふふ、勉強で分からないところがあればつきつきり教えてあげるわ? 実技試験が心配なら、地下に訓練スペースがあるからどんな大声を上げてても隣の家には絶対に届かないわよお?」

チロリつ、と舌なめずりするミッドナイト先生。それつてえつちなやつ?

あ、じゃあ古文分かんるところあるんで……

「古文ね。何処が分からないの?」

ああ、教科書の――

いや近いなつ! 机に突いてる肘におつきいおっぱい当たつとるやんけ!

しかも吐息エツツロ！耳がゾクゾクすつべ！

思わずミッドナイト先生を見れば、『どうしたの？』と微笑みながら見つめ返してくる。な、なんだ!? 先生俺の事好きか!?! モテ期到来か!!?

……と、童貞拗らせたモンキー高校生なら思うだろうが、俺の眼は誤魔化せんぞ！ましてや、さっきの今だからな！

ミッドナイト先生の性欲値も好感度も平均を逸脱しない数値。『ムラムラしたから手当たり次第』でも『好きな男だからアプローチをかけている』でも無い。ならば考えられるのはハニートラップ。俺と親密になつて、『力の譲渡』の秘密を探るつもりなんだろう。なるほど、そつちがその気なら俺にも考えがあるぞ。

俺は眼を紅く光らせながら、ミッドナイト先生から勉強を教わつた。

??

「(……手強いわね)」

ミッドナイト……香山睡は、八雲魔眼に対して内心で舌を巻いていた。こと、『強さ』という点では生徒の範疇に収まらないが、その『心』はまだまだ高校生相当だと思つていた。あのイレイザーヘッドが一方的に負け、殺されそうになつた相手『脳無』に対し

て、同じように大怪我を負ったものの互角以上に渡り合っていたと言う。しかし体育祭決勝戦においては、その青臭さによって『自爆』。心肺停止となつてしまった。

故に睡は、『肉体的には強いが心がまだ未熟な生徒』と八雲魔眼の事を評価していた。……しかし今はどうだろう。こうして身体が接触する程近くに美女が居るというのに、その身を強張らせて挙動不審な態度を取ることもなく勉強を教わっている。しかしかといつて無視をしているのではなく、睡の身体ではなく眼をしつかりと見て質問をしている。女性に対して不躰な視線を送らないのは高ポイント。

……ただ、時々胸ではなく頭上をチラ見しているのが気になるが。髪フエチ？

「うーん流石先生。担当科目以外でもスゴく分かりやすいですね」

「ふふ、勿論よ。まあ、こうして二人きりで教えてるから分かりやすいってのもあるだろうけど」

「……俺、ミッドナイト先生との個人授業ならずと受けていたいなあ」

ホンの僅かに顔を近づけながら、笑顔でそう言った八雲君。その表情と美しく輝く紅い眼にドキッと心臓が跳ねた。

……冷静になりなさい香山睡。生徒を籠絡するつもりが、逆に籠絡されるなんて冗談にもならないわ。

「どうしたんですかミッドナイト先生？」

「つ……なんでもないわよ」

ジツと眼を見つめられながら、手に触れられる。その事に対して一切不快感を覚えなかつた事に警戒した。

彼は、世の中に極稀に居る『距離の詰め方が異常に上手い』タイプの人間だ。勿論それが悪いという事ではないが……そこにタラシの才能が加わると最悪だ。自分もそうだが、大抵の人間は美男美女が好きだ。そんな美男美女が言うことなら一にも二にも即座に従ってしまうような人間も居る。そんな人達に対し、悪意を隠し持っているなら……さて、貴方は『どっち』かしら？

と、にこやかな表情を保つたまま『警戒心』を上げた……その瞬間、彼の紅い眼が悲しげに揺れた。

「ご、ごめんなさいミッドナイト先生……すこし、調子に乗ってしまいました。手、触るつもり無かつたのに……本当にごめんなさい！」

「えっ?! あつ、良いのよ?! 手くらい触った程度で私は嫌がらないわ!」

「ですが、先生のオーラが……」

オーラ?

……しまった! 失念していた! 彼の眼は『生き物の身体から出る生命力』を見ることが出来る。そしてソレは感情によって出る量に揺らぎが生じているように見えている

らしい。彼が隠していた『オーラの使い方』ばかりに眼が行って、基本的な情報が頭から抜けていた。

彼は、擬似的な読心術が使える！どれほどの精度か分からないが、相手に警戒心を抱いている事くらいは『見える』のだろう。

大体予想がついているとは言え、『目に見えないオーラを扱う個性』の一時的譲渡の方法を聞き出すのは急務だ。多くの生徒達の個性を強化することが出来るのもそうだが、万が一にもヴィラン相手に『その個性』がバレてしまつたら……彼は常に危険に曝される事になる。時間制限があるが、手軽に強くなれるというのは誰にだって魅力的に映るはずだ。

自身を警戒している者と仲良くなる事はとても難しい……ええい、女は度胸！

私は八雲君の顔を、その自慢の胸に埋めるように抱きしめる。

「ごめんなさい八雲君、でも大丈夫。大丈夫だから……」

「せ、先生っ!？」

他人と仲良くなる為には、物理的な距離というのは凄く大事だ。こうして自らの懐に入れた者を警戒するのは難しい。相手と親密になるなら、まず自分が相手を好きにならなければ。

……そう咄嗟に思ったが、案外私はチョロい女らしい。こうして彼を抱きしめている

と、まるで大木に包まれているかのような『安心感』を得ていた。それと同時に、異性を抱きしめている『ドキドキ感』も覚えていた。まだ子供……と考えていたが、この瞬間に彼を見る目が変わってしまった気がする。

そうして少しの間、八雲君を抱きしめていたら……自身の身体に当たる硬いモノの感覚を覚えた。あらあら……♥

「せ、先生……?!?その、これは……」

先ほどまで平然としていた彼が胸の中で慌てる仕草を見て、得も言えぬ興奮を覚えた……まあ、そもそも必要ならこういう事を行うのも視野にいれてた訳だし、それに……八雲君の、その真つ赤な情欲の目を向けられるのも、悪くない。

「別に恥ずかしがることは無いわ。むしろ……すこし、嬉しい……かも。八雲君にとつて私は魅力的に見えるって事でしよう?」

ああ、その紅い眼で見つめられると、言うつもりもなかった本心が口から出てしまう。人の本心を暴こうとする悪い子はお仕置きしなきゃいけないわね……♥

「えあつ?!?ちよ、先生!?!」

「ふふ……硬いわ……それに大きい……♥」

八雲君のをズボン越しに指先でさする。火遊びは何度か経験したが、コレはなかなか……いえ、かなり大きい方ね♥

タラシの才能だけでなく、女泣かせの才能も持っているなんて本当に悪い子だ。だから大人がしつかり躰しななければいけないわ♥

「せ、んせえつ……!」

「すこしは我慢しないとダメよ?」

八雲君が悶える声に、嗜虐心が擦られる。ああ、もつと虐めたいつ。もつと辱しめたいつ♥

「うあつ、あつ……!」

「ふふ、すぐイツちやう男は嫌われちやうわよ?♥我慢つ♥がまんよ♥ふうー♥」

「うギツつ!」

八雲君の耳に息を吹き掛けながら、ズボン越しにパンパンに膨れ上がったモノの先っぽを爪を使ってカリカリと刺激する。

絶頂するような快樂ではないが、かといって萎えてしまう事も無い。まさに生殺し。

そこから少しずつ……すこおしずつ指先の力を強めていき、ズボン越しのモノに届く快樂を高めていく。

はあはあと喘ぎ悶える声が入り、私の背中にゾクゾクを越えてビリビリした興奮が駆け抜ける。あつ……♥や、ヤバツ……♥八雲君の声を聞いているだけで絶頂してしまいいそうだ。

「ほーら、私の指気持ちいいかしら? ♥でも我慢♥我慢よ八雲君♥おチンチンに集中しちゃダメ♥別のモノに気を向けなさい♥」

「あつ、ああつ!?!み、ミッドナイトせんせつつ……!」

八雲君の右手を私の胸に押し付け、左手をお尻に当てる。んつ……♥無遠慮で力つよつ……♥余裕のある男と違って、こうがつつく感じも良いわあつ♥

「自分ばかり気持ちよくなつちやダメよ? ♥女の子も気持ちよくしてあげなさい……ね♥」

「うう、ぐつ……うああつ、せんせえつ……イかせて下さいっ!イかせてえつ……!」

八雲君の真つ赤な瞳が潤み、歪んだ顔で射精を懇願してくる。その瞬間、私の中に残っていた『教師』の香山睡は消えた。

「ダメよ♥我慢しなさい♥ズボンの中、精子で汚れちゃうわよ♥」

「あつ!ああつ!うあつ!」

「私をイかせたらおチンチン解放してあげる♥頑張りなさい♥」

「ぐうあつ!う……ぎゆうツ!」

ビクビクと震えながらも必死で愛撫しようとする八雲君。でもそんな手じゃ女の子を気持ちよくすることは出来ないわよ? ♥気持ちよくするやり方も教えてあげなさい♥

「あぐうつ!? ひつ、はあッ!」

「こーやつてえ……おっぱいは、弱あいトコロをクリッ♥クリッ♥きゅッ♥きゅッ♥きゅッ♥気持ちよくなれつて想いを込めてっ♥きゅーっ♥」

八雲君の服に手をつ突つ込み、気持ちよさに対して一切の耐性が出来ていないであろうヨワヨワ男乳首を指先でコネコネしてあげる。するとまるで女の子みたいに、背を反らして快楽から逃れようとしている。

ああ……本当に、もう。八雲君の吐息一つ、身動き一つが私の心にキュンキュンと突き刺さる。本当にハマつてしまっそうだ。

八雲君の耳元で囁き続けながら、両手でイジメ続ける。

「絶対イっちゃダメよっ♥おチンチン我慢しなさいっ♥いい?♥今から嘘を言うから絶対信じちゃダメよっ♥」

「あっ……ぐっ……ふっ……ッ」

『八雲君のキモチイイ射精するところ、私に見せて?♥』

「ぐつつつ?!あッッッ!!!」

ぶびゆるるるっ!!!びゆるるるっ!!!

「ッ
♥♥♥♥」

八雲君の腰が跳ね、ズボン越しても聞こえちゃうほど力強い射精音が部屋に響く。

「……もう♥おチンチン我慢出来ないなんて仕方ない子♥」

「あつ……くあ……」

ぐったりと力無く机に伏す姿さえ愛しい♥私の手で屈服させたという事実に分が良くなる。

んっ……八雲君の事ばかり責められないわね♥私も、八雲君がイク姿を見て下着をダメにしてしまった♥

「染みになると良くないから脱がすわね……♥」

八雲君を一度床に倒し、そのズボンを脱がした……瞬間、非常に濃い精液の匂いが一瞬で部屋に充満してしまった。

「ツツツ
♥♥♥♥」

うっ……あッ……♥♥♥臭っ、くっさっ♥♥♥精液クツサ♥♥♥一瞬でマーキングされちゃうっ♥♥♥

八雲君のズボンと下着をベチョベチョに汚している精液は、見たこと無い程にドロドロの白濁とした塊となっていた。うわあ♥何日モノよコレは♥

「もう……ダメじゃない♥男の子はちゃんとは処理しないと、すぐココが悪さするのよ

「?♥」

「はっ、はあっ、すみませんミッドナイト先生……っ……毎日、シてはいるんですけど……」

「毎日ッ!?!」

えっ? 毎日、出して……この濃さッ!?!♥♥指で摘まめるっ♥♥うわあ……美味しそうね♥♥

パンツの内側にベトベト付いている精液を指で掬って、口に入れる。

「み、ミッドナイト先生!?!」

ぐっちゅ♥くっちゅ♥にゅちっ♥にゅちゅ♥

舌で堪能するように混ぜ、飲み込む。ゼリーみたいにドロツとして、最高♥♥

精液が喉を通って、胃の中に落ちていく。それが理解できる。あ……これはマズいかも。脱がしたズボンと下着をその辺に投げ捨て、八雲君のモノに顔を近づける。

「ズボンとパンツ、今度弁償するわね」

「な、えっ?」

早く洗わないと染みになるだろうけど、もう洗う気無くなっちゃったわ♥

ずじゅろろろろ♥

「おツツツ!?!あぁッ!!」

ぶぼっ♥ぶぼおっ♥ぎゅぼっ♥ぶぶぼっ♥

トラウマになる程のエグいフェラを御見舞いする♥一回射精したくらいじゃ萎えな
い高校生チンポの記憶に、絶対忘れられないタトゥーのようなバキュームフェラを刻み
込む。

「うあああアツ!!?」

泣き叫びながら必死に私にしがみ付く八雲君♥ああ、その顔が見たかったのよっ♥♥

♥気持ち良すぎておチンチン取れちゃいそうでしょっ♥もう自分の手でイけなくして
あげるッ♥♥♥

「み、みっどないとせんせえっ!!!」

びゅるるるっ!!びゅぶぶ!!びゅぶるるるッ!!!

すぐさま二度目の射精。吐精が始まると同時に、喉奥まで飲み込んで射精させる。

じゅぞぞぞぞぞっ♥

「あゝっ……あゝあゝッ……!!!」

二度目でも濃厚っ……♥それでいて飲むのに抵抗感が無いというか……まるで身体
の中に入る事が自然みたいな感じがするわ……♥

……それでいて、絶倫っ♥二回も濃厚精液を大量に射精したにも関わらず、お腹につ
くんじやないかと言う程バキバキに勃起しているモノを見て……ご無沙汰まんこに欲

しくなっちゃったわ♥♥♥

大きくなっていてるモノにゴムを装着っ♥すごっ……『異形型』専用超伸縮ゴムじゃなきや入りきらないわねっ♥

「ミッドナイト先生っ、なにをっ……」

「分かっているクセに♥今から八雲君のおチンチンを教育するの……よっ♥♥♥♥」

そうして床に寝そべっている八雲君に跨り、その大きなモノを私の膣内へと導き入れた。す、すごっ♥♥♥何もしてなくても、一気に奥まで届いてるっ♥♥♥♥

「ふーっ♥ふーっ♥ほら、八雲君っ♥セックスの仕方は分かるわよねっ♥」

「み、ミッドナイト先生っ……!」

「ツツツ♥♥♥♥」

八雲君はへこっ……へこっ……と気の抜けたような腰付きでおチンチンを動かす。

あーもう可愛いッ♥情けない所可愛すぎっ♥エッチっていうのは……こうやるのよっ♥♥♥

「ツツツあああ!!!」

「ほらしつかり見なさい八雲君ッ!♥コレくらい激しくッ♥おチンチン動かさないとダメよッ」

「メよッ♥」

ぱちゅんっ♥ぱちゅん♥ぷちゅっ♥ぷちゅっ♥

膣内から愛液を振り撒きながら、激しく腰を叩き付ける。いやらしい水音が響き渡り、八雲君がその紅い目から涙を零しながら快樂に悶え続けていた。ああ可愛いっ
 ♥全部可愛いっ♥♥♥可愛い癖におチンチン凶悪っ♥♥♥こんな大好きになるに決まってるっ♥♥♥

イヤイヤと首を振る八雲君の顔を両手で掴み、その唇を奪う。ザーメン臭いちゅーでトラウマになっっちゃいなさいっ♥♥♥

「んーっ!!!んんーっ!!!」

じゅるるるっ♥ちゅうっ♥ぢゅぶぶぶ♥

八雲君の唾液を啜り取り、逆に自身の唾液を送り付ける。全身美味しいっ♥必死に抵抗しようとしてる姿好きっ♥もつと、もつとメチャクチャにしてあげたいっ♥♥♥

更に腰の動きを速め、上下だけでなく回転や前後に締め付けて搾精する。イケっ♥イケっ♥イケっ♥イケっ♥

「まだイツちやダメよっ♥そーろーは嫌われちゃうわっ♥」

「うあああッ!!!こんなの耐えられないッ!!!ミッドナイト先生ッ!!!」

「——っ♥♥♥『睡』ッ♥♥♥ねむりせんせいつて呼びなさいッ♥♥♥」

「うっ?!ア……ねむりせんせつ!!ねむりせんせえつつつ!!!」

「ツツツ……!!!♥♥♥」

ぼびゆるるるるっ!!!どびゆるるるるっ!!!

ゴム越しに放たれる大量の精液が子宮口を叩く。名前を呼ばれながら射精される感覚……最高っ♥♥♥♥♥思わず私も本気イキしちゃったわっ♥♥♥♥♥

絶頂の余韻を楽しみながら、ゆう〜っくりおチンチンを抜く。うわすっごっ♥ゴムがザーメンでパンパンに膨れ上がってるっ♥

床に倒れて気絶するように眠っている八雲君をバツクに、ザーメンばんばんのゴムを啜えた私の自撮り写真をスマホに保存する。……ふふっ♥こんな写真、取蔭彼女ちゃんに見せたらどんな反応するのかしら……♥

途中から八雲君の秘密とかどうでも良くなったけど、コレをネタに八雲君へお願いすれば秘密を打ち明けてくれるはずだ。そして必要ならまた……うふふ♥楽しみだわ……

「イイ夢は見れましたか？」



。よ。こ。し。し。し。

スマホ片手に、俺に跨って悦に浸っているミッドナイト先生を押し倒す。

「えっ、えっ？や、八雲君？急にどうしたの？」

「急に、とは？生徒に手を出しちゃう悪い教師にオシオキしないとイケませんからね」

ニヤリと笑いながらミッドナイト先生の着ている衣服を剥がしていく。

さつきまでのナヨナヨした俺は、ただの演技。ミッドナイト先生の好感度を荒稼ぎするためのお芝居。

好感度、82。ここまで高ければ、自身の望む相手から離れていたとしても嫌われる事はほぼ無い。ミッドナイト先生はサディストで、虐め甲斐のある可愛い相手を欲していた。俺はソレを好感度や興奮度等を『視』ながら暴き、演じ、準備していた。

「ミッドナイト先生。まさかとは思いますが……さつきの『お遊び』のようなセックスが大人のセックスだと思いで？」

「な、何を言ってる……え？」

俺の超本気イチモツをミッドナイト先生に見せつける。先程までとは一回りも二回りも違い、コレを見てしまえばさつきのは『半勃起』にしか思えないだろう。

「さつきまでのは、『オーラ』を使ってあえて大きさを抑えていたんですよ。ミッドナイト先生が虐めやすいチンポにする為に」

「い、虐めやすいって、アレでもかなり大きい……」

俺の眼には、見ようと思えばミッドナイト先生の膣内の広さも数値化出来る。そのサイズに合わせた大きさに『調整』するのは少々骨が折れたが。

「ほら、何ビビってるんですか？切奈や透ならこの大きさでも悦んでむしやぶりついてきますし、百ならキスの一つや二つすぐに行いますよ？希乃子とお茶子ちゃんはすぐにケツ向けてきますけど」

「えっ……えっ、ま、まさか……彼女って、取蔭ちゃん一人だけじゃ、ない……？」

「はい。切奈と、透と、百の三人が彼女です。希乃子とお茶子ちゃんはセフレですね」
俺は良い笑顔で答える。

「そんなに俺が隠そうとしてる秘密を暴きたいというのなら、仕方ありませんね。ミッドナイト先生の身体に直接教え込んであげますよ」

「待って、嘘、そんな大きいの挿入らな——」

入るんだなこれが！

ズブツ!!!

「~~~~~ア♥♥♥」

ミッドナイト先生のほっそい腹を内側から押し上げると、どこまで挿入っているかがよく分かる。そして先ほどミッドナイト先生は、『俺の精液』を身体に取り込んでいた。つまりミッドナイト先生は『オーラを操る技術』を無意識ながら体得している。俺はそ

れをイチモツで突きあげながらサポートしてあげる。すると――

「オ〃ひイ〃ん♥♥♥あ〃あ〃へエ〃ツ♥♥♥なにこれっ♥♥♥な〃に〃これ〃っ〃
♥♥♥」

頭を抱えながら快楽に悶えるメスの完成。

膣をオーラで強化し、余りの大きさに裂けないよう柔軟な強靭さを付与。そして更に膣周りの神経も強化してやれば……一突きで今まで得たことの無い快楽が一切の痛み無しで脳内に叩き付けられる。

快楽信号がスタンガンのような電流を脳内まで流し込んで脳みそを焼き切ろうとするが、脳もオーラで強化してやれば本当に焼き切れる事は無い。ただ快楽に鋭敏になるから、発狂はするかもしれないけどね。

ミッドナイト先生の鍛え上げられたマンコをたっぷり蹂躪しながら、オナホールの様にガンガン激しく扱う。

「ほーらミッドナイト先生。コレくらい激しくおチンチン動かせば満足ですかー?」

「ん〃お〃お〃お〃っ♥♥♥ゆるひへえっ♥♥♥ゆるしへえっ♥♥♥しんじやうっ♥♥♥
♥ほんとしんじやうっ♥♥♥」

「大丈夫ですよ。この程度で一々死んでたらキリがないですって。そんな事よりホラ、『セックスの仕方を教える』とか何とか言つてた先生がマグロになってちゃ世話無い

ですわー」

「ツツツひゅぐツ!? ♡♡♡」

先生を抱き上げ、後ろからドチユドチユ突き上げながら部屋に置いてあつた鏡の前に移動する。

「ほらよく見てくださいよ先生。普段ドSぶつてる癖にデカチンポにゴリゴリ犯されてアへ顔晒してるクソマゾ女の顔が見えますよー」

「お〃ほお〃お〃お〃っ ♡♡♡嘘よッ ♡♡♡嘘嘘ッ ♡♡♡こんなうそお〃ッ ♡♡♡」

白目剥きながらケツに腰叩き付けられてよがり狂っているミッドナイト先生のアへ顔がよく見える。うっわ、顔面涙と鼻水だらげやん興奮するわ。

「あー、それとおっぱいの揉み方でしたっけ? こんな感じでいいですかね?」

「あ〃あ〃あ〃あ〃 ♡♡♡ダメダメダメエえっ ♡♡♡」

「えーダメなんですかー? じゃあこうかなー?」

「ひぎい〃あ〃あ〃あ〃 ♡♡♡」

オーラを込めた指先でミッドナイト先生の乳首を押し潰しながら、そのデカい乳腺を強化してやると……おっ、噴乳したっ。

「なんでえ? ♡♡♡にんしんまだなのになんでえ? ♡♡♡」

「日頃からおっぱい弄り過ぎなんじゃないんですかねー」

ミッドナイト先生のおっぱいの開発度は高めだった。まあ今のコレで天元突破した訳なんだけど。

そのままグイグイ搾ってやると牛のように鳴きながら絶頂した。

「あークソ、両手塞がってスマホ使えねえわ。おら睡っ、自分の痴態ぐらい自分で撮れっ」

「ひっ♥♥♥ひんっ♥♥♥ゆるしてっ♥♥♥やだあっ♥♥♥やくもくんやだあっ♥♥♥♥♥」

ヤダヤダ言う割に好感度と興奮度上昇してんじゃねえかこのドスケベっ！お前さては『相手を虐めながら自身を投影する事で快感を得る』タイプの隠れマゾヒストだなっ！そんなヤツはそのデカイケツぶっ叩いてやる！

パアン！♥

「んオ〃オ〃ツ♥♥♥♥♥」

「ケツぶっ叩かれて悦んでるんじゃねえよ教師イ！！」

パアン！♥

ケツをぶっ叩く度に膣内がぎゅっ♥と収縮して悦んでいるのが『視』なくても分かる。全く、こんなドスケベ女教師が今フリーとか世界はどうなってるんだ？

交際経験、5。男性経験、4。一人に逃げられてるじゃねーか！

いや、今の俺も男性経験に含まれてるから……逃げられてる人数増えてるじゃねーか！

「まあそうだよなあ！こんなドスケベに引かない野郎は少ねえからな普通!!」

「ごめんなさいッ♥♥♥ド変態でごめんなさいっ♥♥♥八雲君は逃げないでえっ♥♥♥私を置いていかないでえっ♥♥♥」

「ンなドスケベマンコから離れられる訳ないだろいい加減にしろッ!!」

「ごちゅツツ♥♥♥」

勢い余って子宮口を押し開け、子宮内に亀頭がずっぽり啜えられてしまった。

「あ、やべ……出るッ!!」

「カッ……ひっ……♥♥♥♥♥」

「ぼびゆるるるるっ!!びゅぶぶゆるるるっ!!」

完全にびったりとハマってしまった子宮内で、グツグツに煮え滾った大量精液を解き放つ。一切の逃げ場が無いまま、子宮は水風船のように送り込まれる精液を受け止める為膨らんでいった。

そうして精液を出しきる時には、ミッドナイト先生の腹は妊娠4〜5カ月程度かと思うくらいに膨らんでいた。いやー出し過ぎでしょ我ながら。写真とつとこ。

切奈から『ミッドナイト先生とのセックス気持ち良い?』って来てた。どうしてバレ

てるんですかね？

『ミッドナイト先生妊娠なう』

切奈に写真と共に送る。すぐさま返信が来た……ん？動画だコレ。

開いてみると……

『おーい魔眼ー。見えてるかー？今から希乃子とレズセックスするからちゃんとしててよー？』

どうしてそうなった!?

そして始まるレズセ。希乃子と切奈の濃厚な絡み合いを見てると、再びラインが届いた。

『ミッドナイト先生に拉致されたって聞いた時から、どうせこうなるって思ってたし……ムラムラしたから希乃子犯したった』

切奈ア!?

『早く来ないとお茶子とかも呼んじやうぞ♥』

切奈ア!!?

切奈の暴走を止める為に衣服を着て先生ん家から脱出……しようとする部屋のドアに手を掛けた瞬間、ふわりと甘い香りがしたと同時に床に倒れる俺。か、身体が動かねえ

……!?

「ふーっ♥ふーっ♥ドコ行こうっていうのかしら八雲君ツ♥♥♥」
し、しまった！ミッドナイト先生の個性は『眠り香』——！！

「オトナを本気にさせちゃう悪い子は……後悔もさせてあげないからっ♥♥♥」

意識が混濁してきた俺に再び跨ったミッドナイト先生の発情メス特有の甘い香りを嗅ぎながら、そのまま意識を手放した。

次の日。ミッドナイト先生の車に乗りながら学校へ向かっている途中にラインが来て、開いたら切奈、希乃子、お茶子ちゃん、透、百が全裸で体液まみれになってる姿が映っていた。あ……マジで呼んだんすねえ……。

期末テスト・終わって・おうどん食べる

職員室

「おはようございますミッドナイトさん」

「おはようミッドナイト！首尾はどうだい？」

「おはようございます校長、相澤君。首尾はバッチリよ♪」

そう言っつてミッドナイトは掌をイレイザーヘッドに向け、何かを押し出す動作をした。

「……！コレは……」

「昨日、八雲君が相澤君に向けてやっていたヤツよ。まだノーモーションで……とはいかないけど、大分操作に慣れてきたわ」

「おお！オーラ操作が出来るって事は、『譲渡方法』もすっかり確認してきたという事だね！」

「ええ♥『譲渡方法』は八雲君とセックスすることよ♥」

「……はっ？」

「……H A H A H A！ミッドナイトもジョークが好きだなあ！セックスが『譲渡方法』だ

というのなら八雲君は同学年の女子生徒五人と何度も致し、その上ミッドナイトとも寝た事になるじゃないか！そんな事あるわけが」

「八雲君の愛を直接身体で受け止めること。それが『譲渡方法』よ♥」

「……ふう。すまないイレイザーヘッド、ボクの耳は調子が悪いようだ。今日は一度帰るとするよ」

「待つてください校長先生。今日から期末テストなんですから、帰るのは不合理だ。いい加減現実を見てください」

「いやだああああ!!!だってボクの『ハイスペック』が八雲君を中心に雄英内で昼ドラ真つ青のドロドロ人間関係が繰り広げられるって言ってるんだもんツツツ!!!ボクかえるううう!!!」

「校長先生はカエルではなくネズミです。さっ、仕事しますよ」

??

期末テスト（筆記）の方は……まあ、悪くは無かった。なにせ教師がつきつきりで勉強を教えてくれたのだ。そりゃあ結果に残るモンである。

……だが、『効率的にいきましょっ♥』といって高校生と朝5時までハメハメするのは

大人としてどうかと思う。いくら一時間寝ればどうにでもなるとは言え、そんな性活は良い年した大人が行って良いモノではない。その日のテストが終わった直後に俺を攫いに来るのもどうかと思う。先生なら採点して、どうぞ。

お陰でずくつと粘っこい視線が彼女達から送られてきて……あの、ほんとスミマセン。テスト明けに気晴らしに付き合いますんで……。

そして、実技試験。

二人一組となつて教師一人と戦い、時間内に勝つか戦闘区域から脱出出来るかの勝負を行うらしい。

「二人一組……でもA組は2人居るぞ？」

「そうだな。だから……という訳じゃないが、八雲。お前だけ一人で、本気の教師一人と戦ってもらおう」

「な、なにいいいい!!？」

「先生ッ！一人だけ特別扱いというのはどうかと！」

「……お前らも知ってる通り、八雲は『戦闘に関して』だけならお前らよりも遥かに上に居る。そんなヤツが全員と同じ試験内容なのは不合理だ。勿論、試験も採点も厳しくいかせてもらう。分かってるな？八雲」

「……Plus Ultraだつてんでしょ？それでも余裕な八雲君だけ相澤先生」

「……お前の試験は『最後』に行く。それまでに準備を整えておけ」

「や、八雲君……大丈夫なの？いくら強いって言っても、『本気の教師』が相手なんて……」

「人の心配より自分の心配してろ緑谷。オメエの相方、『アレ』なんだから」

「『アレ』ってなんだテメエ!!!」

「おー体育祭一位の方ではないですか、おめでとうございますう。いやーこんなところでも差ア着いちゃってごめんなさいねエ〜」

「ブツ殺す!!!」

「試験はまだだぞかつちゃん君」

「死ねエ!!!」

「わああかつちゃん?!?!? まだ先生達ソコに居るから!!!」

??

……さて、みんなの試験が終わって、いよいよ俺か。試験の相手は誰か分からなかったな……

そうして完全戦闘態勢を整えていた俺に、放送で校長先生の開始の合図が届いた。さ

て、ネオ八雲君の真骨頂魅せちゃいますよつと！

戦闘区域の中を一直線に駆け抜ける。集中は十分。誰もいない作りたての街中、見えたオーラの方向へ移動すると……そこには、ミッドナイト先生が立っていた。

「……ふふ、さつきぶりね八雲君♥」

「ええもおそんな気はしてましたようはい」

なんとなく、なんとなく試験が始まる前に薄々そんな感じはしていた。クラスメイ卜達の試験を見ていて、生徒が苦手としている部分を突ける教師が相手になっていたのは分かっていた。

じゃあ俺が苦手としてる部分は……やつぱり遠距離戦闘だろうか。それもスナイプの銃撃のような点ではなく、プレゼントマイクやミッドナイトが行う面での制圧に弱い。

今まではソレに対抗する方法は……まあ『頑張る』しか無かったのだが。しかしネオ八雲君となった今となってはとっておきが有る。

ミッドナイト先生なんかに負けたりしない！（フラグ）

「ミッドナイト先生の個性、『眠り香』。この短い期間でマア〜お世話になりましたからねえ。今日こそ本気で——あ、この会話って他のクラスメイト達に聞こえますか？」

「ええ、まあバッチリ聞こえてるでしょうね」

「じゃちよつと濁して……今日こそ本気で勝たせてもらうぞミッドナイト！」
「ふふふ♥今までの私が『全力』だと思わない事ね！」

『今日こそ本気で勝たせてもらうぞミッドナイト!』

『ふふふ♥今までの私が全力だと思わない事ね!』

「おお……すげえ、八雲のヤツ眼がマジだぜ！」

「アイツ……この数日間ミッドナイト先生ん家でナニやつてたんだよオオオ!!!」

「いや、峰田が想像するような事は起きるわけがないだろ？教師と生徒だぜ？そんなもん作り物の中だけの話だって」

「噂じゃアイツの『自爆』を先生達が警戒してららしいよ」

「そりやそうだろ。心肺停止だぞ？すぐ復活したとは言え、また同じこと起きたらヤベーだろ」

「うーん……」

緑谷出久は映像越しのミッドナイト先生と八雲魔眼を観察する。ミッドナイト先生は手足に着けていた重りを外し、会敵時には既に自身の腕を覆うタイツを大きく破いていた。まさに本気で八雲君の相手をするつもりなのだろう。

八雲君の必勝パターンは『会敵必殺』。どんなに隠れ潜もうとも、集中した彼の眼は全

てを見通す。隠れてる敵に対して不意打ち。必殺の一撃を放つ彼は、本来なら入り組んでいる都市部において絶対的な優位を持つているのだが『罨を仕掛けられている』状態には弱い。ましてや、眼に見えないミッドナイト先生の『眠り香』なんて天敵に等しい……

いや、まてよ？なら何で彼はわざわざミッドナイト先生の前に現れた？ミッドナイト先生を倒すのなら、それこそ『眠り香』の絶対届かない風上のビルの屋上から、（非道だけど）窓ガラスなり何なり投げつければ良い。わざわざミッドナイト先生の前に立つて、『眠り香』を浴びるリスクを背負うなんて……

「もしかして八雲君……『眠り香』も見えてるの？」

「なんだって!？」

「わざわざ『眠り香』が撒かれてる中、堂々と正面に立つなんて、それしか考えられない。僅かでも吸ったら終わりでも、自分に届かない位置が視えているなら別だ……」

そうして映像の向こうでは、八雲君が先んじて動き出した。

その腕を高く突き上げ、握りこぶしを天に掲げる。

『我が名は魔眼ヒーロー深紅眼スカレットアイズ!!! 貴様の罪をこの眼で暴いてやる!!!』

そして独特なポーズをとり、八雲魔眼の背後から特撮モノ特有の爆発が起きた。ええ

……？

「…………何やってんだ…………あいつ…………」

瀬呂君の言葉が全員の気持ちに代弁していた。

というか、あんな火薬いつの間に仕掛けて……

『己の罪に焼かれるが良いミッドナイト！Eye of the……』

ミッドナイトの呆然とした表情が見えてないのかそのままポーズを続ける八雲君。おかしいな、今って期末テストの時間だよな。

そして八雲君の紅く燃える眼を、自身の人差し指と中指で挟むように……俗に言う目ピースを見せつけながらバチコーン★とウインクした。いや、ええ……？何をやって――

『A j a ツ!!!』
エイジャ

チユウン

チヨドーン

文字に表すならこんな音だったろうか。

八雲魔眼の紅い眼からレーザーが放たれ、ミッドナイト先生に直撃。爆炎と共にカメラに閃光が走り、見ていた僕達の視界を一瞬で焼いていった。

「ぐああああ目がああああ!!」

明らかに八雲君の個性では出来ないし起こり得ない現象が、カメラを通して僕達が目

に入ってきた。その光景はまるで……体育祭の決勝戦の時と同じ。だが決定的に違うことは一つある。

カメラの調子が元に戻り、再び映像を僕達に届ける。そこには、両足で堂々と立っている八雲魔眼と、全身が火炙りになったかのように焼け焦げ……それでも相手を見据える眼光は一切の陰りが無いミッドナイト先生の二人が映し出された。

「ミッドナイト先生!」

「すげえな八雲!アレ青山のレーザーより威力あるんじゃない?」

「ムッ!」

爆炎に包まれたミッドナイト先生は、さながらアニメ特有のコミカル表現みたいに全身が煤だらけとなっていたが無事であった。

「……ケホッ、ビックリしたわ。それが八雲君のとおつておき?」

「その通り!見た目は派手だし食らったら痛いけど死にはしない程度に威力は押さえてる……とはいえ何事もなく立ってられると困るんですけど!」

『ふふ、そこはプロの意地よ……あら?』

爆炎によって撒き上がった砂塵が収まっていくと、そこには燃え尽きて完全に『服』の機能を放棄したミッドナイトの肌色タイツが塵となって風に舞い散る光景がツツツ!!!?

「みツツツツツ!!!」

そして直後に『Sound Only』という文字だけが白く映る画面に切り替わった。
 「あああああ!!! チクシヨウ!!! もう少して18禁ヒーローの18禁なところが見えたの
 によおおおおお!!!」

『みみみミッドナイト先生っ!? 何っ!? えっ!? なん、なんで!?』

『こんなこともあるうかと私はさらけ出しても恥ずかしくないよう自分の身体を磨いて
 研いて磨きまくったのよ!! この身体に一切恥じる場所は無いわ!!!』

『だからってこんな状況で堂々と仁王立ちするのは間違ってるだろ!!! 出てる!! 上から下
 まで全部がナニもかもがツツツ!!! 隠せよッ! 隠す仕草ぐらいしろよツツツ!!!』

『そんな隙だらけな行動とれる訳無いでしょ!! プロヒーロー舐めてんのかしら!!』

『ミッドナイトおおお!!! ボクの胃に開けるつもりかあああ!!! 中断!! 試験は一時中
 断ッ!! イレイザーヘッド! ちょうど良い布あるじゃん貸してあげてツツツ!!』

『この布は衣服じゃないんで無理です』

『すぐ用意出来る耐火能力のある布がそれしかないんだよオオオ!!!』

「チクシヨウめええええ!!! 八雲おおお!!! オイラと代われ!!! 今すぐソコをオイラに代わ
 れエエエエ!!!」

峰田の叫び声が広い控え室に響く。彼の背中を優しく叩いたのは、上鳴と瀬呂の二人
 だった。

??

ミッドナイト先生が包帯まみれのドスケベマミー娘にジョブチェンジし終えて、ようやく試験が再開する。……そういう性癖を持つてると知ってても、試験の最中にカメラの映像が残るなかで繰り広げられたストーリーキングに驚愕を隠しきれない。時と場所を考えろや……。

再開した戦い。近付いて俺を『眠り香』の範囲内に入れたいミッドナイト先生と、ミッドナイト先生を出し抜いて出口に回りたい俺との戦況は、不思議と硬直した状態で続いていた。

音速を越えて繰り出される鞭の先端を木刀で弾く。威力はとんでもなく高いが、鞭の性質上手数がどうしても限られる。対して木刀は振る速度は早いですが、鞭より遥かに間合いが狭い。

間もなく風向きが変わる事を『視て』高速で退く。その直後、先程まで俺が立っていた場所に『眠り香』が届いた。

「……本当に良い『眼』をしてるわね。私の鞭を弾いて、その上個性の範囲まで完全に掌握出来るなんて」

「自慢の眼ですんで」

「ふふ。でも良いのかしら？制限時間はどんどん迫って来てるわよ？」

「まあ、のんびり行きますよ」

俺の眼には『制限時間』までしつかり見えている。時間は残り10分……まだ焦る時間ではない。……とは言えこの状態、そして今の風向きのままでは、30分どころか一時間経つても突破する事は出来なさそうだ。ミッドナイト先生に接近し、手錠を掛ける事も視野に入れておかなければならないな。

飛んでくる鞭を木刀で弾き返す。この鞭だつて、木刀をオーラで強化してなければ間違いないく、砕き折っている事だろう。何とかしたい所だが、
 Eye of the Aja以外の『オーラ変換』は消耗が激しすぎる。まだ大丈夫という確信はあるが、これでまた心肺停止なぞしようモンなら即座に除籍だ。相澤先生はそういう人だ。

鞭を捌き、『眠り香』を躲し、距離を取りながら隙を見て
 Eye of the Ajaを放つ。辺りに漂う『眠り香』を焼き払い、再び蔭かれる前にミッドナイト先生に接近。その木刀を振り下ろし……避けられる。

「詰めを誤ったわね」

「いやいやそれがどつこい」

全力で強化した木刀はミッドナイト先生に当たらなかつたが、振り下ろされた勢いのままマンホールにぶち当たる。歪み飛んだマンホールがミッドナイト先生の顔に向かつて飛んで行き、予想外の攻撃に怯んだミッドナイト先生はマンホールを大きく躲した為に体勢を崩してしまった。隙、有り。

コオオオオオオオ……

一呼吸。それが勝敗を分ける。木刀が届くこの間合い、深く息を吸って、吐く。全身のオーラが瞬間的に燃え上がり、オールマイトにも匹敵するパワーを出す。

ミッドナイト先生が『眠り香』を飛ばすが、ソレが届くよりも俺の一撃が届く方が早い。

刹那、一閃。

『魔眼流活人剣：瞬宙投げ』

ミッドナイト先生の身体中に巻き付いている、相澤先生の捕縛布を木刀に引つ掛け、職場体験先で学んだG・ガシヘッド・マーシャル・アーツM・Aの投げ技、『宙投げ』そらを木刀で使えるように応用した技だ。

『宙投げ』は相手を身動き不能な空に投げ飛ばす技で、コンボに繋げるもよし、投げに合わせて味方の個性で捕獲するも良しの良い技だ。ただ当然、相手を空に投げ飛ばすには相応の個性か筋肉が求められる……が、俺もお茶子ちゃんもオーラと個性の力でカ

バー。『宙投げ』を習得した。

ビルとビルの間を高く飛んでいるミッドナイト先生は、流石にいきなり空高く飛ばされた事で表情が引き攣っている。……あつ、今の投げで捕縛布がズレて色々モロ見えしそう。具体的には……具とか。

「A j a アツ!!!」

再びの18禁状態になる前に眼ビームを放ち、空から落ちてくるミッドナイト先生を爆炎で包む。流石に……流石に何度も抱いた女性のヤバイ姿を何度も多数に見せたくない。そのくらいの独占欲というか、そういうナニカが働いた。

爆炎に包まれながら落ちてくるミッドナイト先生を、ビルの壁に吸い付くよう蹴りながら迎えに行く。さながら忍者になった気分だ。

そうしてビルの壁から飛び、ミッドナイト先生を抱きとめながらその腕に手錠を掛けたつ着地。ついでに俺のコスチュームを脱いでミッドナイト先生に着せる。

「ゲホツ……ホント、やってくれるわ。生意気……」

「すみませんねえ、俺も大事な高校生活が懸かっているもので。……ここまで頑張つて除籍つてなつたら流石に泣く」

「あら、その時は私の胸で慰めてあげるわよ?」

「先約が居るんでけっこーです」

「ツれないわねえ……とところで、身体の方は無事かしら？」

「身体？……ああ、オーラの事ですかね。大体……眼ビームなら後10発は撃てますよ」
「そんなに!?……連射も出来たりするのかしら？」

「ええ、まあ……あんま意味ないんでやりませんが」

そう、『オーラ変換』だ。このオーラを用いれば、わりと何でも出来る……のだが、如何せん消耗が激しすぎる。だが、ある条件においてオーラの消耗が滅茶苦茶抑えられる事に気が付いたので。それが俺の場合、『眼を使う』事。『眼ビーム』ならそれこそ10発連射してもまだ余裕はあるが、これが仮に指先から出す『レイガン霊丸』みたいに『眼以外』の所から変換したオーラを出そうものなら2〜3発で限界を迎えるだろう。

こんなアンバランスな仕組みは……やっぱり『個性因子』が関係しているのだろうか。つまり俺だから『眼を使う』オーラ変換が高効率なのであって、仮に切奈が俺と同じ事をしようとするの大変な事になる……まあ、あくまで予測なのだが。

なににせよ、こうして『激情』によって自爆しか出来なかった『オーラ変換技術』だが、その使用方法と制御方法を得た今雄英を除籍になる事は無いだろう……無いよね……無いと、良いなあ……。

そうして、俺はミッドナイト先生を担いだまま出口のファンシーなゲートに向かっていった。

「……あの、そろそろ降りても問題無いのでは？」

「いやあ、さっきの戦闘のせいで動けなくなっちゃったわーこれは誰かに介抱して貰わないとだめだわー」

俺の眼にはミッドナイト先生の体力が70%程残っているのが見えているのだが。

「いいからしつかり抱きしめなさい。じゃないと除籍にするわよ」

「アンリイゾナボー！」

渋々俺はミッドナイト先生を抱き上げたまま控室へ戻るのだった。いや、まあ、役得は役得なんだけどね？



「ところで先生、俺はいい加減自宅に帰れますよね」

「ええ（本当は嫌だけど）、もう監視する必要も無いし帰ってもいいわよ」

「やったあ」

「……つまり、私達との接触も解禁されたって認識で良いですかねミッドナイト先生？」

「あつ……、ど、どうしたん切奈、透、百、それにお茶子ちゃんと希乃子まで」

「……そうねえ、また近いうちに私も混ぜてくれる？」

「それはミッドナイト先生の気持ち次第かなあ。ねえ魔眼？」

「えっ、あはい」

「この後全員でウチに来るんだけど、勿論来るよね？」

「……全員とですか」

「全員とです♥」

「あの部屋に、六人は狭いと思うんだけどなー」

「何処を見てもえつちな女の子で役得じゃない？」

「……………オテヤワラカニオネガイシマス」

「よし、じゃーみんな行こうか♥」

「テスト期間相手してくれなかった分たーっぷり相手してもらおうからね♥」

「うふふ♥ミッドナイト先生とナニをしていたか……………聞でじっくりお話してもらいますわ♥」

「はっ、早くっ♥はやくいこっ♥」

「今日もいっっぱいシようなっ♥」

気分はさながらドナドナされていく子牛の気分。まあやる事は子牛というより種馬なんですけどね！いや妊娠だけは絶対避けるからなッ！避妊、大事！

いやー……………体育祭前にやった切奈、透、百の4Pでも三途の川が見えたのだが……………更

に増えて6Pか。全員ヒーロー科特有のスタミナお化けえっち、もえてくるわー(白目)
まあ、嬉しいんですけどね?嬉しいのはうれしいけどね!?限度オ!!!

そうしてマンションに着き、切奈の部屋に押し込まれ、ピンクのベッドの上で脱がされ、皆のドスケベな期待まみれの笑みを見て、ああ……世界は平和だなあ……。



「ただいまー」

「んー、おかえり魔眼。雄英のテストってどうだった?」

「色々やばかった」

「あそー……ん?アンタ……なんか萎れてない?」

「六人……六人を相手にな……一方的にな……前から後ろから挟まれてな……」

「……あ、うん。なんか、お疲れ……晩御飯うどんだけ……食べる?」

「食べる……」

姉ちゃんが買ってきた冷凍うどんをサツと茹でて、冷水で締める。そのまま皿に盛り

付け、冷たいうどんダシを掛けて刻みネギ、すりおろし生姜、温泉卵を乗せて完成。夏バテで食欲が無い時でも生姜パワーで食べてる内に食欲がわいてくるし、温泉卵を食べてしつかり栄養摂取。うどんをつるつるんと食べ、刻みネギと共に噛むと口の中が楽しい。

つるつる、ずずずつ……

歯ごたえのあるうどんに絡んでくる鰹ダシの効いた醤油に近いうどんダシがまた良い味出してる。なんでこう……日本人って出汁というか旨味成分が無いと生きていけないんだろうって気分になる。

レンジでチンしたエビ天を齧って軽く気分転換。サクサクの天ぶらも美味しいが、しんなりした感じもそれはそれで良きって感じ。

冷たいうどんを食べてたら食欲も戻ってきた。ちゆるんとうどんを食べきったら、温泉卵の欠片や生姜ネギカスの色々混じった残りダシを白米にどーん！超行儀悪いネコマンマ！味は……イイネしました！評価は星4です！

「ところで魔眼」

「ん〜？」

「明日お母さんが帰ってくるんだって」

「へーそう……マジで?!なんで?!」

「仕事がひと段落したからだってー。だから今回は暫くゆつくりしてくみたいよ」

「え、ええ……また唐突突然に……暫くゆつくりつて、どれくらいの間？三日か？四日か？まさか一週間じゃあるまいな」

「一ヶ月」

「一ヶ月!!なんだろう……なんか長すぎて怪しみを感ずる」

「流石我が弟。アンタも同じ考えか」

「……新しい弟か妹、増えてたりしないだろうな……」

「流石に……流石に魔眼も高校生になってるんだから……もう増えないと思うんだけど……」

「……姉ちゃん。そんな中大変悪いお知らせがありますっ……!」

「ハイ待つてマイブラザー。そのお知らせ……聞かないという選択肢は有りかしら?」

「聞こうが聞くまいが結果は変わらないが、それでもよろしいか?」

「OH……オーケーオーケー、覚悟して聞こうじゃないか。一体どんな悪い知らせを持って来たつて言うんだいマイケル」

「Heyミーナ、それはだな。俺様は夏休みに入ったら『林間合宿』に行かなきゃならな
いんだぜベイビー」

「What……F○c k!!つまりその間マミーの相手は私一人でしなきゃいけないって

のかい!?とんだジョークだぜマイケル!」

「ノツ、ノツ、ノツ、忘れちゃいけねーのがママーが連れてくるかもしれないねーベイビーの事だぜ」

「F o c k i n , B I O C H ! ! これ以上弟妹が増えたら八雲家だけでサッカーが出来ちまうぜー!」

「いつまでこのノリで話すん? もう飽きたんだけど」

「アタシも」

晩飯を食べ終え、食器を台所に片付ける。そつかー……母さんが帰ってくるのかー……。

「俺暫く友達ん家に泊まるわ」

「逃がす訳無いでしょボケ」

「分かるまい……『女』である貴様には、『実の母に性的に狙われるかもしれない』という恐怖に怯える我的事が分かるまい……」

「……お母さんは、流石にアンタにまで手を出したりしないでしょ……」

「……むかーしむかしのことだった。ある日の朝、目が覚めた時に精通を経験した俺はパンツ片手に母親にその事を伝えた。母親はおもむろに俺の精液まみれの精通パンツを手にし、こう言った」

『貴方も子を作れる歳になったのね。じゃあお母さんでハジメテを経験しない?』

「Jesus……」

「俺は思った。『コイツあヤベー』と……母親から距離を置いたのは、すぐの事だった……」

「うん……そっか……いきなり精通とか言いだして困惑したけど……そっか……そっかあ……なんとというか、お母さんが稀にしか帰って来なくて……良かったね……」

「でも明日帰ってくるんだよね……」

「そうだった……」

俺達姉弟は頭を抱えながら布団に着いた。それだけ母親という存在は俺達に多大な影響を残していつてるのだから……。

林間合宿・初日に・A組女子達とえっち

「ただいま〜♥久しぶりね〜魔眼、魅眼〜」

「……おかえり、お母さん……」

「大体一年くらいかしら〜♥魅眼、貴方は随分成長したわね〜……魔眼は……ふふっ♥」
「えっ、なんで俺の顔を見て意味深に笑ってるんです?」

「ん〜♥息子がとつても立派に育って嬉しいって思ってたね〜♥あつ、そうだ♥久々に皆で一緒にお風呂に入りましょっか♥」

「ゴメン俺今日この後友達ん家行く予定があるのでそれではサラバツ!!!」

「あちよ、逃げんな魔眼ツ!!」

「あらあら〜♥雄英に行つたつて聞いてたけど、ちゃあ〜んとお友達が出来てるみたいでよかったわ〜♥」

「……で、お母さん。いい加減その……抱っこしてる赤ちゃんの説明してくんない?」

「あつ、いけないわ〜♥すっかり紹介遅れちゃったわね〜♥魔眼居ないけど……まあ
いっか〜♥紹介するわね〜♥末妹になる『華眼』かなこちゃんよ〜♥」
「う〜ない」

「ほらほら〜華眼ちゃんもお姉ちゃんに会えて嬉しい〜っ〜♥」
「……………よ、よろしくね、華眼ちゃん…………」

「あつ、いつけな〜い♥魔眼に聞くことあるんだったわ〜♥」
「なにを聞くつもりなのよ…………」

「ん〜♥『男の子のお友達に家に連れてこないのか』って〜♥」

「(コイツ…………息子の友達まで食うつもりか…………!?)」



非常に家に帰りづらい今日この頃。期末テストの結果も返って来て、俺は無事に雄英に残り続ける事が出来た。よかった、よかった。

「場合によってはお前の力を他の生徒にも使わせる事になる」

「それいったいどういう場合!?!」

相澤先生から滅茶苦茶怖い事言われたが…………大丈夫だよな?俺、これ以上肉体関係結ぶ相手増えないよな…………?

そして色々あつてクラスの皆（極一部除く）とシヨツピングモールでお買い物。透と百の二人に連れられてデートしていると……視覚えのある、腐ったようなオーラを感知した。

「あつ!?!ちよ、魔眼!?!」

「魔眼さん!?!急に何処へ!?!」

「ヒーローを呼んでおいてくれ!?!ヴィランだ!?!」

こんな腐ったようなオーラ、この世に二人も三人もいてたまるかよ!

そうして感知したオーラの元へ向かえば、首元を押さえて蹲っている緑谷と電話を掛けているお茶子ちゃんの姿が。腐ったようなオーラを追いかけても、いつの間にか何処かに消えていた。

「……クソツ。嫌な感じしかしねえ……」

胸騒ぎを抱えたまま、その日はそのまま解散した。

??

林間合宿が始まった。

姉ちゃんに『まじでアタシを一人にする気かあー!!!』と襲われたけど、まあ流石に同

性は襲わないだろうし赤ちゃんの相手も馴れたものでしょ？許せ。

そうして、崖から突き落とされて魔獣の森とかいうところを走らされています。どうしてこうなった!?

「おい八雲！お前事前にアレの奇襲を察知できねえのかよッ!!」

「無茶言うなダゴ!!個性由来の被造物はオーラが読みにくい上森の中だぞ此処!!!辺り一帯草木のオーラでダブルで見にくいッ！追加で走りながらじゃ集中出来ねえ！トリプル役満だボケ太郎ジャミングウェイこの野郎!!」

「口悪過ぎじゃね!!?」

眼ビームで土くれ魔獣を焼き払いながら駆け続ける。爆炎は派手だが森に延焼するようなことは無いのが救いか。

「ツツツ前からクソデカいのが来るぞお!!」

「ウラア死ねエ!!!」

「ナイスだぜかつちやつちや!」

「かつちやつちやつて誰だボケコラ!!!」

そうして全員がフラッフラになりながらも、何とかゴールしたのだった。というか途中俺に向かつての集中攻撃が酷かった気がするんですけどどう思いますピクシーポブ?

「将来有望らしいーからつい本気出しちゃったわ！メンゴー！」

「ついでボコされる身になれい！」

その後『唾つけとこー』と駆け寄ってくるピクシーボブから逃げ回った。

「……元気かアイツ」

「くそお……なんでアイツばかり……」

夕飯はとて、とてもおいしかったです。

風呂オ！

「露天風呂とかいつ以来だ？」

「や、八雲おま、お前……前隠したりとかしねえのか？」

「あー？男なら裸一貫、何も着ない風呂だからこそ堂々とするべきだろうが」

「男らしいな！」

「いやいやいや!!!ふざけんな八雲テメエ！隠せよ！んなデカイモンぶら下げられたらオレら立つ瀬ねえぞ!!！」

「こ、黒人モノのAVでも見た事ねえよ……」

「安心しろ。俺自身日本人平均を遥かに超えてる自覚あるから問題ないな」

「そういう問題じゃねえし！」

「こ、これが……持つ者の力……か」

『つーか何なんだよこのデカさは!?なに食ったらこんななるんだよ!』

『さあなー。強いて言えば……遺伝……かな』

「……男子共、声デカいんだよ……」

「……日本人平均を超えてるって……どんくらいかな……」

「けろっ……聞かないで三奈ちゃん」

現在、女湯には三人だけ。耳郎、芦戸、蛙吹の三人は、広い露天風呂の中でただ何となく並んで湯船に浸かりながら、壁越しの男湯から聞こえる騒ぎ声を聞いていた。

葉隠、八百万、麗日の三人は『所用』で少し後から入るとの事。『所用』が何かは……聞く勇気を持てなかった。

『なあ八雲……お前、まさかとは思うが……ソレで彼女と致してる……訳じゃ無いよな?』

『はっはっは、なに言ってるんだ砂藤。ここからフルパワーモードに変形して相手するに決まってるじゃないか』

『更にデカくなるだどオ!!?』

『えっ……ただでさえ腕並みに長いのが更にデカくなる？ちよつと言ってる意味分らない』

「腕並み……腕、並み……？」

「は、入るの……？」

「……そんな大きかったかしら？」

三人は自身の腕を見比べ、記憶を辿る。……あれ？そんな大きかったかな？

『……というか八雲君、君それでどうやってズボン履いてたんだ？』

『そりゃオーラ使って、更に小さく収納してんだよ』

『人体ってそんな簡単には収縮しねえよ!? つーかむしろそのサイズがオーラでデカくしてる結果って言われた方がまだ納得できる!!』

『コレはな、オーラを使えばもつとデカく出来ないか試行錯誤してたら……いつの間にか素のサイズが30センチ砲になっちまってな……』

『さん、30センチツツツ!!』

「「さ、30センチっ……!!?」「」

30センチ? 定規並み? 靴より大きい……。

三者三様に指を広げて、『30センチ』の大きさを確認していた。

『要するにドーピングじゃねえか!』

『ドーピングじゃねえよ我流のチントレ極めた結果だよ!』

『そんな大きかったら、女の子の方が大変なんじゃないか……?』

うんうん、と声を出さずに頷く三人。

『尾白の疑問も最もだ。男にとつてデカさは勲章だが、女の子にとつては腹にブツ刺さる凶器でもある。デカけりや良いつてモンじゃない。だから普段から小さくしておいで、女の子と致す時に少し解放する。後は反応を視ながらサイズを調整して、少しずつ慣らしていく。なあに、妊娠して出産するなら30センチ砲よりも遥かに大きな赤ちゃんが通るんだ。無理せず早いうちにPlus Ultra出来るんならした方がいいつて切奈も言つてた』

『お、おう……いや明け透けかよお前』

『というか風呂入つてる時に話す内容じゃねえし!』

『おーん?なんだお前ら、この程度でおつきしちやいましたかあ? タオルの下でポークビッツ茹で上がつちやいましたかあ?』

『誰の何処がポークビッツだボケエ!!』

『おうなら俺の前に見せてみるよ自称フランクフルト。じやなきやカルパスか?』

『止めなされ止めなされ……巨頭を振りかざし弱き者共をいたぶるのは止めなされ

……』

『お、お、覚えてろッ!』

『三下かな?』

『八雲……まじで……まじで止めてくれ……お前の言葉はすべてオレらのハートを粉々に砕いていくから……』

『いやあー……覗きを企む阿呆には丁度良い仕打ちでは?』

『無関係の人も居るんですのよっ!!?』

『無関係? ほー……ちなみにだが上鳴、俺の眼の力を使えばこの壁を透視出来て、30秒だけその力を貸し与えることが出来るとしたら——』

『是非とも貸してください八雲様ア!!!』

『いや嘘に決まってるだろ何最速で引っ掛かってんだ馬鹿』

『おま、オマエエツツ!!この世にはやって良いことと悪いことがあるんだぞゴラア!!!』

『じゃあ覗きは悪いことだから実行しようと思った段階で処罰しても問題ないね?』

『ふざけんな大問題だよ!!!』

『元気か』

『静かに入れないものかしら……』

『30センチ……』

男湯から聞こえてくる声に集中し過ぎてノボセそうになった三人は、一旦湯船から上

がって身体を洗う事にした。

風呂に入っていた以上に身体がぼかぼかしている気がするが、きつと気のせいだ。3
0センチ砲の力とか全く関係ない。

と、身体を洗っている最中に、遅れてきた三人が露天風呂に入ってきたようだ。

「わっ!!?広ッ!」

「なかなか良い雰囲気ですわね」

「おー……存分に脚伸ばせそうや」

タオルだけがフワフワ浮いているのと、タオルで隠そうにも隠しきれないバインバインのポインポインと、胸もそうだがケツがやべー隠しきれてねーのが入ってくる。

というか、えっ?なんか昼間と別人じゃね?一番最初の時のヒーロー基礎学で着替えた際に見た時より遥かに成長してね?なんで?昼間は服着てたから分からなかったの?そんな事ある?

そして彼女達の声が男湯にまで届いたのか、先程までの騒がしさから一転して静まり返った……と思いきや、一人の男が騒ぎ出した。

『隙有りイイイ!!』

『あッ!?峰カステメエこの野郎ッ!!』

『テメーの彼女とか知らねーッ!そこにあるんだよオイラの理想郷が!』
ユートピア

『死にたいなら地獄に送ってやるよ!! Eye of the ——
 『食らえッ!』

『エイじゃあアアア!!? いいッたい眼がアアアアアアア!!?』

『八雲君!!? 目に石鹼が直撃したぞ!!? 大丈夫か!!?』

『俺の心配より腐れブドウ止める飯田ア!!?』

『腐れブドウ!!? 爆豪君の口調が移ってるぞ!!?』

『壁とは超える為にある!! Plus Ultra!!?』

『いや速ッ!!?』

壁からトトトトと音が鳴り、登ってきているのが分かる。そしてついに頂点まで登りきり——

「ヒーロー以前にヒトのあれこれから学び直せ」

ワイプシの所で預かっているという冼汰くんが妨害した。

『くそガキイイイイ!!?』

『お前以上に立派な人間してる子に向かって何言ってるんだ峰カス。それとさつきはよおくやってくれたなあオイ……地獄直送便、発射オーライ』

『まッ!!? まで八雲グベエ!!?』

ドゴオッ!!

まるで大砲を打ち出したかのような轟音が響いた直後、大量の水飛沫が飛び散る音と共に地響きが鳴り響き、ビリビリと揺れるような振動が女湯まで届く。

「ッ、わっ……!!?」

「ッ危ない洗汰君!」

「掴んでください!」

その振動に脚を取られた洗汰君がフラッと倒れかけ……八百万が咄嗟に腕から棒を伸ばして洗汰君に掴ませる。

「セーフ!」

「大丈夫洗汰君!」

「ッ、——」

棒を掴み、一度は体勢を整えた洗汰君はつい呼びかけに反応して顔を向けてしまう。それが女湯の方向だったとしても。

「ツツツ!!」

「あッ!!?」

その発育の暴力にやられてしまった洗汰君は鼻血を出しながら今度は逆側、男湯側に落下してしまった。

『危ない洗汰君ッ!』

『うおっ!? ナイスキャッチだ緑谷!』

『悪い、つい手加減せずブチかましちまった。……あ………気絶してんな』

『僕、冼太君を外に運んでくるよ』

『おう……冼汰君起きたら、悪かったなって伝えておいてくれ。俺は……ちよつとまだこの怒りが収まりそうにない』

『……み、峰田君が死なないように気をつけてね?』

『大丈夫だ。まあちよつと……生き地獄に合わせるのは得意でね……!』

『八雲オオオ!? お前ヒーロー志望がやっちゃいけねえ顔してるっ!!!』

『まだ爆豪の方がヤベエ顔してるから大丈夫だ』

『テメエと一緒にすんなカス!!!』

ギャーギャーと男湯は再び大騒ぎに包まれた。

『……八雲のヤツがあんなにはしゃいでるのも珍しいな……』

『そうね……』

『30センチ……』

色んな事が起こり過ぎて脳が働かなくなり始めた三人の所に、音を立てずにコソツと近づいてくる者が一人。

葉隠透は、小さな声で三人に呼びかける。

「ねえ、今日さ……」

「……は？」

「あ、先生の許可は既に取ってあるから♪」

「いや、いやいや……だって今日あんなに疲れて……もうぐつすり眠るだけじゃん!」

「しー……それでもだよ」

「ケロツ……あ、明日も早いのよ? そんな事——」

「その明日の為だから大丈夫なんだって♪まあ、勿論無理には言わないよ? 一応離れた部屋取ってもらってるし、ゆっくり寝られると思う」

「そ、それは……でも良いの!?! だってアンタ……」

「んー……本当は良くないけど、でもそれが皆の為だから!」

「み、皆の為って……そんな事……」

「じゃあ、いいの?」

「——ッ!」

「私達だけで、ずーっと独占してて、本当にいいの?」

「そ、それは……」

「……『猫の間』で待ってるから。興味あったら来てね?」

それだけ話して、『温泉温泉っ♪』と鼻歌を歌いながら掛け湯をしに行く葉隠。

「…………どう、する…………？」

「けろお…………」

「…………」

残された三人は呆然とそれを見つめ続け――

「…………」

「…………」

「…………30センチ…………」

いつもよりも念入りに身体を洗い始めたのだった。



消灯時間が過ぎた。

A組女子達に宛がわれた部屋には、三人しか居ない。残りの三人は既に『猫の間』に居るのだろう。

「…………」

「…………」

「……」

「（寝られるかツツツ!!!）」

芦戸、蛙吹、耳郎の三人は同時にこつそり布団から抜け出そうとし、バツチリと他二人と目が合い『いや、これはただトイレに行こうとしてるだけだから』と謎の言い訳が全員の口から漏れ……馬鹿馬鹿しくなって項垂れながら揃って部屋から出ていった。

向かう先は当然『猫の間』。全員が寝る前に猫の間の場所とルートをこつそり確認していた為、道に迷うことなく移動することが出来た。

道中、相澤先生やワイプシの虎と出会ってしまったが、片や『明日も早いんだ。効率的に行け』と言いなながらシツシツと手を振り、片や複雑な表情を浮かべながら『……後悔の無いようにな』と肩を叩いて送り出した。それで良いのか大人達。

そうして向かった『猫の間』の入り口には、今にも泣きそうなんだか死にそうなんだかよく分からない複雑すぎる表情を浮かべたピクシーボブが立っていた。

「どうして……どうして高校生は……私はまだイイ人も居ないのに……」

「び、ピクシーボブ？」

「あんた達もかッ!？」

六対一……六対一つでどうなってるのよ高校生……

と訳の分からない事を呟きながら道をあけて中に招き入れた。

扉を開けた瞬間から、呻き声のような悶え声のような音と共に水音が聞こえてくる。

三人は、意を決して室内へ入っていった。

すると中では……

ずろろろろっ ♥ ずぼっ ♥ ぢゆるるるっ ♥

部屋の中央に敷かれた布団の上で両手を後ろにされて手錠を嵌められた上、目隠しをされながら胡坐をかいて座っている八雲を囲むように半裸の少女が二人……それと宙に浮いている下着が一对、居た。

「うっ……く、これは……透っ！」

「んふふ、せいかくい ♥ じゃあ次ねー ♥」

ちゅっ ♥ ちゅぶっ ♥ ちゅぢゆるっ ♥ ちゅぶぶっ ♥

「くう……先つぽぼっか吸い付いてくるのは……百っ！」

「んっ……当たりですわ ♥ 流石魔眼さん……それでは少し難しく致しましょう ♥」

じゆるるるっ ♥ ちゅっ ♥ ちゅうっ ♥

んれえく ♥ れろっ ♥ ちゅっ ♥

「ふッ!? 二人同時……っ!? くっ……お茶子ちゃんと、百っ！」

「んぷあ……流石や魔眼君♥」

「舐め方だけで判別できちやうほど皆ともエッチしてるんだねえ♥」

「ふーっ、ふーっ……いい、いい加減手錠と目隠し外してくれって……」

「……！まだまだーめっ♥今度はヘッドホン着けて、誰の膾か当ててみてー♥」

「ヘッドホンって……あつ、おいっ!？」

葉隠は自身の私物であろうヘッドホンを目隠しされている八雲に着けて音楽を流す。シヤカシヤカと音楽が流れているのが漏れ聞こえ、八雲は聴覚を封じられたのが理解出来た。

「しー……♥」

葉隠は部屋の入り口に立っている三人を手招きする。その手には、先ほどまで目隠しをしている八雲の前で意志疎通を図るためのメモ帳が握られていた。

『静かにこつちにおいで』

何がなんだか分からない三人は葉隠に招かれるままに部屋の中心へ歩く。

『麗日から』

その字を見た麗日は静かに、されど大胆に下着を脱ぎ捨て、八雲のイチモツを舐めるだけで準備万端になってしまった欲しがりマンコにそのイチモツを沈めていった。

「あつ……やつ♥声出ちゃうっ♥」

「くっ……この柔さは、お茶子ちゃんだな！」

「えへっ♥えへえ〜♥正解ッ♥せいかいッ♥ごほーびのエッチなちゅーしてあげるっ♥」

胡座をかいて座っている八雲に股がる麗日は全身で抱き付くように両手脚を八雲の背中まで回し、舌と舌を絡め合わせながら腰を激しくグラインドさせて射精に導こうとする。

『交代』

麗日の背中を突っついてメモ帳を見せる葉隠。不満げな表情を浮かべながら、渋々と八雲から離れる麗日に代わり、今度は八百万が八雲に股がった。

「んっ……♥はぁンッ♥魔眼さんの……やっぱり凄いですわっ♥」

「うぐぐ……この舐めるような締めつけ方……百ッ！」

「はい♥大正解ですわっ♥ご褒美のっ、魔眼さんが仕込んだいやらしいキスですっ♥」

八雲に抱きつき、腰をタンタンと音を立てながら上下に振りながら口内を舐め尽くすようなキスを交わす。

八雲と八百万がセックスしている横で、葉隠は硬直している三人に向けてメモ帳を見せた。

『次は誰が良い？』

「「っ!!」」

葉隠の顔が見えたのなら、とてもいやらしく淫靡にニヤニヤ笑う彼女の顔が分かつただろう。

蛙吹と耳郎は顔を見合せ、互いの言葉を待った……その隙に、フラツと歩み出したのは芦戸だった。

「みつ、三奈ちゃん!」

「八雲の……30センチ……ずつと……ずつとお……」

八百万の腰の動きが激しくなり、間もなく射精するのだろうと言うほどにビクビク震える八雲の身体から八百万を無理矢理引き離れた芦戸は、服を着たままに八雲の限界ギリギリイチモツを自身の膣内に迎え入れた。

「おっっ♥」

「ツツツ……!!待ツ、あつ!透でもお茶子ちゃんでもねえなコレっ!!」

「八雲っ♥やくもおっ♥凄いいっ♥やくものすごいっ♥」

八雲は、膣肉の中に残る固さに即座に気付き、今まで抱いた誰でも無い事を察して声を上げるが、そんなこと知らないとばかりに八雲のイチモツを激しく受け止める芦戸。

入り口はほぐれつつきゆううつと締めつけながら、まだ固さの残る膣奥で龟头を擦りあげる名器を前に、射精寸前までお預けされたガチガチンポは堪える事が出来なかつ

た。

「ぐっあ……出るっ！」

「だしてっ♥やくものあかちゃん孕ませてえッ♥♥♥」

ぶびゆるるるるるッ!!どびゆるるるるっ!!

目隠しされた上に縛られ、聴覚まで封じられた八雲は誰とも知れない膣内に生中出したことに罪悪感と支配欲を刺激され、複雑ながらもとても気持ち良い射精を行う。

今までずっと妄想していた行為が、ついに実現した芦戸は、妄想以上の快樂によつて脳が焼き焦げるかのような多幸感を味わっていた。

「すっひっ♥♥♥じぶんでするよりすっいい♥♥♥やくもお♥やくもおっ♥」

快樂に支配されるまま八雲に密着するように抱きしめ、その唇に吸い付いた。フアー
ストキスはドラマチックなものと思い込んでいたが、実際には感動もクソも無いただただ欲望的なものであった。

ぢゆるっ♥ちゅっ♥ちゅううう♥

貪るようなキスをしながら、絶頂に震える腰を更に振って快樂を味わう。芦戸は日々の自慰行為によつて、いきながら更なる快樂を楽しめるように身体が出来上がってしまった。

妄想なんかよりも何億倍も凄い行為に耽り続け、自慰では至ったことの無い『頂』に

トばされながら二度目の射精を膣で受け止めた。

「あああああつ♡♡♡♡♡」

ぎゅうううツ♡と強く抱きしめながら、熱い精液が子宮へ送り込まれる快楽を受け止める。目の焦点が激しくぶれるほどに強い快感によつて焼けた脳ミソが溶け出したかのような気持ちになった。

「くっ……う、お、お前芦戸かつ!?おま、何で?」

「ツツツ♡そうだよつ♡三奈ツ♡三奈つて呼んでツ♡私も魔眼つて呼ぶからツ♡」
「ぐ、おお……つー!」

八雲が着けているヘッドホンを外しながら、耳を舐めて求愛行動を取る芦戸。腰をかさずとも、膣内が蠕動運動をするようにウネウネ動いて快楽を送り続ける。

「芦戸さんっ!私を無理矢理引き離すだけでなく、二度も魔眼さんの精液を膣内で受け止めましたねっ!ズルいですわ!」

「やあつ♡やああゝつ♡」

自身がされたように、芦戸を八雲から引き剥がそうと試みる八百万。さながら赤ん坊がダダを捏ねるように抵抗する芦戸だったが、ヘッドホンを戻しながら慣れたように引き剥がしを手伝う葉隠によつてヌポツ♡と音を立てながら結合部が引き離された。

互いの体液が凸と凹から流れ、部屋に凄まじい淫臭を撒き散らす。

「あッ!?」

「くッ!?」

そんな性臭を間近で嗅いでしまった耳郎と蛙吹の二人は、カクツと突然腰から下に力が入らなくなってしまうたかのように床へ崩れ落ちた。

かつて雄英高校の屋上で情事を覗いていた二人は、離れたところ発せられた性臭を嗅いだけで絶頂してしまう程にエロい身体である。そんな彼女達が間近でそんな臭いを嗅いでしまえば、絶頂が収まる間もなく次の絶頂が訪れる連続イキ地獄を味合わされる事間違いない。現に二人は自身の下着だけでなく、履いている短パンにまで洪水被害が拡大していた。

腰が抜けながらもイキ狂っている二人に個性を使つて、軽々と持ち上げる麗日。

「じゃあ次はどっちが挿れたい?」

「ッ!」

宙に浮きながらカクカクと腰を震わせる二人は麗日の言葉によって、その視線を体液でヌラヌラと光を反射している大きなモノに固定された。

アレが、ナカに……! そう考えた瞬間、怖さよりも先に快楽への探求心が勝った。

「う、ウチが——「私からするわ!」梅雨ちゃんッ!」

びよん、と舌を伸ばして八雲に巻きつけ、宙に浮いたまま引き寄せられるように舌を

縮めて八雲に接近する蛙吹。そこそこの速度で八雲にぶつかるときに抱き付くが、無重力状態だったので衝撃はあれどダメージらしいダメージは皆無だった。

「この舌とネットリボディは梅雨ちゃんだろっ!? 悪ふざけが過ぎるぞ!」

「もう、まだ挿れてないのに当てちゃダメよ……んっ♥熱い……わ♥おつき……んんんんんっ♥♥♥」

そのイチモツを自身の入り口にあてがっている最中に、個性を解除された蛙吹は重力に従って落下。その勢いのまま一番奥までドチュツ♥と貫かれた。

「ケ……ろおツ♥♥♥溶けちゃうツ♥溶けちゃうわ♥」

蛙吹は、雄英高校に入学する前までは自慰を行うことは滅多に無かった。というのも家族と一緒に住んでおり、その家族も多いということもあって一人で過ごす時間というのが極端に少なかった。当然、そんな貴重な『時間』を自慰に費やす事も少なかった……雄英高校に入学するまでは。

ある日の屋上。そこでまぐわう学友二人を見てから、自慰行為に耽る回数は激増した。

家の中では家族が居るから早々出来ず、しかしふとした拍子に脳裏に想起される行為によって火照り出した身体を鎮める為に『家の外』で自慰を行っていた。具体的には雄英高校の女子トイレの中や、家に帰る道中にある公衆トイレの中等で行っていた。

「や、くもちゃんっ♥やくもちゃんっ♥」

「ぐう、う……梅雨ちゃんっ、離れッ……!」

「ケロッ♥貴方が悪いのよっ♥学校の屋上であんな事してッ♥反省しなさいっ♥」

公共の設備の中で自慰していた自身を棚に上げ、いろんな女の子とセックスをしている悪い男にオシオキをする。

ぺったんぺったんと尻肉と腰がぶつかり合う度にグポッ♥グポッ♥と膣肉を抉られ、むっちりとしてよく伸びる異形型マンゴゴと腹を押し上げているのが傍目から見てもよく分かる。

自身の腹を内側から強く押し上げるイチモツを腹越しに撫でながら、その長い舌で冒流的に甘いキスを繰り返す。

「んっ♥んっ♥ずろろっ♥やくもちゃんッ♥やくもちゃんのおツ♥大きくて素敵ッ♥♥」

自身の処女を一息で奪っていったイチモツにむしゃぶりつくように形を変えながら、痛みなど一切感じていないかのようにヌメヌメと尻を振って精液をねだる。

現に痛みなど感じていないのだろう。芦戸に精を放った後、尿道に僅か残った出しきれなかつた分が蛙吹の腰振りと締めつけによって漏れ、蛙吹の膣内にじんわりと広がっていた。その僅かな精によって蛙吹は無意識ながらも『オーラ』を操る事が出来てい

た。

より気持ちよくなるために。

より深く快楽を食うために。

処女膜を裂く痛みを完全に塗り潰す快感を十全に味わうために。

自身の膣内を強化し、ただ八雲のイチモツを受け止める事だけに特化した。

ぼびゆるるるるっ!!びゅぶびゆるるるるっ!!!

「あああああッツツ♥♥♥♥♥♥」

何度も何度も代わる代わる犯されたことでバカになったのか、トンでもない量の射精を膣奥に送りこんでしまう八雲。視覚と聴覚を縛られながら発情した雌の匂いと甘い体液の味に満たされ、その上で鋭敏になった触覚には射精させる事に特化している膣肉が叩き付けられ続けた事で八雲の脳内にはビリビリと痺れるかのような感覚が走り続けている。

「あっ……んっ♥♥♥♥♥♥けるお♥♥♥♥♥♥こんなの絶対癖になるに決まってるわ……♥♥♥♥♥♥」

子宮に送り込まれた熱々に煮え滾った精液を感じながら、満足げに八雲へキスを繰り返す蛙水。もはやその思考には『健全なお付き合い』等といった言葉は消え去っていた。

「えへっ♥♥えへへえ♥♥♥♥♥♥皆も一緒に魔眼君のセフレになろっ♥♥♥♥♥♥」

「はあっ♥♥はあっ♥♥魔眼さんっ……♥♥わたくしにもまなこさんのが欲しいですわっ……」

「
正気を失ったかのように行為を見つめる眼は、ギラギラと情欲の炎を燃やしているかのように紅く染まっていた。

蛙水が八雲から引き離され、次にその身体へ跨ったのは……

「……耳郎、だ、よな……？」

「っ……」

荒い息をなんとか抑えながらも八雲の身体に手を添えながら上に跨り、そのイチモツの上に耳郎が乗った瞬間に誰か理解出来た八雲。今まで自身の上に乗ってきただけとは違う体重と肌触り、そしてA組の女子5人と交わってしまったのだから六人目だけ居ないなんて事は考えられなかった。

「じ、耳郎……いくら何でも『ノリ』や『悪ふざけ』でやる事の限度を超えてるぞ!」

「うるさいッ!」

「ぶグッ!」

目隠しをしている八雲の一言に頭突きで返答する耳郎。その頭は八雲の鼻先に直撃し、血こそ出さなかったものの相当な痛みと共に八雲を床に倒した。

倒れた衝撃でヘッドホンが外れる。

「う、ウチだって……『女』なんだよッ!そりや皆と比べても胸なんて無いし!可愛くも

無いし！アンタにとっちゃ魅力のカケラも無いようなヤツだけどツ！」

耳郎は、その目から雫を零した。

中学の頃から自身の容姿に若干のコンプレックスを抱いていたが、雄英高校に入学してからは特に顕著となった。同じ年齢である筈なのに生まれた『格差』に対して表面上に一切出さなかつたが、内心ではかなり気になっていた。

『ロック』と『セックス』というのは中々切つても切れない関係だ。耳郎はそういう事に対する興味というのは人一倍持っていた。『いつか男と付き合い始めたらセックスをするモンだ』という認識であり、事前学習も念入りに行っていた……が、中学生時代のある日の事だ。耳郎は偶々、クラスの男子達が隠れて行っている猥談を聞いてしまった。『やっぱ女はおっぱいのデカさだよな』と。『可愛くなきゃ勃たねえよな』と。

その男子達は、実は耳郎の事が好きであつたのだが他の男子達に対する牽制として態々そんな事を言っていた……というのが話の真相なのだが、色々な意味で純真だつた当時の耳郎にはそんな事までは分からなかつた。ただ一つの事実として、『自分はモテない』と認識してしまつた。更に間の悪い事に、直後偶々転校してきた女生徒の胸がデカく、そして顔も可愛い事から即座に学校のアイドルと持て囃されていた。

それから自身の容姿にコンプレックスを持ち始めた耳郎は『いや、アレが育ちすぎなだけでウチはまだ普通だから……』と思ひながらもコッソリと育乳体操を行っていた。

しかし雄英高校に入学した直後、耳郎は絶望した。女子が！全員！デカかったのである！何のイジメかと。

そんな事を気にするのはロックじゃないと嘯く自分が居る。可愛さを磨けと嘯く自分が居る。雄英から家に帰ればより一層育乳体操に力が入ったし、『可愛いポーズ』の練習を行う時間が増えた。だがそれで良いのか？『男に媚びる』事がロックか？と悩む時間もまた増えた。

そして、初の戦闘訓練を行った日の放課後に……本当のロックを視た。

「ウチも抱いてよッ！誰でも良いんでしょッ!? さっさと勃起してよッ!!」

「もう勃起しとるっ!」

涙を流しながら八雲の胸を叩く耳郎の返答として、両腕を繋いでいた手錠の鎖を破壊しながら腹筋だけで自身に跨る耳郎を逆に押し倒す八雲。金属の鎖をさらっと破壊しおっただこイツ。

自身の眼を塞ぐ布を取り外しながら、泣いている耳郎の涙を拭う。

「いいか耳郎よく聞けコノヤロー！女の子の価値は胸だけじゃねえし、滅茶苦茶可愛い顔してる癖に何言ってるんだって話だし、全身余すところなくメチャメチャ魅力の塊だろうが!! ほら見ろ！しっかりと見ろ！耳郎の痴態で俺のチンチン大興奮だぞ！」

「は、ハア!? それはさっきまで皆とエッチしてたからでしょ!? ウチのみっ、魅力のあるな

しに関係ないじゃん！」

「大有りだ！誰でも良い？んな訳あるか！魅力的な女の子の前に、男は勃起する。それが自然の摂理だ！胸が小さい事を気にして牛乳いっぱい飲んでたり、実はクラスの誰よりもエロい事に興味深々だったり、実はコッソリ『あざといポーズ』の練習してる女の子が魅力的じゃない訳ないだろうッ！俺の眼は誤魔化されんぞ！」

「はアアアア!!?なんでその事ッ——!?!」

勢いのまま、耳郎の唇を奪う八雲。そしてそのまま舌で徹底的にトロトロな表情になるまで攻め続けた。

「——っ、ふあッ♥はっ……はあーっ……な、にすんのよ……っ♥」

「言葉だけで信じられないと言うのなら行動で示す！」

「ッ!?!待ッ——あひッ♥」

先程まで行われていたクラスメイト達の痴態と、部屋に充満する性臭によつて準備の出来ていた耳郎の股間を優しく撫でながら耳や首元にキスを落としていく八雲。ちゅ、ちゅ、と敏感では無いトコロを順番に、マーキングするように、丹念に口付けしていく。しかしそれでいて高まった熱を下げないように快樂も同時に送り込んでいた。

「ふあっ！♥あっ……ひゃうっ♥」

首元から胸の中心、肩、脇、腕、お腹、そして脚といった部分にキスマークを着けて

いく。残されたキスマークを見て、まるで本当にマーキングされてしまったかのような錯覚に陥った耳郎は、その部分からじわりじわりと熱が送り込まれているように思えた。

そうして、体感では短い間に思えた愛撫を受けながら衣服を全て剥かれていた耳郎は、意地の悪い八雲の手によって引き起こされた大洪水の跡を見せつけられた。

「敏感なトコはまだ刺激してないつてのに、こんなグチョグチョになるなんて……本当に耳郎は可愛いなあ」

「ツツツ♥」

再び唇にキスを受けながら、股間だけでなく全身の力までトロトロに溶かされてしまった耳郎はもはや軽口を叩く気力すら湧かない。フニャフニャになった耳郎を抱きかかえ、密着しながら、その秘部にイチモツをあてがった。

「誰でも良い訳じゃない。俺は今、耳郎だからこそここまで勃起してんだ。責任取れよな」

「……うん」

ついさつきまでとは違ってかわって一気にしおらしくなった耳郎にもう一度キスをしながら、その割れ目にイチモツをゆっくり挿入していった。

「あつ……あつ♥あつ♥あつ♥大きいのがつ……挿入つて……ツ！ツツツ……♥♥

「オモチャなんかよりも遥かに凄い圧迫感と快感がゾクゾクと背骨を通って脳天まで突き抜けていく。大きなイチモツがゆっくり、ゆっくりと奥まで侵入してくるが、事前の愛撫によって徹底的に抵抗力を奪われた膣は異物を排除しようと固く硬直するのではなく、むしろ『もつと奥まで来て来て』と言わんばかりに膨れ広がってイチモツを受け入れる。

完全に堕ちた膣内の最奥まで一切止まることなく、むしろ一番奥に届いてからも更に膨れるように受け入れていき、あつという間に八雲の大きなモノを根本まで咥えこんでしまった。

「……マジか」

「はぁーっ♥はぁーっ♥う、嘘お……♥ゼンブ入っちゃってるし……♥」

根本まで咥えこんだ後は広がる事無く、むちゅ〜っ♥と膣全体で絡みつくように締め付けてくる。挿入しているだけで気持ち良くしてくる名器によって、一度バカになったイチモツは即座にこの膣の所有権を主張するために射精しようとする。

内心で歯を食いしばりながら射精を堪える八雲だが、その胸に耳郎のイヤホンジャックが当たっている事に気が付かなかった。

「はっ♥くっ♥ね、え八雲っ……ッ♥わかっ、てる?♥ウチ、今日危ない日なんだけどっ

「?♥」

「ツツツ!!!?」

八雲はその言葉を言われてから、ようやく意識してその『数値』を確認した。耳郎響香、妊娠率……75%。

その数値は……例え直接膣内に射精していなかったとしても、精液に塗れた肉棒をゴムも無く膣内に挿入した時点で妊娠してしまう事も十二分に考えられる数値であった。既にアウト寄り。まだ受精はしていないようだがそれも時間の問題であろう。ましてや、直接中出ししようモノなら……。

引き抜こうにも、それを察知した膣肉が全力で離れまいとちゅううつ♥と吸い付いてくる上に、耳郎は八雲に腕を絡めて『首相撲』の姿勢で逃がす気が一切無い。

「ひっ♥ふうッ♥イクのッ♥止まんないッ♥ほら八雲おツ?♥さつきまでの威勢は何処行つたのよ♥」

淫靡に蕩けた三白眼が間近に見える。鼻と鼻が当たる距離で見合いながら、数cmずつ腰を揺すっては熱い息を吐く耳郎から逃げられずに射精まで秒読み段階となつてしまった八雲。

バクバクと鳴る互いの心臓の音色によって、思考が完全に溶けてしまった耳郎は脚を八雲に強く絡め、絶対に逃がさないと一番奥に固定した。

「……『八雲響香』って名前、良いと思わない?」

耳元で囁かれた言葉によって、遂に我慢の限界を迎えてしまった。

ブビュツ!!ビュブルルルツツツ!!

「ツああああああ♥♥♥♥♥」

ついにやってしまった、危険日ナマ中出し。妊娠させてしまうリスクが高すぎる、最悪の快楽。

しかし、えてして『最悪』と『最高』は紙一重であったりするものだ。

あれだけ大人数に精液を搾られた後だというのに、今までで一二を争う程に大量の精液が迸る。射精させる為に存在する膣肉は『もつと出せ♥全部ひり出せ♥』と激しく収縮を繰り返し、精液を受け止める為の子宮はその口をかつぼりと開けて鈴口に吸い付く。

魂さえ抜き取られる程の快楽を感じながら、『最悪』が脳裏によぎり続ける八雲。しかし対して耳郎は『高校生で妊娠とかサイコーにロックじやん♥』と完全に産み育てる気で新たな命が宿る快楽を受け止めていた。

『ウチの事魅力的って言ったんなら最後まで責任とれ♥』とキスを繰り返す耳郎に、面白く思わないのは他の五人……特に八雲の『彼女』である葉隠と八百万であった。二

人はふくれっ面（葉隠は八雲以外には見えないのだが）で『ちゅっちゅ』を繰り返す八雲と耳郎を見ていた。

五人は耳郎を貶めるつもりは欠片も無い。全員が全員その機会さえ在ったのなら、自己評価の低かった耳郎に対して己の持てるだけの語彙力で褒めちぎる事だつて有り得ただろう。

だがソレはソレ、コレはコレなのだ。最後に横から美味しい所を搔つ攫つてつた相手に対して何も思わないというのは無理がある。

「……ねえ、魔眼ちゃん」

「ンむッ!？」

最初に動いたのは蛙水。その長い舌がシュツと伸び、八雲の首に一周巻き付いた後その口内へ入り込んで足踏しだす。

「魔眼さんっ」

「ンんん!?!？」

次に動き出したのは八百万。八雲にしがみ付いている耳郎ごと布団に押し倒し、その尻穴に舌を這わせた。

「ちよつとオイタが過ぎちやつたかな〜?」

「んひゃあッ!?!？」

八雲の下敷きとなつてしまつた耳郎の小さな胸を突如揉みしだき始めたのは葉隠自身。八雲の手によつて覚えさせられた手技を徹底的に教え込んでいく。

「んぶ……っ！おツ……いッ、お前らオフザケが過ぎるぞッ！」

「今は私達のターンや」

「ッ!?浮っ……!!?」

麗日が八雲を布団から浮かし、耳郎と引き離れた上に八雲の反撃を封じ込めながら八雲の乳首を舐めて攻める。

「魔眼お〜♥アタシがキレーにしてあげるねっ♥んっ……ぢゆるるるっ♥」

耳郎から離れ、体液に塗れているイチモツに丁寧なお掃除フェラを行うのは芦戸。

床から少しだけ浮いている八雲の脚を二人掛かりで押さえ付ける八百万と芦戸は、挟むように八雲の股に顔をうずめる。

立ち上がつて、八雲の口内を蹂躪する蛙水と乳首を舐め回しながら反対側を指で擦る麗日。

床に倒れたままヒイヒイ喘ぐ耳郎に、泣こうが喚こうが徹底的にオシオキを続ける葉隠。

更に部屋の外では、高校生達の痴態に完全に目を奪われてしまつているプロヒーローのピクシーボブが自身の股間を慰め続けていた。

そして建物の外側から窓越しに内側を見てしまったラグドールと、洗汰君を寝かしつけた後見回りをしていたマンダレイが揃って激しすぎるプレイに硬直していた。
長い……長い夜はまだまだ始まったばかりであった。

林間合宿・二日目で・B組女子達とえつち

「お前はツ！お前は本当にいつも悪い事考えてツ！」

「お〃っ♥♥♥ごめっ♥♥♥にやひやあいつ♥♥♥」

「そんなに中出しして欲しいならしてやるよ透ツ！」

「あ〃あ〃あ〃っ♥♥♥勝てないっ♥♥♥魔眼に勝てないよおツ♥♥♥♥♥」

空が白んできた頃、俺は透のケツ肉を挿んでは激しいオシオキを行っていた。聞けば、クラスの女子全員に俺の力を使わせて効率的なトレーニングを行わせるという『案』を相澤先生に相談し、OKを貰ったらしい。いや何やってんの。しかも関係者である俺に対して一切何も言わず、突然呼び出してからの目隠し&手錠拘束コンボ。濃厚な俺でもそりや怒るといふものだ。

そういうわけで首謀者である百、お茶子ちゃん、透には順番にオシオキを行っている。百にはクリイキ地獄を、お茶子ちゃんには超子宮マッサージを、そして透にはケツイキ地獄を御見舞い。嬉ションどころか全身の穴という穴から体液ひり出してイキ続ける姿はホントもう即射精モンですね。

「ひイイイツツ♥♥♥ゆるひツ♥♥♥ゆるひへくりやしやい魔眼しや

んツツツ ♥♥♥♥♥ 頭こわりえちやいましゆわあツツツ ♥♥♥♥♥

オーラによって無理矢理快感強化させたクリトリスに吸引パイプを吸い付けて縛ったまま放置されている百は、お返しとしてプレゼントした『目隠し』を自身の涙でビチョビチョに濡らしながら腰をガクガクと震わせてイキ続ける。

「お”お”……………♥♥♥♥♥ンお”……………ほお”お”……………つ♥♥♥♥♥」

完全に気を失いながらも潮吹きを止めないお茶子ちゃんの子宮内には俺のオーラが叩き込まれ、グネグネと強引に子宮を操作して延々と高められていく快樂によって気を失いながらも膣から本気アクメ汁を垂れ流し続ける。

そして透には、一晩で縦割れアナルになるまで徹底して使い込む。逆流した精液を垂れ流しながら揺らすケツは本当に最高かよ。まあそれはそれとしてオシオキなので頭ブツ壊れる寸前までいくからね。

「しんじやう……………♥♥♥♥♥魔眼にえっちでころされちゃう……………♥♥♥♥♥」
「大丈夫、エッチじゃ死なない」

まあ死なないように全身オーラで強化するんですけどね！強化が無かったら？さあ？

そうして三人には徹底的なオシオキをした後、身体を洗うためにもう一度露天風呂へ向かった。うーんもう間もなく日の出ですね。

「えへへ……魔眼っ♥」

「魔眼ちゃん……♥」

「……な、なにジロジロ見てんの……♥」

三奈ちゃんと梅雨ちゃん、そして響香の三人による洗体サービス。たまんねえなオイ！お返しに洗体してあげるね。奥までしつかりね。道具（意味深）使うけど問題ないよね！

「今更だけど三奈ちゃん陥没乳首エツロ！吸い出してあげるね」

「待ってツ♥♥♥そこ凄いピンカンだからツ♥♥♥んやああツツツ♥♥♥」

「梅雨ちゃんの肌はエロいなあ。手に吸い付いてくるエロさだ」

「ケロツ……ツ♥♥♥さ、触り方がやらしすぎるわっ♥♥♥」

「ほら響香、大事なトコロまでしつかり洗ってやるぞ」

「待ツ♥♥♥おツ♥♥♥んぐうううツ♥♥♥」

三人の身体を洗った後、時間が許す限り全員に性技を教え込んでいった。

じゅるるるっ♥ぐぼっ♥ぢゅぷぷっ♥ぢゆるっ♥ちゅぷ♥

「おう……ダブルパイズリフェラやばっ……」

「ウチに出来ない事を……」

「響香には別の事教えてあげるから！」

そうして三人にマーキングするように精液をぶっ掛け、改めて一人ずつ喉奥に射精した。

「んっ……ゲエツプ♥あはっ……精子飲んでゲツプしちゃった♥」

「精液の味……とても、好きよ……♥」

「ゴクツ……ん、ふぁ……♥腹、熱っ♥」

皆の身体から垂れ流れているオーラに纏まりが出て来た。オーラの認識は問題無いようだな。

それからもう一度身体を洗い流し、ひっそりと部屋に戻って短い時間眠りについた。ほんと……こういう時短い時間でも十分な休息を取れる力は助かる。



午前6時。男子達は皆寝不足な雰囲気醸しながら雄英指定ジャージに着替えていた。

「八雲、お前昨日は何処行ってたんだ？」

「ん？あー……まあ、今日の準備をな」

あくびを噛み殺しながら着替えている上鳴の質問にボカしながら答える。

「テメエ女子んトコに行つてシッポリしてたんじゃねえだろうなあ!!」

「んな訳ねえだろアホ」

流石峰田、エロい事にかけては鋭い。昨日の内に仕留めておけばよかつたかもしれない。

「ひっ!?今なんか悪寒が!」

「ほれ、さっさと行くぞ。今日は昨日よりもヤバイかもしれない」

「え？あ、おい八雲!」

まだ着替えてる最中の男子達を置いて先に外へ向かう。個性強化訓練……漫画やアニメ等で言えば修行編だ。しかも相澤先生監修とくれば……地獄にならない訳が無い。

「おはよう魔眼ちゃん」

「おはよう梅雨ちゃん。眠れたか?」

「ええ……魔眼ちゃんの力は凄いわね。一時間しか寝てないのに体調は万全よ」

地獄を見るハメになるのなら少しでも長く目の保養を行うのは至極普通だな!一晩中抱いておきながら何言ってるんだって?それはそれ、コレはコレ。

このオーラを操る技術が有れば、実質一日24時間+睡眠時間となる。うーん合理

的。……相澤先生と寝るとか言われないよな流石に。そうなったら何が何でも拒否しなきゃ……。

そうして皆着替え終わり、個性強化訓練が始まる。その内容は……想像通り過酷を通り越したナニカだった。ひええ怖。

俺の訓練は『死角に居る者のオーラを感知する』＋『虎の我ーズブートキャンプに参加する』事で集中する時間を取らずとも探知できる能力の向上を目指す。

「動きに集中しろ!!!」

「イエツサアアア!!!」

『我ーズブートキャンプ』自体は問題無いのだが、如何せん動きが複雑すぎるので『視る』事に集中出来ない。『視る』事に少しでも集中しようとすればワイプシの虎さんから拳が飛んでくる。だからといって逆に動きだけに集中してしまうと目の前のムキム筋肉によって俺の眼から脳が腐っていく気がする。ヤベエ。

一緒に参加している緑谷は今にも死にそうな顔して手足を振っている。

「さあ打ってこい!!!」

「イエツサツ!! S M A A A S H!!!」

「良いパンチだ! 筋繊維が千切れてない証拠だよオ!!!」

ビヨンと伸びたように見える腕が緑谷を殴り飛ばす。哀れにも白目を向きながら一

瞬宙を舞う緑谷。普通に酷い。

「次は貴様だ！」

「サーイエツサアア!!」

オーラを纏いながら接近しての右フック。虎さんは通常の人体ではありえないような柔軟性を見せ、腰からCの字を描くように回避した。

「狙いが甘いッ!!」

「ンまだまだア!!」

「ぬう!!?」

ぐにゃんと曲がった背が戻る勢いのままに放たれた拳を、左の拳を振るって迎撃する。さっきの右フックは囷。こういう時は、やるなら本気で全力で。オーラによって岩よりも固く強くなっている拳は虎さんの拳とぶつかり合い、互いの身体を弾き飛ばした。

「良い膂力だ！だがまだ足りんツ！我ースブートキャンプのレベルを上げるぞ!!」

「サーイエツサアア!!」

「ひいひい!!」

緑谷が情けない声を上げてるが、まあ頑張っついてきてほしい。みどいあがんば

えー（棒読み）

『身体だけじゃなくしつかり眼にも意識回しなさい!』

マンダレイの叱咤がテレパスによって届けられる。いかん、やはり思考が筋肉に犯され始めてきた。女体を見ねば……癒しを見ねば……あれ?なんで透全裸なん?

「よそ見とは良い度胸だ貴様!!」

「イエツぐはあーッ!?!」

透の全裸に気を取られた俺は虎のズームパンチ（仮称）を食らい吹き飛ばされる。

地獄のトレーニングはまだまだこれからだ!八雲魔眼先生の次回作にご期待ください!ご愛読ありがとうございます!!



「疲れた……」

全身の気力と言う気力を使い果たしたような、乾燥した雑巾を更に極限まで絞ってひねり出した水みたいな声がかから出てくる。

俺の言葉が聞こえたクラスメイト達は何を言うでもなくウンウンと気持ち首を動かして同意していた。

というかなんか途中で、俺だけ訓練量めっちゃ増加した気がするんだけど気のせい?な

んか無我夢中過ぎて変なこと口走つてた気がするが……。

「(つーか八雲のヤツヤバクね……? アイツ素手で大量の木をへし折つたり砕いたり……その上眼ビームで叩き切った木を燃やして乾燥させるとか……)」

「(頭が……頭が痛てえよお……)」

「(環境破壊は気持ち良いZOY★とか言つてたな……)」

ウイスピーウツズは元から居ないしタイガー・ウツズも居ない事は確かだ。いやそんな事はどうでもいい、重要な事ではない。

虎の言葉によつて午後からは我ーズブートキャンプではなく、辺りに生えてる木を素手で伐採し薪を作るように指示された。勿論その間周囲のオーラ探知は徹底して続ける。

オーラ全開で全身を強化しながら木をへし折り、割り砕き、腕一本分程度の太さにまで叩き切る作業を全て素手で行う。……これ普通の人間がやる作業ではないと思うのですが。おかげで腕がバキバキだ。

そんなこんなで夕方。ワイプシの指示によつて夕飯は俺達が作る事に……なったのだが如何せんこの両腕。震えて動かん。

「だ、大丈夫なん魔眼君……?」

「感覚的に寝れば治るが……少なくとも後一時間は動かせねえなこれは……」

「そ、そっか……」

料理は得意……と言う訳ではないが、まあ恐らく一般的な男子高校生よりかは遥かに出来る方であろう。しかし生木を素手で粉砕していた所為で腕は動かない。皆には申し訳ないが俺は皮むきや皿洗いすらマトモに出来ねえ……スマヌ、スマヌ……。

「ま、まあホラ！皆が使う火の燃料は八雲君が作った薪だから！」

「それ俺の活躍って言うって良いんか……？」

そうして皆の協力で夕飯のカレーライスが出来上がった。うーん……良い匂いですね。食欲が湧いてきます。

出来上がったカレーライスを皆が順番によそっていくのを眺めていると、隣に切奈が座ってきた。

「八雲ー、おつかれさん。個性強化訓練……ヤバかったね」

「んおう。切奈もお疲れさん」

訓練の途中からB組も合流してきて、そりやあもう色々とてんやわんやだった。A組だけでもかなり騒がしかったのだが、其処にB組も入ってそりやあもう凄かった。それから全部を視る勢いで個性鍛えるよーってテレパスで伝えてくるマンダレイマジ鬼畜。眼が二つじゃ足りねえよ……。

夕飯時でも騒がしさは変わらない。B組の……物間、だったか。が突つかかかってい

てやいのやいの言っている。

と、気が付けば切奈は自身の手を飛ばしてカレーの乗った皿を俺に渡してきた。

「その腕無理に動かせないでしょ？アタシが食べさせてあげる」

「……それはつまりアレですかね。アーンってヤツですかね」

「嫌なの？」

「まさか」

切奈のアーンとか幾ら払えば良いんですか？

とは言え、だ。こんな人目につく場所でイチャイチャするのは恥ずかしくないのだから。勿論俺は嬉しいよ？人前でも構わずイチャつき倒したいよ？でも切奈ってそういうのはあんま好きじゃないじゃん。

……おい、その顔明らかに悪たくみしてる顔だろ。そうだろ。そうだと言えつ
！

「……さあ、何のことかなあ？ほら、アタシ達の作ったカレー食べてみてよ」

「俺の前で隠し事とは良い度胸だあ……ムグムグ……うーんスパイシー」

かなり味濃い目だが……お肉の旨味とスパイスの辛みが抜群だね。疲れた身体にガツンと来る濃さが堪らん。カレーが嫌いな男子高校生なんて居ません。

ブチブチに千切った筋繊維を修復するにはとにかく食う、喰らう、食い尽くす！空

きつ腹は最高のスパイスとは良く言ったもんだ。

モグモグ食べてると、切奈とは反対方向の俺の隣にカレーを盛ってきた透が座つてきた。

「こら魔眼つ。B組のじゃなくて、ちゃんと私達が作ったカレーも食べなさい！」

そう言つて透はスプーンでカレーを掬つて俺に差し出す。あーん……うん、美味しい。バチツと叩きつけてくる辛さとニンジンやタマネギ等の野菜本来の甘さのハーモニー。やっぱこれくらい辛くても良いよね。

「ねえ、どっちの方が美味しかった？」

「もちろんアタシ達B組の方だよねえ？」

「一口だけじゃ判断つかねえなー」

「しようがないなあ。はい、あーん」

あーん。うまい！思わず笑顔になるねえ。空腹というスパイスも良いが、美少女二人に囲まれて交互に食べさせてくれるというシチュエーション……もうね、ここが天国かよ。

そうして俺は二人に餌付けされるようにカレーを食べていた……。

「……物間、オレは今初めて『殺意』ってモンを覚えたぜ……」

「うん、それボクに言つてどうしたいんだい？」

「チクシヨウ……なんで八雲のヤツばかりい……！」

「だ、大丈夫だつて峰田！オレ達にもチャンスは有るつて！」

そんなものは無い。（無慈悲）

??

風呂の時間も何事もなく……いや、一名懲りずに覗きを敢行しようとした者が居たよ
うな気がするが木の下に埋めて貰つても構わないよ。むしろ埋めよう（殺意の波動）

そうして見つけた生ごみを袋に詰め、外で処分して埋めようと玄関に向かうと其処に
緑谷と飯田の二人が居た。

「八雲君!?その背負つてる袋は一体何!?」

「八雲君、もうじき就寝時間だ！外に出るのは良くないぞ！」

「ん?ああ……ちよつと生ごみを処分しようとな……」

『ンンンーッツツツ!!!』

ちつ、起きたか……

背負つてる袋がバサバサ暴れはじめ。

「袋がモゾモゾ動いてッ——!!!?」

拘束が甘かったのか、袋から峰田が顔を出した。

「ブハアッ!!! たつ、助けてくれエ緑谷！飯田ア！オイラ八雲に殺されちまうよおー!!!」

「殺されっ?!? 八雲君！どういう事だ！」

「こいつ覗き魔。切奈の裸見ようとした。故に殺す」

そう、コイツは許されざるアレを再び行おうとした。少なくとも俺の眼が黒いうちは絶対覗きなんかさせない。まあ、眼は紅いんですけど。

「峰田君……」

「ち、ちげえよ！誤解だ！オイラはちよつと散歩してたら、偶々迷い混んだ先に女風呂が有ったってだけで——」

「昨日内側から仕掛けてダメだったから外から仕掛けようとしたところを仕留めた。故に殺す」

「八雲君の怒りが有頂天過ぎて『故に殺す』が語尾になってる!!!」

暴れる袋を押さえ付けながら再び外を指すが、進行方向に飯田が立ち塞がってきた。ええい邪魔だ。

「や、八雲君！『殺す』など例え冗談でもヒーローとして言うてはいけないぞー！」

「……安心しろ飯田。冗談じゃねえから」

「尚更たちが悪いのだがッ!!?」

「チクショーッ!!! 良いじゃねえか少しぐらいよオ!!! 八雲お前毎日のようにその眼で女の裸覗き放題なんだろオ!!? その上好き放題出来る彼女も居るんだろオ!!? オイラにだって良い思い分けてくれてもバチ当たんねえだろ!!!」

「峰田君! 例え出来る出来ないに関わらずともそういう言葉は容易く人を傷つける! 止めるんだ!」

飯田は良い事言った。個性でそういう事が出来るというのは、えてして『レットテル張り』の対象になり易い。そんな事を大声で言うなんて……

「そうだと峰カス、そんなに花火のように散りたいなら素直にそう言えば良い。そもそも『毎日女の裸覗き放題』? アホ言え……起きてる間ずっとだ」

「ウボエアアアアアアアアア!!!」

峰田が奇声を発しながら背中では暴れる。ああ可哀想に……この変態性を表に出さなければそれなりに人気が出ると思うんだが……小動物的なの言うか、珍獣的な……。

「峰田が凄いと哀れだから、線香も要らないくらい派手派手に燃やし尽くしてやるね」

「言動が鬼畜を通り越して恐怖!!!」

「お前ら、何騒いでる。もうすぐ就寝時間だ、はよ部屋に帰れ」

緑谷の独特な突っ込みを聴きながら峰田を引きずっていると、相澤先生が現れた。

「先生助けてくれエ！オイラマジで八雲に殺されちまう！」

「あ？」

「かくかくしかじか」

「……なるほどな」

超合理的説明方法、かくかくしかじか。

と言うか峰カスこいつ、自分が先生に助けて貰える立場だと思ってたのか？

「八雲、例えどんな理由があれど『ヒーロー』が自身の感情だけで敵と戦うのは禁忌だ。^{タブー}言わなくても分かってるだろそれくらい」

「……おっす」

「まあそれはそれとして峰田を事前に止めたのは良くやった。ソイツはオレが預かる。

……峰田、お前は補習組と一緒に反省文だ」

「チクシヨウ！なんでオイラばかり!!!」

「自業自得……」

お釈迦さまだつて泣きながらテメエの顔面に右ストレートぶち込むレベルのド変態クソ野郎が『なんでオイラばかり』だと？反省文だけで済んで良かったな今こうして何事もなく高校生やれてる時点で一種の奇跡だつて思い泣きながら感謝してろこのビチクソがツ!!!つて考える俺であつた」

「出てるッ!!全部口から出てるよ八雲君ッ!!」

「八雲君キミほんと爆豪君以上に口悪いなッ!!」

「あらいやだ、つい咄嗟に口からビチクソ本音が垂れ流れてしまいましたわオホホホホ」

「口の悪さが隠しきれないよッ!」

「うむ……そこまで彼女の事を想えるのは美徳だと思うが……少々行き過ぎてないだろうか……?」

「お前らにも『自分より超大事なモン』が出来りやア俺の気持ちも少しは分かるだろうよ」

「そういうものなのか……?」

こいつらが所帯を持つトコなんて想像出来んが、とりあえず好きな女の子があああのクソ葡萄に穢される想像してみろ。(殺意で) トぶぞ。

『だから僕は悪くない』

「いや、まあ……覗きは犯罪だし、未然に防いだのは勿論良い事なんだろうけど……なんだろう、八雲君見ると凄く釈然としない」

「うむ……そもそも八雲君はどうやって峰田君の覗き行為を察知出来たんか?」

「昼の訓練続けてたら眼がチカチカしてな。眼を休ませるために窓の外見てたら峰カス
のオーラが見えて……」

「ああ、うん……八雲君の眼はサーモカメラより高性能だからね……」

「……むっ！マズい、そろそろ就寝時間だ！二人とも、部屋に戻ろう！」

「おう………んの前にちよつとトイレ」

峰田を相澤先生に渡し、二人と別れてトイレに入る。部屋から少し離れているのがちよつとアレだなあ……ん？これは……なんだ？オーラだけ浮いて……？

「捕まえた」

「カクホー！」

「うおおトイレ中に攻撃は反則ですことよ!!?」

浮いていたオーラが突如俺に向かって飛んできたかと思えば、同時に角の様に見える何かが高速で飛来してきた。

小便出すために社会の窓全開で中身を出していた無防備な状態の俺に当たり、俺を宙に持ち上げていった。いやあの……トイレの最中なんですけど……。

声が出した方向を向けば、そこにはおっぱいの大きい女の子二人が！ここ男子トイレなんですけどオ!?

「貴方が切奈の彼氏で希乃子のセフレ……うらめしい……」

「シンミヨウにオナワにつくネー！」

「テンションの差！」

ジャパンホラー感のある女の子とアメリカな女の子二人の手によって確保された俺は、そのまま『猫の間』に引きずり込まれた。道中にすれ違ったピクシーボブの悟りを開いたかのような泣き顔が妙に印象に残った。

そして猫の間の中ではB組女子達が勢揃い……おう切奈、説明して貰おうか。

「その前にさあ……A組の全員コンプリートしたらしーじゃん？ それ説明してくれない？ 今」

「あつ……」

別に好きでコンプリートした訳じゃねえし!? 流れに任せて美味しく頂いたけど俺から望んだ訳じゃねえし!?

……すみません許してください。

「えーどうしよつかなあ〜?」

「次に切奈は『ん〜皆ともシてくれたら許してあげる』と言うー!」
「ん〜皆ともシてくれたら許してあげる……ハッ!」

ンンン知ってたアアア!!! だって切奈の顔、希乃子ちゃん紹介した時と同じ顔してんだもおおおん!!! つまりさあ! それってもうそういう事じゃん!!!

「ほ、ほら切奈、やっぱ止めとこ! 八雲も変なことに付き合わせちゃってゴメンね!」

「ナニ言ってるデスカイツカ! SEXしてストロングなれるならやるべきネ! 『やれば

出来る』って偉い人も言ってたヨ！」

「高校生の身で妊娠はちよつとどうかなって男の俺は思う訳なのですが」

妊娠するかもしれない行為をバンバンやってる事を棚に上げて言いますけどもね。え？つてかB組の子にも俺の『力』の事知られてる？

「希乃子がね……」

「エツチするだけで強くなる……そんなウラメシい話聞いて真相を確かめないヒーロー科が居ると思う？」

「ん」

「それとキノコサンをSEX FRIENDにしたヤクモサンのBIG MAGNUMにタイヘンキョーミをイダキマシター！」

「つい口が滑って皆に言っちゃったノコ！テヘペロ☆」

「女子ってホントそう言う所あるよねツツツ！！！」

赤裸々な性事情の暴露……あると思います。なんで？

「……あの、やはり無理に行為を迫るのは良くないかと」

「ここまでしつかりついて来ててソレは無しでしょ？むつつり茨」

「なっ!?わ、私は決してムツツリでは!?!」

興奮度が切奈と希乃子に次いで高い。おめでとう、アンタはしつかりとしたムツツリ

スケベだ。

で、フンフン鼻息鳴らしながら角とテレキネシスの力で釣り上げられている俺のズボンに手を掛けるこの子は間違いなくオープンスケベだろさては。

「ん」

「『ん』じゃねえわ」

交際経験0、男性経験0、自慰回数は……うん、性欲値が低いって事は単純に好奇心で人の股間に興味を持つてるんだなオメー。つーかちよつと待って……やだこの子マイペースが過ぎるんですけど!?ズボンとパンツが引つ張られッ!?アーツ!!!

「なあッ……!!」

「嘘オ……」

「Wow… So big…」

「……臭」

「トイレしてる時に連れ去られたからなア!!ちゃんと毎日シツカリ洗ってるわ!!」

チクショウ! 帰らせろ!!

バタバタ暴れようとしても角とテレキネシスのダブル拘束によつて全然動かせない。

ああんフニフニ触るのらめえ。

「柔らかい……でも、芯がある感じ」

「ゆ、唯さんツ!？」

「ちよ!?!唯!?!汚いって!!」

「うわあ、唯ってほんと物怖じしないなあ……」

「味はしょっぱい」

出会ったばかりの女の子にチンチン舐められるのは流石に初めてだなあ……マイペースが過ぎる。

「えへへ……魔眼のタケリタケちゃんはココも弱いノコ♡」

「うおツ……!？」

希乃子ちゃんが玉の裏をレロレロと舐め回す。こんなん……勃起するに決まってるやん……。

「ん……!？」

「な、なっ……嘘っ、うそでしょ……!？」

「Oh my god……ジャパニーズウタマロ……」

「……ウラメシすぎじゃん」

勃起チンチンを見ての反応である。……ん?テレキネシスの子は男性経験が1、角の子に至っては4……ほう、興味深いですね。

「……ねえ唯、ちよつとそこ退いて?アタシがフェラのお手本みしてあげるからさ♡」

「……………」

「せ、切奈…………？ねえ、本気でやるつもりなの…………？」

「えー何言ってるの一佳？彼氏のチンポ勃起させておいて抜かない訳無くない？」

「ああ…………神よッ…………！」

えーいもうどうにでもなれー（死んだ目）

切奈が俺の前で跪いてイチモツにキスをする。その後俺の眼を見て…………ニヤアと笑った。ああ、嫌な予感するんじや。

切奈の舌がベロオ♥と亀頭から裏筋に掛けて伸びた…………と思つた瞬間、一息にイチモツが切奈の喉奥まで入り込んでいった。フェラチオ超えてディープスロット。ねえ、フェラチオのお手本じゃない？お手本としてはダメな部類じゃない？

ぶぼっ♥ごぼっ♥ぶっぼっ♥ずぶぼっ♥

切奈は目から涙を零しながら、喉を膨らませてイチモツを何度も出し入れする。時折喉奥をひねるかのように首を動かしてイチモツに与える刺激を変え、激しい行為を続ける。

「あ…………ああ…………」

「せ、セツナサン…………」

「ん」

「ウラメシ……」

精液を搾り取る為だけの下品なディープスロートによって一気に最大硬度へ固められたイチモツの射精の兆候を感じたのか、俺の腰に両腕を回して強く抱き付くようにイチモツ全てを喉奥まで突き入れる切奈。こんな我慢できるかよっ……！

びゅるるるっ！ぶびゅううーっ！

喉奥から胃に精液を叩き込み、存分に飲ませる。

切奈も喉をグリグリ動かして精液を残さず飲み込んでいく。

ずっ……ぢゅるるるっ♥ぶぼおっ……♥

「んっ……え〱ほッ！はっ……ああ♥ほら、こんな感じ♥」

完全に喉奥が性感帯として開発され切った表情を浮かべ、口の端から精液を垂らしながら淫靡にクラスメイトにニヤニヤ笑いかける切奈。大変えっちです。

「き、希乃子もアレ出来んの……？」

「流石に無理ノコ……あ、でも魔眼に無理矢理喉奥犯されるのもイイかも……♥」

ふーっ♥ふーっ♥と発情したのか腰をフリフリ揺らし始める切奈と希乃子。うーんハードな予感がやってまいりました。……お？角とテレキネシスの拘束が緩んだので今の内に脱出。

「お手本というのならセックスから見せるべきだと思いました」

「んアひ!? ♥♥♥」

切奈のケツを掴み、そのズボンを剥ぎ取る。紫のレースパンツをずらして、後ろからイチモツを宛がう。

「あつつ♥♥♥ちよ、魔眼おつ♥♥♥待つてつ♥♥♥待つてつてばっ♥♥♥」

「俺に女の子差し向けて、最後に激しいオシオキえっちするのクセになっっちゃったんだよな切奈」

「ツツツ~~~~?!? ♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

切奈の顔が真っ赤に染まり、涙目になる。さつきまでディーブスロートしてたからつてもあるだろうが、凶星を突かれたせいもあるだろう。ホント切奈ってこういう所可愛いよなあ……それはそれとしてオシオキするけど。

「じゃあ皆にアへ顔晒そうか」

「待つてゴメンほんと許しイイイイイツツ♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

初っ端から全力のピストン。切奈のケツ肉ごとブチ犯す勢いで腰を叩き付け、更にオーラで強化した最大サイズで切奈のマンコを挟りぬいてあげる。

一瞬で全身の力がトんだ切奈は部屋に敷いていた布団の上にケツを突き上げながら倒れ、生オナホに変わった。

「ほら切奈、顔上げなきゃ皆にいき顔見せられないだろお?」

「ん”お”お”お”お”お”ツ♥♥♥♥♥お”お”お”お”お”ツ♥♥♥♥♥ん”や
 “あ”あ”あ”あ”♥♥♥♥♥」

刹那の肩を引き上げ、皆に切奈のだからしないイキ顔を見せつける。白目を向きながらもヨダレを垂らして笑顔を浮かべる切奈を見て皆の顔が引き攣った。

抜けるギリギリまで腰を引いて、一気に一番奥まで叩き付ける。切奈の膣及び子宮、その周辺神経が今までの激しいセックスによって鍛え上げられたからこそ出来る子宮貫通プレイ。叩き付ける度に子宮口を抉じ開けて子宮壁に龟头を突き刺し、引き抜く度に高いカリ首で子宮口を引つ掛けて引つ張り出そうとする。

慣れて無ければ文字通り内臓を掻き回される苦しみを味わうプレイだが、切奈は並の女の子じゃない。身体にぶつとい肉棒が突き刺さり、引き抜かれる行為ですら苦しみ無く快樂だけを貪るト変態に育ってしまった。膣肉をイチモツが擦り上げる度にギューギューと絶頂締め付けをするせいで俺もあつという間に射精してしまいそうになる。

ドチュツ♥ドチュツ♥と切奈の膣内を耕し続け、ごりゆつ♥ごりゆつ♥と切奈の子宮を突き伸ばす。一突き毎に全身を震わせて絶頂してる切奈の膣内にオシオキ中出し

……!

ぶびゆるるるるっ!!!びゆるるるるる!!!

「ん”お”お”お”お”ツ♥♥♥♥♥」

みつともない喘ぎ声をあげて背を反らせる切奈。本当にみつともなさ過ぎて連続射精しそうな程好き♥

その体液まみれの顔を抱き寄せ、濃厚なキスを行った。

「ツツツ♥♥♥♥♥~~~~ツツツ♥♥♥♥♥」

精液を出し切り、切奈から離れればアへ顔を浮かべたまま布団に崩れ落ちた。膣からイチモツを抜けば、結合部から射精してるかのように勢い良く精液が逆流してきた。

このまま気絶した切奈に気付けを行って二回戦に行きたい所だが、他の子達も居る事だし止めておく。でも期待チンポがいまだに最大仰角。手頃なオナホは居ないかなー？

「はっ♥はっ♥魔眼さまっ♥魔眼さま専用生オナホっ♥精液専用ゴミ箱が準備できてるノコッ♥」

希乃子が布団の上で仰向けに寝転がり、M字開脚して準備万端マンコを見せつける。早く早く♥とヒクヒクおねだりしてるのが可愛いですね。

「いただきます」

「召し上がれえツツツ♥♥♥」

おっほ……っ！やっぱ希乃子マンコ熱すぎだろっ！精液を搾り取る専用の搾乳機に育った希乃子マンコは、全体が俺のイチモツにピッタリフィットして余すことなく気持

ちいいところをしゃぶってくる。

そのままトントンと膣奥をノックすれば、快楽に完全屈服した子宮口がカポツ♥と開く。ごほうびに子宮内もイジメてあげるね！

「んほおおおッ♥♥♥」

だらしなない喘ぎ声を上げて子宮内にイチモツを受け入れる希乃子。希乃子はおっぱいも敏感だから一緒に遊んであげよう。

「ひきやあああッ♥♥♥おっぱいビリッてえッ♥♥♥ビリッてえッ♥♥♥」

感度だけでなく乳腺もオーラで開発してるからそろそろ……おっ、出た！

「んひいいい♥♥♥おっぱい出たッ♥♥♥出ちゃったア♥♥♥魔眼さまの赤ちゃん育てる準備出来ちやっただアッ♥♥♥」

ぷしゅーつと勢い良く噴射する母乳（未妊娠）を舐めとりながらピストン運動を速める。おっぱい飲めるしチンコ気持ちいいし最高かよ。

「えへえ〜ッ♥♥♥魔眼さまの赤ちゃん欲しい〜ッ♥♥♥いっばいいいっばい産み育てたいノコ〜♥♥♥」

「アイドルヒーローになる夢はどうしたあ！」

「なるもんッ♥♥♥赤ちゃんいっばい育てながらアイドルヒーローになるもんッ♥♥♥魔眼さま専用ママドルヒーローにならせてっ♥♥♥」

「この欲張りめっ！成敗っ！」

「んふあああッ♡♡♡♡♡」

乳首をきゅううつと摘まみ、希乃子の搾乳を続ける。ぷしいっ、ぷしゆしゆっ、と噴き出る母乳を浴びながら中出し……っ！

「あっ……♡♡♡♡♡あひっ……♡♡♡♡♡」

ほてっ、と希乃子の下腹部が少し膨れているのを確認し、膣からイチモツを引き抜く。希乃子はおっぱいを垂れ流しながらだらしのない表情を浮かべて気絶していた。

ふう……。

切奈と希乃子にはあえて激しいプレイを行った。もちろんオシオキという側面も有ったが、これだけ激しいプレイをいきなり見せつけられて引かないヤツは居ない。『あっ……やっぱ止めとこ……』とここに居る女子達が思ってくれば……

「あれだけ出しても勃起してるとかウラメシい……」

「So cool…♡」

「ん……」

ブレねえな君たち！そんな気はしてたよ！

希乃子の膣から引き抜いたイチモツを間近で凝視する三人。くっ……殺せっ！

とか思ってたら角の生えた子がぶりっとしたケツをふってきてんああああもうエロ

いなアアア!!!

「HEYヤクモサン、『スエゼン食わねどタカヨウジ』ネ♥」

「それを言うなら据え膳食わぬは男の恥だろうがアメリカンガールっ!」

「ふああああッ♥♥♥」

うおお……名前も知らない外国人女の子マンコエツロ……!愛液ドロドロな上に熱く抱き付いてくるかのような締めつけ……!

「アメリカではSEXはアイサツみたいなモノ♥ガンガン激しいのカモンネー♥」

「こんな挨拶有ってたまるか!アメリカ始まってんな!!!」

「はああああッ♥FUCK ME!!♥」

雄英卒業したらアメリカに引越そうかな……。

ウインクしながらピースして挑発してくるので乗ってあげましょう。そのエロ尻堪能してやるからな。

肉の詰まったセックス専用むちプリエロ尻に腰を叩きつけながらぶるんぶるん揺れるおっぱいを掴む。おっふ、ハリの有るパワフルおっぱい……ケツもチチも肉詰まっているのに腰細いとかミラクル過ぎるだろ!好き♥

「Oh!♥イエス!♥カモンッ!♥」

「でもそのアメリカン喘ぎ声はあんまり好きくない!」

「What——ンンンツツツ!♥?♥?♥」

ちようど良い所にオナホハンドルがあつたので掴み、布団に押し付ける。おつ、興奮度が上がつて締め付けも強くなった。

喘ぐ余裕も無いような獣みたいな声を聞きたいんだよ俺は!

「おらっ!全人類中トップを争うレベルのデカさと固さをそのエロまんこでしつかり味わえこのっ!」

「ツツツ♥♥♥~~~~ツツツ♥♥♥」

名前も知らない女の子犯すの気持ち良すぎワロタ。しかも相手から誘ってきてんすよコレ、完全に合法的レイプサイコー。

脳みそが中々アメリカンに染まってきた感じがするが大丈夫だ、問題ない。

「挨拶でセックスすんなら、キチンと最後までキメないと失礼だからなっ!」

「ツ!?♥♥♥WAIT!♥♥♥PLEASE CUM OUTSIDE——」

「バカ言えこんなんCream^生pie^中一^出掴だろっがツ!!」

「NO!♥♥♥NO!♥♥♥」

「『嫌よ嫌よ好きの内』ってな!おら逃げんなッ!中出しアクメ決めろ!日本男子嘗めんなッ!」

「Wha——あッ♥♥♥NO♥♥♥PLEE——んああッ♥♥♥」

出会ったばっかの女の子に中出しっ！アメリカ式挨拶セックスっ！

角を掴みあげて、逃げられないように押さえ込みながら……射精っ!!!

ぶびゆるるるるっ!!!びゆるるるるるるる!!!

「んおおおおッ♡♡♡♡♡」

そうだよソレが聞きたかったんだよっ！獣のような喘ぎ声を上げながら舌を突き出してアクメをキメる姿エロ過ぎ！ご褒美にこのまま抜かずに続けてあげるね♡

「お”ッ?!♡♡♡♡う”、WHY?!♡♡♡今CUMしたばっか——」

「覚えておけっ！生意気な女の子に分からせるまで日本男子は決して沈まないと！」

「OMGッ♡♡♡こんナノ勝てないヨッ♡♡♡FORGIVEッ♡♡♡PLEASE

FORGIVE MEッ♡♡♡♡♡」

「しっかり反省するまで許さんッ！デカいケツ揺らして誘いやがって生意気なッ！反省しろっ！子宮で反省しろこのっ！」

子宮口をこじ開けて中に侵入。ゴリゴリと掻き回し、中出し精液をマーキングするよ
うに擦り付ける。

「お”ッ♡♡♡ん”オ”オ”ッ♡♡♡オ”オ”ッ♡♡♡」

あつという間に言語野がペアになったアメリカンガールにトドメの中出しッ！オマ
ケにオーラでクリトリスの神経強化させながら引っ張りあげてあげるねっ♡

「はぎヒイイイツ ♡♡♡♡♡」

盛大な潮を噴き出しながらビクビクと背を反らせて絶頂したアメリカンガール。やれば出来んじやーんついでに精液ぶっかけとこ。

おつ……………くつ……………ふう。布団の上で倒れるアメリカンガールにマーキングぶっかけ。顔も尻も全部精液で汚してやつたぜ。最高かよ。

……………と、ここまでやって俺は正気に戻った。しよ、初対面（厳密には違うけど）の子に俺はなんて事を……………。

「ウラメシ過ぎ……………♡あぁ……………んっ♡」

「おふっ」

放心していた所を突然イチモツにしやぶりついてきたウラメシガールによって布団の上に押し倒される。うお……………フェラ上手……………。

ねっとりと隅々まで丹念に舐めていくかのようなフェラ。ジュルジュル吸い付くようなフェラも気持ち良いが、この絡み付くようなフェラも良い……………。切奈にもしっかり覚えて貰お……………ツ!!?

「痛いッ!？」

「……………今私以外の子を考えてでしょ……………ウラメシい……………」

「独占欲強めだなっ!」

オーラを込めて神経ごと刺激してやればホレこの通り、フェラする余裕も無くなってヒンヒン喘ぐようになった。ふふふ……俺の眼は誤魔化せないぜ。彼氏との初エツチは痛いだけで終わり、それから時折気が乗った時だけ彼氏の誘いに乗っていたがやっぱ快感より痛みを堪える時間の方が長く、それからなあなあに別れて雄英高校に入学したらクラスメイトの充実した性生活を聞いて『あれ？皆痛みを堪えてるモンじゃなかったの？』と今までのエツチに疑問を抱いて気持ち良いだけのセックスに興味を引かれて今に至るお前の苦悩が手に取るように分かるぜ！まあ今手に取ってるのはおっぱいなんだけど！

「くっ……♡♡♡んっ……レロッ……あく……んっ！♡♡♡」

そして『このままイカされるのは癪』とばかりに俺のイチモツにしゃぶりつく。だが残念だったな！出そうと思わなければ、気持ち良くてもフェラ程度で絞り出される俺ではないわっ！このまま胸だけで絶頂させて……ひんっ♡

「くっ♡ふっ♡ふっ♡ん……ふっ♡♡♡ぢゆるっ……♡♡♡」

フェラしながら玉揉みだどっ!?おふっ……精子強制製造されりゆう……♡くっ、堪える俺！玉舐めや玉揉み程度、いつぞやにやられた一对多のハーレムセックスの時に散々されただろ！たった一人に良いようにやられる訳がンホオン♡

「とっっておき……♡♡♡んっ♡ひっ……くっ♡♡♡」

ケツ穴に指が入ってきやがっただとオ!? くっ……うおお……こいつ前立腺探るの手慣れてやがるっ! いったいどれだけ彼氏のケツ穴ほじくり返してきたんだ!? 10回か! それくらい……いや十分多いな! 俺と切奈みたいに毎日のようにセックスしてた訳でもないなら十分に多いな!

くそっ、負けてたまるか……! おっぱいを揉む力を強める。グニグニと形を変える柔らかさはとても素晴らしい。それでいて服の上からでもカチカチに硬くなってるのが分かる程乳首の自己主張が激しいのもGOOD。容赦なく摘まみ上げてやるっ!

「んはあぁっ♥♥♥くウツ♥♥♥な、まいき……っ♥♥♥」

グツと口を閉じて喘ぎ声を我慢する……のかと思いきや、ペロオ……と唾液を垂らしてきた。既にヨダレでベトベトのイチモツに追加で垂らして何を……? と、次の瞬間。ヨダレが宙にフワツと浮いてイチモツの鈴口に……マジか待て待て!?

「尿道攻め……っツツッ! ♥♥♥」

唾液が尿道内を逆流してきた。いやいやお前さんそういうのも出来るん!? うぐおお……っ! 尿道攻めは流石に受けたこと無いって! 出すトコから入ってくる感覚がヤバイ。しかもただ入ってくるだけじゃなく唾液が尿道内をムニムニ動いて刺激してくる。チンチン破裂しちゃうっ! こんなんで破裂する程ヤワな鍛え方してないけど……。

た、耐えろ……尿道攻めの耐え方わかんないけど気合で耐えろ俺エ……! くっ……お

……こ、これで……5分ツ!!

「ひイツ……あああああツツツ♥♥♥♥♥」

ピンツと乳首を弾けば、眼を見開いて絶頂に喘いだ。ふつ、勝った……と気を抜いた瞬間金玉をきゆうつと両手で挟まれ精液が搾り出された。

ぶびゅううううつ!!!びゅぶるるるるつ!!!

おつ♥やつべつ♥堪えてた分めっちゃ出るっ♥やつぱり尿道に入ってくるより出していく方が気持ち良いですね。

めっちゃドロつとした精液が女の子にぶっ掛かり、その髪や顔、服を汚していった。

「はあっ♥♥♥はああっ♥♥♥」

「ふーっ……」

なんでこんなセックスバトルみたいな事してるんだっけ。一発抜いて冷静になった頭で考えたがやつぱり分からん。

射精して力が抜け、布団に倒れた俺の股座に顔をうずめたまま荒い息を整えている灰色髪の女の子。どうせ次はオマンコで勝負なんですよ？俺知ってる。

「ん」

唯と呼ばれた女の子はいつの間にかズボンと下着を脱いでいて、俺のイチモツの上に跨りました。いやマイペースうー。灰色髪の女の子も『え？このタイミング?』って顔

で見てるよ君の事。

指で自身の秘部を広げ、勃起チンチンを迎え入れていく。イチモツはすんなりと膣内に入って……入って……入って……入っていかねえな。

「……大きすぎ」

「俺から言わせれば君の中が狭すぎなんだわ」

直径1cm、深さ5cm弱。個人差はあれど、この女の子はかなり膣が小さい方である上にカウントを視る限り自身で膣内を広げた事もほぼ無いだろう。ましてや『準備』が整ってない状況で勃起チンチンが入る訳が無い。……まあ、一応『興奮状態』ではあるみたいだが……。

「唯、私が先」

「……ん」

渋々といった感じで俺の腰から退き、顔に小振りな尻を下ろす。いきなり顔面騎乗とは……コイツ、出来るっ！

せつかくなので薄く生え揃った陰毛を舌で掻き分けながらクンニし、手をおっぱいに伸ばしてフニフニ揉む……キメ細かい肌触りに程よく詰まった柔らかさ、うーん……とてもいいですね。

「んっ……はあっ……っ……っ♥」

「こんなウラメシいに入るかな……んっ♡くっ……ふうっ♡♡♡」

ウラメシガールが俺のイチモツを迎え入れ、奥までしつかり啜えこんだ。お、お、愛液いっぱいなのに膣内がザラザラしてるっ……。

「おっ……くっ……ふうッ……♡♡♡ 大きすぎて苦しい……♡♡♡」

「んん……♡ふあっ……♡」

くう……複数プレイは得意じゃねえんだ。オーラを集中させようにも、両手に『凝』して戦ったゲンスルーみたいになそこ以外の攻撃に対して極端に弱くなる……。イチモツと両手、口にもオーラを集めて攻めると――

「あはうッ♡」

「んぶッ!？」

「はあっ……はあっ……ん……♡♡♡」

「んんっ!？」

快楽を受けて姿勢を崩した黒髪の子が偶々俺の胸に手を突き、予想外の反撃に反応してしまった俺の様子を見て乳首弄りを覚えてしまった。だからもお複数プレイは苦手なんじゃあつ！

「ふうっ♡♡♡ふううっ♡♡♡お腹苦しいっ♡♡♡ウラメシ過ぎっ♡♡♡」

「んっ♡ふう……んッ♡♡♡ふああ……あっ♡♡♡」

「へ、え……♡♡♡乳首弱いの……♡♡♡唯、右側借りるよ……れえ……♡♡♡」
「んんん♡♡♡はあ♡♡♡くっ♡♡♡」

あああああちくしよう二人揃って乳首ばつかああああ!! 舐めるのと摘まむの禁止い
いいい!!!

そつちがその気なら俺も全力全開で攻めてやらあよ!!!

灰色髪の女の子を下から突き上げるように腰を振り、黒髪の女の子の胸を引つ張りながら膣内へ舌を伸ばす。

「あゝうゝ♡♡♡深すぎッ!♡♡♡ひイツ♡♡♡んあああ♡♡♡」
「んっ♡♡♡は♡♡♡あ♡♡♡あ♡♡♡」

バチバチと膣内で快楽が弾けている二人の限界は近い……が、同じように俺の限界も近い。くっ……灰色髪の女の子の膣内気持ち良すぎだし、黒髪の子の膣も俺の舌にちゅーちゅー吸い付いてくるし……挿入したら絶対気持ち良いヤツっ……!

うおお……また、名前も知らない子に……出すッ!

「あああああ♡♡♡」
「んんんん♡♡♡」

びゅるるるるるっ!!!びゅるるるるる!!!

ぎゅうっつと締め付けてくる膣内に出出しっ……!こんな無限に出せるに決まって

る……っ！

絶頂してクツタリと力の抜けた女の子達を上から退かし、黒髪の子を布団の上に寝かせる。ここまで来てもう『やっぱ怖いので止めました』なんて絶対許さねえぞ……！

「ふーっ♥ふーっ♥んっ……来て♥」

「ちゃんとオネダリ出来て偉いぞっ！」

仰向けに倒れながら両脚を抱えるように腕を回し、クンニして少し広がった秘部を両手で広げながらセルフマングリオネダリするなんて健気で可愛いなあ！そういうの大好きだから！

オーラを使って挿入るギリギリまでイチモツを小さくし、膣内に挿入っ……！

「ツツツ……い……んんんっ♥♥♥」

痛みは一瞬。細い腰を掴んで外側からオーラを送って破瓜の痛みを和らげながら快樂を増幅させる。っーかキツいなっ！ココを今から俺の30cm砲が入りきるまで上げてやると思えば、とんでもない征服感が背中を走る。

最初はゆっくり……馴染ませるように膣壁にイチモツを擦り付ける。

「はツツツ♥♥♥ああッ♥♥♥ふううッ♥♥♥んんんっ♥♥♥」

「舌よりも遥かに気持ち良いだろ？」

「んっ♥♥♥うんっ♥♥♥んああッ♥♥♥」

上の口も下の口もめっちゃめっちゃ素直かよ、好き。

腰をトントンと動かしながら、少しずつイチモツを大きくしていき膣内を拡張していく。おっほっ……吸い付いてくる膣内エツロツ……!!もつと気持ち良くなるように両手でお腹を掴み、オーラ式子宮マツサージも並行して行うね♥

「んんんツツツ!!?♥♥♥ああアツ♥♥♥待ツツツ!!?♥♥♥んあ”あ”あ”ツ♥♥♥」

あー良いねー良いですねー可愛い顔歪めて快樂に泣き叫ぶ姿はとてもオチンチンにキマすねー。

ほらほら、分かる?今凄い勢いで膣内広がつつてるの分かる?人をデイルド扱いするって事はオナホ扱いされる覚悟のある人ですよ?俺専用ガバガバオナホマンコにしてあげるね♥

「あ”あ”あ”くくツツツ♥♥♥ん”ん”ん”ん”くツ♥♥♥♥♥」

顔に手を当てて必死に快樂を堪えてる姿は本当に良いものですね。気持ち良さのあまりに泣き叫ぶのもEXCELLENT!

いやあでも日頃から鍛えてるだけあつて身体を支えるインナーマッスル凄いな。かなり拡張してるにも関わらず吸い付く様な締め付けは健在。本当にもうヒーロー科つてエッチ専用マンコに鍛え過ぎじゃない?オーラ使つてエッチ専用マンコに改造して

る俺が言うのもなだけで。

自分でも滅多にシない処女だったのに初めてのエッチでトラウマ級の快樂叩き付けられて、もうオナニーじゃ満足できない身体になっちゃったねえ。

のしかかる様に押さえ付け、自己紹介も碌にしていないう女の子の生マンコを徹底的に蹂躪っ！両手使つての子宮マッサージはもういいか。顔を隠してる両手を掴んで御開帳。強烈すぎる快樂でトびかけてる泣き顔は本当に素晴らしいですね。

「あゝッ……♡♡♡♡♡ひいッ……♡♡♡♡♡」

よだれやら涙やらで凄い事になってる上に紅潮してる姿がエロすぎて我慢できず貪るようなキスをしてしまった。妊娠率30%……勢いでゴム無しセックスしてるが外に出さない……

というかもはやゴム無しでセックスしてるのがスタンダードになってしまっている件について。

「ンンンツツツ♡♡♡♡♡ンンン〜ツツツ♡♡♡♡♡」

おツ!!?締め付けが急が変わって……ツ!?!やばっ、出そ——!?!あつ、コイツ脚を腰に絡めてきてツ——!!

びゅぶるるるるっ!!!びゅるるるるっ!!!

「~~~~ツ♡♡♡♡♡」

おっほおっ……射精後に吸い付き舐めるような締め付けっ……出し切るっ……残らず全部射精しきるっ……！やっぱ膣内射精気持ち良いっ……！

「ん〃お……♡♡♡♡♡ほオ〃ツ……♡♡♡♡♡」

ビクビク震えながら放心する黒髪の子が絡めている脚を解き、離れる。うくん……流石に連続で出し過ぎて疲れた。小休止……と、お？

「っ……！」

「あっ……その……オカマイナク……」

部屋の隅で凄い目付きで睨む緑髪の子とオレンジ色の髪の子……オレンジ色の子は知ってるな、確かクラス委員長長の拳藤……だったか。その二人が顔真っ赤にしながら情事を見ていた。

「二人は真面目ぶってるけどかなりのムツツリスケベだからセフレにしてあげなよ♡」

「復活したのか切奈」

「当たり前でしょ〜？一発でダウンする程ヤワな鍛えられ方してないもくん♡」

うん、なんかスマン。

そうして切奈の手が飛び、緑髪の子の両脚をパカッと広げた。うわ、ズボン越しでも分かる大洪水。

「切奈さんッ!!?は、放してくださいッ!!」

「いやいや、ここまで準備万端で抵抗すんの無理有るじゃん茨〜♥」

そのままスルスルと緑髪の子のズボンと下着を脱がした切奈。おお……パイパンだ……。大洪水の元はヒクヒクと震えている。とても……良い……。

「性欲に溺れるのは罪ですっ！大罪ですッ！神は見ておりますよッ！」

「ん〜？見られるのに興奮するって事〜？」

「ちちち違いますッ!!」

ニヤニヤと笑いながら個性を存分に使って、俺の所まで緑髪の子を引き摺ってくる切奈。言動がオツサン。

そうして大股開きの状態で固定され、顔が真っ赤を超えて若干青く見えるくらいに紅潮した子が必死に自身の秘部を隠そうともがいている。恥じらう姿も良き……。

小休止なんて要らんかったんや……俺のビッグマグナムも完全回復……装填準備完了……。

「こ、こんな事許される訳がありません……！結婚を前提としたお付き合いもまだだと言うのに……！そもそも私は神に捧げた身故にこういった事は——」

「茨、知ってる？むかーしの神官ってお酒やタバコは勿論、危険なクスリやセックスだつてガンガン楽しんでたんだってさ」

「なっ!?そんな事ある訳が無いでしょう！と言うか今それ関係あります!」

「関係あるんだなー♥お酒やタバコとかを散々楽しんで、その後一生それらを断つの。そういう『修業』なんだって。誘惑を知らないまま断ち続けるのは簡単だけど、一度誘惑を知ってから断つのはとっても難しい、だからこそ『修業』になるんだって」

「そ、そんな事……いや、しかし……」

「だから茨もサイコーに気持ち良いセックス知ってから『禁欲』すればいいんじゃない?♥」

「それは……そうなのかもしれませんが……」

マジかよ切奈お前こんな敬虔っぽい子を唆すとかマジの悪魔かよ……

「(つて言うか切奈お前よくまあそんな昔の宗教の話とか知ってたな……)」

「(で・ま・か・せ♥)」

「(お前エ!!!?)」

切奈……お前そんな嘔吐く子じゃなかったじゃん……いや、割りと前からそんな感じだったわ。

広げられた秘部からトロトロと絶え間無く愛液が垂れ流れ、その尻穴までヌチヨヌチヨに濡らしていた。お尻のシワまで大変エツチ。

「ほら……ね?アタシ達と一緒に強くなって、プロヒーロー目指そ?」

「せ、切奈さん……うう……」

そして茨と呼ばれた女の子の身体から、拘束に抵抗しようとする力が消えた。

「八雲さ、ん……っ！お、御願ひ、します……！わ、わた、私の処女を……奪つて下さい……っ！」

「……良いんだな？」

「はっ、い……こ、コレもまた、神が与えし試練……っ！ならば私は乗り越えてみせま、しょう……っ！」

だ、大丈夫か？抵抗する力はなくなつたけど今度は緊張で違う力みが出てるぞ？力抜けて……

「あっ……そ、それと出来れば……」

「ん？声小さくて聞こえねえ。なんだって？」

「出来れば、なるべく気持ち良すぎないように手加減をお願い致します……」

もの凄くか細い声だが、確かに聞こえた。うんうん、なるほど。気持ち良すぎないように手加減ね。ほーん。

その心は？

A. 気持ち良すぎてセックスにドハマりしちゃうとヤバいから。

あつ（萌死）

あい分かった。俺も鬼じゃねえんだ、可愛い女の子の為なら一肌脱ごうじゃあねえか。まずは痛くならないようにしつかりオーラで膣周りを強化して、破瓜の痛みを和らげられるように手早くマツサージして、あつついでに子宮も強化しておこうか。

「あつ……はあつ……！♥なつ、えつ？♥な、何をっ……」

「君、名前は？」

「はあうツ!?♥し、塩崎茨……です……ツ♥」

「ん、良い名前だね。茨ちゃん、『試練』つてのは険しければ険しい程、それを乗り越えられた時に大きな進歩を得られる筈……違うか？」

「ふにゆあ……ツ♥それはそうでしょうが……あソツ♥」

茨ちゃんにマツサージを施しながら準備を整える。うん、これなら大丈夫だろう。気持ち良すぎないようにね、分かっている分かっている。

「神は、人に乗り越えられる試練を課す。そうだろ」

「ほおつ♥ふうツ♥は、はいっ……その通りですっ……ツ♥あのっ♥さつきから何をおソツ♥」

「だから俺は茨ちゃんの試練の為、誘惑を与える悪魔にだつてなるよつて話」

「ふ……え……え……？」

完全準備万端ひくひくおまんこいただきまーすっ！

「ふに〃やあ〃あ〃あ〃あ〃つ♥♥♥♥♥」

おおおっ?!熱ッ!圧ッ!厚ッッッ!!

ドッロドロに蕩けきつた肉厚マンコッッッ!!腰ほっそいのにとっからこんな肉集めて来たんだコイツッ!!しかもチンポ啜えこんだらミュチっ♥と締め付けてくるッ!!神聖オナホッ!!

「あ〃ッ♥♥♥♥♥あ〃に〃やあ〃っ?!♥♥♥♥♥にやんでえッ!♥♥♥♥♥きもちよすぎないようにっていったのにイツ♥♥♥♥♥」

チンポ啜えこんで悦んでんじやねーよ聖者ッ!!おまんこの震え方で全部丸わかりだからなッ!あーくそっ!これで処女かよッ!切奈が本気で搾りに来てるマンコ並の気持ち良さッ!!正に天性の名器ッ!!おほう……中が蠢いてやばっ……!腰が勝手に動くッ!!こんなん速射モンやんけっ……!

「ひい〃い〃い〃ッ♥♥♥♥♥激しすぎますッ♥♥♥♥♥私のお腹こわされちゃいましゅっ♥♥♥♥♥」

正に悪魔を殺す為のセイントパワーを秘めたトロムチスケベまんこ。切奈の膺が人の手によつて丹精込めて作られたザーメン搾り器なら、茨ちゃんの膺は神の手天然モノによつて作られたザーメン搾り器。こ、こんなモン……俺のデビルパワーで耕しまくってや

入れ、精子増産体勢に入る。エロを司る神なんかには、負けないッ！（フラグ）

髪の手束を振りほどき、即座に二回戦。切奈の手束手助けは外して貰い、バックから茨ちゃんを突き上げる。

「ひあああああッ♡♡♡♡♡」

おおっ……！後ろからだど更に感覚が変わって……ッ！突き上げて即座に押し返して来る厚みが良すぎッ！

酸欠の金魚のようにパクパクと口を動かして快楽に悶える茨ちゃんの乳を後ろから揉みしだく。弾力が凄い。そして揉む度にウネウネと膣が締めまり形を変える。感度良好。

「あああッッッ？♡♡♡♡♡ひにやあああッ!?!♡♡♡♡♡」

一突き毎に嬌声を上げる茨ちゃんの体力も限界のようだ。眼の焦点は合わず、口からヨダレが垂れ放題。大丈夫、茨ちゃん相手なら『快楽に勝てるようになるまで何回でも』気持ち良くして上げるからねっ！

だからコレでトドメの一撃……クリ絶頂とナカ絶頂の合わせ技……！

「ん〃お〃お〃お〃お〃お〃ッ♡♡♡♡♡」

ぶびゆるるるるるっ!!!びぶるるるるるるっ!!!びゆるるるるるっ!!!

おっ♡やっべっ♡金玉で精子作った端から搾り取られるっ♡

絶頂と共に竿をにゅちよぬちよと締め上げ、更に吸い上げられる。その上汚い喘ぎ声
がもう好き過ぎてヤバイ。倍率ドン。

思う存分たっぷり中出しし切り、手を離せば力の抜けた茨はそのまま布団の上に倒れた。気持ち良すぎてもう……もう……出し足りねえじゃねえのオ……!

バキバキを超えてガツチガチに最大勃起したイチモツが天を貫く。金玉では精子が大量生産され、早く早くと出番を待っている。ああ、準備万端マンコ転がつてねえかなあッ!

「あっ………♡」

居た。

オレンジ髪の子、拳藤が堪えきれずに服を脱ぎ捨て、自身を慰めていた。これはもう……アレだよね、実質合意って事だよねッ!仕方ないよね合意だし!

「待つ、あッ♡」

拳藤に飛び付き、押し倒し、そのままの勢いで挿入ッ!!

「ん♡ひイツ♡♡♡♡♡」

おほう♡なんだこのびったりフィットまんこっ♡俺の30cm砲を受け入れる為だけにあるかのような広がり方っ♡キュウキュウ締め付けるマンコも良いけど、この全てを受け入れるかのような器量マンコも良いッ♡こんなん……こんなんガン突きしたく

なるやんけエ!!!

「おッ?!♥♥♥♥♥ンオ〃オ〃ツ♥♥♥♥♥激しッ♥♥♥♥♥過ぎッ?!♥♥♥♥♥
ほオ〃オ〃ツ♥♥♥♥♥」

形だけの抵抗を押し退け、気持ちよくなるためだけのセックス。全身を包む筋肉と程よい脂肪が抱き心地抜群な肌触りを生み出す。ムキムチな女の子オナホ扱いすんのきもちーっ!

ゴリゴリと敏感なところを抉りつつ、ケツ穴に指を突っ込んで鳴かせる。あークツツソ下品な喘ぎ声チンポにクルんじやあー……うつ、出るっ!

ぶびゆるるるるっ!!!びゅびゅぶるるるっ!!!

「んお〃お〃おッ♥♥♥♥♥」

オナホマンコに中出しサイコーっ!合意レイプ気持ちいいー!!

そのまま抜かずに二回戦。拳藤を組み伏せるように布団へ押し付け、獣のように覆い被さって犯す。

「あッ♥♥♥♥♥お〃オン”ッ♥♥♥♥♥それダメッ♥♥♥♥♥深すぎイ”ッ♥♥♥♥♥

♥♥♥♥♥指なんかより遙かに気持ちイ”イ”ッ♥♥♥♥♥」

レイプされてるっのに何笑顔でアへってんだ!そんなエロい子にはもつともつと激しいのをお見舞いしてあげるねっ♥

イチモツをマンコに突っ込みながら、ケツ穴にオーラを込めて拡張させる。……おいおい、すんなり広がりすぎだろッ！ どんだけ普段からケツマンコ弄り倒してんだドスケベッ！ 後でケツハメの刑に処すッ♥

おらっ！ ケツ穴に手首まで突っ込まれながらアクメしろっ！

「オ”オ”オ”オ”オ”オ”ッ♥♥♥♥♥」

二穴攻めに呆気なく陥落した拳藤は豚のような鳴き声を上げて失禁した。可愛いね♥
 そして二度目の中出し射精ッ♥ザーメン全部受け止めろッ！ 一滴でも溢したら十倍にして再注入してやるっ！

「ほッ……オ”オ”オ”ッ♥♥♥♥♥」

全身を震わせての激しい絶頂。潮を噴きながら中出ししたザーメンを逆流させ、その殆どが布団の上に撒き散らされた。あくあ……お置き飲精させなきゃ（使命感）

「ンぶオ”ッ!?♥♥♥♥♥」

目の焦点が何処かに飛んでしまった拳藤ちゃんの身体を仰向けにし、その細い喉奥を拡張させるように強制イラマチオ。喉がチンポで膨らんでるの丸分かり〜。

「ぼッ♥♥♥♥♥オ”ッ♥♥♥♥♥ごッエ”ッ♥♥♥♥♥」

喉マンコ犯されて喜んでンじゃねえよッ！ おらっ！ マンコから溢した分胃の中に

ザーメンぶちこんでやるッ！夕飯のカレーと一緒にしっかりと消化しろッ！

びゆるるるるる!!!びゅぶぶぶぶッ!!!

「ツツツ〜♥♥♥♥♥」

おっほっ♥喉マンコに吸われるッ♥しっかりと全部飲み干して偉いぞ〜♥ご褒美におまんこナデナデしてあげるねっ♥

「ンンンッ♥♥♥♥♥ンンンン♥♥♥♥♥」

あゝ、ヤベエ〜っ。ぶっ壊す勢いでレイプしてるつてのに拳藤ちゃん丈夫過ぎてヤベエ〜っ。こんな勢いでセックスしたら流石の切奈でも一回気絶してるつてのに、拳藤ちゃんは未だにビクビク身体を震わせながら期待に満ちた眼を向けてくるのヤベエ〜っ。金玉空にするほど射精しても出し足りねえ〜っ。

三度目の雌穴レイプ。完全に服従しきったマンコ犯すの気持ちいいね♥今度は子宮の内側からマツサージしてやるからね♥

そうして喘ぎまくる拳藤の膣内と尻穴を犯しまくって、何度目の射精か。そこに至って漸く自分の身体がおかしい事に気がつく。

射精しても、射精しても、萎えぬ。金玉にオーラを込めたとかそういうレベルの話ではない。これは……もしかやまさか。

「魔眼が食べるカレーにイロイロ混ぜちゃった♥めんご♥」

「よもやよもやだこんちクショウ!」

切奈お前エ!!!俺はその手のオクスリとは相性が絶好調過ぎてヤベエって知ってるだろツ?!というかカレーに何混ぜてんの?!あれか?!味濃かったのって精力剤的なサムシング混ぜる前提で味濃くしてたのか?!用意周到かお前は!!!?

切奈に掴みかかろうとした瞬間、巨大な手が俺の身体を布団の上へ大の字に倒して押さえつけてくる。巨大な手を眼で辿っていくと、目付きがヤバイ事になってる拳藤がじゅるりとヨダレwithザーメンを垂らしながら俺の上のしかかる。

「はあーっ♥はあーっ♥どうしてくれんだよ八雲オ……♥もう私、自分の手じゃ満足出来ない身体になっちゃったじゃんかあ……♥」

性欲値、105。おかしいな、この手の数値って普通100が限度いっぱいなんですけど……限界突破されてるんですけど……Plus Ultra!!ってか?喧しいわ!!

えっ、ていうか拳藤さん、貴方こんなデカイ手で自分のおマンマン弄ってますのん……?そりや30cm砲もずっぽし入るよね……。

とか考えてたら俺の顔にのしかかるおっぱいっ!

「ヤクモサ〜ン♥♥♥アメエリカでもウけたコトの無いSuperHARDなファックにメロメロになっちゃったヨ♥♥♥」

ぬちゅっ♥と両手に触れる湿った柔らかい感触ッ！

「手……熱ッ……ほら……まだ満足出来てないんだから……もつとウラメシくしてよ……」

「んっ♥♥♥」

両脚の間から感じる二人分の吐息ツツツ!!?

「えへへえ〜♥♥♥魔眼のやる気スイッチはココを舐めるノコ〜♥♥♥」

「ま、魔眼様の御不浄っ……私の口で清めて差し上げます……♥♥♥」

ああ、おっぱいで物理的に眼を塞がれてても視える全員の性欲値の平均が100超えてるってどういう事なの……。

イチモツが痛くなる程ガチガチに勃起している。

「全員孕ますまで帰れまテン♥始まるよお〜♥♥♥♥♥」

切奈の声が耳元で聞こえ、耳の穴をレロオ♥と舐められる。そしてそれを合図に、全身に押し付けられる女体の柔らかさ。あ、ああああ……

誰が言ったか、A組は全員がトップを目指して切磋琢磨を繰り広げる魔窟で、B組は全員でトップを目指してチーム力を磨く軍団。どちらが優れているとかの話は置いておいて、昨日と今日で嫌と言う程味あわされる八雲の長い夜はまだまだ終わらない。

林間合宿・三日目で・大事件

「お” ツツツ ♥♥♥♥♥んお” お” お” ツ ♥♥♥♥♥」

「おらっ！ クラス委員長なら全員の模範となるアクメ顔晒せっ！！ ケツアクメしろっ！！」

「あ” つ…………んツ…………♥♥♥♥♥た、体力…………おばけえ…………♥♥♥♥♥」

「ん…………ツ ♥♥♥♥♥あ…………ツ ♥♥♥♥♥」

「ア…………やくモリアん…………♥♥♥♥♥」

「か、神よ…………オっ ♥♥♥♥♥」

死屍累々。そう表現するしかない程に全員が体液でグツチャグチャになった布団の上でぶっ倒れていた。上の口や下の口、後ろの口からザーメン逆流させてノックアウトしている女の子達を後目に、オレンジ髪の子にトドメのケツマンコ射精ツツツ！！！！

「お” お” お” ツ…………♥♥♥♥♥お” つ…………ほお” ♥♥♥♥♥」

完全に白目を向いて気を失った拳藤ちゃん。な、長かった……。切奈と希乃子除いた子全員合わせても、まだ拳藤に射精した回数の方が多かつたくらいには長い戦いだつた……。空が、黄色い…………（気のせい）

全員のお腹が精液によってぼっこりと膨れている。上から飲ませたり下からぶち込

んだりした所為だ。あーヤベエよ……こんなん絶対妊娠モンやん……。昨日響香孕ませックスした直後にコレだよ、学ばねえ……。

……ま、まだ妊娠したって決まった訳じゃないからッ！

「……風呂入ろ……」

金玉が完全にカラッケツになったんじゃないかと思うのは初めてだ。オーラによる強化だけでなく、オーラ消費まで使って精力絞り出したのは初めてかもしれん。ガス欠に近い状態……

ご飯……の前に全身汗やら愛液やらでネットネットベトベト。洗い流したいと考えるのは至極当然の思いだった。身体を引き摺る様に露天風呂へ向かい、入る。

「キュートにキャットにステインガー!! ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ! (一人 Ver.)」

「何全裸で裸いでるんですか土川流子さん」

「冷静ッ!! それと本名呼び止めてよ!!?」

なんか、露天風呂の中(外?)にワイプシのピクシーボブがポーズをとってた。全裸で。何やってるんですか心は18歳さんじゅういち。プロヒーローがコスチューム脱いでたら一般人として扱ってそれ一番言われてるから、マナー的な意味で。

ま、まさか適齢期を気にしすぎてついに年齢半分くらいの男にまで手を出そうと……

「違っ！……わないけど！言い方ってモンがあるでしょ!？」

「敷地内にある露天風呂内に全裸で侵入して男子高校生を拐かし、淫行に及んだ容疑でピクシーボブ（本名：土川流子）容疑者を逮捕。調べによると『心は18だから大丈夫だと思つた』と容疑を認めており、関係各所にも事情を——」

「止めい！」

ピクシーボブの猫パンチ（素手）。うわーやられたー。

「あつ、じゃあお風呂入るんで失礼しますね」

「本当に失礼してるわね!?!全裸の美女が此所に居るんだから襲いなさいよ！獣のように

……あつ、発情期の猫のようにっ！」

「なんで今上手いこと言つたつて顔したの？無理です」

だつて金玉の中が空っぽなんだもん。今ばっかは誰が相手でも勃たないよ……。これ以上は本当に命にかかわる。

ピクシーボブを無視して風呂に入るが、ピクシーボブもピクシーボブで勃たせようと風呂の中で抱きついてきたりチンチンふにふにしてきたり好き勝手してきた。あの……早く風呂から上がって寝たいんですけど……。

そうしてピクシーボブからの洗体サービスを受けたが完全カラッケツな状態では結局勃たず、ピクシーボブを落ち着かせる為に『道具（意味深）を使わない洗体サービス』

のお返しをした。ごめんねピクシーボブ……何が悪かったと言えばもう、タイムミングが悪かったとしか言えないんだわ……。

「にやつ……♥♥♥にゃひいつ……♥♥♥」

あーエツロっ！勃起してれば即ハメしてやるのになアチクシヨウめ！でもゴメン！流石に体力残つてないのっ！

全身をピクピク震わせるピクシーボブにバスタオルを掛けながら風呂から出る。うーん流石に眠い……。

寝た。

??

林間合宿三日目。今日も朝早くからバリバリ動いて個性をブチ鍛えるのだが……ヤバイ。

「はああああっ!!!」

辺り一帯を埋め尽くさんとする茨のつる。

「おおおおりやああああっ!!!」

木々を平然と薙ぎ倒していく拳藤の大拳。

「THUNDER HORNツ!!」

銃弾のごとき速さで射出されていく角取（あの後自己紹介された）の四本の角。

他にも色々ヤバい事やつてる子達も居たが、B組の中でも特に目立つのがあの三人だ。

それに触発されたのか、A組の女子達も派手に個性強化訓練を行っている。

「女子達どうした……昨日よりも更にヤバくね?」

「二日で強くなるってレベルじゃねえぞ……!」

「スゲーな!オレ達も負けてらんねえ!」

啞然とした表情で女子達を見る男子一同。まさしく気の持ちようで強くなれるというのは中々に凄まじい。女子達のこの変わりように、相澤先生も思わずにっこり……恐怖映像である。

「僅か一日だけで此所まで変わるとはな……。八雲の力を男子達にも使わせる事が出来りや良いんだが……」

おおお……なんか急にケツが寒くなってきた……!

女子達のレベルアップぶりにテンション高くなってるのは何も先生達だけではない。

普段からクソクソうっせえわな爆豪がトングデモねえ表情で女子達を睨み付けている。うーんいつも通り。

昨日の俺然り、派手派手に森林破壊を行っている女子達にいいよストップが掛かったのはすぐの事だった。

「ウチの敷地を禿げ山にするつもりか！」

とマンダレイの怒りの一言。側にいた洗汰君がドン引きしている。

そういうわけで今は俺と一緒に『土魔獣と楽しいじゃれ合い』と洒落込んでいる拳藤と角取。もちろん、じゃれ合い（気を抜けば致命傷）である。

「うおおおお!!?俺だけなんかレベル違くなえかピクシーボブう!!?」

「女の子に恥をかかせた罪は重いわよっ!!」

「女の『子』……?!!?」

ブチツ、と何かがキレる音がした。思わず地雷を踏んじやったぜ★

直後、俺を取り囲む土魔獣の群れ、群れ、群れ。多すぎて数えられねえっ。その群れが一斉に俺に向けて飛び掛かってきた。

「うおお死ぬううう!!」

「八雲っ！」

「マナコサン！」

拳藤の大拳が、角取の角が、土魔獣の群れを粉碎していくがそれ以上の数が押し寄せてくる。もうダメだおしまいだあ……と言うにはまだ早いッ！

「ンンン新必殺!!」スカーレットアイズ・ドラゴンブレス『深紅 竜 殺 砲』ツツツ!!」

眼から紅いエネルギーが放射され、土魔獣の群れを粉々に吹き飛ばした。拡散型の眼ビームである。

Eye of the Ajaは必殺技だが非致死性である……だがこの技は破壊力特化、『人に向けて撃つてはいけません』ってヤツだ。眼から飛ばしたオーラは当たった物を砕きながら拡散していく。超至近距離で撃てば人体を粉々に砕くことも可能だろう……威力的には。

ふふん、ピクシーポプの土魔獣攻略完了っ!

『それ使ったら訓練にならないでしょ。訓練中にその技を使うのは禁止よ』

「オーマイガーッ!」

そうだよ、今はあくまでも個性強化訓練の最中なんだからちゃんと訓練内容に沿った通りに身体動かさなきゃダメじゃん。土魔獣に勝つ事が目的じゃねえんだわ。

ま、まあ新必殺技のお披露目会ってことで一つ……あ、ダメ?そっすか。

「(私の土魔獣の群れを一撃で撃破するなんて……初日じゃ使つてなかつた筈。温存していた?それとも……昨日の訓練中に編み出した?だとしたらなんて成長力ツ!顔良し、将来性良し、アッチも世界レベル……こ、これ以上無い程に優良物件じゃない……こうなったら今夜中にも既成事実を……!!)」

ゾクツツツ！

な、なんだ……!? 今明らかに捕食者に狙われたかのような、殺気にも似た悪寒を感じたぞツ!? 何処からだ!? 誰だ!?

「……ねえ八雲。アンタ……ピクシーボブに何したの?」

「えっ!? 何って特になにもして……」

してたわ。早朝にガツツリとシテたわ。本番やってないだけで、十分肉体関係と呼べるほどの事ヤツてたわ。あつ、もしかしなくてもさっきの悪寒ってピクシーボブから……

「……心当たり、有るんだ」

「ピクシーボブがマナコサンを見るEyesがMONSTERのアレデス!」

「モンスターと言うより野獣?」

「アンタら好き放題言うわねホント!!!」

物凄い勢いで生成される土魔獣。次々に俺達へ向け飛び掛かって来るので片っ端から叩き落とし、粉々に砕く。

拳藤と角取の二人を援護しながら、敷地内のあちこちに居る皆の様子を視る。うん、俺だけ訓練内容のレベルが違いすぎね? 眼が……眼が足りん……。

常に首を振って辺りを見回しながら眼に入る情報を脳内で精査し分析する。脳を

オーラで強化してなかったら思考力が間に合わねえ。

『しつかり土魔獣の対処に意識向ける!』

「うおおおお!!」

眼が充血してんじゃないかという程に酷使し、ぶつ倒れるまで戦い続けた。ぶつ倒れた。

??

色々あつて夜ウ! 肝試しの時間だツツツ!!

「堪忍してくれえ! 試めさせてくれえ!!」

一部諸事情で参加出来なかった者達も居たが、関係ないねっ! 息抜きの時間じゃア!

「……なんか、八雲君テンション高いね」

「緑谷、お前も土魔獣と一日中遊んでると俺の気持ちも分かるぞ」

常に死角を狙って飛び込んでくる土魔獣を倒し続ける作業と並行して、A組B組全員十ワイプシ四人十相澤先生ブラキン先生二人の46人の居場所を常に把握し続ける作業を一日中。頭パンクすつべ普通。

「つまり俺には癒しが必要なんだ。分かるな?」

「う、うん……」

『きやー八雲君こわーい！』『ふふふ俺がついてるから大丈夫だぜ』ってやり取りをしつつ接近する二人の距離！飛んできた虫にビックリして思わず悲鳴をあげながら抱きついてくる瞬間！何が出てくるか分からない暗い森の中をドキドキとしながら歩き周り、紆余曲折時間を掛けて漸くクリアした時には達成感のあまりに飛び付いてきて……ぐうえへへへたまんねえなあオイ！」

「……すーっ……」

おい緑谷なんだそのぬとねの区別がつかなさそうな顔は。お前そんな表情差分あったのか。

まあそんな事はどうでも良い。颯爽と組み分けのクジを取り、中を確認する。ふむ……8、か。……8？

「……緑谷、クジ見せろ」

「……」

緑谷の持っていたクジに書かれていた数字も8。なるほど、これが意味する事はつま

り！

「……」

「……」

これが虚無ってヤツか……。

きつと鏡を見れば俺のぬとねの区別がつかなさそうな表情差分が見られる事だろう。誰が見るかチクシヨウめ。

そうして、そうして。

「何でヴィランが居るんだよオ!!!」

ヴィラン連合の襲撃を受けたのだった。



「僕、洸汰君の居場所知ってますッ!!」

「ならお前だけでも戦線から飛ばすッ!俺の手に乗れ緑谷ッ!!どっちだ!!?」

「八雲君ッ!?!……向こうだよッ!!」

「んならア……オーラ全開ッ……俺の腕潰すぐらいの勢いで踏み飛べッ!人間^{カタバルト}投射器ッ

!!」

緑谷を遠くへ投げ飛ばす。

「お前が『八雲』ってヤツだな」

「あらいやだ、聞いてた以上に私の好みだわ」

「オカマの好みなんざ知るかア!!!」

緑色のトカゲ人間の持ってたデカイ武器の集合体をワンパンで破壊し、オカマの個性であろう磁力の影響を受けながらも地面を踏みしめ、ぶん殴る。個性を使うのはルール違反? だったら使わずブツ倒せばいいだろツツツ!!!

森の中に見えたオーラには明らかに見た事の無いヤツのオーラが混ざっていた。クソツ! もつと早く集中していれば襲撃に気が付けただろ俺!!!

「ぐっ……中々ヤルじゃない……!」

「聞いてた話よりも……遥かに強いッ……!」

「ヴィラン共、お前らの仲間は何人居る。個性は。戦闘スタイルは。目的は」

暴く。暴く。殴りながら、蹴りながら、両手を返り血に染めて暴き出す。

「ぐほッ……クソッ……! オレ達じゃ敵わねえか……マグネ、アレを使う!」

「異議無しよスピナーッ!」

スピナー、マグネと呼ばれた男達が懐から小さな筒を取り出し、空に向けて投げた。

ほひゆるるるるううう……

笛のような音が鳴り、煙を上げながら空へ飛んで行く筒。……信号か何かか?

と、次の瞬間。森の中から、木々を薙ぎ倒しながら現れる巨漢が二人。

「グ、ゴ、ロ、ロ、ロ」

「ガロロロロ……」

改人 脳無。それが二体。

片や、人間の全身に目玉が付いたような風貌で、絶えずギョロギョロと辺りを見回している。

片や、六本の腕から木の枝のようなモノが生え、ザワザワと蠢いている。悪趣味極まりねえな。

脳無は俺目掛けて一直線に駆け出し、その双腕を振るった。破壊の奔流が辺りを吹き飛ばす。なんてパワーだ。

奴等の狙いは俺か、なら……仕方ない。

「すみませんマンダレイ。俺はちよつとこいつ等引きつけるんで、そのヴィラン二人頼みますよ」

「っ!? 待ちなさい八雲君ッ!」

待てないね。少なくとも奴等は待つちやくれねえみたいだ。

目玉脳無が俺を殴り飛ばすが、風に吹かれる枯葉のように脱力して流れに逆らわず、それでいて殴られたダメージを防ぐようにオーラで集中防御し、殴られた勢いのまま森

の中を飛んで行く。飛んだ先にあつた木の幹に着地し、追撃に來た脳無共の相手を再開した。

こいつ等から見えるオーラ……それは『死』のオーラだ。死んでるオーラ。殺虫剤を食らつた虫けらの様なオーラ。ああ、視るに耐えられん。ジタバタともがき暴れるゴキブリのような、車に轢かれた犬の様な、飛び降り自殺した死体の様な、生理的嫌悪感を濃縮したようなオーラ。見ていてだけで吐き気がする。哀れに思える。

「ゴ、ロ……ゴロ、ズ……」

「ガロロロロ……」

ああ、不愉快極まりない。早く俺の眼の前から居なくなってくれ!!!

『Eye of the Aja』アアア!!!

「ギ、ア、アアアアアアアッ!!!」

熱戦が目玉脳無に直撃し、その全身を爆炎に包んだ。絹を裂く様な叫び声が目玉脳無から発せられる。姿は野郎なんだけど。

爆炎を突つ切つて多腕脳無が俺を挟み殺そうと腕を振るうが視えてんだよボケが。紙一重ギリギリ掠めるようにしゃがんで回避し、伸びきつた腕を捻じり切る。

ブツ、ブチチィッ!!

「ガロロッ!!!」

USJン時に現れた脳無のような『シヨック吸収』『超回復』みたいな個性ではなく、何か別の力を持っているようだ。オーラの流れを視る限りは……恐らく、あの木の枝の様なモノが刺さったら発動するような『攻撃補助』タイプか……。

捻じ切った腕を、燃え盛る目玉脳無に向けて投擲する。身体を燃やす炎を振り払っている目玉脳無の身体中についている目玉に投げた腕から生えている枝が突き刺さり、その身を腐らせて辺りに悪臭を広げていった。……直撃はマズそうだな。

目玉脳無の身体の半分まで腐敗が進行した所で目玉脳無は突き刺さる腕を抜き捨てた。グズグズと肉体が溶け出している。

「ゴ、ロ、ロ、ロ、ズ!!!」

目玉脳無の全身が光りだし、その身から急激にオーラが溢れだしてきた。な、なんかヤバイ予感しかしねえ。

全力で目玉脳無から離れ、木の影に隠れた直後。眼玉脳無が大爆発を起こし、その肉片を周囲に撒き散らした。爆風は木々を薙ぎ倒し、森に大きなクレーターを作り出した。なんて威力……差し詰め『自爆』の個性か。

飛び散った肉片はズルズルとクレーターの中央に集まっていき、再び目玉脳無の姿を形どった。

「グ、ゴ、ロ、ロ、ロオ!!!」

自爆して尚生きてるとかヤベエな。飛び散った肉片に触れるのも……止めておいた方が良いでしょう。

多腕脳無は即座に俺を見つけ出すと再び駆け寄ってはその腕を振り回す。ああマジで鬱陶しい。そのオーラを見ているだけでイライラしてくる。

早くこいつ等を倒して皆の無事を確認しないと……ストレスでハゲそうだ。

「ガロロロロ!!」

振り回す腕を全て避けていき、眼ビームでこんがり焼いていく。火に対する耐性が低いのか、ザワザワと蠢いていた木の枝が焼け落ちていく。

全て焼け落ちた頃になって漸く多腕脳無は動かなくなった。だが死んでない。めちゃくちゃ丈夫だな……。

「ゴ、ロ、ズウー!」

目玉脳無が俺に飛び掛かってきたが、スカールレッドアイズ・ドラゴンプレス深紅眼竜殺砲で体表面だけを消し飛ばす。威力の調節も出来て便利な技だな。

全身に付いてた目玉が潰れ、そこから赤とも黒とも言い難い難い血液のような物が垂れ流れる。まるでゾンビゲームに出てくるクリーチャーのようだ。

「ゴ、ガ、ガア!」

再び全身が光り出したのを確認した直後に全力で離れ、木の影に隠れる。そして二度

目の自爆。今度は最初の自爆よりも更に威力の高い爆発が起き、突風と共に木々を薙ぎ倒していった。

「クソッ……受けたダメージに比例して爆発力が高くなる個性か」

中途半端にダメージを与えてしまった為に起きた被害。少なくともこの辺りには誰も居なかったようだが、爆風はもしかしたら誰かの所まで届いているのかもしれない。その誰かが元凶を探しに此所まで来てしまったら、三度目の自爆が直撃するかも……そう考え、目玉脳無を完全に消し飛ばす事を決意した。

先ほどの自爆で、焼け焦げた多腕脳無の全身が粉々になっていた。間違いなく即死だ……。相当に不愉快なオーラを持っていたが、奴らは望んでその姿になった訳では無いのだろう。目の前から消えて欲しかったが、死んで欲しいわけではなかった。中々に我が儘だな、俺は。

……だが、今度は俺が仕留める。俺の力で、俺の責任で。バケモノだろうが、元人間その命を奪うと考えるだけで吐き気がするが、コイツを放置してしまえば誰かが自爆の犠牲になってしまう。やるしかないんだ、じゃあやるしかないんだよ。

「ゴ、ロ、ズウ！ゴロ、ズウ！」

先ほどよりも早く復元した目玉脳無。よく見れば潰した筈の目玉が復活してやがる。半端なダメージは自爆の威力を上げる上にダメージを無かったことにする……ンなら

対策としては……『半端じゃないダメージを与える』もしくは、『個性を発動できない状態にする』……死ぬか、生きるかの瀬戸際だ。この森の中に隠れ潜んでるヴィラン共の事はその時考える、今はただこの修羅場を乗り越える事を考える。

広がるクレーターの中心部でじつとして居る目玉脳無に向けて、薙ぎ倒されていた木を投げ飛ばす。目玉脳無は飛んでくる木を拳で碎き、俺に向かつて突き跳んできた。身体能力が上がってやがるっ!!

「ゴロ、ズウー!」

「やってみろやバケモンがッ!!」

深紅^眼竜^{ビーム}殺^ム砲^ムで目玉脳無に風穴を開け、その内側から Eye of the Ajax で焼き上げる。辺りに人体が焼ける悪臭が漂い、怖気の走るようなどす黒い体液が目玉脳無の身体から飛び散る。外から、内から、全身を焼かれているにも関わらず、まだ生きて居るしぶとさに冷や汗をかく。

今日の朝から全力で訓練に当たっていた弊害か、身体に残されたオーラ量はかなり少ない。にも関わらず、全力で放った殺人ビームでも身体に穴が開く程度、更に追い討ちで放ったビームで全身を焼いても、まだ生きて暴れるだけの体力が残っている。

目玉脳無の全身が光り出す。此所で自爆されてしまえば、また振り出しに戻される。そもそも爆発の威力は? 何処に隠れる? 木に隠れたとしても、木ごと粉々になるんじゃない

ないか？

一切迷わず逃げ出せばギリギリ間に合ったかもしれないが、身体は寸での所で動かなかった。迷ってしまった。間に合わない。

一撃で脳無を仕留める……もしくは、完全に止める事の出来る方法なんて……そんな方法が有るわけ……!?

俺の視界の端に、小さな蛇が森の中へ逃げていく姿が見えた。

蛇……魔眼……ツ!!有ったツツツ!!一撃で脳無を仕留める方法ツツツ!!だがこんなことは試した事がない……チクショウツ!!やるしかないんだ!じゃあやるしかないんだよオ!!!

未知を望め!未踏に挑め!そして敵を打ち倒せツ!!!今の俺に、限界はねえツツツ!!!
眼が燃え盛るように、ギリリと紅く光った。

『バジリスク・アイ蛇王の眼』

八雲の紅き瞳を見てしまった脳無は、自爆する直前の姿勢のまま身体が石のように固まってしまった。

否、石のように……ではなく、『石そのもの』に変化していた。ギョロギョロ動いてい

た目玉も、自爆の予兆を見せていた光る全身も、非常に精巧な石像のように変化していた。

完全に動かなくなった脳無だが、その意識は未だに健在だった。壊れた機械のように、自爆を自身の動かない身体に命令し続けている。しかし石に変化した自身の身体はなんの返事も返さず、全身の目玉はなんの情報も脳に送らず、完全なる闇の中、脳無の意識のみが存在していた。

八雲は、土壇場で自身の策が成功し、ついでに脳無を殺さずにすんだ事に安堵した。自身の眼は、全身が石に変化した脳無が未だに生きている事をしつかりと視ているし、自身が望めば石化を解除出来る事もしつかりと視えた。

「……………ぐへえ〜っ！つ〜かくれ〜た〜!!!」

修羅場を乗り切った八雲は全身を地面に投げ出し、脳無の自爆によって剥き出しとなった地面に横たわる。

プロヒーローだとしても勝つことは非常に困難であっただろう二体の脳無相手に、生き残るどころか五体満足で勝利を納める事の出来た八雲は間違いない大金星を挙げたと言えよう。万が一、二体の脳無の内一体だけでも他の場所に現れていたら、その脳無によつて生徒か、プロヒーローか、いずれにせよその手によつて殺められていただろう事は想像に難くない。多腕脳無はチリも残さず消し飛んだが、それは八雲の手によるも

のではなく仲間（そういう意識は無かっただろうが）である目玉脳無の自爆によってその身を消し飛ばされた事は、仮にこの戦いが外に知られたとしても八雲を『ヒーローでありながら敵を殺した殺人者』という誹謗中傷を防ぐ事実となる事は幸運であつたと言える。

幸運が続いた為に残された結果、それが今だ。全身全霊を懸けて戦つた八雲を責める者は誰一人居やしない。殺し合いを制し、高校1年という若い身でありながら死の淵に触れて帰り、生き残つたという達成感と脱力感と共に、全身の集中力全てを切つて地面に横たわる彼を咎める者は誰一人居やしない。

例え、それほどの大活躍をする事すら敵の作戦の内であろうとも。

「お疲れ様ですつ、ヤクモくんっ♥」
「……………あ?」

銀色に輝く刃物が、地面に倒れている八雲の腹部を貫く。

「ずっと、ずっと待ってましたっ!この時、この瞬間っ!ヤクモくんってナイフ効かないんですモン!」

五体満足でいた筈の八雲の腹から、命の赤色が溢れ出す。

「えへへエっ♥♥♥これでおあいこですねっ♥ヤクモくんから受けた破瓜の痛みと一緒っ♥」

「……て、てめ……エ……」

八雲の視覚が暗く狭まっていく。腹を刺された痛みだけではない、薬物的な眠りの狭まりかただ。それと同時に、僅かに残った視界がグラグラと揺れ動く。

「まさか忘れてないですよねっ!?!ワタシです!トガっ!トガヒミコっ!だいたい一年ぶりくらいですなヤクモくんっ♥♥♥ちうっ♥ちうっ♥」

八雲の腹にナイフを突き立て、ぐちゃぐちゃと動かしながら幸せそうに脳無の返り血を浴びた八雲の頬にキスを落とす異常者、トガヒミコ。

「本当なら今すぐにもエッチしてあげたいですけど、今はお互いオアズケですね……でも大丈夫ですっ♥スッゴクイイトコロに連れて行ってあげますからっ♥」

「その男がトガちゃん『恋人』かい?ずいぶんとまあ……まさか、本当にあのバケモン二体を倒すなんてな。どっちが怪物なんだかオジサンわかんねえよ」

「ミスター、ワタシの恋人に対して『怪物』は酷くないですか?」

「あー、そういう意味じゃないんだが……ゴメンよトガちゃん」

「イイですよ。えへへっ、ヤクモくんっ♥ちよつとの間ガマンしてて下さいねっ♥」

八雲の思考は、ナイフに塗られていた毒によつてぐちゃぐちゃと纏まりが無くなつていた。口から泡が出始めた程に衰弱している八雲を無視し、コンプレスは自身の個性によつて八雲を圧縮して黒い玉の中に閉じ込める。

その、直後。八雲の意識は深い闇の底に沈んでいった。

「えへ、えへへへっ ♥♥♥これからは、ずっと、ずううっつと一緒なのですっ ♥♥♥」

八雲が入った黒い玉をコンプレスから受け取り、大事そうに頬擦りし、宝物のように口付けを落とし、オモチャのように口に入れてねぶり回し、決して失くさないように自身の膣内へ迎え入れた。

「んっ……あっ ♥♥♥ああ……っ ♥♥♥ヤクモくんが全部入っちゃいました……っ ♥♥♥」

「……オジサンの個性をそんな事に使われるのは初めてだよ。というかトガちゃん、いくらなんでも外でそういう事するのはどうかと思う」

「何言ってるんですかミスター！ワタシはただ大事なトコロに大事なモノを入れているだけです！ヤクモくんも言っていました！『大事だからこそ時には激しく使う事も必要』だって！」

「多分なんか意味間違えてないか？知らないけど……。それより、早くパンツはいた方が良いぞ。夏とは言え夜は多少冷える、女の子が腹を冷やしちゃダメだ」

「そうですね！」

トガヒミコは八雲が入った黒い玉をしつかりと奥まで入れた後、下着をはいて速やか

に集合地点へ向けて移動し始めた。

やれやれと首を振って、先を駆けていくトガヒミコを追うMr. コンプレス。……しかし、ふと何かを思い出したかのように立ち止まり、ある物の所まで歩み寄った。

「……見るだけで石になっちまうとか、恐ろしいねえ。何よりも恐ろしいのは、ヒーロー志望の癖に人の命を気安く奪える所が恐ろしい。アレを仲間に引き入れるどころか、とんでもない爆弾になっちまいそうだ。……折角だしコイツも持って帰るか。何かの役に立つかもしれないし……最悪好事家に売れば良い金になるだろ」

そう呟きながらコンプレスは石像と化した目玉脳無を個性で圧縮し、懐に仕舞い込んだ。

恐らく今頃、本体が目標を捕まえている頃だろう。急いで集合地点に戻らないとな……そう考えたコンプレスは、既に見えなくなっている程に素早く移動していたトガヒミコの後を追いかけた。



かくして、増えていた方のMr. コンプレスの個性によって奪われた八雲を持ったト

ガヒミコとコンプレスは現在集合地点に集まり、他のメンバーと一緒に残りの者達を待っていた。

同じように敷地内に散っていた増えていた方のヴィラン達はその殆どが生徒達の手によつて撃破され姿を消していた上に、本物の方であつたマスキュラー、マスタード、ムーンフィッシュも同じように生徒達によつて撃破されていた。

増えた分も含めれば、あれだけ多く居た『開闢行動隊』も現在は僅か8人。茶毘、トウワイス、スピナー、マグネ、そしてトガヒミコと増えている方のトガヒミコ、増えている方のコンプレスと、もう間もなく来るであろう本物のコンプレス。

「さつきねっ！ 凄いカアイイ子と会つたんだあ！」

「どんな子!? どんな子!？」

「うるせえよトガ。 いい加減一人に戻れ」

「えー。 そう言われても痛いのはヤなのです」

「いいじゃないですか茶毘くん。 ちゃんと役目は果たしてるんですから」

「あつ！ それとね！ それとね！ 途中でヤクモくんの次くらいにカツコイイ男の子を見かけたの！ すっごい血まみれでボロボロでっ！」

「いいなあ！ いいなあ！」

「……ハア、 おいトウワイス。 お前が増やしたんならお前の意思で消せねえのか」

「おう任せろ！俺の個性で増やしたモンはダメージを与える以外の方法じゃ消えねえからな！諦めろ！」

「チツ……」

「それでね！それでね！」

「うん！うん！」

「トガちゃん達、その辺にしときな。……そろそろ時間になる——!?!」

その集合場所に突如現れたのは本物のMr.コンプレスと、それを追いかけてきた障子、轟、緑谷の三人だった。

■
「来んな デク」

多くの重軽傷者、意識不明の重体を出し、そして行方不明となった生徒が二人。

内、一人はまだ良い。ヴィランに攫われて一刻を争う状況だが、生きている事が確認

出来ていた。

だが、もう一人は――

「……なにが、あつたんだ……此処で……」

まるで小さな隕石でも落ちたかのような破壊痕。大量に残された血痕。そして元の姿が想像出来ない程にバラバラに飛散した死体。

襲撃事件の後始末と行方不明者の搜索を任された警察やプロヒーローがその光景に絶句した。

聞けば、凶悪なヴィラン二名と戦闘をしていたと言う。その戦闘の激しさは、離れた場所でも爆発音が聞こえた程。

「ミサイルでも落ちたのか？」

「小型の核爆弾かも……」

「なんにせよ、普通の爆弾程度でこんな地面ごと抉れるかよ……」

行方不明になった生徒の個性を調べれば、どう考えてもこんな破壊力を出すなんて事は不可能だった。ならば此処を襲撃し、逃げ出したヴィランの内の一人の個性か或いは、この飛散している死体の個性か……もしくは本当に核爆弾か何かか……。

大きな爆発音は二度聞こえたらしい。地面に出来たクレーターの数と一致する。

こんな破壊的な威力を前に、しかも二度も……普通の生徒が生きていられる訳が無

い。その死体も、もしかしたら飛散した死体の中に混じってるやも……。

「……とにかく、この肉片全部集めてDNA鑑定だ。現状手掛かりがコレとこの血痕しかない以上、ここに力を割くしかない。ヒーローの皆さんも協力お願いします」

「……雄英のヒーロー科が相手だからって、ここまでやる必要あるのかよ……ヴィラン共……ッ！」

警察は、あちこちに飛散している肉片を全て一つずつ丁寧に集めていく。……考えたくないが、もし、万が一、その肉片の持ち主が雄英生徒のモノであったのなら……。

プロヒーローは、自身の個性を最大限活用して手掛かりを探す。視覚、嗅覚、触覚。あらゆる方向から、どんな小さな手掛かりを見逃さないように気を張って。

その結果は、飛散した死体の肉片を回収しDNA鑑定した所、その全てが該当せず。

その結果は、爆心地からほど近い所にある大量の血痕がある場所から消失したとしか思えない。

生きているのか、死んでしまったのか、どちらとも言えず。それが警察とプロヒーロー達が出した結論だった。

死んでいるとすれば、不可解。爆発によってむき出しになっている地面の上に、生徒のDNAが含まれた血痕が残っている事が不自然だ。

かといって、確実に生きているという証拠も無い。大爆発によって飛散した肉体が、

更に爆炎によって塵となってしまっただけならば、確認する事は出来ない。

行方不明者、二名。一人はプロヒーロー、ラグドール。そしてもう一人は雄英生徒、爆豪勝己。

生死不明者、一名。雄英生徒、八雲魔眼。

雄英としては大失態。だが、それ以上に、その事実は生徒一同に暗い影を落としていったのだった。

「魔眼……まなこお……嘘だ……うそだよお……だって……ぜったいしないっていったじゃん……いったじゃんかあ……」

「……………」

「魔眼さんは……生きている……絶対……絶対生きている筈です……だって……魔眼さんは……」

多くの重軽傷者が搬送された病院の中で、数少ない無傷の少女達は院内に設置された椅子に座り込んでいた。

大粒の涙を流す者。呼吸をする事すら忘れてしまいそうな程に呆然とする者。縋る

様に希望を眩く者。そしてその場には居なくても、多くの者が悲しみの表情を浮かべていた。

最悪の夜は、まだ明けない。

中学三年・初めての・トガちゃんエツチ

八雲魔眼が中学生だった頃のある日、トガヒミコは彼を見つけた。

夕暮れ時の路地裏。小賢しいヴィラン、ヴィラン予備軍が活動し始める危険な時間と場所。そこに一人の女学生と、三人の下卑た笑みを浮かべていた男達、そして……返り血を顔に浴びて尚微笑む八雲魔眼が居た。

「ったく、女の子一人口説くのには三人掛かりで、その上ナイフなんぞ使うなんて男の風上にもおけねえ野郎共だ」

八雲に一切の怪我はなく、倒れ伏している男達は皆自身の鼻や股間を押さえながら蹲っていた。

「あ、あの……助けてくれて、ありがとうございます……」

「どういたしまして。それよりその制服……近くの有名高校の制服じゃないか。そんなモン着たまま、こんな時間にこんな場所に来たらそりゃ『襲ってください』って言うてるようなモンだよ」

「そんな!? 私はどういうつもりじゃッ!!」

「分かっている分かっている。ちよつと帰りが遅くなって、家族に心配かける前に帰ろうと

してついこんな近道使おうって思ったんだろ？その心意気は立派だけど、もうちよつと自分が可愛いってこと理解した方が良いかもな」

「かつ、可愛いッだ、なんて、そ、そんな……」

「事実さ。……さつ、もう日が暮れる。ヴィランに襲われたなんて、それこそ家族に心配掛けるだろ。近くまで送っていくよ」

「そそそ、そんな事まで助けてもらうわけには——」

「イチャついてんじゃねえクソガキがッ!!死ねッッッ!!」

八雲が女学生の居る方を向き、気を抜いた瞬間……機会をずつと待っていた男が、手に持ったナイフを振りかざして八雲の死角から襲いかかり……一切振り返ることなく後ろ蹴りを男の顔面に叩き込んだ。

「視えてんだよ馬鹿野郎……ッ!!」

「ボガアツツツ!!ぐつ……ふ、ふひやひやひやッ!ばきやはへめーだ!オレによきよへーは『痛み分け』!受けたダメージをへめーにも返すっ!」

「つてエ……ちつ、余裕ぶつこいてコレはダセーな俺……」

へし折れた鼻先を押さええながら滑稽な声を出す男の個性によつて鼻血を流す八雲。しかしそれでも余裕な態度を崩さず、女学生を守るように背にする。

「わ、わ、私つ……ヒーロー呼んできますッ……!」

「む、無駄だ……！オレサマの個性は『逃がさない』ッ！どんな相手だろうがオレサマに背を向けて逃げ出す事は出来ねえっ……おおお、コイツ同じ男として狙っちゃいけねえトコロを容赦なく……っ」

「ほ、ほひへアツヒのほへーは『遮音』ッ！ひよんはほほほえはほーがおおほーひにはへほほきはひねえっ！」

「どうでも良いがお前ら無理に喋るとただ無様なだけだぞ」

「「なんだと?!」」

いきり立つ男達に怯える女学生を宥めながら、堂々と笑う八雲。

「『逃がさない』? 逃げる気なんてさらさらねえよ。『遮音』? 人殴る音がヒーローや警察に聞かれちゃあちよつと困るからむしろ助かるなア。んで、『痛み分け』? てめえにもダメージ入るんなら、俺が負ける道理はねえよなあ!」

そう言って男達へ飛びかかり、全員をほぼ同時に蹴り倒す。『逃がさない』個性を持った男の顔を、親でも判別付かない程にボコボコに殴る。『遮音』の個性を持った男の股間を蹴り潰す。そして『痛み分け』の個性を持った男を地面に投げ飛ばす。

「(……) オっ……」

「びッ……」

「がはアッ……!」

「ぐウっ……投げてても効果有るのかコイツ……」

「す、すごい……」

女学生が思わず声をあげてしまう程に鮮やかな手際でもって、ナイフで武装した男達をあっという間に倒してしまった。一人に関しては完全に白目を向いて気絶してしまっている。

「デエツ……テメエ……痛みが怖くねえのか!？」

「痛いのが嫌ならヒーロー目指してねえわダアホ。おら立てよ性犯罪者共、テメエらの罪の数だけその顔爆散させてやる」

そうして宣言通りに男達の顔とついでに股間を破壊しつくした八雲は、適当に落ちてたビニール紐でふん縛って路地に転がしていた。

「その、改めて……助けてくれてありがとう八雲魔眼くん」

「おう、良いってことよ……ン？俺自己紹介したか？」

「うふふつ。君、魅眼ちゃんの弟でしょ？私、魅眼ちゃんの友達なんだ」

「おー……それはそれは、普段から姉がお世話になっております」

「い、いやいや、むしろお世話になってるのは私の方で……や、それは今いつか。それよりっ！ま、魔眼くん、怪我大丈夫!?!顔中凄い傷だらけだよ!」

「お気になさらず。寝て起きれば元通りよ」

「私が気にするのっ！とにかく、ウチに来てっ！怪我の治療しなきゃだし……そ、それに……助けてもらったお礼……しなきゃ……だし……」

「お礼？エッチなやつ？」

「えっ————ッッッッ!!違いますっ！もうっ！」

「あーホラホラ拗ねないで。もうこんな時間なんだから送ってくつてば姉ちゃんの友達」

「——桜」

「んお？」

「風吹、桜……です、名前……桜って……呼んでください……」

「おお、フラグが立った」

「立ってませんっ！ほら、ちゃんとエスコートしてくださいっ！男の子でしょっ！」

「おう、護衛は任せろ桜ちゃん！」

「ツツツ!?……調子が狂いますね本当に……」

そうして二人は路地裏から去っていった。

後に残されたのは顔中ボロボコに腫れ上がったヴィラン三人……それと、全てを影から見ていたトガヒミコだけ。

「……ヤクモ……くん……」

♥

返り血を浴びて尚微笑む彼に惚れた。

振るわれるナイフを紙一重で躲し続け、相手の顔を殴り続けて血に染まっっていく両手に惚れた。

『痛み分け』によつて全身がボロボロにダメージを受けていく姿に惚れた。

そして、静脈血のような黒みの混ざつた赤い眼に惚れた。

「ヤクモくんっ♥」

彼の事が知りたい、彼の事を深く知りたい、そして……『彼になりたい』。

トガヒミコは、いつものように標的を定める。好きになつた人の事を知るために、探るために、殺すために。

ニマニマと深い笑みを浮かべているトガヒミコが、ふと何かに気がついたのか笑みを沈めて路地裏の闇へ消えた。その直後、通報を受けて駆けつけたプロヒーローと警察が路地裏に現れ、ビニール紐によつて雁字搦めに縛られていた上に顔面が激しく腫れ上がっている男達を見つけた。

男達の身元はすぐに照会され、強姦魔ヴィランチーム『フーカーズ』と判明。即座に逮捕された。

ニュースでは、男達の顔面や股間に執拗に攻撃を与えられた形跡があり、過去の被害者及びその家族による制裁を受けたのではないかといった報道が成され、事実を知る女

学生は口にしていた味噌汁が喉に詰まるといふ事故が起きた。

それから、八雲をひっそりとストーキングし続ける少女の姿が散見されたとか、されてないとか。

??

八雲魔眼が高校に上がる前……より正確に言えば、取陰切奈とお付き合ひする前まではとにかく『見境が無かつた』。年上だろうが年下だろうが、男だろうが女だろうが、とにかく会う人会う人の『好感度』をゲームのように荒稼ぎしていた。

始めの頃は好感度一つ上げるにも苦勞していた。だが小学校を卒業する位になれば初めて出会ったその日の内に、同性ならば気心知れた親友として、異性でも軽におさわり程度なら笑って許される友達として、好感度を稼ぐコツを掴んでいた。中学二年という多感な時期でも、異性にセクハラをしてもパンチ一発で許される程度には好感度を上げることは容易に出来るようになっていた。それは女教師でも一緒だ。放課後に教室で二人きり、勉強を見てもらうついでに胸を軽く揉んでも軽いお叱りの一言だけで済む。それほどまでに八雲にとっては女性との壁というものは失く、むしろそれが普通と思ってしまう程に距離が近いモノだった。

電車で隣に座った大学生の女の子と、通学の間の僅かな時間だけで連絡先を交換出来るほどに仲良くなった。

満員のバスで向かい合つて立つ社会人の女性と、混雑していた短い時間の間だけで家に招かれる程度に仲良くなった。

公園で遊んでいる小学生女児達と、日が暮れるまでの少ない時間で『しようらいおにーちゃん』とけっこんするっ！』と全員から告白を受ける位に仲良くなった。

それほどまでに八雲魔眼は見境無く多くの者の好感度を荒稼ぎし、それが普通と思つてしまう程に人タラシとなつていた。

中学生の頃から出会つたばかりの女性の家にお泊まりするのは普通だった故に、姉の魅眼も諦め気味。深夜過ぎ、朝帰りとなる事だつてザラだった弟に対して、心配や怒りよりも先に『お母さんの影響受けすぎでしょ……』という呆れが勝つたのは八雲の血筋故か。『犯罪には巻き込まれないでよね』と言うのが精一杯だった。

そんな八雲魔眼に転機が訪れたのは、中学三年のある日の事。姉の友人を強姦魔ヴィランから救つた日から、暫く立つた時の事。彼はその日からずっと自身をストーキングしていたオーラの持ち主に声を掛ける事にした。

「ずっと俺をつけてるけど、何の用？」

「っー」

トガヒミコは、自身の隠遁術には自信があつた。それこそプロヒーローや警察から逃げ続けてきた実績、並より優れた容姿を求めて襲つてくるヴィラン同業者から隠れ潜む経験、そして生まれながらに持つていた暗殺者としての才能が、自信に繋がっている。

だと言うのに、ただの中学生が自身の隠遁術を見破つた事に驚愕した。

もちろん八雲にとっては、ずっと自身の周りに潜んでいるオーラが視えていた為に隠遁術など何の関係も無かつただけである。今声を掛けたのだから、ただの気まぐれ以上の理由は無かつた。

しかし声を掛けた事で、己に付き纏つていた者の正体を漸く『視』た。姿は女子高校生……だが八雲の眼には、その女子高校生の頭上に見える『カルマ値』がハッキリと見えていた。

「こんにちはっ！私、トガ！トガヒミコって言いますっ！」

一見、無害そうに見える少女。だがその本質は間違いなくヴィランであつた。

本来であれば正しい反応として、即座に警察やヒーローに通報するべきなのだろう。腕っぷしに自信のある八雲であれば、取り押さえてから通報するぐらいでもちようど良いのかも知れない。トガヒミコも、ストーキング行為がバレた時すぐに逃げ出すべきだったのかも知れない。彼の実力は良く知っている。自分では敵わないかもしれないし、そもそも不要なりスクを避けるべきである。

だが、しかし、トガヒミコは何故か、彼の前に出て呑気に挨拶をしていた。トガヒミコは数日間彼をストーキングしていて、彼がよく女の子の子を口説いているのを知っている。彼が色んな女の子の家に入っているのも知っている。トガヒミコは、自分自身でも知らないうちに、彼に自分を知ってもらいたいと思ってしまうていた。彼を知り、なりた。そして彼に自身を知られた。そう考えてしまっていた。

そして、八雲魔眼は『見境が無かった』。

「丁寧な挨拶どうも、俺は八雲魔眼。至って普通のイケメン男子だー」

ニカツと口が裂けそうな程に大きな笑顔を見せる八雲。その笑顔を見て、ドキドキと胸が騒ぎだしたのをトガヒミコは自覚した。

そして八雲は笑顔のままトガヒミコに歩み寄り、その頭を胸に抱き締めるように優しくハグをした。

「……へえッ?!」

その一連の動きがあまりにも自然すぎて、トガヒミコが目の前にいる敵対するプロヒーローの視線から逃れて死角に潜り込む以上の自然さで、八雲はトガヒミコと密着していた。

優しく、包まれるようなハグ。心の壁が氷のように徐々に溶け出してしまふような、ポカポカした気持ちになる。ああ、こうやって抱き締められるなんていつ以来だろう

か。

「今日、良いことがあった」

「…………へ、はい？」

抱き締められた姿勢のまま、顔を見上げれば…………すぐ、間近に、優しく微笑む彼の顔があった。

「今日のお昼は何を食べた、とか。この面白い映画を見てね、とか。そういう他愛もない話で一緒に騒いだり、盛り上がったたり、時には怒りや哀しみを分かち合ったり…………そんな関係になれると思っただ、今」

トガヒミコは八雲の言葉を受けて、すつ…………と。涙を流した。

「出会い方や、互いの立場なんて関係無い。自分自身がどうしたのかって意思と、相手の意思が繋がりがあった時…………それが『友達』って関係なんだと思う」

優しく気に細められた赤い目に吸い込まれそうになる。

他愛もない話で騒いだり、盛り上がったたりする関係…………当たり前のように、当たり前前じゃない…………『普通』の、関係。

「…………ワタシの話、聞いてくれますか？」

「ああ、勿論」

『異常』な自分を受け入れてくれるかもしれない。『異常』な自分を拒絶されるかもし

れない。

相反する思いがぐちゃぐちゃと脳内を駆け巡るが、気が付けば優しく撫でられる手の暖かさによってトガヒミコの思考は纏まった。

「ワタシ、ずっと、ずっと昔から、血を吸うのが好きで、血の香りが好きで、それから――」

トガヒミコは、自身が抱えている『異常』を全て八雲に吐き出した。相手の事をもつと知りたい。でも、自分の事をもつと知ってもらいたい。そんな風に想ったのは……あの■■■■の日以来で――

「――だから、ワタシに八雲君の血を飲ませてくださいッ♥」
好きだから、隠し持っていたナイフを八雲の頸動脈に突き立てた。

「あ……………れ……………」

首の皮膚が貫けない。

「な、なんで……………」

「それは、俺も『異常』だからさ」

現在のトガヒミコの眼には一切見えないが、八雲はトガヒミコの動きを察知して首周

りに自身のオーラを限界まで集めていた。オーラによって強化された皮膚は鉄以上の硬度を持ち、ナイフによる一撃を完全に無効化していたのだった。

「トガちゃんの想い、しかと受け取ったぜ。なら今度は俺の番だな」

首に突き立てられたナイフを指先の力だけで押し折り握り潰した八雲は、壊れないように優しく……そしてキツく、トガヒミコを抱きしめた。

八雲の『眼』に反射する自身の顔が見える程、互いの距離は近く。今にも唇同士が触れ合つてしまいそうな程、近く。

そうして語られる、八雲の『異常』。

生涯たった一人だけを愛する事を是とし複数の相手に好意を抱く事を否とする風潮に唾を吐くような、恋愛観。

「色んな子を好きになる、その何が悪い。確かに隠れて付き合うような行為は、相手に失礼だというのは分かる。なら、互いの合意がある上で、互いに複数の相手が居る事を承知の上で、それでも互いを愛していると公言する事は悪い事か？ 一つを徹底的に『好き』になるのも美德だろう……でも『好き』が多いって事は、それも幸せな事なんだと俺は思うよ」

あれも好き、これも好き。好きな事、好きな人が増えれば増える程、それだけ好きな世界が広がっていくのだから。

「確かに俺は『異常』なんだろう、自覚してるよ。でも、『異常』な俺を内側に押し込めて何になる？ 『異常』な俺を『普通』にして何になる？ 確かに人を傷つける事は良くない事だろうな。でもだからと言って自分を傷つけても良い理由にはならないよな。だから俺は色んな子を好きになるし、ソレを止めようとも思わない。誰が、何を言おうが好きに言わせておけばいい」

「……」

その想いは、とても理解できる。トガヒミコ自身も、今まで多くの人を好きになつた経験があるのだから。

「……でも、やっぱり『異常を理解してくれる人』が欲しいよな」

「……」

八雲の眼が悲し気に細められる。そう、『理解』だ。自身の異常を『理解』してくれる人が欲しかったのだ。有るがままにただ受け入れるのではなく、こうして一歩引いた所で『理解』してくれる隣人が――

「トガちゃん。俺って結構丈夫だから、多少血を吸われたくらいでどうにかなるほどヤワじゃねえんだ」

「ヤクモくん、ワタシも色んな人の事を好きになつてきました。ヤクモくんの事も……きつとこれからも色んな人の事をすきになつてしまうのです。でも、ヤクモくんの事が

好きなことに変わりはないと思うのです」

「……俺もトガちゃんの事が好きになっちゃまったよ、両思いだな」

「……ヤクモくん……ヤクモくん……ヤクモくん……ヤクモくん……」

その感情に気が付いたトガヒミコは、謔言を呟くように八雲の名を呼ぶ。相互理解の時はもう過ぎた、なら……更に一步進む時なのだろう。

押し折れたナイフを首筋に突き立てながら、甘えるように頬擦りをするトガヒミコ。血が欲しい……でも殺したくない、彼になりたい、共に歩んでいきたいと、想った。

「……ソコは死ぬから、指先にして欲しいんだが」

「っ！♥」

ちよつとだけだぜ？といたずら気味に笑いながら、八雲は自身の爪で指先を切つてトガヒミコの口元に差し出してきた。

小さな、小さな傷だというのに、どくどくと鮮血が流れ出してくる。

そのまま血が流れる指先を、トガヒミコの唇に押し当てた。

「んっっっ……♡ちう♡ちう♡」

まるで親鳥が雛に餌を与えるように、施されるように血を吸うのは初めての事だった。抱き合いながら、愛を確認し合うかのように。眼と眼を合わせて、相手確かめるように。

八雲の血を身体の中に取り込む度に、全身から火が出てしまいそうになる程熱く火照つてしまうトガヒミコ。熱に浮かされるように恍惚とした表情で、血を吸い続ける。

「……………あつーやべ……………」

「……………あ、これ……………つて……………」

互いの身体を密着させるように抱き締めていた八雲に、更にもっと強く抱き返していたトガヒミコ。そして至近距離で指をしゃぶりながら恍惚の表情を浮かべる美少女の顔を見て、勃起してしまう程には興奮してしまった。

早い話、八雲はバキバキに勃起したイチモツを衣服越しにトガヒミコへ押し付けてしまっているのだ。

「……………♥」

恍惚とした表情から、恥ずかし気に顔を真っ赤に染めるトガヒミコ。か弱い女子高生を装い、路地裏で生きてきたトガヒミコは『男』からの劣情を目の当たりにした事は何度もあり、レイプ現場を見た事もあればレイプされた事だつてある。まあトガヒミコをレイプしようとしたヴィランは皆オカマへと強制手術されたが。ともかく、野郎からの下劣な性欲を向けられた事があるが、その程度で一々隙を作っているようであれば未だに処女を守れていない。

……………しかし、今の状況だけは別であつた。恋人とキスをするように相手の血を吸う行

為を愛情表現と自身で定義しているトガヒミコにとっては『互いに好きである同士との行為』の前段階である勃起を見て身体が溶け出したかのように更に熱くなった。

「えへへッ♥ヤクモク——」

八雲の勃起を、『求婚』と定義したトガヒミコは笑顔でソレを受け入れようとして。八雲の眼に映る『拒絶』の色に、脳が停止した。

■
俺は『最低』だった。

人としてクソ野郎である事を自覚し、それを治そうともしないくらいには『最低』だった。

眼に映る景色にはゲームのステータス表示の如くあらゆる数値が、そして本来その人が隠しておきたいであろう『個人情報』が見えていた。年齢、生年月日、体力、精神力、その他様々な身体的数値、そしてその他俺が知りたいと思つた数字が、手に取るように。例えば、知能。頭が良いと誇っていた同級生の頭上を見れば、本来隠しておきたかつたであろう『直前に受けたテストの点数』が分かる。……赤点、か。補習頑張つてね。

例えば、交際人数。学校一のヤリチンと噂されていた先輩の交際経験は0。だが性交

経験は多い。……ペットに飼つてる犬相手に盛つてるとか、キモ……。

そして例えば、好感度。誰がどれくらい俺の事を好いているのかがよく理解できる。いつも笑顔で話しかけ、下らない内容の会話でさえも楽し気に笑うあの子の好感度は平均値以下。猫被りもいとこだ、将来は大女優かい？

俺の『眼』は、人が社会に溶け込む為に吐く嘘を簡単に見破る。しかし、俺以外の者達の『眼』は、俺の吐く嘘を見破る事が出来ない。そんな事に気が付いたのは、本当に幼かった頃。あの頃の俺は本当にクソ野郎だった。今もそうなんだが。

はじめはそれこそゲーム感覚だった。リセットの効かない、ハードコアモード。

好奇心で、操作しやすい数値である『好感度』をとにかく稼ぐゲーム。人から好かれる事のなんと難しい事。人に嫌われる事のなんと容易い事。だが、正確な結果を常に確認し続ける事が出来るのはとんでもないアドバンテージだ。

あらゆる人間が『人が喜びそうな事』や『人に嫌われそうな事』を手探りで探し、その行動に対しての結果も『笑顔で相手を嫌う事』だったり『しかめっ面になつても好かれる事』だったり、ぱつと見て正しい行動だったのかが分からない。はた目から見れば仲良さげに見えても、実際には笑顔の仮面の裏で相手に罵詈雑言を浴びせているのかもしれない。

だが、俺だけは違う。例えば笑顔で陰口を言える者や表情筋が死んでる者だろうが、そ

の者の『好感度』が絶対的な数値として見える。何を言えば好感度が上がり、何を行えば好感度が下がるか、全て手に取るようにその場で分かる。ならば、後は膨大な経験を積んでいくだけである。

好感度によって好まれる・嫌われる会話が変わる。身振り手振りだけでも好感度が上下する。話し方、呼吸の間、視線だけで好感度が変化する。どんな小さなことでも好感度は絶えず変化する。まばたきの回数、その日の気温、風の強さ、互いの距離、今の時間、ありとあらゆる『ステータス』の違い。

そうして俺だけの、俺にしか理解出来ない膨大なビッグデータを活用する事で、初対面の相手でも仲良くなる方法を身につけた。それが例えヴィラン予備軍であろうが、俺と『出会った』だけで仲良くなれる。話せば話す程、親密になれる。更に時間を掛ければソイツにとって俺は唯一無二の友となれる。

他人には絶対理解出来ないであろう努力と、数多もの経験。そしてソレらを十全に扱う話術。オマケに話も出来ない様なキチガイ相手を黙らせるオーラ圧倒的暴力操作の才能。

俺は、このチカラを、『個性』を使って……世界を支配する。ソレが出来る力と才能を持つている。幼い時からの好奇心で始まった趣味は、きつと世界を牛耳ろという神の意思だったのだろう。

俺の前では、正義も悪も等しく無価値。ありとあらゆる者達から支持好され、世界の支

配者として君臨する。それが俺の夢。

俺こそがオールマイトを超えて、全世界一位となる者だ!!!



中学生の八雲魔眼は、母親やその恋人達の趣味であつた様々なアニメ・漫画・ゲーム等の影響を受けて重大な厨二病を患つていた。若くして拗らせていた。何よりもタチが悪いのは、厨二病もうそくを實現出来るだけの能力を持つていた事だつた。

しかしそのくせ童貞気質と言うか、妙な所で引いてしまふ様々な人達をモヤモヤとさせていた。

ある時は『中学生相手に処女喪失……犯罪つ……犯罪だあ……』と内心ドキドキしながらセックスする準備万端に整えて八雲を家に招いた社会人二年目の女性を前に、一緒にご飯を食べて風呂入つて普通に寝ると言うただのお泊まり会で終わらせて『なん……だと……?』つてさせたり。またある時は『ゴム良し! ベッド良し! え、エツチな下着も……ヨシっ! い、い、いつでも来なさいっ!』とホテルに一緒に泊まつた女子大生を前に、添い寝だけで終わらせて『あるえ?』つてさせたり。またある時は『今日は、家に誰も居ないから……ウチ、来る?』と一生懸命にお誘ひしたクラスメイトを前に、勉

強会を行って『おかしい……何かがおかしい……』ってさせたり。とにかくすんでのところでオアズケさせまくっていた。

八雲に性欲が無いという訳ではないが、とにかく多くの女性達とお付き合い同然の行為をしていながらも『一線』を越えることは無かった……トガヒミコに出会うまでは。

??

「ぐああああツツツ?!」

トガヒミコは八雲の眼に映った感情を視て、ただ無意識に八雲の首元に自身の歯を突き立てた。

金属の刃を通さなかった皮膚は、あつさりとトガヒミコの牙を受け入れた。それこそ生命活動を支える太い血管まで歯が届くまで、すんなりと。

「ふーツツツ♥♥♥んふーツツツ♥♥♥」

トガヒミコは鼻息を荒くさせながら、嘔き出る八雲の血を飲んでいく。

完全に無意識であった。全く意図しない行動であった。だからこそ八雲の皮膚を裂き、その鮮血を食るように飲み啜っていた。

八雲の血……『体液』をその身体に取り込んだトガヒミコは、その身を包む靄のよう

なモノを視認出来ていた。そして八雲の血を飲んだ事で、自身の個性の発動条件を満たしていた。

トガヒミコの眼がドロリと赤黒く染まり、八雲のあらゆる『情報』を数字として暴き出していく。無意識であれど、脳はその情報を食欲に取り込んでいく。友人の数、交際者の数、キスをした回数、そして……性交経験。

「……あはっ♡♡♡」

トガヒミコが笑い声を上げた事で噴き上げる血を押さえるモノが無くなり、辺りに血が撒き散らされると共に八雲はフラリと地面に座り込んだ。

八雲は大量に失った血によって真っ青になった顔色のまま、これ以上の出血を抑えるようにオーラを込めて患部を手で押さえ、傷口を塞ぐ。

トガヒミコはそんな八雲の隙を突いて、着ていた衣服を素手で引き裂いた。

「ツツツ!?!」

「ヤクモくん♡ヤクモくんっ♡ヤクモくんツツツ♡♡♡ワタシが助けてあげますからっ♡♡♡」

互いに愛し合っている筈だと言うのに。互いを求めあっていたと言うのに。狂ってしまう程に貴方を欲していると言うのに。トガヒミコの眼に映る好感度^{数値}は——

「ヤクモくんのハジメテ♡ワタシのハジメテと交換してあげますねっ♡♡♡」

んな感情を込めながら快楽を叩きつけ続け……あつという間に絶頂へ至った。

ビュルルルルツツ!!びゅぶるるるるるつ!!

「~~~~ツツツ♥♥♥♥♥」

煮え滾った精液がトガヒミコの膣奥へ大量に注がれ、その子宮内を蹂躪する。

本当に一つになつてしまったかのような熱さが腹部に溜まっていくのを感じながらトガヒミコは考える。

「(ヤクモくんから貰つてばかり……何かオカエシしなきゃ……♥)」

『理解』も、『血』も、そして『精液』も。全て貰つてばかりで何も返せない。ならば貰つたモノだけでも返せるようにならない。

自身の吸血欲求を理解してくれた。ならば八雲のポリアモリーを理解しよう。八雲の事を愛し、八雲は自身以外の女も自由に愛せるように『理解』しよう。血を分け、狂おしい程の愛を注がれた。自身が返せるものは……『身体』しか、無い。

「ワタシの全部♥ヤクモくんにあげますねっ♥」

男というものは定期的に性欲を処理しなければならぬ。八雲も例に漏れず、その欲求を発散する手段が必要だろう。ならば血を貰う代わりに、自身の肉体を使って性欲処理をしてあげよう。子孫を残したいと言うのなら、何人でも産み落としてあげよう。もつと激しい行為だつて、アナタがそれを望むのなら——

「だから、もっとキモチヨクなってください……♡♡♡」
 ドクドクと血の海に沈みながら、ギリギリで意識を保っている八雲に向かって微笑むトガヒミコ。その全身は間違いなくトガヒミコ自身のモノであったが、『眼』だけが八雲と同じように赤黒く染まっていた。



「……………ぐ……………」

懐かしい夢を見た気がする。きつとこの世界で誰よりも壮絶な童貞卒業の夢。何処に致死量ギリギリの血を流しながら女の子とセックスするヤツが居るんだ。いや此処に居るんだけど。

ぼやけた視界の中、思考を巡らせる。気絶する前に受けた毒は既に抜けきっているようだ。その気になればすぐにでも立ち上がり、暴れ出す事も出来るだろう。……例えば、全身が鋼鉄製のワイヤーや手錠で雁字搦めにされてようとも。

「…………マジかよ。本当に一日足らずで目エ覚ましやがった。トガちゃんのナイフに塗ら

れていた毒つて大の大人を2・3日昏睡させる強力なヤツだった筈だぞ……」

視界がハッキリすれば、そこには変な面を被った男が居た。

変な男というか、ヴィランだ。

「て、めえは……誰だ……?」

「しかも起きてすぐ喋れるとは……タフを超えて異常にしか思えねえよ」

頭上に浮かぶ『カルマ値』を見れば、かなりの悪党であることが窺える。だが……なんだ?この違和感は。コイツのオーラ……まるで作り物めいた色してやがる。

「八雲オ……!」

「ア……爆豪……?」

名を呼ばれて顔を向けた先には、椅子に縛られながら座る爆豪の姿が見えた。

「んだ爆豪テメエ……趣味、悪いな」

「ぎっけんなシュミじゃねえわボケカスゴリア!! テメエもヴィランに捕まってんだよザ

コが!!」

「ああ、大丈夫だぞ爆豪。お前のその……被虐趣味?は皆には内緒にしておくから……

お前が変なことしなけりや俺の口が滑る事も無いさ……」

「だからチゲエつつつてんだろ!!」

「余裕ね、アナタ達……」

グラサン掛けたオカマがぼそつと呟く。うーん……寝起きの気怠さは抜けたようだ、そろそろシリアスさんモードと行こう。

「さーで……で、お手手野郎。USJ襲撃ン時以来じゃねエかア……今日はあの脳みそむき出し野郎は連れてねえのかア？」

「……」

ダンマリかよ。……あん時と比べて精神の成熟度が上がってやがるな、俺達が成長してる間、敵も成長してるってか？嫌になるぜ。

「……おいトガ、お前の希望でソイツ連れてきたんなら自分で面倒見てろ」

「俺ア犬か何かか？」

「ふふふ♥首輪も似合いそうですねヤクモくん♥」

「……八雲テメエ、ヴィランにまで……」

爆豪が非常に珍しいドン引き表情をしてる。いやあ、うん……若気の至りって奴で……。

お手手野郎がクイツと顎で奥の部屋を示し、トガヒミコはニコニコ笑顔で俺を引き摺っていく。……今暴れるのは得策じゃねえ、か。

そうしてオカマに『あんまり大声出しちゃダメよ？』と釘を刺されながら奥の部屋とやらに引つ張られれば……控えめに言っただけだった。は？

「さあヤクモくん♥ココでワタシと赤ちゃん作りしましょうッ♥♥♥」
「ズルいですよワタシ！先にワタシと赤ちゃん作りをするんですッ！」

それとトガヒミコが増えてた。なんで。

というか部屋の端にある棚に置いてある大量のビーカーって……

「ヤクモくんの精液を少し分けなきやイケナイって言うのはシヤクですけど……まあ些細な事です！」

……。
ヴィラン連合に俺の秘密バレてるう……。情報源は、まあ……トガちゃんだよなあ

過去トガヒミコにレイプされた時、路地裏とかじゃなく普通に日の差す小さな通りで行為をしていた為に誰かが通報し、現場にヒーローが駆けつけた……が、それを察知したトガヒミコはオーラを用いた暗殺術によって駆けつけたプロヒーローを即座に『再起不能』にして逃走。思えばあの時、俺は自身の力を他人にも使わせられるんじゃないかって思ったんだったか。当人であるトガヒミコがそれに気が付いてない訳が無い。

……もしかして、俺このままヴィラン連合の身体強化ポーション工場END迎える……？

I F 話・露天風呂で・にやんにやんえつち

「キュートにキャットにステインガー!! ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツ! (一人 ver.)」

「何全裸で裸いでるんですか土川流子さん」

「冷静ッ!!! それと本名呼び止めてよ!!!」

なんか、露天風呂の中(外?)にワイプシのピクシーボブがポーズをとってた。全裸で。何やってるんですか心は18歳。プロヒーローがコスチューム脱いでたら一般人として扱うってそれ一番言われてるから、マナー的な意味で。

……しかし……ふむ。なるほど……これはこれは……高校生のフレッシュユな恵体も良いが、この成熟しきったインナーマッスルムチムチ食べ頃ボディも……。

ふりふり揺れる乳と尻を眺めていると俺のムスコが『早くヤつちまいましたようぜアニキ!』と臨戦態勢を取る。おお……死にかける程出したのにコイツ……。

「……♥なによアナタ、あれだけ暴れ回ってまだやり足りないの?」

にまあ♥と笑いながら俺のイチモツをツンツンつつくピクシーボブ。

いやあ……もうね、コレあれですわ。つまりピクシーボブから誘ってきてる訳だし、

添え膳食わぬはつて言うしね。

俺の前で屈むピクシーボブの頭を掴み、そのまま股間まで誘導。体勢を崩したピクシーボブは俺の腰にしがみつくように倒れ込む。

「ちよ、ちよつと!?!」

「おほく良いケツ、これで彼氏無しとかどれだけ周りの視る眼がねえんだか。ほら、このまましゃぶつてよ流子」

「ツ♥……か、勝手に名前呼びして……まあ良いけど……んつ、クツサ……♥」

先程まで散々使い倒したムスコは色んな女の子のマン汁吸って独特な匂いを放っているが、そんな事お構いなしにピクシーボブの口内へ突っ込む。ピクシーボブの舌は猫の舌と違いヌルヌルのスベスベだ、全くキャットならちゃんと言までザラザラにせんかい。

「ぶっ……♥ぶぶぶっ♥いぶぶっ♥んぼオツ♥」

時々ピクシーボブの鼻をつまんで呼吸を無理矢理止めさせながら喉ファック。軽いMツ気入ってるからこんなんでも悦んじやうピクシーボブ可愛いね♥強いオスに服従したがるなんて悪いドスケベキャットだよ本当に!

チンポしゃぶりながらケツを振って誘惑し続けるピクシーボブにご褒美をあげましょうね〜

「んぷんぷん ♥♥♥」

一晩中やりまくっている光景を見続けた所為で既に解れきっているピクシーボブの処女マンコに手を伸ばす。おいおい風呂入ってないのにびしょびしょじゃん早いトコ蓋しなきや（使命感）

「ほら、もう良いぞ。いつまでしゃぶってんだ流子」

チンポしゃぶりに夢中になっっているピクシーボブの頬を軽く叩いて正気に戻す。不服そうにイチモツから口を話すが、指を使つた下品なジェスチャーを見せればゾクリと顔を震わせてケツを向けてきた。良いぞ。

「は、ハジメテだから優しく……ね？」

「生意気言うなオラ」

パチンと軽くケツを叩けば『あんツ♥』と露天風呂に響き渡る嬌声。ほんとお前さあ……一々チンチンに響くんだよね！激しいヒーロー活動で擦り切れた処女膜完全に破りつくしてあげるね♥

ずぷっ！

「んにゃああああっ ♥♥♥」

自分で慰める事に慣れてる癖に膣内に異物が入りこむ事には慣れてない耳年魔マンコにぶち込む。ぎゅむぎゅむ締め付けてきて気持ちいいっ……！

「はひッ♥♥♥はっ、激しいッ♥♥♥」

膣内を強引に押し広げるように腰を突き入れながらピクシーボブの両腕を掴んで支える。突く度にぶるんぶるん揺れるおっぱいはえっちですなあ。

パンパンと肉がぶつかり合う音と雌猫の嬌声が男湯に響く。誰かが朝風呂浴びに来た瞬間即バレ……と言うか隠す気が一切無いような喘ぎ声を上げるピクシーボブ。そこまでして既成事実を作りたいのか。

「ち、違ッ♥♥♥ああっ♥♥♥ひにゃああッ♥♥♥」

「デカい声上げながら何言ってるんだ」

リズムカルに腰をピクシーボブに叩き付けければ、精液をねだるようにマン汁垂らして締め付けてくる膣。こんな姿誰かに見られたら結婚を前提にお突き合いしてるようにしか見えないもんな。

「ほら、ちゃんと何処に射精して欲しいか言ってみろ」

「あひいっ♥♥♥おまんこっ♥♥♥おまんこの中でしゃせーしてくださいっ♥♥♥」
「孕みたがりドスケベキャットめっ！お望み通り中出ししてやるよッ！！」

ピクシーボブの両腕から手を離し、絶対に逃げられないように腰を掴む。等身大女性プロヒーローオナホ気持ちはいい♥一番奥で射精してやるからなっ♥

「おっ……出すっ、出すっ、しっかり受け止める……ッッッ！！」

「んあッ……あああああッ♡♡♡♡♡」

エロいアクメ顔晒しながら絶頂しているピクシーボブの子宮口に押し当てて射精ッ……！大人の女性に射精する快感たまんねえッ……！

そして竿内に残った精液を出しきる様に腰を軽く揺すりながら、ピクシーボブのケツをぶつ叩くことでマゾアクメさせて膣内を締め付けさせる。あゝ気持ち良すぎて脳みそ溶けるぅ。

ピクシーボブと繋がったまま露天風呂内に入り、そのまま正面から抱き合うように二回戦。

お湯の抵抗もあつて激しい動きは出来ないが、ピクシーボブのおっぱいに吸い付きながらヤルには丁度良い。

「あゝっ……♡♡♡♡♡んおゝっ……♡♡♡♡♡おっぱい吸うのダメっ……♡♡♡♡♡」

コリコリに硬くなった乳首を舌で押し潰すように転がしながらピクシーボブのケツ穴に中指を突っ込んでアナルセックスの準備する。全身ドスケベにしてあげるからな。

ゆつくりとした腰振りによつて甘イキを繰り返すピクシーボブは、あつという間にのぼせ切ったかのように顔を真っ赤に染め、その眼の焦点はぼやけていた。まるで泥酔し

た子をレイプしているかのような背徳感……更にチンポ硬くなっちゃいましたわ♥

ケツ穴ほじくり返ししながら二度目の膣内射精。ほんと……中出しする度に具合が良くなるのか反則だろ……！よだれを垂らしながらイクピクシーボブにご褒美のキス。ふにやふにやになったメス猫可愛いね♥

風呂に入っているつてのに発情雌フェロモンをムンムンと漂わせるピクシーボブを露天風呂の縁に優しくうつ伏せに寝かせ、後ろからのしかかる様にケツ穴ファック。おっ……入口キツイクセに中トロットロ……！ハメ甲斐あるう〜！

「お〇ンツ♥♥♥♥!?お〇オっ……ほオツ♥♥♥♥♥」

眼を白黒させながら喘ぐピクシーボブの髪に鼻を突っ込みながら深呼吸をする。酸っぱい雌臭で精子増産されました。

いやーホント皆にやるには気が引けるプレイを受け入れてくれるなんてピクシーボブは懐が広いなあ！お礼に二度と便秘にならない程ケツ穴ブツ壊しセックスしてあげるねっ。

「んお〇お〇お〇ツ?!♥♥♥♥♥」

髪のがいを肺に充満させるような深呼吸を繰り返す変態的なプレイで最大勃起したイチモツがピクシーボブのケツマンコの中で暴れまわる。ゴリゴリと音が聞こえそうな程激しく腰をグラインドさせてその腸内を拡張させると、対抗するようにギユチュ

ギョチュと締め付けてくる。一回で縦割れアナルになっちゃったらごめんねピクシーボブ。

オンオン唸るピクシーボブの身体をうつ伏せから仰向けにひっくり返し、白目を向きながら意識を飛ばしているピクシーボブにお目覚めキス。死人ですら飛び起きるような激しいベロチューによつて意識を戻したピクシーボブは、涙を流しながら絶頂し続けていた。

「ゆゝるゝしゝてゝッ♥♥♥♥もゝうゝゆゝるゝじゝてゝえゝッ♥♥♥♥♥」
 「本当に止めて欲しいって顔じゃねえよなア流子お!!」

ケツ穴から白く泡立った腸液が零れ出す程激しいケツ穴処女喪失セックスによつて泣き叫びながらも笑顔を浮かべて快樂を受け止め続ける流子に容赦なく腸内射精つ……! おらつ、ケツ穴からザーメン残さず飲めつ!

射精しながらも尚セックスを止めない。ピクシーボブの口から泡が出始める程に気持ち良すぎて苦しいアナルファックを続け、そのまま連続の射精つ……! おっほ……すげえ出るつ……めつちや出るつ……! ケツ穴で孕ませるつもりかよ……!

くつそ無様でどエロいピクシーボブのアへ顔によつてまだ出せると言わんばかりに硬くなるイチモツ。やべえよ……オクスリ効き過ぎじゃね?

だが肝心のピクシーボブは完全に意識を手放してしまったようだ。気絶してるまま

オナホのように使うのも興奮するけど……それよりも、だ。

「隠れても無駄ですよラグドール」

「ニヤン!?!」

『視』えてるんだよなアゝ俺にはよオゝゝゝ!」

露天風呂の岩陰に隠れてるアンタの『姿』^{オハラ}がよオゝゝゝツツ!

そしてなによりよオゝゝゝ……アンタの『性欲値』がトンでもねえコトになつてるのもよオゝゝゝツツツ!!!

ラグドールが逃げだすよりも速く俺の手がラグドールの腕を掴み、岩陰から引きずり出し、その眼前にバキバキドロドロチンポを見せつける。ああ『サーチ』掛かつてる眼を向けられるのが気持ち良いぜ。

「俺のチンチンの弱点とかって解かったりとかするのかなあ?」

「あつ!?!あちきの個性はそんな事まで視えたりは……」

そう言いながら勃起チンチンガン見してるよね。絶対視えてるよね。分かるよ。だって俺も似たような個性してんだもん。知ろうと思えば知れる。って事だもんな。

「ほら、風呂場なのに服着てるのはおかしいでしょラグドール」

「あつ、やつ、待つて……まっつてえ……」

ラグドールが着ていたコスチュームを脱がし、お姫様だっこをして洗い場に連れてい

く。

「ほら、さつきまでエッチしてたから汚れてるからさあ……洗ってよ知子」

「うう……わ、分かったから押し付けるの止めてえ……」

裸に剥いたラグドールの引き締まったお腹にイチモツを押し付けながら洗体のおねだりをするそとと澁々と……それでいながらしつかりチンチンガン見しながらボディソープを手取るラグドール。

そして……

「……」

「……」

「……風邪ひいやいそうなんすけどまだ掛かりそうですかね」

「そつ、そんな事言われてもアチキこんな事初めてだからしかたにやいでしょッ!!」

手にボディソープの容器を持ったまま固まり続けるラグドール。ウブなんですわ……とはならないからな。交際経験と男性経験は共に1……だがこれは……うーん、高校生ぐらいの頃に一回お付き合いたけどあんまり長続きしなかつたとか……?

仕方がないのでラグドールの手にボディソープをつけ、その手首を俺が握ってイチモツを洗わせる。

「ほら、こーうやって優しく力を込めて……指と掌全体全部使うようにしつかりと……つ、

そこの溝の部分とかは指の腹を使って……」

「こ、こんな事普通やらないよお……」

「とか言いながらしつかり興奮してる癖に」

「ひにゃんっ♥」

陰毛が生え揃ったラグドールまんこを指で擦れば、顔を赤くしながら腰を浮かしてしまいう程に敏感な反応を返してくる。可愛いね♥

ラグドールの手を使ってしつかりとチンコを洗い終え、そのおっぱいに挟む。ぶよすべで良いぞ。

「ほらほら、弱点攻めないってんなら俺から攻めてくぞ知子」

「名前呼びだめえ……」

片手でラグドールのおっぱい挟みながら、もう片手でラグドールの頭を押さえてチンポにキスさせる。口では嫌がついても俺の眼は誤魔化せんよ。押しに弱いんですね。

「んっ……ふっ……ふぁ……んんっ……♥」

チンチンちゅちゅするの好きなのかな？どんどん上がっていく好感度に笑顔になる。パイズリキスされるの気持ち良い……。

四白眼をうつとりと細目ながらチンチンちゅちゅし続け、ついには自分から舌を伸ばして先っぽを舐め始めた。ん〜エッチ！

「口より先にチンチンにディープキスしちゃった感想をどうぞ」

「んん……………」

恥じらいながらも咎めるような視線を向けてくるラグドール。こんな可愛いのに俺の倍近く生きてるってマ？

頭を撫でるように押さえつけながらラグドールの口内へ射精。飛び出る精液を舌で受け止めようとして、想像以上の多さですぐに口から溢れ出した。

「けほっ、けほっ……………出しすぎにやあ……………」

精液でマーキングしてるかのようにラグドールの顔とおっぱいを汚す。なんでこうザーメンぶっかけされた女の子ってこんなそそるんだらうか。

おっぱいの谷間に溜まった精液を指で掬ってペロペロ舐めとるラグドールを、優しくかつ抵抗を許さない力で押し倒す。

「あっ……………ダメっ……………待ってえ……………」

「挿れるぞ、知子」

「ダメ……………ダメにやのにい……………ふ、あああっ♥♥♥」

形だけの抵抗を押し退け、ラグドールの膣内奥深くまで一息で入れる。柔らかいのに、鍛えてるだけあってギューギュー締め付けてくるドスケベまんこっ！やっべ、孕ませてえ。

合意の行為だし安全日とか関係無いね。気合で孕ませてやるオラア!!!

ぼびゆるるるるるるっつっつ!!!びびゆるるるるるるッ!!!

「にやあああああッッッ ♥♥♥♥♥♥」

あー孕ませセックススキもちー。さいこー。本能でザーメン搾り取ってくる孕みたがりまんこに合わせて孕ませ射精するのやべえー。

I Qが駄々下がり状態のまま更に腰を打ち付けて生中出し。金玉に入ってる精子全部がラグドールの卵子に向けて全力を尽くしている。

いつも以上に大量の精液を放ってご満悦な俺の視界の端に、ハアハアと息を荒くさせながら腰をカクカク動かししてるピクシーボブの姿が見えた。あ、気絶から立ち直ったんですね。ピクシーボブ。

孕ませなきや。

ヤバイ。もう理性が完全に性欲に支配されてしまった。合宿始まってから毎晩から早朝にかけてのセックス漬け背徳ハーレムで本能がバグった。ピクシーボブとの生ハメセックスによって傾きまくった良心の天秤が、ラグドールとの子作りセックスでぶっ壊れてしまった。

ほら、こんなに孕みたがってるエロエロなメス猫ちゃんがドスケベおねだりケツ振りダンスしてるじゃん。じゃあもうコレ同意ってことだから。赤ちゃん作りたがってる

女の子に子種を撒くのは人助けだったんですね。

ほらピクシーボブ、ここにバキバキに勃起した赤ちゃん孕ませ棒があるじゃん。苦し
いから助けてくれよヒーロー。

「ふっ♥んっ♥んんっ♥♥♥んむうッ♥♥♥」

ケツ穴からザーメンひり出しながら四つん這いで寄ってきたピクシーボブは、そのま
まの姿勢で俺のイチモツを啜えこみ喉奥で奉仕してくるので頭を撫でてご褒美をやる。

「んぶエツツ♥♥♥ゴ……オッ♥♥♥ぶぼオッ♥♥♥」

あく大の大人が高校生にノドまんこほじくり返されながら悦んでる無様な姿さ
いこー。しかもケツ穴から屁みたいな音出してザーメン噴き出すなんて下品極まりねー。
大好き♥そんなに結婚したいなら俺が結婚してやるから、プロヒーローから俺専用孕み
袋にジヨブチェンジして♥

「お” ツツツ♥♥♥ぶぼツツツ♥♥♥ん”ぶオッ♥♥♥」

「おしっこ漏らしちゃうほど嬉しいかー、そうかそうか……これがプロポーズだ受け
取れ流子ッ！」

「ゴ”お” ツツツ♥♥♥♥♥♥♥」

強制イラマチオからの喉奥射精。残さず飲み干せたらご褒美に赤ちゃん孕ませてあ
げるね♥

「ぶ……お……いぶつ、ゲエエっ……！」

あーあー、折角めっちゃ大量に精液ブレゼントしてやったつてのに、ピクシーボブつたら白目剥きながらザーゲロ吐いて……仕方ないからオシオキシなきやね。

ピクシーボブのケツに赤紅葉が出来る程強くぶつ叩いて股を開かせる。

「こら、オシオキだつてのになんだその期待に満ちた目は」

「はあーッ♥♥♥はあーっ♥♥♥」

ギンギンにいきり立っているイチモツを捉えて離さないピクシーボブの眼が情欲に満ちる。こんなんさあ……俺の『眼』が無くても赤ちゃん欲しがってるつてモロバレじゃん。期待に応えねばならんな。

バキバキのチンポをピクシーボブのまんこに挿入っ！それと同時に超快感の子宮マツサージをして、強制的に排卵させる。

「あゝッ♥♥♥♥♥ひいひいひいッ♥♥♥♥♥」

再び白目を剥いて絶頂するピクシーボブだが、今度は一切遠慮なく強制排卵マツサージを続行。今日でママになーれっ♥

「待ッッッ!?!♥♥♥♥♥あゝにゝやあゝあゝあゝッ!?!♥♥♥♥♥死ぬッ♥♥♥♥♥しんじやうッッ♥♥♥♥♥」

イキ過ぎて完熟まんこになったピクシーボブの膣内を徹底的にチンポで耕しながら、

オシオキ排卵マツサージ♥大丈夫、あれだけザーメン飲んでんだからオーラも自由自在。死なないように快樂と共に体力強化しようねー。

完全に搾精専用まんこと化したピックアップボブ。このまんこならどんな男でも逃さないぞっ！感謝しろっ！感謝アクメ決めろっ！

「も〃うやダあツツツ♥♥♥♥♥イくのヤダアっ?!?!♥♥♥♥♥あ〃あ〃あ〃あ〃ツ♥♥♥♥♥」

孕め孕めと念じながら子宮マツサージをすれば、俺の眼に映る妊娠率100%の数字。数撃ちや当たるとはならない、百発百中の数字。まあ、仮に当たんなかったとしても当たるまで撃てば実質100%だからな。

搾精まんこをズボズボほじくって溜めに溜めた精子を、ピックアップの一番奥にイチモツを押し当てて解放ツ!!!

びゅぼぶぶツ!!びゅぶるるるるっ!!!

「~~~~ツツツ♥♥♥♥♥」

と、特濃……ッ！精液が尿道を大量に通っていくのが解かるッ！オーラで強化されまくった孕ませ子種が、これまたオーラで強化された卵子に突撃して受精っ！元気な赤ちゃん出産確定っ♥

「ふーっ！ふーっ！」

やばいやばいやばいっ！まだ出し足りねえッ！こんな気持ち良いセックス止められるかよッ！！

眼を白黒させながら意識を天国へ飛ばしているピクシーボブの上に、これまた中出しして放心していたラグドールを重ねて再度セックスっ！もはや『セックス』と言うより『フアック』と言った方が正しいまである。

「に〃いあアアアアっ♥♥♥♥♥」

「まんこ犯されて悦んでんじやねえぞラグドールっ！」

貪るようにラグドールの唇を奪い、その口内を蹂躪するとあつという間に完全服従モードと化したので遠慮なくラグドールにも孕み袋になってもらいましょう。おらおら、しつかり孕めっ。

「お〃おんツ♥♥♥♥♥ンオお〃オ〃っ♥♥♥♥♥」

「クソ下品な喘ぎ声が弱点つてよく見破つたな知子っ！ご褒美の子宮マツサージだッ！！」

「お〃お〃お〃お〃お〃♥♥♥♥♥」

潮を噴いて満面の笑みで悦ぶラグドール。あー……ラグドールも妊娠率100%にしとこ。是非とも俺の子を孕んで元気に産んでくれ。

完全に精液を搾り取る事に特化したラグドールまんこを何度も突きながら、思いだし

たかのように時折ピクシーボブの受精済みまんこにぶち込む。アラサープロヒーローのドスケベまんこ味比べとか最悪にさいこーかよ。

そうして散々レイプ紛いのファックをして、ラグドールに再び大量中出しッ……！孕めっ！孕めっ！

膣内に散々射精し終えたら、マーキングするようにラグドールとピクシーボブにぶっかけっ！く……おお……すげえ出るっ、出るっ！プロヒーローをオナペットにするなんてほんと……しかも実物を……神様ありがとう。

一周回ってバグった無尽蔵体力を前に、二人掛かりでも敵わないピクシーボブとラグドール。既に意識は空高く舞い上がり、降りてくる気配は無い。

だというのに、未だにバッキバキのゴリゴリに勃起しているイチモツは治まる気配が無い。ヤベエ。

もはや無意識になってもバリバリ搾精用に特化してる気絶まんこを無遠慮に使うか、もしくはケツ穴にぶち込んで強制気付けファックに行くか……悩みますねえ。

と、僅かに悩んで二人のケツ穴に手を伸ばそうとした瞬間、いつの間に来たのかマンダレイ（私服）が割って入ってきた。

「ちよ……っつと八雲君。もーいい加減良いでしょ。これ以上は流石に見過ごせないからね」

「流石ヒーロー、友のピンチにすかさず駆けつけるとは。だが遅かったな！既に二人の胎には新たな生命が宿っている！」

「なっ——えっ、嘘っ。いやだって二人共今日は危険日じゃ無い筈……」

妙なテンションになってる俺の言葉を受けて、股から精液を垂れ流しながら倒れ伏す二人に思わず振り向いて隙を晒すマンダレイ。俺はその隙を突いてマンダレイの服の中へ手を突っ込んで中に隠れてる大っパイを揉む。おっふ……こんなデカイ乳ぶら下げてヒーロー活動とか嘗めてんの？是非とも妊娠して貰ってもっと大きくなってもらいたいですね。

「っ！」

「おおっと、良いんですかマンダレイ。今の俺は無敵、この際やれば氣イ失ってるその二人でも良いんですよ？それに別にハジメテって訳でも無いんですから、たかが高校生の性欲くらい一つ納めてくださいよ」

「アンタなんでそれを……くっ、その硬いの押し付けないで……！」

今の俺完全にヴィランですわ、言動がただのクソレイプ犯。だつてのにホント俺の性欲が止まらない……。

力でマンダレイの抵抗を押しさえ込みながら私服を脱がしていく。理性が『それを脱がすなんてとんでもない！』と騒ぐが性欲に支配された本能のワンパンで沈んだ。

「信乃姉ちやーん、俺のチンチンしゃぶってよー」

「ツなあ、や……めっ……くっ……!」

甘えるような猫なで声を上げてマンダレイの名を呼ぶと、ただでさえ開いていた力の差が更に大きく開く。シヨタコン……と言うよりは単に年下というのに弱いだけか。こんなデカイチンチン持ったシヨタなんて居るわけねえだろいい加減にしろ!

力が抜けてフニャフニャなマンダレイを押しえつけたまま地面に倒し、そのデカ乳を衣服から解放させる。おほおーバルンツて跳ねたよバルンツて!

「いやーごめんなさいねマンダレイ。こんな可愛げのないグロチンコしゃぶってもらって本当にありがとうございます」

「ンンンン」くっくっくっ!

両手を掴んで押しえつけたまま、その口を犯すようにシックスナインの体勢でイチモツをぶち込む。マンダレイの口まんこレイプするのやべえー。

「歯を立てても良いんですよマンダレイ。勿論そんなことしたら、今オネンネしてる二人に何するか分からないですけどね」

マンダレイから睨まれながらも口内をグリグリ犯し続ける。……おっ? マンダレイもしかして……興奮してる? おいマジかよ!

マンダレイの私服スカートを脱がせば、ジュンジュンと濡れているタイツ&パンツ。

エッチだね♥身体は正直なんやなって……。

「信乃姉ちゃんの良い蜜〜」

「ンンンツツツ!?ンンンツツ!!」

何言ってるか聞こえねえなあ!しゃぶれよ!うわスツゴい剛毛とメス臭、そんなにおまんこでチンチンしゃぶりたいのならそう言えよバカ♥

マンダレイの口からイチモツを抜き、見せつけるようにメス臭まんこにあてがう。

「はっ……はっ……ゲホッ、八雲君つ……も、もうやめて……お願いだから……」

「そんな発情期真つ盛りな眼え向けておいてもうやめては無いでしょ信乃姉ちゃん♥
ねえ信乃姉ちゃん、おチンチンムズムズするから姉ちゃんの中にぶち込んで良い?良
いよね?孕めオラア!!!」

「ひつつつ——ぐっ♥♥♥」

マンダレイの膣内へ一息に挿入っ!蜜どろっどろの熱々まんこきもちー♥快楽で脳
ミソぶっ壊れるほどメツタメタに犯してあげるねっ♥マンダレイの弱いトコロはく
……おいおいマジかよっ!子宮ホジホジされるのが好きなのか!よーし信乃姉ちゃん
の為に義理の弟が一肌脱いであげよう……ねっ!!!

「ひゅぎいッツツ♥♥♥」

「普段クールぶってる女のアクメ声って良いよね。もつと聞きたくなる……オラアッ

「!!!」

「はアぐツツツ♥♥♥」

マンダレイの子宮口をこじ開けるように腰を叩きつけながら、外側から両手でオーラを送り込んで卵巣をマッサージしてやれば……ほれこの通り、妊娠率100%孕みたがり危険日まんの完成♥

「ふーツ♥♥♥ふヒ……いツツツ♥♥♥や、ヤクモくんつ……ダメつ……今日はつ……ホントにダメなのつ……♥♥♥♥♥」

ええええそれはもう存じておりますとも。何なら本人よりも身体の調子をよおしくご存知ですとも。今子宮に向けて射精すれば、元気な赤ちゃんが産まれることになるつてのをよおおおく知っておりますとも。

だからこそ。

「信乃姉ちゃん……妊娠セックス、凄く気持ちいいよ」

「ツツツ……♥♥♥♥♥」

マンダレイの眼に、ハートマークが浮かび上がった気がした。

ぶびゆるるるるっ!!!びゅぶるるるるるっ!!!

「ああああああアツツ♥♥♥♥♥」

マンダレイの子宮口に龟头を無理矢理入れ、大量射精。精液を一滴も残さず子宮で受

け止めろっ！出会って数日の高校生に孕まされろッ！！

おっ……おっ……めっちゃ吸い付くっ……残さず吸われるっ……！！

腰を揺るように精液を出し尽くし、マンダレイにのし掛かるように倒れ込む。ヤバい。昨日からの暴走で完全に……完璧に一切残さず射精しつくした。弾切れだ。

おっぱい肉布団さいこう……もうマジ眠い……

と、意識を手放しかけた瞬間、マンダレイが俺に両腕を回しガチッと捕まえる。oh
……嫌な予感。

「八雲君。大人を本気にさせたらどうなるか……その身体に刻み付けてあげるわ……
♥」

ガツチリ捕まったまま、ぐるりと地面に倒される。マンダレイの後ろには、ピクシー
ボブとラグドールの眼が爛々と光っているのが見えた。

「煌めく眼でロックオン」

「猫の手 手助けやってくる」

「キュートにキャットにステインガー」

「ワイルド・ワイルド・プッシューキャッツ！（三人ver.）」

バァーンとでも効果音がなりそうな決めポーズの後、俺を押さえに掛かるワイプシの
三人。

「レイプ犯確保っ♥」

「プロヒーロー嘗めにやいでねっ!♥」

「絶対に逃がさないわよ♥」

ラグドールとマンダレイがその恵体で俺に抱きつき、ピクシーボブが更に外側から個性を使つて拘束する。

「あの……これは……」

指一本動かせない（そもそも疲労で動けない）拘束を受け、俺はすぐ目の前に居る全裸のラグドールとマンダレイを交互に見る。

「アチキの『眼』は色々サーチができるんにやけどお……今、アチキら全員に新たな命が宿っちゃったのが見えてるんにやよねえく?」

俺は死んだ。今家に居るのであろう姉上と母上よ、俺の最期のお願いだ……部屋にあるパソコンとHDDは粉々に砕いて海へ捨てやがれ下さい。

性欲は身を滅ぼす。来世もしっかり覚えてようね!

恐怖のあまり気を失う直前、にいんまりと笑うワイプシ三人の美しい笑顔が見えた……。

◆
その後ンまア~~~~あ色々あった。

あの後気を取り戻した時には既に日が高く昇っているにも関わらず、俺は何処かの部屋の中で一人芋虫のように縛られて転がされていた事。

その後時々来る、虎さん以外のワイプシの方々につまみ食いされた事。

そして夜には肝試しに参加……したがヴィラン共が襲撃して来て、ワイプシ+先生達によつて瞬時に全員捕獲しちゃった事。

そして……ワイルド・ワイルド・プツシーキャッツが解散し、ヒーロー活動を引退した事。

『私達、プロヒーローから母になります』

全国放送でお腹ぼっこり膨らんだまま引退宣言するんだもん。そりやあ見てた人全員『あつ（察し）』つてなるよ。だつてのに肝心要のお相手さんに関しては何も沈黙を貫くという徹底ぶり。

『でもワイプシの皆が幸せならOKです』

なんてテレビのインタビュで答えた人は一時ネットの話題となり。んな事はどう

でも良いんだ。

んで、俺はあれから仮免許を取得した直後からほぼずっと、虎さんとコンビみたいな感じになっている。『ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ』は解散したが、虎さんは個人でヒーロー活動を続けていたのだ。そんな虎さんの下で俺はインターン生としてバリバリ活動している。

……なんでか？

「しつかりついて来いスカイレッドアイズ深紅眼！嫁三人とその子供達を全員養うのなら、人の十倍働くプロヒーロー達の更に三倍働かねばならんぞ!!」

「ンンンだからって撮影後すぐに首根っこ掴んで行きますかねエ普通!!」

まあ、そういう事だ。

俺は今、少しでも稼ぐためにモデル兼英雄英生徒&インターン生として二足の草鞋を履いて、稼ぎながら勉強している。『我が盟友達を泣かせればタダでは済まんぞオ!!』とのお声も頂き、大変モチベーションが高い状態。つらあい……。

まあお陰でと言うべきか、未だプロデビューしてないにも拘らず俺の知名度は非常に高い。なんせお茶の間で話題沸騰中の元ワイプシメンバーである虎がインターン生をコンビとまで言ったのだ。ソレを言われるまでそんなアレ無かったやん虎さんよオ

……。

ともかくそんなこんなでアチコチに引つ張りだこ（物理）な俺はヒーロー活動以外にも、母親のツテを使い副業としてモデルの真似事を行い金を稼いでいる。そしてこれがまた当たった。オーラを用いた存在感の強調は紙面越しにも発揮され、俺が表紙を飾る雑誌は非常に快調な売れ行きを記録し、もはや高校一年生が稼いで良いレベルじゃない収入が口座に振り込まれる。でもこれ……三人十ベイビー達を養うにはまだまだ心元無いのよね。

「しかもその上『何故か』妊娠してる同級生たちの面倒も見ないといけないから大変だよ
ねー」

「ホント不思議だよなアハハハ!!」（白目）

俺の人生何が如何してこうなった！いや、まあ全部俺の性欲が悪いんですけども。やれば、デキる……良い言葉だな……我々に避妊の大切さを教えてくれる……（遠い目）

性欲は身を滅ぼす。来世もしっかり覚えてようね！眼がピカピカし過ぎて眩しいお兄さんとの約束だ！